

## はじめに

発刊の辞（理事長 藤谷宣人、学長 高橋史郎）	P . 1
自己点検・評価「多摩美術大学 2000・2003」の 基本的考え方について	P . 3
自己点検・評価活動の進め方	P . 4
自己点検・評価部会組織	P . 5
外部評価者紹介	P . 6

## 多摩美術大学の概要

多摩美術大学の理念	P . 7
多摩美術大学の沿革	P . 8
基礎情報	P . 12

## 多摩美術大学の諸活動の現状

教育・研究活動について	P . 15
学生支援活動について	P . 93
施設について	P . 112
社会貢献活動について	P . 141
入学・卒業状況について	P . 168
管理運営について	P . 199

## 外部評価による評価

外部評価報告	P . 221
--------	---------

## その他

資料	P . 239
編集後記（自己点検・評価部会長 森下清子）	P . 270



理事長・藤谷 宣人

「多摩美術大学 2000-2003」の刊行にあたって

このたび多摩美術大学は「多摩美術大学 2000-2003」を刊行する。本書は、1999年に発行した「多摩美術大学 1997-98-99」に続く第2弾であり、大きく変わったところは本学のあらゆる分野について直接、具体的にヒアリングを行い、多元的な自己点検・評価をしたことである。

2004年は、わが国のすべての大学にとって節目をなす年であるといえよう。すべての国立大学が国立大学法人化されたこと、少子高齢化を中心として、大学を取り巻く諸情勢が更に進んだこと、そして学校教育法の改正によって全ての大学が7年に1度、国が認定した認証評価機関の評価（認証評価）を受けなければならないことなど話題の多い年であった。特にこの認証評価の意義は大きい。その根底にあるのが自

己点検・評価である。

本学は、いち早く1992年全学からなる教育充実検討委員会を発足し、そのなかに自己点検・評価部会を設け、以来制度的に自己点検・評価に取り組んできた。その一環として、授業の評価も毎年おこなっており、授業方法の改善に反映されている。

たえず現状を点検・評価し、大学改革にむけた課題を整理し可能なものから実行する施策を講じることは極めて重要なことであり、このことが多摩美術大学の絶えざる発展の原点ではないかと思っている。

これからの変化の多い時代は、高い志を持って全学一体となって大学改革を行って、純度の高い個性輝く大学にすることが求められており、社会や学生に認知されなければ発展することができない。本学は、そうした社会的要請に応え、改革を怠らずフロントランナーとしての役割を果たしたい。

本書の刊行にあたり、自己点検・評価部会長の森下清子教授のたゆまぬご尽力と委員の方々、各研究室、各関係部局の方々のご協力に心から感謝申し上げます。



学長・高橋 史郎

#### 刊行の辞

本学は、学則の第一条において「教育・創作・研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行い、その結果に基づいて改善・充実に努める」と規定しています。

2000年に刊行しました「多摩美術大学1997-98-99」に続いて、今回「多摩美術大学2000-2003」が刊行されますことは、本学の自己点検・評価活動が着実に機能しつつある現れといえます。

近年、学内の各学科研究室や事務部が発行します各種の刊行物は、ますます充実したものになっていますが、本書のように、大学全体を網羅し、客観的に記述する刊行物は重要であります。

本学は今後とも、このような情報開示により社会の信頼に応え、教育・創作・研究水準の向

上をはかり、本学の目的及び文化的・社会的使命の達成に努めます。

本書の刊行を担当した自己点検・評価部会長の森下清子教授はじめ、編集執筆作業に参加し、ボトムアップしました、多くの教職員のご尽力に感謝いたします。

---

---

## 自己点検・評価「多摩美術大学 2000・2003」の基本的考え方について

自己点検・評価「多摩美術大学 2000・2003」を出版するにあたり、その目的、方法等を以下のとおり定めた。自己点検・評価活動を行うに際し、それに関わる全ての関係者が、この基本的考え方の趣旨を共有するものとした。

### < 自己点検・評価「多摩美術大学 2000・2003」の目的について >

2004年4月1日より学校教育法上の規定が施行され、国公立を問わず、全ての大学、短期大学、高等専門学校は、7年以内に1度、文部科学大臣が認証した認証評価機関からの評価を受けることが義務づけられた。又、認証評価機関による評価の実施とは別に、大学が自らの活動を検証し広く社会に説明する責任を負うものと多摩美術大学では認識している。

多摩美術大学では大学独自の自己点検・評価活動を従前より行って来た。今回は、認証評価機関による評価を視野に入れた、より深い検証が可能な自己点検・評価活動を行う。

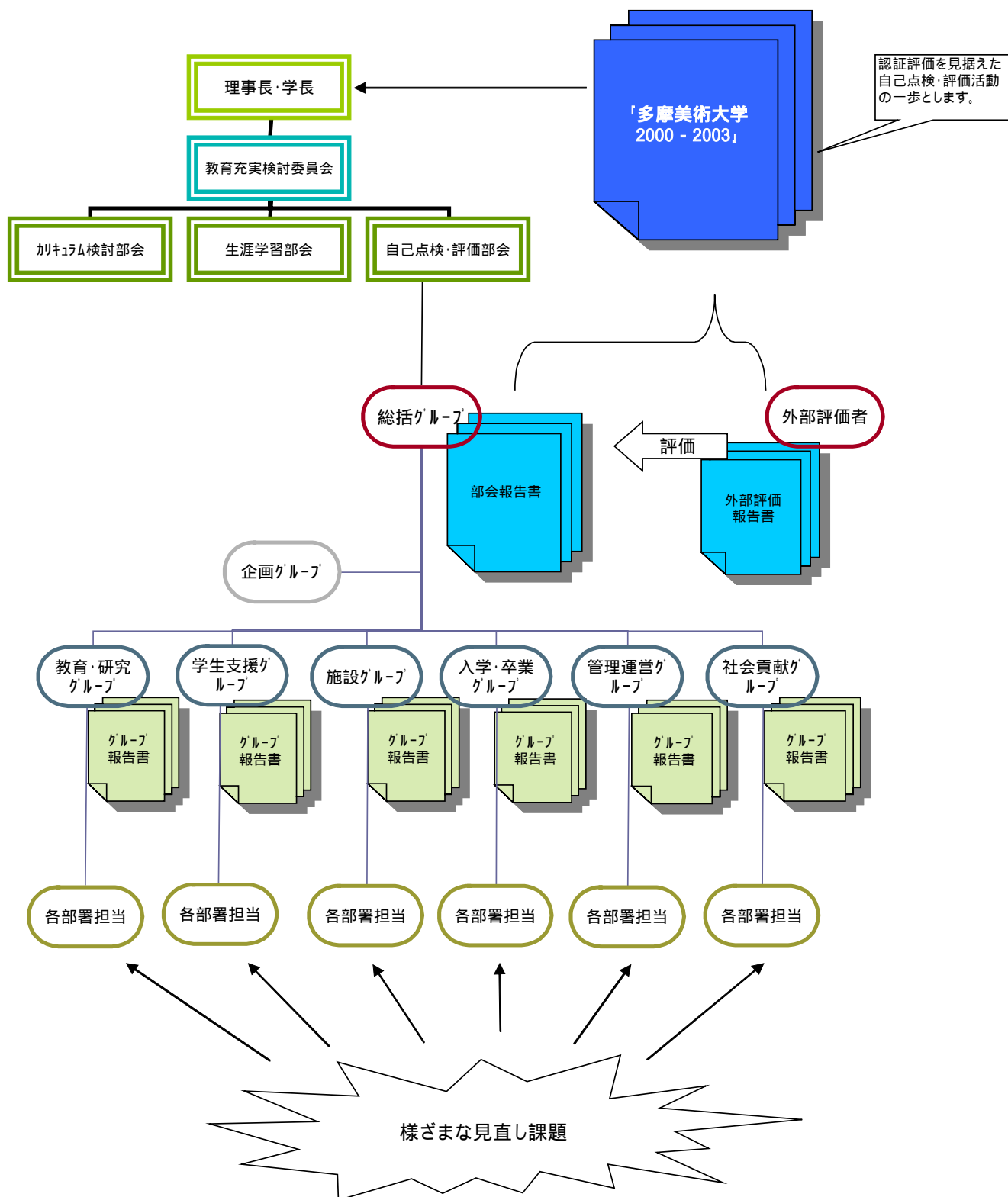
### < 自己点検・評価「多摩美術大学 2000・2003」の内容について >

- ・本報告書は、学内組織である教育充実検討委員会自己点検・評価部会における分野ごとの作業グループによりまとめられたグループ報告及び、外部評価者による報告書（座談会議事録）から成る。
- ・各作業グループが報告書をまとめるにあたっては、各グループが最優先とする利益の視点により、グループ報告書をまとめた。そのため、グループ報告間で矛盾が生じる場合があるが、本学における現状・課題をありのままに掘り下げる方法として、グループ報告を最大限に生かした。
- ・取り扱う項目は、多くの項目を詰め込みすぎず、分かり易くした。
- ・自己点検・評価活動のプロセスそのものを重視する狙いから、詳細に過ぎる問題点の指摘、コンセンサスを得ていない改善案、履行期限を定めた改善案などの提示は行わないこととした。
- ・外部評価者による評価は、認証評価に向けての第一歩として本学独自に行なうものである。よって、改善点や時期は履行の責任を負うものではない。自己点検・評価のプロセスそのものを重視することを狙いとする。但し、外部評価の結果は今後の自己点検・評価活動、各部署の運営に積極的に役立てるものとする。
- ・外部評価者の選定にあたっては、本学に関係するものを排除し、可能な限りの公正さを保つことを心がけた。

### < 自己点検・評価「多摩美術大学 2000・2003」活動の進め方 >

- ・本活動の進め方は、次の手順と組織により行なう（P.4～5参照）。

## 自己点検・評価活動の進め方



## 自己点検・評価部会組織

作業グループ名	グループメンバー
総括グループ	森下清子（部会長・教務部長）、清田義英（美術学部長）、米倉守（造形表現学部長） 柿本静志（総務部長）、中島和彦（経理部次長）、石井渉（総務部総務課・事務担当）

作業グループ名	グループメンバー
企画グループ	森下清子（部会長）、柿本静志（総務部長）、恩蔵昇（総務部総務課長） 荒川直（教務部事務部長）、田中誠二（造形表現学部事務部事務課長） 中島和彦（経理部次長）、石井渉（総務・事務担当）
教育・研究グループ	市川保道（日本画）、室越健美（油画）、渡辺達正（版画）、中島祥文（グラフィック） 近藤秀實（美術学部共通教育）、猪股裕一（デザイン）、中村隆夫（造形表現学部共通教育） 森下清子（教務部長）、荒川直（教務部事務部長）、田中誠二（造形表現学部事務部事務課長）、河島吉成（教務部教務課・事務担当）、渡邊由美（教務部教務課・事務担当）
学生支援グループ	竹田光幸（彫刻）、伊藤孚（工芸）、福島勝則（映像演劇）、中野嘉之（学生部長） 畔上洋一（学生部就職課長）、植村博（学生部次長）、田中誠二（造形表現学部事務部事務課長）、伊藤多恵（学生部学生課・事務担当）
施設グループ	田淵諭（キャンパス設計室）、渡邊清光（施設整備室長） 甲斐重守（総務部八王子校舎総務課長）杉本功（総務部総務課・事務担当）
社会貢献グループ	田淵諭（環境デザイン）、須永剛司（情報デザイン）、海老塚耕一（芸術） 筒井一憲（図書館事務部事務課長）、仙仁司（美術館事務室長） 野澤敏之（メディアセンター事務室長）、田村勇二（教務部学務課長）、渡邊美紀子（生涯学習センター事務部）、米山秀樹（教務部教務課・事務担当）
入学・卒業グループ	岩倉信弥（プロダクト）、皆川魔鬼子（テキストル）、北條正庸（造形）、川崎勇（学生部事務部長）、伊藤憲夫（企画広報部次長）、＜畔上洋一（学生部就職課長）＞ 米山建彦（企画広報部企画課・事務担当）
管理運営グループ	柿本静志（総務部長）、恩蔵昇（総務部総務課長）、中島和彦（経理部次長） 森下清子（教務部長）、石井渉（総務部総務課・事務担当）

印はグループ長

## 外部評価者紹介



會田 雄亮

陶芸家

東北芸術工科大学 名誉教授

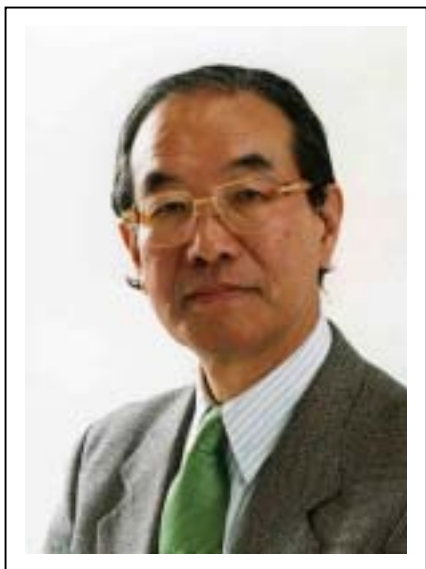
前東北芸術工科大学 学長

千葉大学卒

(社)日本クラフトデザイナー協会監事(元理事長)

(社)日本建築美術工芸協会理事

他、各種国際会議委員等を多数務める



岡島 達雄

琉球大学工学部環境建設工学科 教授

元名古屋工業大学 学長

東京工業大学卒、同大学院(博士)修了

日本建築学会会員、日本インテリア学会理事・副会長

日本コンクリート工学協会会員

日本グリーンビルディング協会副理事長

日本環境創造研究センター副理事長



和田 義博

公認会計士

日本公認会計士協会理事

明治大学商学部卒

学校法人運営調査委員(文部科学省)

大学設置・学校法人審議会学校法人分科会委員(文部科学省)

国立大学法人評価委員会専門委員

明治大学監事

## 多摩美術大学の理念

### 理 念

「自由と意力」

### 目 的

広く造形芸術全般について高度な学理技能を教授研究し、その深奥をきわめて文化の進展に寄与することを目的とします。また国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー並びに教育者研究者等を育成することを目的とします。

### 運営方針

人類の美的資産の継承と未来を拓く新しい美を創造します。  
現実社会を突き動かすことができる豊かな表現力を育成します。  
国際的な芸術家やデザイナーが集まる創造的な環境を構築します。  
専門分野の深化を図る専門実技教育の一層の充実と、総合化を図る共通教育組織と大学院組織の充実を目指します。



## 多摩美術大学の沿革

1935年	多摩帝国美術学校を東京都世田谷区上野毛に創設する。校長・杉浦非水、主任・中村岳陵（日本画）、牧野虎雄（西洋画）、吉田三郎（彫刻）、杉浦非水（図案）、学生 67 名。今井兼次教授設計の校舎完成。
1936年	図案科会機関誌『デゼグノ』創刊。女子部を設置する。北玲吉名誉校長、衆議院議員初当選。杉浦非水図案生活 30 周年記念連合展。
1937年	財団法人認可、徴兵猶予認可。どろ糸・くらぶ結成（多摩帝美在学生の会）。造形図案家集団結成。多摩帝国美術学校図案科会及本年度卒業制作作品展。
1938年	校舎三棟台風被害にあう。研究室 6 科第 2 回展。
1939年	出征学生に慰問袋発送。『多摩美術』創刊。『デゼグノ』（第 10 号）終刊。
1940年	里見宗次、フランスから帰国し、図案科の教授に就任。
1941年	『多摩美術』第 2 号刊行。多摩美報国団結成。日大芸術科と野球試合、応援皆無のため惜敗。
1942年	野外授業を軽井沢で実施。『多摩美術』第 3 号刊行。
1943年	『多摩美術』第 4 号刊行。
1944年	校舎が海軍技術研究所に接収され休校となる。『多摩美術』学徒出陣記念特集号刊行。全教員、全学生の作品写真を掲載。
1945年	三木清教授検挙（9 月獄死）。第二次世界大戦の空襲により校舎の大半（図案棟を除く）を焼失する。在京関係者により再建を協議。
1946年	溝ノ口工場（元軍需工場）を借り入れ学生募集を行う。入学試験を実施。開校、授業を再開する。
1947年	専門学校認可、多摩造形芸術専門学校（美術部・建築部・工芸部）となる。理事長・杉浦非水、校長・井上忻治。
1948年	戦後第 1 回の作品展開催。中学校・高等女学校教員無試験検定出願資格認可校となる。
1949年	『多摩美術』復刊第 1 号刊行。モダンアート夏期講座開催。
1950年	多摩美術短期大学（絵画科・彫刻科・造形図案科）を設置。学長・井上忻治。戦災焼失の上野毛校舎一棟を復旧、全面授業再開。
1951年	「財団法人多摩美術短期大学」を「学校法人多摩美術短期大学」に組織変更。戦災焼失の上野毛校舎一棟を復旧。
1952年	戦災焼失校舎復旧新築（佐藤次夫建設指揮）による本館完成。
1953年	多摩美術大学（絵画科・彫刻科・図案科）設置。理事長・杉浦非水、初代学長・井上忻治、美術学部長・逸見梅栄、初年度入学者 135 名。

## ・多摩美術大学の沿革

1954年	多摩芸術学園を併設する（映画科・演劇科）。逸見梅栄が学園長に就任。教育職員免許状授与所要資格認可。『美術大学新聞』（学生新聞部）創刊。
1955年	杉浦非水理事長、第11回日本芸術院賞恩賜賞を受賞。
1956年	上野毛校地 5,267坪購入。多摩芸術学園に、舞台美術、脚本、演出専攻を増設。
1957年	多摩美術大学美術学部第1回卒業式挙行、卒業生 133名。多摩芸術学園に、写真科を新設。
1958年	4年次生の奈良京都古美術研修旅行始まる。講堂が完成。多摩芸術学園溝ノ口校地（1766.5坪）および校舎を購入。ポール・ランド来学、名誉教授として迎える。
1960年	上野毛現本館完成。八王子校地の購入が始まる。
1961年	村田晴彦が理事長に就任。夏期講習会開催、以後、恒例行事となる（1988年まで）。
1962年	上野毛現1号館完成。溝ノ口学生寮完成。奥村土牛教授、中村岳陵元教授、文化勲章受章。
1963年	図案科をデザイン科と改称。
1964年	大学院美術研究科（修士課程）設置。附属図書館（上野毛）完成。八王子合掌造移築完成。
1965年	奈良古美術セミナーハウス（飛鳥寮）完成。杉浦非水名誉理事長没、大学葬。八王子運動場完成。
1966年	多摩芸術学園、後藤狷士学園長就任。上野毛現2号館完成。富士山麓セミナーハウス（純林苑）完成。八王子民俗資料館完成。
1967年	井上忻治学長、理事長兼任。多摩芸術学園、松葉良学園長就任。山名文夫元教授、デザイン教育の功績により瑞宝章を受章。
1968年	石田英一郎が学長に就任、総合美術大学構想を発表。多摩芸術学園新校舎完成。石田英一郎学長没。福沢一郎教授、学長事務取扱に就任。
1969年	芸術学科、建築科の設置が認可される。学園紛争により全学封鎖。全学教授会発足。八王子校地に学生寮、本館完成。福沢一郎教授、学長事務取扱を辞任。末松正樹教授、学長代行に就任。末松正樹学長代行辞任。村田晴彦事務局長、学長事務取扱兼任。
1970年	真下信一が学長に就任。「紛争の経過ならびにその後の学内問題について」発行。円鍔勝三教授、芸術院会員となる。
1971年	美術学部の八王子校舎移転開始。建築科開講。
1972年	八王子校地に学生会館、体育館が完成、以降実習校舎 11棟・図書館・美術参考資料館などが完成する。日光東照宮建造物装飾文様採集調査を実施。
1973年	多摩芸術学園、デザイン科を新設。加山又造教授、日本芸術大賞受賞。
1974年	美術学部の八王子校舎移転完了。村田晴彦理事長口述筆記『多摩美術大学沿革史』刊行。
1975年	村田晴彦が理事長を辞任、会長に就任。内藤頼博が理事長・学長代行に就任。村田晴彦会長・元理事長

## ・多摩美術大学の沿革

	没。
1976年	井上忻治名誉学長没。多摩芸術学園、専修学校制度による専門課程に移行し、絵画科を増設、6学科体制となる。創立40周年記念式典。
1977年	山本丘人特別講師、文化勲章受章。
1978年	内藤頼博理事長、法曹界および美術教育における功績により勲一等受章。今井兼次教授、芸術院会員となる。
1979年	内藤頼博が学長に就任。多摩芸術学園25周年記念式典。
1980年	デュシャン 大ガラス 東京ヴァージョン公開。
1981年	芸術学科開講。1号館完成（現絵画棟）。アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン（米国）との交流始まる。
1982年	附属美術参考資料館が博物館相当施設の指定を受ける。学芸員資格認定指定校となる。シルバコーン大学（タイ）と国際交流協定を締結。
1983年	『多摩美術大学研究紀要』創刊。
1984年	芸術学科プロジェクト・第1回「TAMAVIVANT」展開催。
1985年	真下信一元学長没。八王子2号館完成（現芸術学科棟）。
1986年	李朝生活画展開催。附属図書館に「瀧口修造文庫」寄贈される。創立50周年記念式典。創立50周年記念事業『多摩美術大学50年史』刊行。
1987年	後藤狷士が学長に就任。創立50周年記念事業「もの派とポストもの派の展開」展、「TAMABIVENTS」開催。
1989年	社会人教育のための美術学部二部（絵画学科・デザイン学科・芸術学科）を上野毛校舎に設置。初年度入学者160名。上野毛3号館完成。
1990年	「ルーチョ・フォンターナ」展、「多摩美術大学版画教室の20年展」。大学説明会開催（以降毎年開催。'98年より進学相談会に改称）。
1991年	藤谷宣人が理事長に就任。中央工芸美術学院（北京）と国際交流協定。福沢一郎名誉教授、文化勲章受章。
1992年	美術学部絵画学科版画専攻開設。アルスター大学美術科（アイルランド）との版画作品交換展。『多摩美術大学広報 たまびNEWS』創刊。多摩芸術学園閉校。
1993年	美術学部二部第1回卒業式挙行、卒業生125名。
1994年	八王子校地を拡張し、建設整備を再開。美術参考資料館を附属美術館と改称。『多摩美術大学教員プロフィール'94』刊行。松尾敏男教授、日本芸術院会員となる。
1995年	シンボルマーク制定。校友会設立。大学院を昼夜開講制とする。創立60周年記念事業 広告デザインの

## ・多摩美術大学の沿革

	誕生から現代まで 展、「第1回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展」開催。
1996年	弘益大学校（ソウル）、東亜大学校（釜山）と国際交流協定。「1953年ライトアップ」展開催。
1997年	アジアの美術教員展。絵画棟、彫刻棟の一部、学生クラブ棟完成。加山又造客員教授、文化功労者。
1998年	全学的情報インフラが完成。情報デザイン学科設置。改組転換により、工芸学科・生産デザイン学科・環境デザイン学科設置。同じくグラフィックデザイン学科、絵画学科、彫刻学科へ改称。芸術学専攻修士課程設置。デザイン棟、彫刻棟、工芸棟が完成する。美術学部オープンキャンパス実施（以降毎年開催）。「第2回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展」開催。
1999年	辻惟雄が学長に就任。テキスタイル棟、T A Uホール、グリーンホール完成。造形表現学部（造形学科・デザイン学科・映像演劇学科）を上野毛キャンパスに設置。美術学部二部の募集を停止する。
2000年	美術学部情報デザイン学科と芸術学科でセンター試験利用入学試験実施。多摩美術大学美術館を多摩センターにオープン。生涯学習プログラムがはじまる。メディアセンター完成。八王子校舎前期工事竣工式典。内藤頼博名誉理事長没。松尾敏男名誉教授文化功労者。ヘルシンキ芸術大学（フィンランド）と国際交流協定。
2001年	大学院美術研究科博士後期課程美術専攻設置。美術学部、造形表現学部で3年次編入学試験実施。メディアセンター開館。「20世紀ポスターデザイン展」開催。清華大学美術学院（北京）と国際交流協定。
2002年	大学院美術研究科博士前期課程工芸専攻設置 生涯学習センター設置。「日韓中教授作品交流展」開催。「第3回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展」開催。レクチャー・ホール、新本部棟の建設着工。
2003年	高橋史郎が学長に就任。
2004年	レクチャーホール、本部棟完成。 八王子キャンパス後期工事竣工披露記念式典。

2004年12月現在

## キャンパス概要



(上野毛キャンパス)

東京都世田谷区上野毛 3-15-34

校地面積：16,118.66 m<sup>2</sup>

校舎面積：16,963.16 m<sup>2</sup>

(2004年12月現在)

1935年、前身の多摩帝国美術学校設立の地である上野毛キャンパスは、都心部から至近であるとともに、首都圏西部に連なる緑豊かな住宅地に接した教育に好適な地にある。

現在は造形表現学部、大学院（夜間主コース）、法人本部が設置されている。



(八王子キャンパス)

東京都八王子市鎌水 2-1723

校地面積：151,561.70 m<sup>2</sup>

校舎面積：72,571.69 m<sup>2</sup>

(2004年12月現在)

1960年から美術学部の移転が始まった八王子キャンパスは、多摩ニュータウン開発計画地

域東西 12 k mの最西部に位置している。

1995年に着工した八王子キャンパス計画により、教育・研究のソフトとハードの融合をテーマに、美術学生のための創作研究の環境づくりに取り組んでいる。又、多摩丘陵の緑豊かな特色を生かし、雨水利用、太陽光発電など環境配慮にも取り組んでいる。現在は、美術学部、大学院が設置されている。

その他、附属美術館（多摩市落合）、富士山麓セミナーハウス（山梨県南都留郡）、奈良古美術セミナーハウス（奈良県奈良市）などで構成されている。

## 教育組織

		収容定員	現員				
<b>大学院美術研究科</b>		<b>235</b>	<b>248</b>				
博士後期課程	美術専攻	21	15				
	博士前期課程	120	124				
		24	24				
		20	21				
		36	53				
		14	11				
<b>美術学部</b>		<b>3,062</b>	<b>3,487</b>	共通教育	研究科 共通教育		
絵画学科	日本画専攻	124	152				
	油画専攻	506	552				
	版画専攻	120	144				
彫刻学科	120	130					
工芸学科	240	262					
グラフィックデザイン学科	662	763					
生産デザイン学科	プロダクトデザイン専攻	120	133				
	テキスタイルデザイン専攻	160	180				
環境デザイン学科	300	366					
情報デザイン学科	480	527					
芸術学科	230	278					
<b>造形表現学部</b>		<b>800</b>	<b>975</b>	共通教育			
造形学科	160	192					
デザイン学科	400	483					
映像演劇学科	240	300					

収容定員、現員は2003年度5月現在

## 教職員の配置状況

	美術学部	造形表現学部
教 授	86	20
助教授	19	11
講 師	7	2
助 手	33	9
非常勤教員	236	67
総務系職員	11	0
経理系職員	7	0
教務系職員(事務)	11	5
図書館職員	8	4
その他職員1	18	0
教務系職員(副手・技術職員)	42	14
厚生補導系職員	12	2
技術技能系職員	2	0
その他職員2	9	3

2003年5月現在

職員の振分は人件費処理によるため、経理、総務、その他職員1、

技術技能系職員は全て美術学部へ片寄せしてある。

その他職員1は、総務、経理、教務、図書館以外の事務職員

その他職員2は、用務職員、セミナーハウス管理人

技術技能系職員は、ネットワーク管理者、電気技師、運転手など

## §はじめに§

教育・研究グループにおいては、各学科における現状の分析と評価を中心に、国際交流、研究活動等を検証した。なお、今回の自己点検・評価活動では、本学の活動概況を分かり易く把握するために、教員個人の研究活動については割愛した。

## § 現状報告・評価 §

### 1. 全学的教育方針の形成

#### 美術学部

##### <目 標>

大学教育において全学的教育方針を示すカリキュラムの編成がきわめて重要な意味を持つことは言うまでもない。本学は美術大学としての性格から実技科目がその多くを占めているが、大学理念にある「自由と意力」にそっていわゆる学科目もそれに劣らず重要視されている。いわば実技と学科とが両輪となってカリキュラムを支えているのである。とは言え、カリキュラムに関する各学科の意志の疎通をはかるべく設立されたカリキュラム委員会も、2000年までに会議が開催されたことはほとんどなく、それがカリキュラム編成における実技科目と学科目とのバランスの欠如につながっていた面も否定できない。

こうしたことへの反省から、各学科の抱えている問題の解決や大学理念の実現への提言を行なうカリキュラム委員会の積極的な運営がはかられ、毎月決められた時間に会議が設けられ、現在ではカリキュラムの編成から調整を行なうまでに機能を果している。

##### <現状報告・評価>

###### ①意見集約の方法

カリキュラムに関する教員個々の意見は各学科のカリキュラム委員を通じて委員会に伝えられ審議される。そこではまた、大学理念の実現に具体的にどのように取り組むのか、また国際社会に対応し、あるいは創造力に富む学生を育成するのはどうしたら良いのか、などのきわめて難しい問題が真剣に議論される。こうした議論の過程の中で、現在では各学科の教員の意志疎通が有効にはかられ、個々の問題を全学的視野から扱う姿勢が形成されつつある。これはカリキュラム委員会の重要な意義の一つであり、委員会の今後の展開についての明るい材料として十分評価できるものだろう。

###### ②問題解決の状況

これまで定期的開催された委員会に提出された課題はかなりの数にのぼり、そのすべてについて扱うことは難しく、ここではその大きな課題についてのみ報告する。

実技各学科と共通教育の長期にわたる連絡不足のために、車の両輪であるべき両学科のカリキュラムがいくぶんバランスを欠くようになり、まずその是正が課題になった。一方、それにとまなう時間割の過密化による必修科目の重複もあわせて解消する方向で検討が開



始されている。

美術学部は1, 4年と2, 3年がそれぞれ午前、午後に分かれて履修することになっているが、その区分を超えた科目については速やかに正常な状態に戻す作業が急務となっている。また共通教育の科目については2002年度から似通った科目の一元化、また各学科から委託された講義科目を各学科に戻す形で現在までに15%ほど科目の整理・統合を行い、時間割の過密化解消に一役買っている。時間割に関しては、資格関係の講義、語学の一部が各学科の必修科目と重複する現象が見られていたが、これについてもかなりの改善がなされるようになった。

その一方で300人以上を超える受講者のいる講義、またそれとは逆にきわめて受講者数の少ない講義などには、授業を効果的に運営するために、受講生数に上限や下限を設けるなどある程度の制限を加えることも検討されている。

また従来、ファインアート系とデザイン系が別個に設定していた科目の中から全学的に履修が可能であるものについては、一部オープン科目として他学科の学生が履修できるようになったことも特筆されるべきだろう。

#### <課 題>

カリキュラム委員会は現在のところ、過去から引き継いださまざまな問題を是正する方向で運営されているが、本来は大学理念にある「自由と意力」を具体的に実現してゆく議論の場でなければならない。

そうした反省と決意の中で、上記で触れた課題をさらに速やかに解決すべく努力するとともに、まず共通教育を従来の大学に存在していた一般教養とは別の、ファインアート系とデザイン系の実技各学科を底辺で結びつける領域、すなわち美術教育に必須の講義系科目を供給し、しかも現代社会に対応できる教養や国際的な感覚を身につける基礎的学科として再度位置付けることが大きな課題として残されている。

一方、他学科の学生が履修できる専門的な科目としてのオープン科目に代表されるように、実技各学科をつなぐ新しい掛け橋的存在である実技系授業、およびファインアート系内、デザイン系内で類似の技術を習得できる実技科目を増設することなども近い将来の展望として、その討議に入る段階にまでいたっている。

今後は時代に即した教育科目の多様化が想定され、これ自体は歓迎すべきことであるが、その際に学則別表を変更することは極力避けることとし、多様化の根底に基礎的な体系のあることをむしろ尊重したいと考えている。それこそが履修体系の明解さの維持であり、カリキュラム構成の原則だからである。

現在このようなカリキュラムの重要性に対する各学科の認識は確実に進展しており、近い将来には美術大学にふさわしいカリキュラムが整備されるのも時間の問題であると確信している。これからも多摩美術大学のブランドとして、実技科目および共通教育科目からなる特色あるカリキュラムの構築に努力を惜しまない所存である。

## 造形表現学部

### <目 標>

造形表現学部のカリキュラム委員会は、各学科のカリキュラム委員および教務主任と事務職員が、夜間という限られた授業時間の中で充実したカリキュラムを提供できるように、学部全体、各学科のカリキュラム編成等について討議・検討を行い、教授会へ提案している。

### <現状報告・評価>

#### ①意見集約の方法

カリキュラム委員会で検討し、結論が出ない場合は各委員を通して各学科に意見を求め、再度検討している。また、委員長作成の議事録を配布し、各学科と事務部両方で検討を行った結果を委員長が教授会へ提案するという形をとっている。

#### ②問題解決の状況

おもに議題となっている課題は、編入学試験方法、卒業認定、単位制、ワークショップの開講、教職課程、教室・機材の使用と管理、教室の設備、共通専門科目の設置、基礎教育科目の改正などがあげられる。実際には、編入学試験方法、卒業認定、教職課程、教室・機材の使用と管理、教室の設備などが実行され成果をあげている。

### <課 題>

今後もカリキュラム編成の充実については課題が残されており、共通専門科目、基礎教育科目の改正、教職課程、美術学部との他学部履修などについて検討が必要である。また各学科で報告された検討結果を文書化していくことが課題であると考えられる。

## 2. 各学科の現状

### 美術学部

#### 絵画学科日本画専攻

##### ①教育目標

絵画学科日本画専攻では、膠という接着媒体を使用する。多様な絵画表現のなかの一つであるとして日本画を捉え、長い歴史を持つ東洋絵画のなかの日本画とは何かを考え、次の世代の自由で豊かな日本画の創造を目指すことを主眼としている。

日本画は、中国大陸にその源を持つ表現技術である。その技術が日本に伝来し、ときのなかで醸成され、現代の日本画へと受け継がれて来た。石、植物、金属など、およそ地球上に存在するあらゆる物質を顔料として描く日本画の技法は、飛鳥・白鳳の時代に確立され、今日に至っている。稀有で貴重かつ豊潤な日本画の表現世界は、この長い歴史に裏打ちされた技法の深遠さこそが基盤となっているといえるだろう。

こうした日本画の、膠・胡粉・岩絵具・顔料・墨・箔などの素材とその用具など、伝統的な制約が大きい日本画の技法を駆使できるようになるには、かなりの勇気・忍耐・覇気を必要とする。今日、小学校・中学校・高等学校での日本画教育は皆無に近い現状にあり、近代西洋思考をもって、伝統的な日本画を捉えることは困難である。

それだけに、現代絵画を創造する大いなる発展性が秘められているといえる。この大きな困難と不自由さを乗り越えてこそ踏み込むことができる、自由な表現世界が広がっているのである。

若々しい感覚と新鮮で気力に満ちた才能をもって現代の日本画の問題に取り組み、明日の日本画を築く若い力に期待する。常に流動的・進歩的であるよう心がけ、自由を信条として守りながら、各自の個性を十分に発揮し、自発的な制作を通じて努力を集積し、大胆な創造を実践し、美を探求する表現者としての基本的な態度の修得をめざしている。

### ②カリキュラム構成

- 課題実技Ⅰ～Ⅳ（１～４年課題実技）
- 日本画実技Ⅰ～Ⅳ（１～４年/ コンクール春季・夏季）
- 材料基礎学Ⅰ・Ⅱ（１・２年/ 絹本実習、箔実習、技法講座、表具実習、絵の具実習、模写実習、材料研修旅行）
- 日本画特論Ⅰ・Ⅱ（１・２年/ デッサン）
- 日本画特論Ⅲ（３年/ ゼミ、和紙ゼミ）
- 特別実習Ⅰ・Ⅱ（３・４年ゼミ）
- 卒業制作（４年）

１，２年次は日本画の表現技術の習得、素描力の充実、自由な創造を実践するための基礎姿勢の育成を心がけたカリキュラムとなっている。

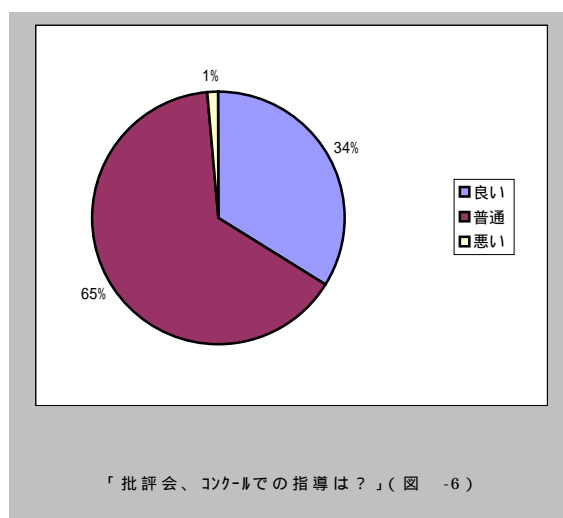
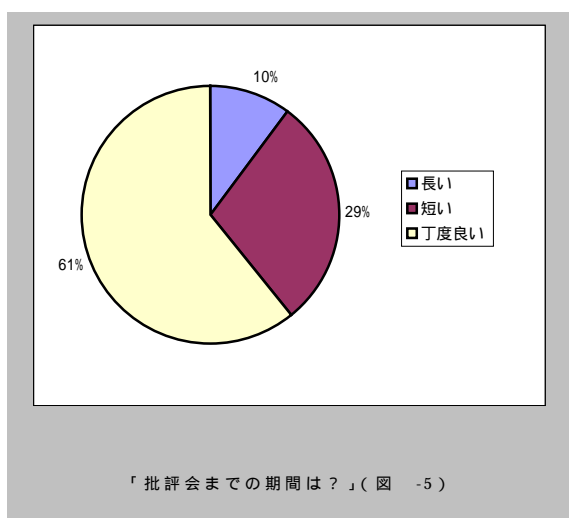
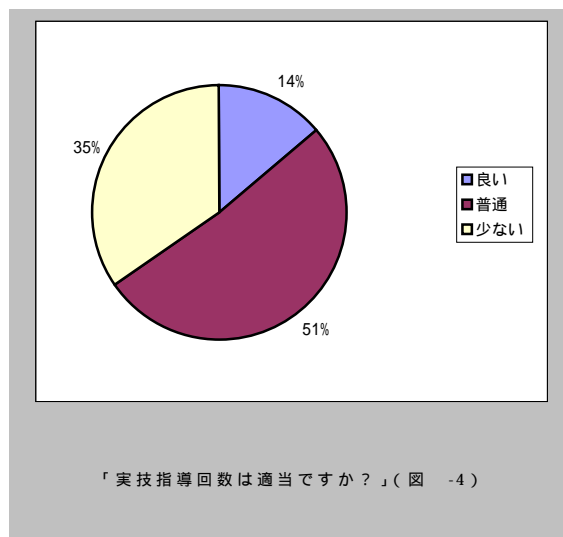
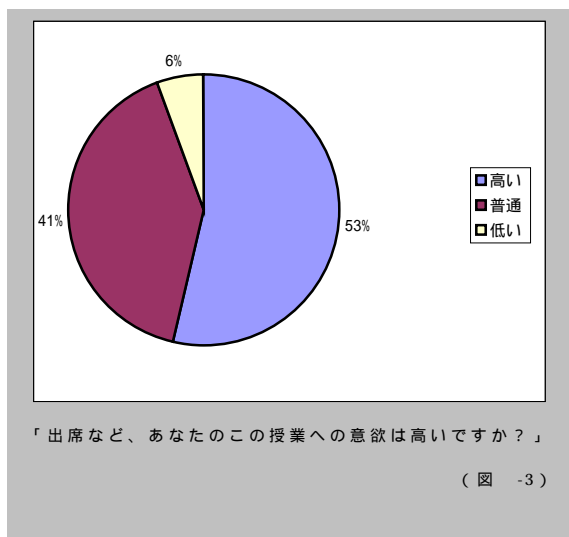
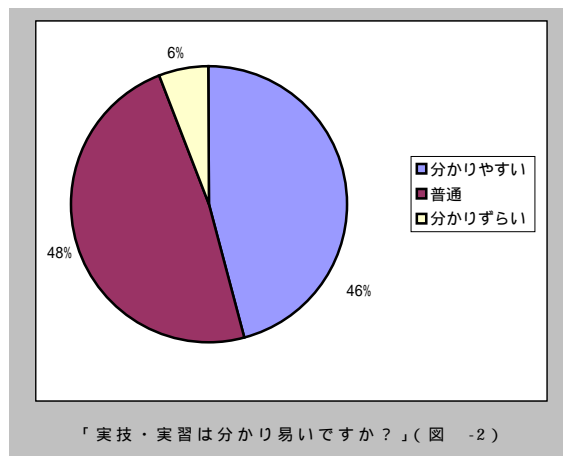
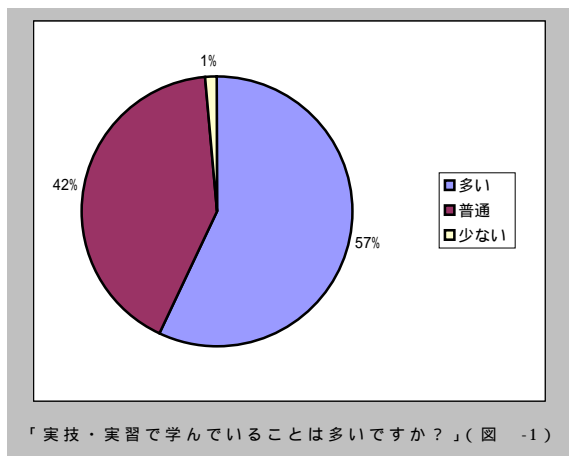
３，４年次は各自の主体性・自主性に基づいた作家としての搜索活動を触発し、表現技術・創造精神の形成を行う指導をしている。コンクールとして年２回担当教員以外の指導で批評会が行われる。

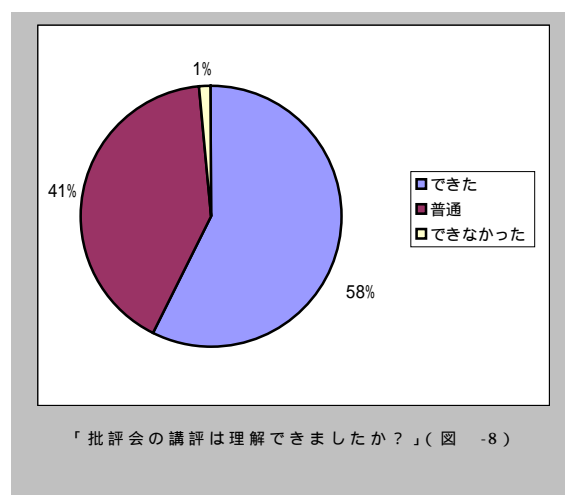
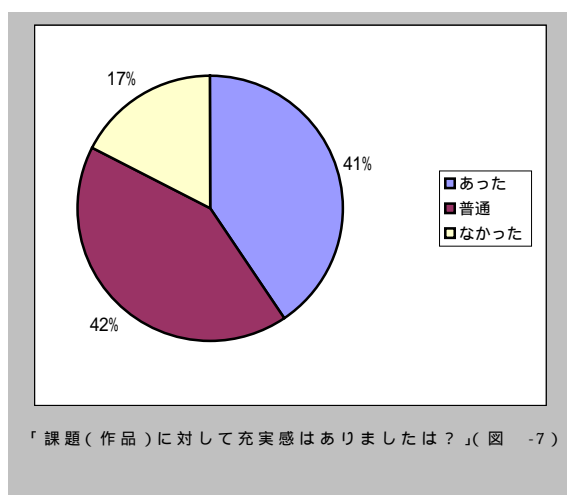
特別実習として箔・絹本・技法講座・表具・絵の具・材料研修旅行（奈良、京都、福井、金沢などへ墨、絵の具、和紙、金箔の製造見学）素材研究も重要と考えている。模写実習に関しては、二条城美術研究所所属の特別講師を依頼し、より実践的模写を学生に体験させている。

[実態]

日本画の授業に関するアンケート調査の結果

2003年度の学生を対象とする。(学部1～4年、院1年)





③教育効果

卒業生、学生の各コンクール等での受賞状況

青垣 2001年 日本画展

- 第 15 回 優秀賞 (吉村朝丈)
- 兵庫県知事賞 (安田敦夫)
- 兵庫県芸術文化協会賞 (真島友子)
- 第 16 回 東京新聞賞 (上坂美樹)
- 第 17 回 東京新聞賞 (柏原祐子)

佐藤太清賞公募美術展

- 佐藤太清賞 (西川芳考)

奈良 万葉日本画大賞展

- 第 1 回 万葉日本画大賞 (大矢真嗣)
- 準大賞 (木下めいこ)

第 5 回雪梁舎フィレンツェ賞展

- フィレンツェ大賞 (亀山祐介)

臥龍桜日本画大賞展

- 第 12 回 優秀賞 (日暮謙一)
- 第 14 回 大賞 (菅原桃佳)
- 第 15 回 大賞 (松村ちひろ)
- 優秀賞 (伊藤正次)

(財) 佐藤国際文化育英財団奨学生

- |        |         |
|--------|---------|
| 第 10 回 | (福井青士)  |
| 第 11 回 | (坂本藍子)  |
| 第 12 回 | (松村ちひろ) |

堀越泰次郎記念奨学金

- |       |        |
|-------|--------|
| 第 1 回 | (上坂美樹) |
|-------|--------|

## ④専任教員と非常勤教員の役割

日本画の指導体制は全体指導体制をとっている。各学年の担当を決めているが担当学年以外の指導も積極的に行なっており、縦、横の連携、協力を自由にするため柔軟な指導体制を目指している。

実務的には、各授業のカリキュラムの立案、構成、指導は専任教員が行い専任教員主導の体制をとり、特別講座講師として年 2 回 3 人の学外の講師、名誉教授、学内他学科の講師、特別実習の講師の方々を依頼し専任教員とは違った目線からの指導を行なっている。

## ⑤研究活動

## \* 共同研究について

2001 年度

「日本画におけるバインダーの現在とその可能性」

- ・ 現在使用されている膠の分析

市川保道教授、榊田隆一教授、中野嘉之教授、戸田康一教授、米谷清和教授

植本誠一郎氏 (ホルベイン)、上田邦介氏 (うえまつ)、中川晴雄氏 (中川胡粉)

2002 年度

「日本画におけるバインダーの現在とその可能性」

- ・ 紙と膠について

市川保道教授、榊田隆一教授、中野嘉之教授、戸田康一教授、米谷清和教授

植本誠一郎氏 (ホルベイン)、上田邦介氏 (うえまつ)、中川晴雄氏 (中川胡粉)

## ⑥就職支援

主に 4 年生を担当する教授が受け持ち学生との個々の対話を重要と考え、進路を共に考えている。

作家に育っていくことを主としている。

## ⑦課題

授業に関するアンケートから、教育の原点である学生とのコミュニケーションは、ほぼ満足できる内容をもっていると思われる。美術特に日本画指導は日本という特殊な環境と風土に根ざしている、素材の使用は新しい方向に向かおうとしている、但し西洋、アメリカからの文化流入に対し東洋画としての日本画の位置付けは、創作の思考、伝承等、現代

日本画は厳しいところにある。

課題としては指導回数、学生の課題提出に対する意欲増進は今後十分な検討と実践を推進すべきである。

### 絵画学科油画専攻

#### ①教育目標

表現手段が多岐にわたっている現在、美術教育は従来の技術指導や、画一的な全体指導では対応が難しくなっている。各人の個性差や、現役から浪人までの年齢差のある学生の、それぞれが志向する表現手段を考慮し、積極的な制作意欲を導きだす指導態勢を整えることが重要である。この場所が、将来作家として美を創造してゆく為の幅広い基盤となるよう育成に努めたい。

#### ②教育効果

2000～2003年度は、カリキュラムを遂行する為のクラス選択制が、より明解に推移した4年間だった。具体的には2000～2001年度の6教室制が、2002年度の過渡期を経て、2003年度には3分割に再編成された。2001年度以降再編に着手し、順次カリキュラムと連動したクラス編成の見直しをはかって来た結果である。具象的傾向、抽象的傾向、同時代美術（コンテンポラリー）の3つの大きなグループに分割され、クラス選択は学生にとってより分かり易くなったと言える。

クラス選択は、1年生後半、2年生、3年生の計3回あり、その度に希望により、移動、入れ替わりがある。クラス選択説明会だけでなく、先輩や友人からの情報もあり、定員の限界を越えない限り、ほぼ希望どおりの選択が可能となった。さらに内容の充実が必要だが、学生が自分にふさわしいクラスを選択でき、教員との関係も円滑に行われている実態を見て、教育効果は以前よりもおおむね向上しているものと自己評価したい。

(2003年度はクラスの名称が、グループ、またはアトリエと学年により混在していたが、2004年度から、1年～4年まで名称をグループに統一予定)

#### 『グループ1』

美術は思考のみで生み出されるわけではない。たとえ美術作品を作り出す、唯一思考する私たちだからといって、人間はすぐれて突出した存在だということにはならない。地球上に生きる限り、自然界を構成する一員にすぎないことは否定できないからだ。そのことを謙虚に受けとめて美術を考えてみると、自然、人間、生活環境の中の物、それらの「存在を見る」ことから得られるインスピレーションは極めて重要であることに気がつく。そして、見る人の内部でそれが思考と結びついた時、初めて表現上の有効なファクターへと上昇する。

その表現とは、一面的に「見ること」から「描くこと」へと移行することだとは言いきれない。「見ること」から「見ないこと」へ、そして「見ること」から「描かないこと」への移行も、やはり表現であることに違いはないはずだ。だがそれらの移行する軌跡は、い

ずれも「見ること」から始まった「物の存在」との関わり方の変種だということができる。どのような表現手段でも、思考のみの空転を避け、「物の存在」を「見る」という始源的な行為に、いつでも戻れる柔軟な循環システムを自分の体質として確立することが重要だと考える。その上で、近、現代の美術の変遷を考慮し、「リアリズム」「リアリティー」「在り方」という広範囲な「存在」についてのとらえ方を考えてみたい。

したがって、グループ1では、特にモデルなど、物に密着した具象的な表現をはじめ、ゼミ等によって抽象表現や、自己発見の為の感覚的ドローイングを試み、また脱平面による作品を含めた多角的な表現の実践が可能となっている。

### 『グループ2』

グループ2は、抽象絵画や現代造形について研究し、自己表現を探求することを目標に掲げている。「絵画とは何だろう」という疑問や、この時代と社会にいる一人として生まれる創造的な問題意識や、自分にとってのリアリティーを大切にしながら作品制作を行っている。ともすれば情報の中に埋没してしまいそうな自己をあるべき自己として再確認し、制作することの楽しさと困難さを体験しつつ、それぞれの真の創造を獲得すべく指導を行っている。

1, 2年では、現代造形の基礎演習として各教員の演習と講義を通して、特に素材と造形の研究を行い自己表現を探求している。ドローイング、オートマティズム、コラージュ、アッサンプラージュ、抽象絵画、レリーフ、ファウンドオブジェ、インスタレーションなどを試みている。3, 4年では、専任教員4名による4クラス制で、教員それぞれの個性とアイデアを生かした授業を行い、きめ細かな指導を行っている。面接による年間制作計画や進路の相談、ポートフォリオやプレゼンテーションの指導を行い、美術館などでの学外授業や研修ゼミ旅行も行っている。1人担任制による閉鎖性が問題となるが、グループ内教員が相互のクラスの批評会や指導を受け持つことで開かれたものになるよう努めている。今後、更に開かれた常態を目指していこうと考えている。

### 『グループ3』

2002年度より現グループ制が始まり、グループ3のサブタイトルとして、「同時代美術」を掲げて来た。それは一般的にカテゴライズされた「現代美術」をさらに積極的にとらえ直し、変化する時代（その時々々の今）に即応した美術、表現を考えるグループであることの表明である。専任教員もその「今」に対しての制作研究と発表活動をしていると自負している。また本専攻の歴史を考えても、時代（美術界）に対してつねに先駆的な発言、発表をする作家を輩出して来た。またそれらの作家の多くは、絵画表現にとどまらず、多岐のメディア、表現によってその存在感を強くしている。そのよき伝統を守り、さらに先鋭化するために努力していかなければならないと考える。

しかし、一方で先鋭化することは、それを標榜した途端、逆に鈍り、形骸化し、閉鎖的になり、ある種のタコ壺化の危険を孕んでいる。グループ3内でも、完全な個別教室制を採らないのも、美術教育において、教える側と教わる側が出来るだけフラットな関係を保ち、すべてに開かれたシステムが望ましいと考えているからである。ただそのことにより、教員がグループ内すべての学生を把握しなくなってしまう。もちろんそれは事実上不



可能であり、たとえ出来たとしても非常に形式的なものとなってしまうといったジレンマに陥る。現状では低学年の指導を非常勤講師の比重を高めることで、全体のバランスを何とか保っている。

このように開かれたシステムと先鋭化は矛盾を孕んでいるが、どちらか一方を取れば良いというものでもないので、今後も継続して検討してゆくべき問題である。

グループ3では今まで特別講義やワークショップを通じ、他学科との交流を試みて来た。今後さらにそれを深め、大学という有機体の中で、それを支える一つの細胞として、あるいはラボとして、またあるときは学外に対する本学のサテライトとしての機能、存在でありたいと考えている。

受賞年度	受賞名(コンクール名)	氏名	卒業年度
2000年度	群馬青年ビエンナーレ 群馬県立近代美術館 奨励賞	雨宮庸介	学99卒
	フィリップモリスアートコンペ 大賞	奥村雄樹	学00卒
2001年度	3.3㎡(ひとつぼ)展 グランプリ	雨宮庸介	学99卒
	トーキョーワンダーウォール 入賞	桑久保徹	学01卒
	アートボックス 大賞	水野 暁	院01卒
	トーキョーワンダーウォール 大賞	原 良介	院01卒
	FREE ART FREE2001 大賞	鮫島大輔	院02卒
	トーキョーワンダーウォール 大賞	鮫島大輔	院02卒
	V O C A展 奨励賞	大谷有花	院02卒
	キリンアートアワード 奨励賞	水谷 一	院02卒
	八王子夢美術館 奨励賞	水谷 一	院02卒
	ターナー 美術手帖賞	峰松宏徳	学03卒

学生・卒業生の受賞歴(表 -1)

### ③課題

油画専攻全体を、改善、向上の視点から見ると、次のことが課題としてあげられる。1年生前半の共通カリキュラムである。基礎課程に位置づけられてはいるが、基礎教育としての明解なビジョンが学生に伝わっているかどうか疑問な点もある。難しい問題が含まれているので、時間をかけて考察する必要があるが、基礎教育にはどのようなカリキュラムを立ち上げてゆけば良いのか、また基礎にどのくらいの時間を必要とするのか、基礎そのものの考え方を含め、今後検討を重ねなければならない。

それだけに留まらず、ファインアートの横の連携を含め、美術大学全体の基礎教育の充実に向けて、改善してゆく余地は残されている。

### ④大学院

大学院生は、作家に一番近いところに位置している。作家としての自立を考えれば、クラス担当制の中に埋没すると、場合によっては逆に拘束されることも予想される。従って大学院では、学部の時のようなクラス制は採らない。学部で培った各自の制作研究をバツ

クアップし、作家活動に向けた一人の表現者としての自立の手助けとなる指導をめざしている。通常、教員がアトリエに指導に出向く以外に、院生からの教員へのアポイントにより、学部時の担当教員以外の様々なジャンルの教員との接触を可能にし、幅広い視野に立つ考察が持てるようにしている。また、学部で行われるどの特別講義にも参加できる。

一人あたりの壁面積は十分に確保されており、個展、グループ展、コンクールへの出品等、積極的な発表活動が行われている。通常の指導の他、講評会は年2回である。各院生が希望した3名から5名の教員により、各アトリエで随時批評を受ける。批評した教員は協議して評価を決定する。また修了制作では、教員全員の協議により評価を決定している。

### ⑤専任教員と非常勤教員の役割

専任教員から非常勤教員へ指導の方針を伝え、それに沿ったカリキュラムの内容で現場での指導を行なっている。非常勤教員は、基本的には1,2年次の授業を担当しているが、グループによっては3年次以上の学年にも指導に関わっている。

## 絵画学科版画専攻

### ①教育目標

多様な版種による多角的な視覚と思考を技法と修練によって、より新鮮で創造的な世界を切り拓き、作家としての基礎的能力を深める。

### ②カリキュラム構成

1年次：木版・銅版・リトグラフ・シルクスクリーン各版種の道具の扱いや素材について基礎技法を学び、コラージュ制作や色々な素材を用いたオブジェ制作・人体デッサンなどの演習を通じて幅広い表現を学ぶ。

2年次：自身の選択した版種に分かれ、より詳しい技法の習得、自己表現の在り方について探る。また、1年次に続き、特別講師による演習を通じてより幅広い表現を学ぶ。その他、CM制作等で活躍する映像クリエイターを招き3DCGを用いて版画作品の映像化の実践を行う。

3年次：自己表現の探求と共に、マスメディアや、ギャラリスト・評論家・作家等、第一線で活躍する方を講師として招き、実際のテーマにより現代版画を考えていく。テーマとして「メディアからみた現代の版表現」「デジタルによる版表現」「メディアアートの今後」「国際コンペについて」など。  
その他フレスコ画、テラコッタ粘土、道具づくり等の演習がある。

4年次：1年を通して卒業制作と版画集を作成。  
また、卒業制作展を銀座等の画廊にて開催。

### ③教育効果

アンケート調査の結果

・2,3年次の基礎実技においては、70%～80%の学生が、良い又は普通、分かり易いという結果により、教育効果があると評価する。

- ・演習：期間が1週間と短い事もあり 10%前後の学生が理解できないと回答しており、従って今後この期間を1週間以上に延長することをカリキュラム上検討する。  
また、モーショングラフィックスの授業については昨年度使用したソフトが難しすぎたため理解度が低かった。今後は、ソフトの専門家を入れて指導にあたる。
- ・版画の専門分野については、おおむね学生に評価されていると考える。

その結果として、毎年卒業する学生の約 1/3 の学生が大学院へ進学をし、以下の通り各コンクール等で受賞する等卒業後、作家として活動をしている。以下大賞受賞者のみ記載。

### 1 期生

大矢雅章（日本版画協会 協会賞受賞）

### 2 期生

大塩紗永（01 池田満寿夫芸術記念賞/大賞受賞版画協会/02 準会員佳作賞）

羽岡 元（03 プリンツ 21 グランプリ グランプリ）

### 3 期生

傍嶋飛龍（00 池田満寿夫芸術記念賞大賞受賞/第1回利根山光人記念大賞展ビエンナーレきたかみ大賞）

杉山 実（グラフィックアート「3.3 m<sup>2</sup>展」グランプリ受賞）

久坂 奏（フォトグラフィックアート「3.3 m<sup>2</sup>展」グランプリ受賞）

### 4 期生

三瓶光夫（04 プリンツ 21 グランプリ グランプリ）

### 5 期生

藤井 哲（大阪現代版画コンクール展大賞受賞）

### 6 期生

全田紗和子（03 第80回記念春陽展大賞受賞）

\*大賞以外の受賞者数：約 20 名

## ④ 専任教員と非常勤教員の役割

専任教員：版画基礎実技と専門分野の指導と講評

非常勤講師（名誉教授・客員教授・非常勤講師・特別講師）：1, 2年の基礎過程と講評。又、特化された専門分野の指導

## ⑤ 研究活動

シルパーコン大学・多摩美術大学絵画学科版画専攻版画作品の交換展

- 展覧会名 Tama Art University, Japan&Silpakorn University, Thailand 2002
- 展覧会会期 2002年6月12日～6月30日
- 開催開場 シルパコン大学ギャラリー
- 内容 シルパコン大学の学生及び教職員、多摩美術大学絵画学科版画専攻大学院生による版画作品交流展。  
シルパーコン大学(39名)、多摩美術大学大学院生(27名)により構成。

- 展覧会名 シルパーコン大学・多摩美術大学による版画交換展
- 展覧会会期 2003年10月27日～11月8日
- 開催開場 多摩美術大学絵画北棟1階エントランスホール
- 内容 シルパーコン大学の学生及び教職員、多摩美術大学絵画学科版画専攻大学院2年生による版画作品交流展。  
シルパーコン大学(28名)、多摩美術大学大学院生(21名)により構成。

## 【高大連携事業】片倉高校 造形美術コースの生徒の大学における学習

- ・銅版 エッチング・銅版の多色刷り(ヘイター刷り)  
担当 教授:渡辺 達正 助手:2名
- ・木版 木口木版 製版行程・木版画の説明・木口木版 刷り  
担当 教授:小林 敬生 助手:2名
- ・リトグラフ アルミ板リトグラフ・ベニヤによるリトグラフ  
担当教授:小作 青史 助手2名

## 【版画体験実習】

- ・2001年7月13・14日 pm13:30～pm16:00  
受講生人数 (各版種10名)
- ・2001年7月27・28日 am10:00～pm16:00  
受講生人数 (各版種10名)

## 【石膏デッサン】2001年7月13・14日 am10:00～pm12:00

受講生人数 30名

## 【版画体験実習】2002年7月22・23・24・25日 am10:00～pm16:00

受講人数 14名

## 【版画体験実習】2003年7月22・23・24・25日 am9:30～pm5:00

受講人数 9名

## 【大学版画学会】

版による独自の造形表現と大学における研究及び教育の発展を目指す。

大学版画展は、次代を担う若い人々の制作発表のみならず、版画を通じて社会と美術館、大学との深い交流をはかっている。

- ・ 第 25 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2000 年 12 月 2 日～12 月 17 日
- ・ 第 26 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2001 年 12 月 1 日～12 月 20 日  
学部 4 名 大学院生 8 名
- ・ 第 27 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2002 年 11 月 30 日～12 月 20 日  
学部 1 名 大学院生 10 名
- ・ 第 28 回全国大学版画展（町田市立国際版画美術館）2003 年 12 月 6 日～12 月 21 日  
学部 3 名 大学院生 9 名

【チャリティ販売】

期間：大学版画展会期間中（毎年）

場所：町田市立国際版画美術館

売上げの半分から経費等を除いた全額を、町田市の福祉団体へ寄付

本学 参加者人数 平均 50 名 売上げ平均 110,000 円

【公開セミナー】

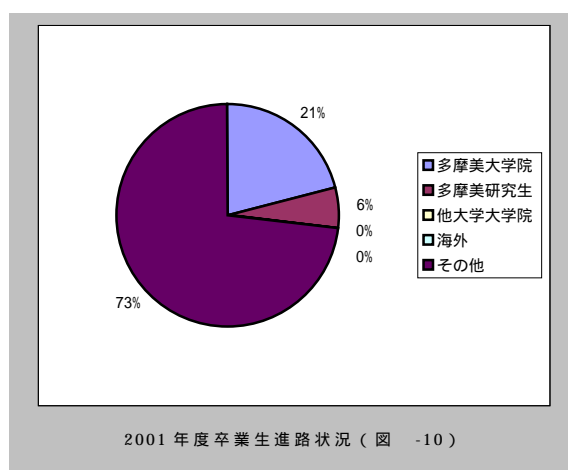
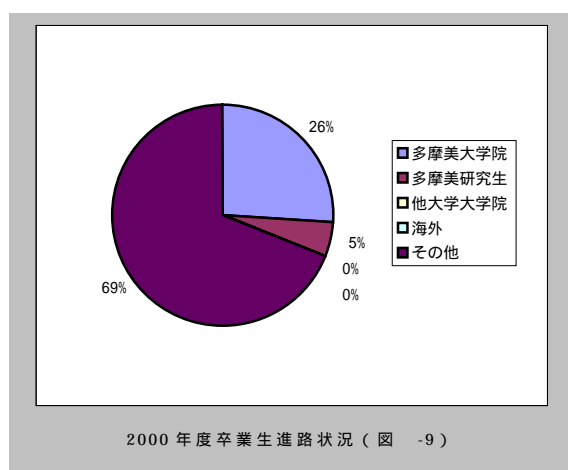
2002 年度 油性・水性木版の多版摺り 町田市立国際版画美術館

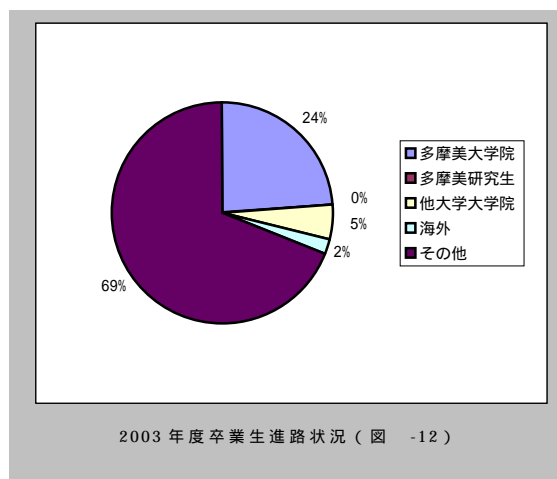
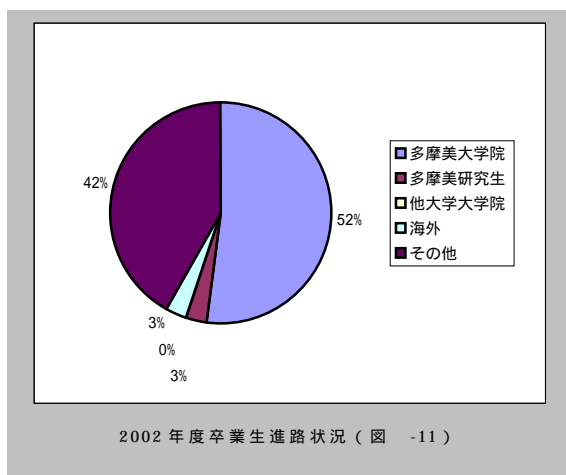
2003 年度 足刷りリトグラフ 町田市立国際版画美術館

- ・ 現状としては、他学科が行っていない様な事業を行うことができていると評価しているが、予算が少ない事が不十分な点としてあげられる。

⑥ 就職支援

\*全力で作家にするために努力している。





## 彫刻学科

### ①教育目標

彫刻は立体の芸術である。人間の歴史とともに始まった、造形表現のなかで最も古くからあった表現形態の一つである彫刻を、自らの表現手段として現代的な展望から、自分自身の手で見、手を使い、自己表現の創造の道を目指す。

我々はすばらしい造形文化の遺産を数多く受け継いでいる。それらは遠い祖先の人たちの貴重な生活の証でもある。

その文化遺産から、我々は多くのことを学ばねばならない。同時に現代に生きている者は、自然を尊び、人と社会と芸術のかかわりを大切にして現代の創造を探究していかねばならない。

現代彫刻は、多様化する価値観の中で人間の意識の変化や、新しい素材や技術に敏感に反応して、様々な表現形態を生み出し、個々の創造の領域を求めることとなった。今日の彫刻を目指すということは、新たな領域への果敢な挑戦を始めることでもある。

彫刻学科に学ぶ学生は、自然形態の探求と素材の扱い方などの基礎を徹底的に学ぶとともに、創造の原点となる「自己のイメージの発展」や「ものの見方」を養い、それを基本として自己表現の創造へと進む。

彫刻学科では、学生と教員との人間的交流を基盤にし、お互いの思考や創作を通して彫刻芸術の修練と探求を実践する。教員は体験を通しての助言と指導を惜しまない。「何をしたいか」「何を学びたいか」という目標をしっかりと見据えて、自らの手による探求と努力、完成の練磨と向上に努めることこそが、それぞれの明日を開く鍵となるのである。

### [実態と現状評価]

八王子キャンパス計画の実現に伴い、近年、本学科の掲げる教育目標も概ね達成されつつある。それは素材ごとの専門工房に専任・非常勤教員をそれぞれに配した指導システムが、「創作研究と発表との一体化」を実現した専用ギャラリーとの連動により、カリキュラムの充実に貢献している。また、専門（専攻）制の導入により個別指導の徹底化が可能と

なり学生の志向性に応じた柔軟な指導がなされるようになった。

しかし大学、あるいは学科の評価は、卒業生の活躍に担うところが大きい。デザイン系の学科のように、その年々の学生の就職先である程度、評価が計れる領域とは異なり、ファインアート系の場合、卒業後 10 年、20 年後に漸く結果の出る世界なだけに、在学中に卑近な完成度を求める教育方針では逆効果である。将来、豊かな人格を備えた優れた芸術家の輩出を目指したゆとりのある教育を実現したい。その為にも教育施設を有効活用し、カリキュラム改革や産官学共同研究の実施等を重点に教育目標の達成に引き続き努力する。

## ②カリキュラム構成

- ・実技実習Ⅰ・Ⅱ / 彫刻実技Ⅰ－○塑造実習 1・2・3・4 ○基礎実習 ○木彫実習  
○彫刻論 A
- 彫刻実技Ⅱ－○塑造実習 5・6 ○石彫実習 ○金属実習  
○基礎実習 2 (パソコン講習)
- ・実技実習Ⅲ・Ⅲ / 彫刻実技Ⅲ－○塑造・石彫・木彫・金属・諸材料専攻  
○古美術研究ゼミ ○課外研究ゼミ
- ・実技実習Ⅲ・Ⅳ / 彫刻実技Ⅳ－○塑造・石彫・木彫・金属・諸材料専攻  
○彫刻論 B ○卒業制作

### [実態と現状評価]

本学科のカリキュラム構成の特徴としては、大きく基礎課程と、専門課程に大別される。

基礎実習（1，2年次）においては、本学科の基本理念に於ける基礎教育の重要性を踏まえ、全教職員が関わりながら2年間指導にあたっている。現状では実習教室の整備等により、ほぼ教育目標は達成できていると考える。今後、内容に停滞感が見られたり、必要性に疑問のある授業がある場合、新たな角度から基礎実技を捉え直した講座の導入など、カリキュラム全体のバランスをはかりながら、基礎教育の活性化と時代を見据えたカリキュラム改革を実現する。

専門実技（3，4年次）においては、素材ごとの専門工房において、比較的ゆとりのある教育が実現されている。特に、ギャラリーの有効活用によって、「創作研究と発表」そして、「鑑賞と交流」という総合的な学習が行われるようになった。また、専門工房の明確化が学生の選択肢を広げ、より適切な指導が可能となった。しかし、一方では、専門領域に偏りすぎて、偏狭な表現に陥る可能性も感じられる。斬新且つ柔軟な発想と次世代を担う人材の育成の為には、指導体制の見直しも今後の課題である。

## ③教育効果

1，2年次の基礎過程において、選択制を導入する大学が多い中、本学科では徹底した対象観察によるモデル実習と、実材実習（各実材実習とも7週間ずつ実施）を全て必修にしている教育効果は大きいと考える。様々な自然素材に触れ、自らの手をとおして感性を刺激し、思考する大切さを学びながら3，4年次の専門課程へと引き継がれる。これらの体験が学生個々の可能性を広げ、自らの志向性を見極めた質の高い造形へと結実している。また、古美術研究ゼミ、課外研究ゼミ、学外から講師を招聘し開講する特別講義（彫刻論）

等を実施し、専門領域にとどまらず多角的な研究にも努めている。さらに、研究発表の場として学内ギャラリーでの発表や、産官学共同研究の実施等により客観的な作品批評の場を創出し、美術と社会との関わりについても学習させており、これらの経験が卒業後の進路においても活かされている。

次に、問題点であるが、専門課程（3，4年次）において素材ごとの専門工房での制作・指導によって、きめの細かい指導がなされる反面、工房や学生の孤立化も一部で指摘される。この問題は学科内の問題にとどまらず、学内における各学科の孤立化の問題と同義であり、今後、学科内の指導体制や工房システムを再検証し、教員同士の授業相互評価システムの確立など、開かれた教育の実現に努力する。また、他学科の学生との交流を積極的に促して、学科間交流の活性化をはからなければならないとも考える。

#### ④専任教員と非常勤教員の役割

本学科の指導体制は、基礎課程、専門課程ともに、専任教員の専門（専攻）分担制にもとづき、専任教員と非常勤教員を担当授業に配置し、専任教員主導のもとに非常勤教員の協力を仰ぎながら、指導にあたっている。各専門によって非常勤教員の役割分担には若干の違いはあるが、具体的には、各授業の立案・構成・指導の中心は各専門の専任教員が行い、その補佐役として非常勤教員の役割があり、あくまでも専任主導型の指導体制といえる。しかし、この体制は、他の専任・非常勤どうしの、横の連携、協力が少ない縦割りの体制であり、授業進行のし易さの反面、指導方針が不透明で客観的評価に欠けた授業になりかねない。今後、複数の指導教員による授業の導入や、非常勤及び特別講師による独立した講座の開講、専門領域を超えて指導にあたる教員の配置など、常に意見交換や客観的評価の可能な指導体制を実現したい。また、非常勤教員の選考方法を見直し、時代に対応した幅広い人材の確保にも努めたい。

#### ⑤研究活動

研究活動については、本学科が過去に10年間にわたって実施した長野県更埴市との彫刻設置事業の実績をはじめ、山形県寒河江市への彫刻設置事業（1999～2003年度）、聖路加国際病院での展覧会の開催（2001、2002年度）、2003年度には八王子市と本学との共催による、八王子市夢美術館開館記念事業・多摩美術大学彫刻展の開催（2004年度も開催予定）など、学内での研究発表にとどまらず、日頃の教育効果を地域社会に広く公開し、美術教育の理解と交流の場を創出して、学生の将来を見据えた学習支援活動を積極的に行っている。さらに、開かれた大学教育をめざして教育内容の積極的な公開に勤め、地域社会に根ざした教育の実践に今後とも努力する。

#### ⑥課題

情報化が加速する現代社会において、若い世代の美術の可能性への追求は、既存のカテゴリーを超え、従来とは違った経緯で社会と関わり始めている。「絵画・彫刻・デザイン」などといった色分けは彼らには存在しない。あるのは、目の前にある現実であり、現実が引き起こすあらゆる事象そのものがモチーフとなり、アートと成り得るのである。今後、ますます経済のグローバル化が進み均質化する価値観のもと、美術もまた時代の波に飲み



込まれていくのか。このような現実を踏まえ、彫刻学科では美術大学が果たすべき役割とはいったい何かを常に念頭におき、時代に翻弄される人間ではなく、自分の目で視、思考する自立した芸術家の育成を目指して、新たな美術教育の可能性を模索していきたい。それには、伝統と革新のバランスを保ちながら、幅広い教育を実践することが大切である。一方、大学本来の在り方として、生きた教育の実践には何より、教員個々の研究体制の維持と充実が必要不可欠である。

## 工芸学科

### ①教育目標

文明の叡智の結果誕生した陶・ガラス・金属という質料を用いて、情報文化が欠落させてしまっている「モノ」のもつ圧倒的な存在性を造形へと結実させる、これが工芸学科のめざすものである。

かつてものを造ることは、何のためという目的を探し、つくるべきものを計画、それをもとに素材を活用して実現する、という総合としての人間的行為であった。しかしながら、高度近代化社会は大量消費の効率追及のために、つくる行為を分割させ、人がつくることや、つくられるものへの認識能力を失い、総合としての人間的行為を二義的あるいは趣味的存在へと押しやっていった。さらに時代は、非物質つまり電磁や電波などによる仮想の情報を、現実として受け止める文明を展開するようになった。

工芸学科はそうした状況に異議を唱え、現代において、陶・ガラス・金属という実在を使い、手でものをつくることの意味を提言していく。また、生活に深くかかわるべき工芸において、何が人間にとって望ましいものなのか、何が我々の時代に応答し得る造形概念なのか、個々人が模索する美術教育を行う。

多摩美術大学における工芸教育は、従来の、いわゆる工芸の概念では律し切れない独特の教育研究を実践し、国際的な評価を得て来た。陶教育は、陶素材による現代美術を創作しており、また、日本ではじめて本学に導入されたガラス造形の教育は、国際的なガラス工芸作家を多数輩出している。

工芸学科は、伝統的な日本の工芸観や西欧的な美学の芸術思考を超越し、時代の新たな価値観を構築し、世界的なフィールドで活躍し得る陶・ガラス・金属の現代造形作家を育成する。また、デザイン工芸の指導機関や社会教育施設などで指導に携わる教育者や研究者、工芸工房やデザイン社会などで企画・デザイン・制作に携わるクリエイターを育成する。

### ②カリキュラム構成

陶、ガラス、金属、それぞれのプログラムは本学科の教育目標を達成することを意識し、実材の違いから来る、あるいはそれぞれの歴史的背景を考慮して、独自のカリキュラムを組んでいる。本学科では思考に重きを置き、技術の習得を主目的としていない。実技の主軸を造形演習行為とし、造形論としての思考と、それを作り上げる技術を一体化して行う方向性を持つ。カリキュラムが正しく機能しているかの見直しは毎年の恒例としている。これは専任、非常勤の教員が反省熟考し、学生からの要望も組入れ、必要事項の変更を行

っている。事例として、3つのプログラムを希望に沿って経験する「異素材との組み合わせによる造形」課題を3年時に取り入れている。教員側の負担は多大なものがあるが、学生が交流し、他の実材を知る有効な授業となっている。

### ③教育効果

実材を扱うことの喜びや困難さに直面する学生達は卒業を迎える頃にはどのように仕事を継続するか思案し、それぞれの方向を決める。実作者であれ、デザイン企画の分野であれ、実材に正面から向かい合った者の独特な視点が活かされている。陶プログラムは他大学と異なり、現代造形を目指すユニークな存在としてあることは周知の事実である。陶造形の分野では日本のみならず世界のリーダーとして活躍する者が多い。ガラスプログラムは日本で最初に設けられ、その分野で幾多の活躍する卒業生を送り出している。優れたガラス展では招待される作家の半分以上が本学出身者で占められることが証明している。また、金属分野では現代を強く意識した造形が行われ、独特な方向性が現れて来ている。多くの卒業生達が自分自身の工房を設立し制作活動を継続していることから伺われる。

思考に重きを置く教育は現代社会から強く求められ、その教育が困難なことであるからこそ注目をあびている。大学院への進学希望が高まって来ていることはその見逃せない事実である。単に仕事を継続するための進学ではなく、思考と造形の連動をより充実して行える場として院生は捉えて来ている。

受賞年度	展覧会	受賞名	氏名	作品名	卒業年度
2001年度	高岡クラフトコンペ	グランプリ受賞	太田真人	『a peel of light』	学 93 卒
	Glass Craft Triennale	佐竹ガラス大賞受賞	土屋章		学 98 卒
	第 37 回 神奈川県美術展	平面立体部門 大賞	小林秀幹	『静かな流れの中で』	院 98 卒
	第 35 回女流陶芸公募展	女流陶芸大賞	齊藤美千代	『間』	学 01 卒
2003年度	第 41 回朝日陶芸展	グランプリ	古川敬之	『Core?<!Y』	学 93 卒
	第 37 回女流陶芸公募展	女流陶芸大賞	星 巻	『想』	院 00 卒

学生・卒業生の大賞受賞歴(表 -2)

受賞年度	展覧会	受賞名	氏名	作品名	卒業年度
2000年度	第 18 回朝日現代クラフト展	優秀賞	志賀 英二		学 94 卒
	第 3 回現代ガラスの美展 in 薩摩	審査員特別賞	志賀 英二		学 94 卒
	金沢市工芸展	奨励賞	五十嵐智一	『響』	学 95 卒
	酒盃台展	優秀賞	宮尾洋輔	『tou』	学 97 卒
	第 36 回神奈川県美術展	平面立体部門特選	小林秀幹		院 98 卒
	第 36 回神奈川県美術展	美術奨学会賞	藤井志帆	『Untitled T00-001A2』	院 02 卒
2001年度	第 1 回現代ガラス展 in おのだ	審査委員賞	塩谷直美		院 86 卒

## IV. 教育研究

	第3回現代ガラスの美 展 in 薩摩	審査員特別賞	塩谷直美		院 86 卒
	第39回朝日陶芸展	秀作賞	古川敬之		学 93 卒
	21世紀アート大賞	熊本放送賞	留守玲	『Dear diary』	院 02 卒
2002年度	第2回 KOGANEZAKI・器 のかたち・現代ガラス展	日本ガラス工芸協会 賞	神田正之		学 82 卒
	日本現代ガラス展・能登 島	銀賞	志賀 英二		学 94 卒
	第8回 ものづくりコ ンテスト 高専・大学の 部	文部科学大臣奨励賞	磯 瑚子		学 03 卒
	第38回神奈川県美術展	平面立体部門 県立 近代美術館賞	松永明子	『時間の音』	現院 2
	第39回神奈川県美術展	美術奨学会賞	河上由武	『玉座』	学 02 卒
	第2回 KOGANEZAKI・器 のかたち・現代ガラス展	奨励賞	征矢 真由 子		学 04 卒

学生・卒業生の受賞歴(表 -3)

大賞以外

### ④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員は入学時の基礎的指導から大学院生の指導までを受け持ち、その他の事務的業務も助手・副手の力を借りながら行う。非常勤教員は主として学部の高学年の指導にあたる事が多く、その指導に必要と思われる適切な人材が配置されており、1年ごとの契約更新が行われている。

### ⑤学科運営の意思疎通

カリキュラムの検討など学科内では月に一度の学科内会議の席上で行われるが、それぞれの研究室を訪ねての意思の疎通が頻繁に行われている。

### ⑥研究活動

立川市との間で公園に設置するオブジェクト制作が2002年度に行われ、また2003年度には東京造形大学・女子美術大学とも共同して江戸川区との間で伝統工芸師/学生プロジェクトが行われた。参加学生は他大学の学生との交流、ならびに伝統工芸の仕組みを知る機会となった。

### ⑦就職支援

各自が制作を続けられるよう工房等の紹介を行っているが、仕事の性格上、就職状況は困難であるのは否めない。カリキュラム上にデザインにも則した課題を取り入れ、ポートフォリオの制作指導などを行っている。また教職課程を取る学生にはそのための猶予を与えている。

## ⑧ 課題

本来は他学科が第一志望であったが、「入学できたのは工芸学科だった」との学生を指導することは困難を伴う。これは本学の知名度によるのだが、この事実を勘案し、積極的に工芸分野を目指す学生を受け入れられるよう新しい入試を行う予定にある（2005年度入試予定）。

## グラフィックデザイン学科

## ① 教育目標

日々、進展、変化する情報化社会の中で、人々の生活環境やグラフィックデザインを取り巻く環境も急激に変化しつつあり、ビジュアル・コミュニケーション・デザインの役割は一段と重要になって来ている。このような現状から、深い人間性に根ざした豊かな感性、創造、発見、計画する力を基礎とし、描写、構成、情報伝達技術などの造形力を持ち、併せてデジタル機器による巧みな情報処理技術を保有する、創造性や問題解決能力が高い、実践的かつ進歩的なグラフィック・デザイナーの育成が本学科の目標である。そのために60数年に及ぶ伝統と実績の下に、これまでの教育を充実、高度化し、さらにコンピュータや映像などの教科目を加えて学科を構成している。アナログとデジタルの両面に均衡のとれた発想と技術、広い視野と高い教養、理論などを学ぶこととしている。

## [現状の報告]

コミュニケーションデザインの本質を軸に、内容の充実を志向している。そのことが結果として、最先端分野を拡充していくという好循環の構造につながっている。このことは少子化現象に対して危機感を持たねばもつほど重要視される。

1, 2年次で基礎的力を身につけ、3, 4年次で複合的に科目選択が可能なカリキュラム構成をとっている。

分野別では、広告 105・表現 65・伝達 20 名程の比率でコースに所属し、分野の選択は、学生の希望に沿って行われている。

それらを補う意味で、産業界において第一人者として活躍中の卒業生を中心とした特別講師を、年数回招いて第一線の現場からの刺激を与えている。特別講義は、他学科を含め平均 300 名ほどの学生が受講している。熱気溢れる講義が行われ、学生の評価も高い。

あくまでもデザイン教育がどうあるべきかを中心に据えて、大学として正攻法の改革を行っている。

## [評価と課題]

## A) 良い点

2年から3年に進級する際、28科目すべてについて1週間通してのオリエンテーションを行っている。基礎課程から専門課程への橋を架ける時間と捉え、自分の進む道を真剣に考えて欲しいということと、自分の選択する以外の分野への理解を深めてもらうことが狙いである。

本学科での一連の取り組みを分かりやすく説明するために、受験生向けフライヤーでは、カリキュラムの全貌が分かるように工夫している。学年を追って、誰が、何を、どんな意図で教えてくれるのかをダイアグラム化（マップ化）して示している。

合格者の質を上げ、実質の難易度を高めるために、レベルの高い入学者を確保するよう努めている。そのために採点日を増やす等、教員一丸となって努力をしている。

本学科も近年、社会貢献活動として、産官学共同研究を実施している。

#### B) 改善したい点

理論系科目の拡充が進んでいない。教員数の枠の問題もあり難しい。今後、各コースともに、研究分野に力を入れたい。

### ②カリキュラム構成

#### [現状の報告]

##### カリキュラムの考え方

基礎課程においては、ビジュアル・コミュニケーションの視覚化への技術習得を目的として「手」による表現手法による描写力、構成力の獲得とともに、コンピュータ等機材を介した表現手法を学び、併わせてデザイン基礎理論の習得を目指す。

専門課程では、ビジュアル・コミュニケーションにおける各専門分野についての表現手法と理論を一体化して学ぶことを目指し、専門コースを設けて、より専門性の高い講座内容を提供し、一方では各専門分野を跨ぐ科目選択のシステムにより、多面的な視点を持った学生の指導を行う。

グラフィックデザイン学科の現状の教育課程は次の通りである。

##### 教育課程

##### ■グラフィックデザイン学科基礎教育科目

□1年次／基礎造形Ⅰ、基礎造形Ⅱ、立体造形Ⅰ

□2年次／基礎デザインⅠ、基礎デザインⅡ、写真、タイポグラフィ基礎実習、立体造形Ⅱ

##### ■グラフィックデザイン学科専門教育科目

□3年次

広告コース／広告計画Ⅰ、広告映像Ⅰ、アートディレクションA-I、アートディレクションB-I、アートディレクションC-I、グラフィッククリエイションA-I、グラフィッククリエイションB-I、CMクリエイションⅠ、CI計画Ⅰ、パッケージ・デザインⅠ、セールスプロモーションⅠ、WebディレクションⅠ

伝達コース／視覚言語デザインⅠ、コンピュータ・グラフィックスA-I、コンピュータ・グラフィックスB-I、インフォメーション・デザインⅠ、エディトリアル・デザインⅠ、タイポグラフィⅠ

表現コース／表現デザインⅠ、広告写真Ⅰ、写真Ⅰ、イラストレーションA-I、イラストレーションB-I、アニメーションA-I、アニメーションB-I

## □4年次

広告コース／広告計画Ⅱ、広告映像Ⅱ、アートディレクション A-Ⅱ、アートディレクション B-Ⅱ、アートディレクション C-Ⅱ、グラフィッククリエイション A-Ⅱ、グラフィッククリエイション B-Ⅱ、CM クリエーションⅡ、CI 計画Ⅱ、パッケージ・デザインⅡ、セールスプロモーションⅡ、Web デイレクションⅡ

伝達コース／視覚言語デザインⅡ、コンピュータ・グラフィックス A-Ⅱ、コンピュータ・グラフィックス B-Ⅱ、インフォメーション・デザインⅡ、エディトリアル・デザインⅡ、タイポグラフィⅡ

表現コース／表現デザインⅡ、広告写真Ⅱ、写真Ⅱ、イラストレーション A-Ⅱ、イラストレーション B-Ⅱ、アニメーション A-Ⅱ、アニメーション B-Ⅱ

全コース／卒業制作

## ■グラフィックデザイン学科専門教育科目（学科目）

コンピュータ基礎概論、印刷概論Ⅰ、印刷概論Ⅱ

グラフィックデザイン学原論、広告史、広告表現論、広告コンセプト、English in Graphic Design、ビジュアルデザイン論、広告コピー論、広告原論

## ■ワークショップ

シルクスクリーン、描写、CG 基礎実習

## ■共通基礎教育科目・共通専門教育科目

外国語科目、演習科目（ゼミ）、他

## [評価と課題]

2004年度より、写真系講座（清水行雄・十文字美信）、Web デザイン系講座（福井信蔵・福田敏也）、アニメーション制作系講座（斉藤紀生）を充実予定。今後も更に拡充すべき分野と考えている。

前述した通り、理論系科目の拡充が進んでいない。充実のために、ビジュアルデザイン論、広告コピー論など、2005年度以降開設を予定している。さらに、本学科において必要な理論系科目の内容の構成を検討しながら、より発展をはかりたい。

## ③教育効果

本学科の基礎課程、専門課程の制作実習を経た学生は、産業界におけるビジュアル・コミュニケーションの分野に進出していくが、特に広告デザイナーの育成に顕著な成果が見られ、我が国の広告界におけるデザイナーの先達となっている卒業生の下で、近年も多くの広告賞を受賞する広告デザイナーを輩出している。広告デザインの制作実習は、マーケティング理論、広告表現理論と表現計画を一体化した指導であり、実証的な手法を駆使するデザイン教育を目指したことによる成果である。

また、描写力に重点を置いた教育により、アニメーション、イラストレーションのクラスの卒業生に優れた作家が出ている。デザイン研究では、グラフィックデザインと他分野

(情報デザイン、環境デザイン) とのコラボレーションが進み、特に大学院博士前期課程(修士課程)において研究成果が見られるようになって来た。

### ④専任教員と非常勤教員の役割

本学科では実技科目においては各学年の指導は、まず専門分野に専任教員が配され、非常勤教員がサポートするといった組み立てである。基礎課程における描写系専任教員、構成系専任教員、映像系(写真、アニメーション)専任教員が各2名を基準に配され、そこに非常勤教員が付くことになる。専門課程も同様に、各専門コースには広告コースの6名、伝達系2名、表現系4名の専任教員がカリキュラムを造り、コースを運営し、非常勤教員がサポートしている。

理論系については、専任教員が担当する例は増加しているが、外部の研究者が非常勤教員として専門の科目を担当している。

### 生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻

先進性と独自性・・・(学科の理念)  
自由と意力・・・(大学の理念)

### ①教育目標

「世界に通用する自立したデザイナーの育成」

目標を達成するため、入学、教育、進路の各過程において、2001年に5カ年計画を立案し2002年4月より実施している。

### A) 入学

「ブランドを上げ、入試倍率アップを目指す」

#### イ. プロモーション(情報発信)

- ・学科用シンボルマーク(2001年度)、パンフレット(2002年度) ファカルティー(2003年度)の作成
- ・グッドデザイン賞イニシアチブ展参加と産学作品企業内展示の実施(2002年度ー)
- ・産官学共同研究の外部展示の積極化(2002年度ー)

#### [評価・課題]

- ・グッドデザイン賞イニシアチブ展では、高校生や予備校生の来場者が増加。
- ・2003年度のホンダとの産学がドキュメンタリー番組に取り上げられた。

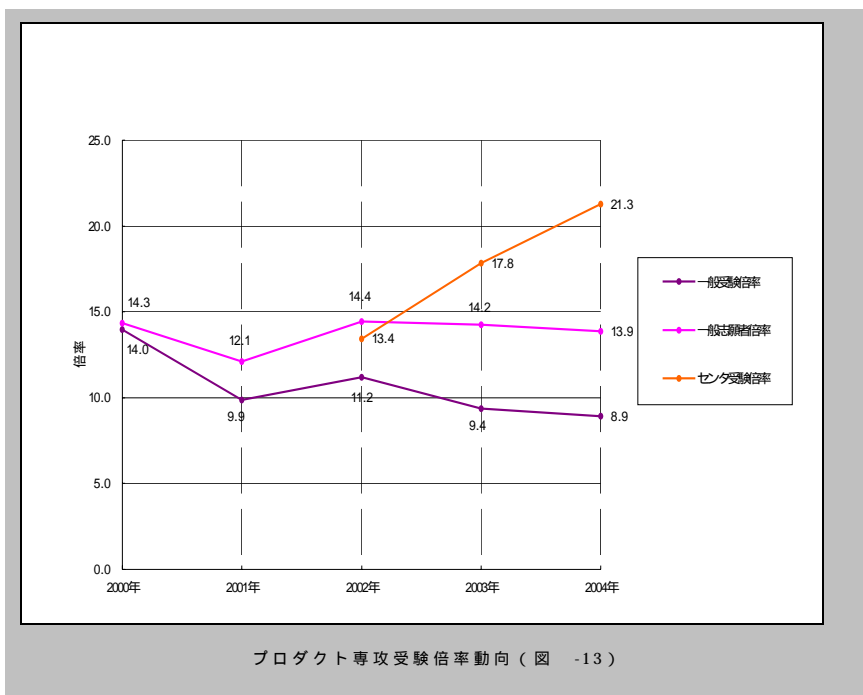
#### ロ. 入学試験(図I-13参照)

- ・大学入試センター試験の導入(2002年度ー)
- ・実技試験問題の目的の明確化  
デザイン:色鉛筆導入(2002年度ー)独創性、発想力、表現力を審査。

デッサン：モチーフの形体、構造、材質の表現力の審査に焦点を絞る。

[評価・課題]

・大学入試センター試験の受検倍率の増加（13.4倍から21.3倍へ）は、併願による確実合格を目指す受検者の増加を示していると考えられる。



B) 教育 「世界のプロダクトデザイン教育を先導する」  
イ. カリキュラム

・プログラムの目的別分類と目的の明示化（表 I -4 参照）

各学年のプログラムをメインプログラムとサポートプログラムに分類。

メインプログラム：総合的なデザイン学習が段階的に行えるよう構成。

サポートプログラム：デザインに必要な知識や技術を専門的に教授。

	1年		2年		3年		4年	
	デザインの楽しさを知る		デザイン表現技術の習得		デザインプロセスの修得		デザインの実践と応用	
	メインプログラム	サポートプログラム	メインプログラム	サポートプログラム	メインプログラム	サポートプログラム	メインプログラム	サポートプログラム
	基礎デザイン1	デザイン基礎 デカ生カ ザ産ラ イ写イ技 ン真ン術 ス演図 ケ習面 ツタ チ1	基礎デザイン2	デ応フア ザ用オイ イ写ルデ ン真ムア ス演デ ケ習イテ ツベザン チロイヨ 2ツン ブ概 メ論 ン ト	プロダクトデザイン1	一デ知 般ザ的 デザイン 財 産 ザ イ 経 営 概 論	プロダクトデザイン2	
1	プロダクトデザインの理解と目標設定		空間とモノの関係		試行錯誤する		前期課題	
2	造形トレーニング		身体とモノの関係		他者へ配慮する		卒業制作	
3	構造の理解		特定の人のためのデザイン		夢をカタチにする			
4	機能の理解		不特定多数のためのデザイン		環境に配慮する			

(表 -4)

※2002年度より実施。毎年チェック、改訂を行い、ローリング作業を実施（2004年度版）



- ・ 社会との積極的連携  
産学共同研究の積極化  
「サロン TAMA・P」（他分野で活躍する卒業生との交流の場）の開設（2003 年度～）
- ・ プログラムの連携強化  
「連携シート」の導入（2003 年度～）：他教員のプログラム進捗状況の把握
- ・ 知的財産の有効活用  
「学生作品アーカイブス」の構築（2003 年度～）：学生作品のデジタルデータ化
- ・ 自立心の向上  
「学生管理グループ」の設置（2002 年度～）：学生主体で実習室、工具類を管理

## [評価・課題]

- ・ プロダクトデザイナーに求められる知識や技能の多様化に即したカリキュラム作りが必要と考えている。（インターフェイス、ユニバーサルデザインなど）
- ・ 産学共同研究では、学生作品が商品化されるなどの成果を上げている。
- ・ サロン **TAMA・P** では多くの学生が参加し、卒業生と交流を深め、自らの指標を考えるきっかけとなった。より活発な交流を計るため、**2005** 年度設立を目標にアーバンサロンの設置を目指している。
- ・ 連携シートにより、他教員のプログラムを意識できるようになったため、全体性をもった指導が可能になった。
- ・ リニューアル版ホームページで学生作品アーカイブスを活用（2004 年度予定）。

## ロ. 指導方法

- ・ 専任教員と非常勤教員の役割の明確化  
専任教員（4 名）：学科長、大学院教務主任、教務主任、対外担当で役割を明確化。  
非常勤教員：専門の異なるデザイナーが、幅広いプロダクトデザイン領域に対応。
- ・ 3，4 年次チーム指導の実施  
毎日異なる教師が指導にあたり、プロの現場に近い環境を作り、実践的教育を実施。
- ・ 中間カリキュラム会議の開催（2003 年度～）：問題抽出の迅速化、次年度への対応。

## [評価・課題]

- ・ 頻繁に教師が顔を合わせる機会を設けたことで、連携指導がスムーズになった。
- ・ 各プログラムの進捗状況、学生の理解度の把握などプログラム全体を客観的に観察し、具体的に評価し、統括的に管理する仕組みづくりが必要と考えている。

## ハ. 環境整備

- ・ ワンウェイ方式からツーウェイ方式の講評会へ（2001 年度～）  
講評を聞く学生から教師の表情が見えるように、講評会のレイアウトを工夫。
- ・ 教授室の廃止、研究室大部屋制の導入（2001 年度）

## [評価・課題]

- ・学生の出入りが自由な大部屋制の研究室によって、教師と学生間の開かれたコミュニケーションが容易になった。
- ・専任教員の研究作業の場、非常勤教員の休息の場、参考品保管などを考慮すると現状の研究室ではスペース的に限界がある。

## ②進路 「個性を活かしたマンツーマン指導の実施」

## A) 就職支援

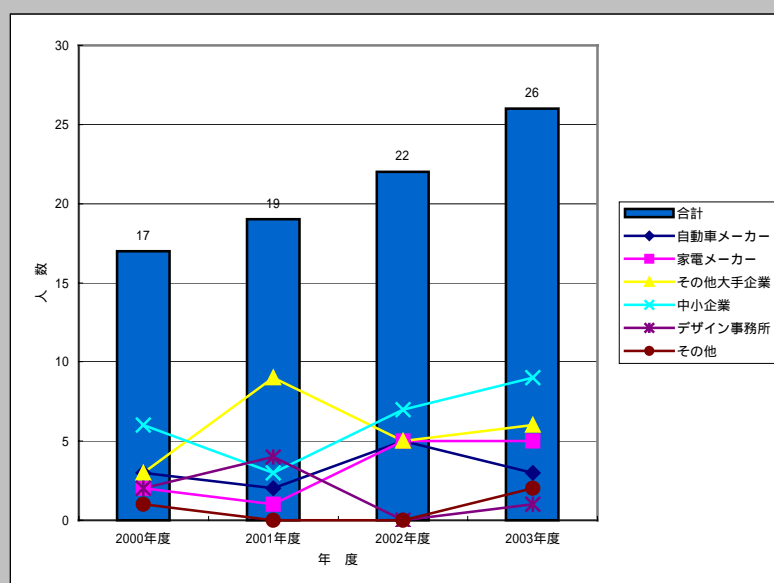
- ・就職担当教師に就職情報を集約。
- ・マンツーマン指導：ポートフォリオ制作方法、面接の心得などを個別指導。

## [評価・課題]

- ・求人数が減少している中、本学科の就職率は向上している。(表 I-5 参照)
- ・中小企業やデザイン事務所への就職者が増加傾向にあるのに対して、自動車メーカーや家電メーカーを含む大企業への就職者は減少傾向にある。(図 I-14 参照)
- ・近年は大手企業が実施している企業実習において苦戦を強いられている。学生の就職希望先の多様化や、企業や社会が求める人材と本学科で教えているスキルとのギャップなどが原因と考えられ、「会社訪問」などによる調査や分析が急務である。

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
学生数	27	27	26	32
就職内定者数	17	19	22	26
就職率	63%	70%	85%	81%

(表 -5)



プロダクト専攻就職先動向 (図 I-14)

### B) 進学

- ・本学大学院、他大学を含め、進学希望者は年1、2名程度である。

#### [評価・課題]

- ・プロダクトのデザイン現場では、スケッチや造形力といった従来型の基礎技術以外に、マネジメント力、ビジネスセンス、ユニバーサルデザインやインターフェイスデザインに関する知識など、より高い能力が求められるようになって来ている。
- ・そのため、今後は大学院の充実、社会人大学の可能性など、基礎的スキル以外の教育環境の充実が課題となっている。

### ③総合

着実な成果を見る中、上記3つの過程（入学、教育、進路）を充実させ、5カ年計画を強力に推進していく上で作業スペースの確保と指導陣の充実が急務と考えている。

## 生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻

### ①教育目標

ひとにもっとも身近である繊維。繊維を使用するあらゆるデザイン活動がテキスタイルデザインの領域である。人間は生を受けたその時から布地に包まれ、そして布地に包まれ生を終える。テキスタイルと生活環境との密接な関係は原始の時代から現在まで、また未来においても不変である。生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻においては、その重要な繊維のあらゆる可能性をこれまでの創造概念を超え追求する。

多様化する繊維は、テクノロジーの進化とともに日々巧妙に設計され変貌している。ウェア、ファニチュア、インテリアスペース、また医療、通信、宇宙まで、従来の狭義な解釈ではくくりきれない領域へと広がりを見せている。新しい時代と世界に向けてのテキスタイル文化の担い手として、クリエイティブな社会性と個性を備えたデザイナー、未知の造形を求めるテキスタイルアーティスト、心と技を継承、新技法を開拓するクラフトマンなど幅広い視野と豊かな感性を持つ人間性の育成を行なう。新しい角度からのアプローチを試み、十分な環境、設備のもとで教育の課程を学ぶ。

生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻においては創造からプロダクツへ展開する可能性をも追求する。過去の偉大な伝統染織からの啓示と尊重を基にした知識や技法の研究、習得は、現代に適応するカルチュアやインダストリーへの不可欠な基礎知識となる。また地球にとって重要なテーマである環境への負荷がより少ないエコマテリアルの開発を学ぶことも領域内の今後の重要な課題である。

また、企業からの依頼に応え、教員指導のもと学生が応じる産学協同研究も充実した内容で評価を得ている。

## ②カリキュラム構成

## 〔実態〕

1998年度の改組転換において生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻では、従来の教育内容を継承しつつ現代に適応する知的クリエイターの養成を目的としたカリキュラムが編成された。専門教育科目において多様化する学生の要求と社会変化に対応する実践的内容を持ったカリキュラムとして2002年度よりウェアテキスタイルI（3年次）選択科目、2003年度にはウェアテキスタイルII（4年次）選択科目として新しく組み込まれた。また、2002年度よりコミュニケーション概論（3年次）はビジュアルシンキングI、パターンデザインI（2年次）は2003年度より基礎テキスタイルデザインに変更し、よりデザイン基礎力を強化し、単位数を2単位（実技）→4単位（実技）に変更した。コミュニケーションデザイン（2年次）は2003年度よりデザインプレゼンテーションとし、新しくプレゼンテーションデザイン力を養うため、実習から講義科目へと変更した。

	<u>2002度</u>	→	<u>2003度</u>
新規科目	ウェアテキスタイル I 3年次選択 / 2単位（実技）		ウェアテキスタイル II 4年次選択 / 2単位（実技）
変更科目 (名称・単位数・他)	コミュニケーション概論 3年次 / 2単位（実技）		ビジュアルシンキング I 2単位（実技）
	パターンデザイン I 2年次 / 2単位（実技）		基礎テキスタイルデザイン 4単位（実技）
	コミュニケーションデザイン 2年次 / （実技）		デザインプレゼンテーション （講義）

## 〔現状〕

テキスタイルデザインは幅広い領域を担う分野であり、カリキュラムの編成に対しては、十分討議したうえで決定している。他大学より本学科へカリキュラムの問い合わせも多数受けていることから十分評価がなされていると思える。専門教育科目（実技科目）と共通教育科目（教職・学芸員資格科目を含む）との時間割の重複が2000年度より特に問題となったが、他学科の学生も履修出来るようにオープン科目として時間割を変更するなど対策しているが、まだ検討の余地が考えられる。これからもテキスタイルデザインの可能性を最大限に生かす教育を実現するために努力したい。

## ③教育効果

テキスタイルデザイン専攻の傾向として、学生の意識には就職を希望するものも多い。そのため実社会での要望に対し、即座に柔軟な行動が可能となる教育に目標を置いて来たが、少しずつ効果が現れている。特に3、4年生は実社会でのデザインの現状のシュミレーションしつつ、課題として充実した授業内容で、各企業の開発担当者や経営者の連鎖講座から学ぶことで現場の緊張感を体験させ、意識の向上をはかって来た。機材も市場で使

用されるものと同様の機種で教育をしているため、手技の習得と同様にプロダクティブな機材も使用が可能になった。オリジナル性の高い創作活動を目的とする教育は過去から十分に浸透しているため、その力を社会でより発揮できるよう、実社会で活用されるデザインを追求する教育を目指している。さらに自己の創作活動を十分に表現できるプレゼンテーション力向上のための授業も行って来た。

卒業生の進路としては、ファッションテキスタイル、インテリアテキスタイル、素材メーカー、車両メーカー、商社、アパレル企業など、テキスタイル関連企業でデザイナーとして就職するものが多い。なかには更なる研究を目指し大学院へ進むもの、海外留学するものや、自身で創作活動を志すものなど多彩な人材を輩出しているのがテキスタイルデザイン専攻の学生の現状である。

### ④ 大学院

大学院においては、2002年度の大学院改革に伴い、実技科目として大学院博士前期課程（修士課程）デザイン専攻のなかに、『テキスタイルデザイン研究』および、『テキスタイルアート研究』の二つの講座を設けた。その後、実情に照らして2003年度より、『染織研究』と『テキスタイルデザイン研究』に再編成し、学術的な教養だけに偏らない実技研究の充実を目指している。また、学生の研究領域選択にきめ細かな対応をするため、各研究科目で担当教員の得意な専門分野を明確化し、指導を分担している。今後、国際的視野を持ったアーティスト、研究者、教育者の育成と共に、高度情報化社会に対応して、インハウス、フリーランスデザイナーとして活躍できる人材育成を行っている。

### ⑤ 専任教員と非常勤教員の役割

テキスタイルデザイン専攻の授業における、専任教員と非常勤教員の役割の現状を分析すると、まず、実技科目では主に専任教員が担当し、非常勤教員は補完的な役割を担っている形と、講義・演習科目では、非常勤教員が単独で1科目を受け持つ形の2つに分けることができる。大きな教育方針と目標を専任教員がたて、より専門的な知識や技術を非常勤教員が担当する現在の状況はテキスタイルの合理的且つ網羅的な教育の実現を可能にしていると考えられる。この専任教員と非常勤教員の役割分担で不十分な点は、主に実技科目における染織の多様な特殊技術の指導体制の実現にあると考えられる。前回の自己点検・評価の課題で示した内容とは少々矛盾するが、2001年度頃からは半期または通年担当の非常勤講師よりも、むしろ、ピンポイントで特殊な技術の指導を担当してもらえる臨時講師に依拠することが多くなっており、このような形態をとって、不十分な点を補っているのが現状である。

## ⑥ 研究活動

実施年度	研究名	対象学年	相手先	内 容
2001 年度	「秩父ちぢみの季節限定商品から解放するデザイン研究開発」	3 年生	(財)中小企業総合研究機構	デザインコース 3 年生が「ちぢみ」の生地を産地より供給され、様々な商品アイテムをデザインした。
2002 年度	「有田プロジェクト」	大学院生	(財)中小企業総合研究機構	環境デザイン学科の 3 年生と当学科卒の大学院生が窯元に宿泊して新商品開発をした。
2003 年度	「新業態のプロデュース」	3 年生	富士シティオ(株)	環境デザイン学科の 3・4 年生と本学科デザインコースの 3 年生が共同で新業態としてスーパーマーケットの要素を取り入れたコンビニの開発をした。
	「Gradess の市場開拓の可能性を探る」	2 年生、3 年生	(株)マーケティングマジック	クライアントからの転写紙制作用機器一式を移譲され、アルミ・ステンレス等を使用して新しい市場向けのホワイトボードを提案した。
	「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」	2・3・4 年生・大学院生	江戸川区	女子美、造形大学と本学の学生が江戸川区に残る伝統工芸の新たなデザインの試みをした。

(表 -6)

## [実態]

各担当教員が学生を不特定で募るケース、授業に組み入れるケース等様々である。契約金の使途も各担当教員が管理している。

## [現状評価]

学生は積極的に取り組みモチベーションも高く、社会でのデザイナーの役割を理解するには良い機会である。

## [不十分な点]

学生が熱中し過ぎて、通常の授業を怠るケースがあり今後は可能な限り授業の範囲で行うことが良い。また、各授業の担当者との話し合いの必要がある。

## 環境デザイン学科

### ①教育目標

#### 『環境をデザインする』

環境デザイン学科では、「環境」を「人の知覚対象のうち、他人と共有することのできる範囲」と定義している。その「環境」を「三次元空間」として広くとらえデザインすること。これが本学科の教育範囲になる。

スケールから見ても、「環境」はディスプレイ、ファニチャー、インテリアといった小空間から、建築、都市空間までをも網羅している。それらをデザインする姿勢を身につけるためには、からだ全体で環境を受け止め、体験を通して自然や人間社会のなかにある問題を見出すことが必要になる。このプロセスにおいて、プロポーションやバランス、色彩感覚といった美学的要素のみならず、サステイナブルデザイン、ユニバーサルデザインといった社会学的要素からも問題提起がなされ、答えを探求しなくてはならない。

環境デザイン学科では、徹底的な現場・原寸主義と、CAD・CGを駆使したモニター上でのシミュレーションとの両面から、「手」で考え、デザインする姿勢を身につける。「学ぶ」とは知識の積み重ねだけではない。講義と実践を通してさまざまな視点を養い、自らの興味を掘り下げ、実技としてかたちにしていく。

学生は4年間を通し、自分の意志で「インテリア」「建築」「ランドスケープ」の三つの系から自由に課題を選択できるようになっている。強い意志と実行力や組織を指導する力を養い、同時に光や風を感じ取ることのできる感受性をもった学生を教育している。

### ②カリキュラム構成

#### A) 環境デザイン学科の3つの柱

「講義・演習・実技課題」の3つの柱によってカリキュラムは構成されている。

講義は知識を蓄え、演習は手で覚え、実技課題では、自らの考えをかたちにする。

#### B) 系の所属と実技カリキュラムの自由選択制

実技は、1年次に幅広く環境デザインの基礎を学び、2年次からは各自の適性と興味に合った「インテリアデザイン」、「建築デザイン」、「ランドスケープデザイン」のいずれかの系に所属し、少人数でより専門的なデザインを学ぶ。実技はこの3つの系と共に「産学共同プロジェクト」を合わせた4つを柱としてカリキュラムを構成している。

3つの系と産学共同の各課題は、いずれも本人の希望で自由に選択でき、各自は2, 3年次に系を横断して独自のメニューを作ることになる。それぞれの系の課題を自由選択することで、柔軟なデザインを学ぶことができるのが環境デザイン学科の大きな特徴である。

3つの系の学生所属比率はインテリア3：建築2：ランド1である。

#### ◎インテリアデザイン系

外部環境から守られた室内空間は、五感全てにおいて自由に開かれ、それらを構

成する素材の可能性は、本学科の中でもっとも広いものである。身体に最も近い感覚－肌触り、色合い、音の響き、明暗、座り心地、居心地などを頼りに、家具、空間演出、室内環境簿についてデザイン室、工房、CAD 室などを使いながらインテリアデザインを学ぶ。

### ◎建築デザイン系

建築は空間に秩序を与え、人々はこの空間によって秩序づけられる。この建築を工学面からだけでなく、使う人間に優しい本来のデザインの意味と、構造に裏付けられた造形としての建築デザインを学ぶ。インテリアデザインは建築に包括され、ランドスケープデザインは建築を包括することから、この系はそれぞれを統合する役目をもっている。生活のデザイン、機能のプログラミング、プランニング、構造デザイン、ディテール、素材などについて、図面、CAD、模型制作等の実技を通して学ぶ。

### ◎ランドスケープデザイン系

本学科の内容を最も大きなスケールでとらえながら、繊細な自然や都市の現象に敏感に呼応する感受性をもってランドスケープデザインを学ぶ。太陽の動き、月の明り、風の薫り、水のゆらぎ、地形のうねり、土の匂い、石の重さ、木々のざわめきなど、さまざまな外界の諸現象のなかでどのようなデザインが可能なのかを、戸外でのフィールドワークや実測や演習を通して考える。

## ③教育効果

### A) 手で学ぶ

本学科では、徹底的な現場・原寸主義と、CAD・CGを駆使したモニター上でのシミュレーションとの両面から「手」で考え、ものをつくる文字通り身をもって環境デザインの意味を探ることに重点を置いている。

- ・ハイテクからローテクまでのバランス教育の強化を図る。
- ・原寸と共に、図面表現能力の強化をはかる。

### B) 問題解決能力

本学科では、問題解決能力を養うことを重視している。これは、環境デザインに課せられた複雑なプログラムを読み解く課題や、産学共同を他学科と一緒に取り組み、社会に求められるデザインのニーズを探求することで身につけていく。

### C) 生きたデザインとしての産学共同

本学科に入学する学生は、80%近くが本学科を第一志望として入学をしている。予備校や受験生への積極的学科紹介が功を奏し、また学生を主体としてカリキュラムに組み込んだ産学共同の積極的取り組みによる知名度も上がって来ている。



### ④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員は学科の基本方針を策定し、学科の運営と実技指導と専門科目の講義にあたっている。実技系非常勤教員は、社会で活躍する第一線のデザイナーを多く配し、最新のデザイン教育の指導にあたり、また講義系非常勤教員にも各専門領域の第一線の研究者や実務者を配し指導にあたっている。

### ⑤学科運営の意思疎通

専任教員は学科内会議を月2回おこない、学科内で進行しているカリキュラムの問題点を検討し、学生一人ひとりの課題取り組みや学習状況等を把握し、問題があれば速やかに対処している。

### ⑥大学院

#### A) 大学院の3つの柱

環境デザイン領域の大学院は、「環境デザイン」、「家具デザインの制作と研究」、「産学公共同プロジェクト」の3つの領域からなる。

#### B) 大学院の教育と研究

環境デザイン領域の大学院は、本学科の学部と縦につながりながら、上記の3つの領域が研究や創作を行っている。

実技指導は本学科の教員が学部1年から大学院までを一貫して指導にあたっている。各領域の研究テーマは、本学科の学部の特徴をより専門化したものである。

### ⑦研究活動

#### A) 産学共同研究

研究室の教員が個人的なつながりで行う理工系の産学共同と違い、多くの学生の感性を引き出しながら学生を前面に押し出し、学生の自主的な問題の掘り起こしから解決を導き出す形で産学共同に取り組み、これらをカリキュラムに取り入れている。

年間を通じて数件の産学共同がカリキュラムとして学生に提供されている。学生は大変熱心に産学共同に取り組み、社会の仕組みとデザインの密な関係を学んでいる。また、他学科とも積極的にチームを組み、本学科がプロデュースする立場で産学共同を行うケースも年々増えて来ている。

実施年度	研究名	対象学年	相手先	内容	請負内容	受賞名
2000年度	【紙のイスたち】	3年 (2学科合同)	㈱伊万里大國段ホール	新商品提案	デザイン	
	【I Mac meets air】	2年	T.D.W.実行委員会 協力:アガ'ルコビ'ユ-ター(株)	イベントプロデュース	デザイン・制作・施工	サインデザイン賞入選 1
	【T.D.W.2000 チェコッティブース】	3年	チェコッティ・コレツィオーニ	展示ブースデザイン	デザイン・制作・施工	1
	【新しいIMOS BURGER_2000】	2・3年	㈱モスフードサービス	店舗デザイン	企画・デザイン	
	【鎌北湖プロジェクト】	3年	埼玉県毛呂山町	ランドスケープマスタープラン	デザイン	
	【壁プロジェクト_3『言語連鎖の壁』】	3年	協賛:外務省	ワークショップ(ドイツ・ハンブルグ市)	デザイン・制作・施工	サインデザイン奨励賞
	【火夜】	2年	(財)公園緑地管理財団/国営昭和記念公園	イベント空間演出	デザイン・制作・施工	ディスプレイデザイン賞入選 1
【うちわでBOMB】	2年	岩手県安代町役場	ワークショップ	インスタレーション		
2001年度	【八王子みなみ野 シティフェスタ2001】	3年	住宅都市整備公団	イベント空間演出・ビジュアルデザイン	デザイン・施工	ディスプレイデザイン賞入選
	【誠美保育園】	3年・環境設計室	(社)誠美福祉会 誠美保育園	園庭改修工事設計業務	企画・設計・監理	
	【ユニバーサルデザイン提案】	3年	三井ホーム(株)	デザイン提案	デザイン	
	【100のすわり展】	1年	T.D.W.実行委員会	展示総合プロデュース	デザイン・制作・施工	1
	【パルーンフラッグ】	2年	T.D.W.実行委員会	サイン計画	デザイン・制作	サインデザイン準優秀賞 他 1
	【be Sure 展示ブース】	3年	トソー出版(株) be Sure編集部	展示ブースデザイン	デザイン・制作・施工	ディスプレイデザイン賞入選 1
	【新しいIMOS BURGER_2001】	2・3年	㈱モスフードサービス	店舗デザイン	デザイン	
	【亀戸サンストリート】	3年	㈱タイムクリエイト	ストリートファニチャーデザイン	デザイン	ディスプレイデザイン賞入選
【雪灯り】	2年	安比高原温泉協会・㈱東広社	空間演出	デザイン・制作・施工	サインデザイン準優秀賞	
2002年度	【Flower & Garden display design project】	4年・大学院	イオン(株)	新業態店舗デザイン	デザイン	
	【サイバーシティ八王子ロゴデザイン】	3年	八王子市商工会議所	ロゴデザイン	デザイン	
	【ウインドウディスプレイ】	2・3年	ベネトンジャパン(株)	ディスプレイデザイン	デザイン	1
	【すわるかたち展】	1年	T.D.W.実行委員会	展示総合プロデュース	デザイン・施工	1
	【新業態のマスタープラン提案】	2・3年 (3学科合同)	富士シティオ(株)	新業態店舗デザイン	デザイン・総合プロデュース	
	【2002版パンフレット】	3年	㈱まちづくり三鷹	パンフレット制作	デザイン	
	【有田プロジェクト『有田焼への提案』】	3年	(財)中小企業総合研究機構	新商品提案	デザイン	
【高齢者の暮らしと生活空間の提案】	3年	三井ホーム(株)	デザイン提案	デザイン		
2003年度	【平塚店基本計画】	3・4年 (3学科合同)	富士シティオ(株)	店舗・サイン・アプリケーションデザイン	デザイン・総合プロデュース	グッドデザイン賞 新領域デザイン部門(内定) 9,18
	【新業態のマスタープランの提案】	2・3年	㈱スリーエフ	新業態店舗デザイン	デザイン・総合プロデュース	
	【新しいコンテンツ・サービスの提案】	2・3・4年 (2学科合同)	スリーエフ・オンライン(株)	e-Towerコンテンツ・サービス提案	企画・デザイン	
	【えどがわ伝統工芸産学プロジェクト】	3年 (3学科合同)	江戸川区産業振興課	新商品提案	企画・デザイン	
	【高齢者の暮らしと生活空間に関する提案】	3年	三井ホーム(株)	デザイン提案	デザイン	

受賞年度	受賞名	氏名	作品名
2001年度	東京建築士会住宅課題賞 優秀賞受賞	鈴木清巳	
	第38回 SDA 賞 準優秀賞	井村芳生、内田名美、江尻麻紀、佐久間俊之、須川悠理子、須藤慶一、成田陽子、堀田玄樹、吉田節	TDW オフィシャルサインバルーンフラッグ
	第38回 SDA 賞 奨励賞	河合隆平、橋本英和、吉富寛基	光の小路
2003年度	6th OISTAT THEATRE ARCHITECTURAL COMPETITION 2003	大室 佑介	The Egg
	SXL コンペ大賞受賞	熊切真知子	光源氏の家
	銀座ショウウィンドウコンペ 銀座かねまつ賞	大西恵美	
	銀座ショウウィンドウコンペ 資生堂賞受賞	和久紗枝	
	ヘティヒコンペ 2等受賞	溝淵匡史	
	シェルター学生設計競技 2003 入選	大室 佑介、松村 和典	きりかぶハウス
	ohyama future competition 2003 最優秀賞	今泉 泰昌	kids-wall

(表 -8)

SDA - スペースデザインアソシエーション

DDA - ディスプレーデザインアソシエーション

#### ⑧ 就職支援

毎年本学科の卒業生を就職相談会にゲストとして招き、直接のリクルートをはじめ、在学生の就職活動全般のアドバイスをおこない、卒業生と在学生の交流を密にはかっている。

#### ⑨ 課題

本学科は、特色ある教育内容が受験生や高校、予備校に周知され、受験倍率も毎年高いが、これからは美術大学として「環境デザインという領域」をどう体系化していくか、また、社会に「環境デザイン」の重要性をどうアピールしていくかが課題となる。

質の高い卒業生を多く輩出し、社会に活躍のできる場を広く作っていくことも課題となっている。

## 情報デザイン学科

## ①教育目標

20世紀後半、科学技術の課題として生まれた「情報」概念は、その発展と社会化とともに、今、文化芸術の主要テーマとなっている。本学科はその「情報」を美術表現の対象とし、そこに新たなファインアートとデザインの領域を拓いている。

コンピュータに代表されるデジタルテクノロジーや国際的な情報通信ネットワークが実現している機能は、大きな可能性とともにさまざまな問題を私たちの社会生活に投げかけている。直接に触れることができず、それ自体が見える形をもたない情報。その情報と人間社会との豊かな関係をつくり出すこと、それが本学科の教育目標である。

これまで本学が培ってきた美術表現教育を基盤として、科学や工学あるいは数学や哲学が美術と連携する領域を切り拓き、そこで活躍する新しいタイプのクリエイター養成に取り組んでいる。

## ②カリキュラム構成

本学科の教育カリキュラムの特徴は、作品制作を「行うこと」（演習科目）とそこに不可欠となる幅広い知識を「知ること」（専門講義科目）の連携である。ここでは、理系、文系、美術系、音楽系といった既存の枠組を超えたダイナミックなカリキュラムが提供される。制作する学生たちは、さまざまな知識に支えられて「自分が何を如何に制作しているのか」を言葉と知識で説明する力を獲得する。

ここで学ぶことのできる表現の幅は、言語表現から平面表現、立体表現、映像表現、音響表現、環境表現まで広がっている。またその社会応用へ向けて、カリキュラムの総合性と専門性を両立させるため、「情報芸術」と「情報デザイン」の2つのコースプログラムを用意している。それぞれのコースで少人数のクラスを編成し、学習領域の関連性を高め、専門性の強化と表現の深化をはかっている。同時に両コースは、共通の講義科目や共同プロジェクトをとおして連携し、総合的な視点と社会の変革に対する柔軟な対応を欠かさないための教育研究システムが組み込まれている。

年次	第2期（2002-2004年度）	単位	第1期（1998-2001年度）	単位
1年次 (必修科目)	情報デザイン学概論	2	情報デザイン学概論	2
	情報デザイン学概論	2	メディア環境論	2
	情報デザイン演習	8	基礎造形演習	4
			情報構成演習	2
			リスニング英語	2
	情報デザイン演習	8	基礎造形演習	4
2年次 (必修科目)			情報構成演習	2
	情報デザイン演習	8	情報デザイン基礎演習	4
			プログラミング演習	2
			日本語表現法	2
	情報デザイン演習	8	情報デザイン基礎演習	4

## IV. 教育研究

			プログラミング演習	2
			プレゼンテーション英語	2
	テクノロジーアート史	2	情報機械史	2
3年次 (必修科目)	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
			情報数学	2
	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
			情報数学	2
4年次 (必修科目)	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
			情報デザイン学特論	2
	情報デザイン演習	8	情報デザイン演習	4
	卒業研究制作	10	卒業研究制作	8
2～4年次 (選択科目)	情報システム論	2	ハードウェア構成	2
	デジタル表現論	2	ソフトウェア・アーキテクチャー	2
	インターネット概論	2	マルチメディア基礎論	2
	アルゴリズムデザイン	2	オブジェクト指向方法論	2
	ヒューマンインタフェース	2	ヒューマンインタフェース	2
	デザイン方法論	2	分散環境デザイン論	2
	サウンドアート	2	知識モデル	2
	デザインパターン	2	デザインパターン	2
	映像論 (2003年度より映像デザイン論)	2	映像史	2
	音響・音楽論	2	音響・音楽論	2
	メディア教育システム論	2	コミュニケーション論	2
	現象学とデザイン	2	現象学とデザイン	2
	メディア芸術論	2	メディア芸術論	2
	情報社会	2	知的財産権	2
	デザイン史 (2003年度より情報デザイン史)	2	デザイン史	2
	認知科学	2	認知科学	2
	情報と職業	2	情報教育	2
	デザイン・サーベイ	2	組織と社会	2
	パフォーミング・アート概論	2	生物学と情報	2
	インターフェース概論	2	科学史	2
	ベンチャー起業論	2	ベンチャー起業論	2
	メディア芸術論	2	空間認識論	2
	写真論 (2003年度より写真デザイン論)	2	構造人類学	2

第1期から第2期への科目変遷(表 -9)

選択科目に関しては、、、のそれぞれから8単位以上、計32単位以上履修する。

### ③教育設備

本学科の教育は、さまざまなデジタル情報設備機器によって支えられている。各室に設

## IV. 教育研究

置され教育用に稼働しているパソコンが全体で 200 台以上、プリンター、プロジェクター、そして貸出用機材としてのデジタルビデオカメラ (DV カメラ) 69 台など大量のハードウェアを不可欠とする教育が行われている。また、パソコンには多種大量のソフトウェアが装備され、全てのハードウェアとともにすみやかに稼働するため、常に維持管理運営し一定期間で新機種に入れ換えを行っている。

それら業務を遂行にあたる担当教員とスタジオ付き助手・副手は責任が重く、本来の教育業務に加え、日進月歩する技術を習得しながらの教育環境の整備という過重な負荷のかかる仕事となっていることも否めない。今後このような「設備産業型」の教育組織管理を大学全体で真剣に検討することが火急の課題であると考ええる。その第一歩として本学科では 2001 年度より、学科ネットワーク構築と各種サーバ等の維持管理運営に関して、それを担当する技術員を配し、専任教職員の負荷を軽減した。

部屋名称	設 備 名 称				
	パソコン	プリンタ	サーバ	プロジェクター	貸出用DVカメラ
学科事務室 ( 研究室 206 )	10	1	0	0	0
アゴラ 207	0	0	0	1	0
会議室 208	0	1	5	1	0
プレゼン室 213	0	0	0	1	0
プレゼン室 203	0	0	0	1	0
3 階、旧スタジオ 7	17	0	1	1	0
3 階、旧スタジオ 7 教員室	5	1	0	0	0
スタジオ 2	20	0	0	4	0
スタジオ 2 教員室	4	3	0	0	0
スタジオ 5	23	0	0	2	0
スタジオ 5 教員室	7	2	1	7	5
スタジオ 6	27	3	0	0	29
スタジオ 6 教員室	0	1	1	2	11
大学院生室、情報芸術系	4	1	0	0	0
武道館	0	0	0	0	0
スタジオ 1	50	2	0	2	7
スタジオ 1 教員室	15	2	5	2	0
スタジオ 3	23	5	0	0	0
スタジオ 3 教員室	4	1	0	2	10
大学院生室、情報デザイン系	3	0	0	0	0
スタジオ 4	21	2	0	1	3
スタジオ 4 教員室	5	3	2	1	4
合計	238	28	15	28	69

ハードウェア機器の概数 ( 表 -10 )

2004 年 8 月調べ

## ④専任教員と非常勤教員の役割

本学科の人的組織構成は、専任教員 12 名、助手・副手 8 名でスタートし、2001 年度 7 月より、専任教員数は変えず、助手・副手 7 名、学科事務員 2 名の体制である。非常勤講師数は 2002 年度より安定し 23 名を維持、その他、臨時講師を配置している。

非常勤教員の役割は、教育カリキュラムに必要な幅広い技能と知識を提供すること、また教育内容をその時代の社会技術状況に対応させることにある。そのために適切な人選を行い、教育の質と量を保証している。専任教員は、情報芸術領域と情報デザイン領域の教育研究について中長期展望を定め、教育研究組織の構成と中核となる教育と研究の運営に責任をもってその業務にあたっている。

年度	役 職									
	専 任				客員教授	専 任			技術員	非常勤講師
	教員全員	教授	助教授	講師		助手	副手	学科事務		
2002 年度	12	3	6	3	2	4	3	2	2	23
2003 年度	12	6	4	2	3	3	4	2	2	23

教職員の構成と人数(表 -11)

## ⑤学科運営の意思疎通

大学、学部、大学院、学科などさまざまなレベルでの組織が活動するために、意思疎通をはかっている。本学科では 2 つのコース編成をすみやかに運営するために、学科長、教務主任の他、コース代表 2 名をたて、「学科会議（コース連絡会議）」と「コース会議」を併設運営している。その他、コース共通として学科事務員を加えた助手・副手連絡会議をはじめ、コンピュータ関連費による機器、技術員アウトソーシングなどの検討会議を運営している。

大学院カリキュラムの新編成にともない「情報デザイン領域」の大学院教育プログラムは 2002 年度より始まり、本領域を志望する約 20 名の大学院生指導を行っている。しかしその教育内容の充実に十分な時間をかけられない現状にある。1 クラスの履修が少数となる大学院教育を担当することもまた、ひとつの教育業務であることが適切に評価管理されることが必要である。その点は、本学全体の高等教育プログラムの確立のために早急に改善すべき重要課題だと考えている。

## ⑥学生の入学

本学科は設立時より、美術系大学志望だけでなく、幅広い領域を学ぼうとする学生に学習の機会を提供するために、2 種類の入り口を設けている。一つは、描画表現力を評価する入学試験、他は一般の学科目の力を評価する入学試験である。前者が一般入試「本学一般方式」を利用。後者は 2000 年度より大学センター試験を利用する「センター利用方式」である。「センター利用方式」は一般入試の「デザイン」科目の受験を含んでいる。それぞれは 8 割、2 割の定員配分である。両者の併願が可能のため、2001 年度よりセンター利用方式の志願倍率が増加していることがわかる（表 I-12 参照）。

大学センター試験利用では、「地理歴史、公民、数学、理科」の 4 教科 25 科目から選択

#### IV. 教育研究

する1教科1科目が得点となる。「外国語」科目には2002年度よりアジア圏の言語を加え「英、独、仏、中、韓」から1科目選択となっている（表I-13）。

センター利用では、「公民」、「数学」、「理科」を選択した者が入学している。それら科目の得意な学生が、「鉛筆デッサン」科目で入学した学生達と共同し、多様で豊かな学びをつくっていることもこの学科の特徴となっている（表I-14参照）。

2005年度入試より、受験生の普遍的な描写力と表現力を重視するため、これまでの入試科目の「デザイン」（100点）を「視覚表現」（200点）に改め、持参用具に「水彩用具一式（透明・不透明絵具共に可）」を加える予定である。広く、ファインアート系学科志願者の応募が期待されている。

入学年度	入試方法	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
2000年度	一般方式	80	821	801	176	84	4.6	10.3
	センター利用方式	40	378	360	82	47	4.4	9.5
2001年度	一般方式	80	831	798	176	86	4.5	10.4
	センター利用方式	40	487	442	86	44	5.1	12.2
2002年度	一般方式	80	747	726	178	88	4.1	9.3
	センター利用方式	40	316	233	99	44	2.4	7.9
2003年度	一般方式	80	721	697	173	87	4.0	9.0
	センター利用方式	40	439	390	112	42	3.5	11.0
2004年度	一般方式	80	617	596	198	83	3.0	7.7
	センター利用方式	40	371	338	100	44	3.4	9.3

受験者数変遷（表 -12）

入学年度	入試方式	本学試験科目		大学入試センター試験科目
2000年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	
	センター利用A方式	デザイン		外国語、国語、数学
	センター利用B方式	デザイン、論文		外国語（英、独、仏1科目選択） 国語（国、国・国から選択） 数学（数学、数学・数学Aから1科目選択）
2001年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	
	センター利用A方式	デザイン		外国語、国語、数学
	センター利用B方式	デザイン、論文		外国語（英、独、仏1科目選択） 国語（国、国・国から選択） 数学（数学、数学・数学Aから1科目選択）
2002年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	
	センター利用方式	デザイン		外国語（英、独、仏、中、韓） 国語（国、国・国から選択） 地理歴史、公民、数学（4教科から1教科1科目選択）
2003年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デッサン	外国語、国語	



## IV. 教育研究

	センター利用方式	デザイン		外国語（英、独、仏、中、韓） 国語（国、国・国から選択） 地理歴史、公民、数学（4教科から1教科1科目選択）
2004年度	本学一般方式	デザイン、鉛筆デザイン	外国語、国語	
	センター利用方式	デザイン		外国語（英、独、仏、中、韓） 国語（国、国・国から選択） 地理歴史、公民、数学（4教科から1教科1科目選択）

入試科目の変遷（表 -13）

年 度	選 択 科 目				
	公民	数学	地理歴史	理科	合計
2002年度	17	11	7	9	44
2003年度	15	5	7	15	42
2004年度	15	12	9	8	44

センター利用入学者の選択科目別人数（表 -14）

### ⑦教育効果

本学科の教育の成果は、既存の領域の枠に収まらない新しい時代のクリエイターやイノベーターを社会に広く輩出し、新たな作品や産物を生み出すことである。2001～2003年度、3期の卒業生たちは、文化庁のメディア芸術祭やNHKのデジタルスタジアムにより、次世代のアートとして広く社会に認知されるようになったメディアアートの分野や、ユーザ・インタフェースや情報デザイン専門家が不可欠となった製造業のデザイン部門、あるいは広告、マスコミ、印刷業等さまざまな領域で活躍を始めている。

現在明らかになりつつある、国内外展覧会における情報（メディア）芸術表現領域の確立、産業社会における専門部門の確立、あるいはWebなど社会的な情報活動応用での成功を追い風に、本学科が提供した教育の効果が社会に顕在化しつつあるのが現状と言える。

## IV. 教育研究

氏名	受賞年度	展覧会	受賞名	作品名	卒業年度
力石咲		第7回文化庁メディア芸術祭 アート部門インスタレーション	審査員推薦 作品	ManGlobe	学 03 卒
		第9回学生CGコンテスト イン タラクティブ部門(福岡アジア美 術館)	最優秀賞		
		第7回文化庁メディア芸術祭 福岡展	展示		
		インフォメーションアートの想 像力展(都立写真美術館)	展示		
工藤幸平	2003年度	作品ヤングパースペクティブ 2003	入賞	鬼切	学 03 卒
	2002年度	松本リズム万博2002、イメージ フォーラム	発表		
		第1回タマアートコンペティ ション	グランプリ	国歌/キミガヨ	
		インフォメーションアートの想 像力展(都立写真美術館)	展示		
	第2回上野毛展	グランプリ	happoufusagarizm		
木村匡孝		第9回学生CGコンテスト イン タラクティブ部門	最終選考ノ ミネート作 品	フッタウェイ1号	学 03 卒
		インフォメーションアートの想 像力展(都立写真美術館)	展示		
		第18回ハンズ大賞	審査委員特 別賞三井康 巨賞	peace walker.0T-1	
		第18回ハンズ大賞展 Bunkamura ザ・ミュージアム、大阪 IMPホ ール(大阪ビジネスパーク内)			
蒔貴彦		芸術科学会 DIVA 展	特別奨励表 彰	ピニルハウス	学 03 卒
		福岡アルティアム	展示	巣くう	
井上恵介	2003年度	メビウスの卵展 2003 多摩展	公演	SPACE MAESTRO	現院 1
		未来の学校グランドフィナーレ 大阪彩都	公演		
石黒俊輔		映像表現フォーラム(画像電子学 会主催)	最優秀賞	running	学 03 卒

## IV. 教育研究

村上陽子	2001 年度	NHK デジタルスタジアム	放送（最優秀 作品選出）	VisiblePlace	学 00 卒
富岡優子	2002 年度	NHK デジタルスタジアム	放送	VagueVision	学 00 卒
菊地春佳		世界最大のソフトウェア・アートのポータルサイト「runme.org」	展示	NETARIUM	学 01 卒
	2003 年度	NHK デジタルスタジアム	放送		
乙津理恵子		第 5 回 SICF( Spiral Independent Creators Festival ) 展	準グランプリ	デジタル音響詩吟	学 02 卒
		「Electric Rainbow Coalition」フェスティバル( 米米ダートマス大学にて開催 )	参加		
大畑さやか		NTTICC「ネクスト～メディア・アートの新世代」展	展示	internal sense	現 4 年
久保奈緒		中小企業ホームページグランプリ( たましん主催 )	企業賞		現 2 年
松尾明子		Photo slide show of students vol.3	準グランプリ	帰郷	現 4 年
小山内久美子		文化庁メディア芸術祭 アニメーション部門	奨励賞	星の子	現 4 年
鈴木喜丈	2003 年度	青山芸術祭デザインアワード 2003	準グランプリ	日の丸	現 4 年
石黒俊介		映像表現フォーラム( 画像電子学会主催 )	最優秀賞	running	学 03 卒

学生・卒業生の受賞歴等(表 -15)

特に情報芸術コースの創作の特徴は平面や立体、映像や音響、時間や空間、物質や非物質といった形式を問わないことにある。下記のような多様な特別講義とも連動したオープンなスタンスが原動力となって、本学科はこれまで独自の文化を育ててきたデザインとファインアート、美術と音楽、アカデミーとストリートなどの領域をつなぎ、それらを再構築していく 21 世紀の美術大学のひとつのあり方を提示している。

年度	氏名	所属
2002 年度	カリーハンス・コモネン	ヘルシンキ芸術デザイン大学
	高畑勲	アニメーション作家、本学科客員教授
	カール・ストーン	コンピュータ音楽家
	大重純一郎	映画監督
	JODI	ネットアーティスト
	川本喜八郎	アニメーション作家、本学科客員教授
	田中泉	デザイナー
	小阪淳	デザイナー

2003 年度	ウィリアム・ダックワース	コンピュータ音楽家
	高畑勲	アニメーション作家、本学科客員教授
	久保田達也	起業家
	クリストフ・シャルル	コンピュータ音楽家
	エキソニモ	メディアアーティスト
	有吉司	インタラクティブ・デザイナー
	針谷周作	メディア・ディレクター/プロデューサー
	クワクポリョウタ	デバイス・アーティスト
	加藤道哉	CG 作家
	佐藤真	映画監督

特別講義の実施状況(表 -16)

## ⑧ 就職支援

本学科卒業生が社会に出る状況を俯瞰するにあたっては、いわゆる企業就職だけでなく、会社やNPOなどの起業活動、作家活動、アートスタジオや小プロダクションでの修行やコンテスト受賞を含め、緩やかで幅広いそして長期的な視点でそれを捉えることが重要である。

本学科が行っている学生就職等支援の業務は、就職、企業実習（メーカー系企業が1週間程度の期間で実施）、インターンシップ、社会での作品制作活動紹介など多岐にわたっている。企業系の就職においては2003年度よりインターンシップ実施企業が増加し、それにともない参加学生数も増加している。2004年度には海外企業（ドイツ、シーメンス社）のインターンシップへの参加が実現した。就職担当業務は、2003年度まで教員2名体制で行って来たが、本年度より、代表教員1名、補佐教員を2名、副手を2名配置し支援の充実をはかっている。

本学科卒業生の就職については、卒業時の学生報告資料をもとに、報告者の中の就職希望者数を基数とした場合に推計される就職率はおおよそ60%台と言える。企業就職をみた時の最近の傾向は、就職試験での「SPI 試験」などいわゆる一般学科知識の不足による不合格報告事例が多く、企業就職を希望する学生への対応検討が必要になっている。また、大学院修了者への就職支援もさらなる充実が必要となっている。

卒業年度	企業、事務所など	教育機関	進学	小計	卒業生人数
2001 年度	35	2	6	43	99
2002 年度	42	1	4	47	106
2003 年度	32	1	9	42	125

就職の状況(表 -17)

分類	業種	就職先機関名
企業	メーカー	ソニー、東芝、日立製作所、セイコエフソン、リコー、オリンパス、パナソニック、島津製作所、ヤマハ、デンソー、ジャストシステム、セガ、ナムコなど
	広告、マスコミ、印刷	電通、博報堂インフォグラフィクス、リクルートメディアコミュニケーションズ、毎日新聞社、テレビ朝日、凸版印刷など
事務所		イトー、ソフトバンク、カインズ、ノースなど

学部卒業者の就職先(表 -18)

修了年度	修了者人数	就職先機関名及び業種名
2002年度	5	(独)産業技術総合研究所、企業、アーティスト、大学研究室
2003年度	7	企業、映像プロダクション、写真スタジオ、大学院博士課程進学、留学

大学院修了者の就職先(表 -19)

## ⑨ 研究活動

本学科の研究活動は、科学研究費補助金(文部科学省・日本学術振興会)、科学技術振興事業団研究プロジェクト助成をはじめ、産業界、地域社会、行政との連携などさまざまななかたちで幅広く行われている。表 I-18 は、産学共同研究として本学附属メディアセンターに登録実施した研究プロジェクトである。

それら研究プロジェクトの内容は、卒業研究制作発表会や展覧会などの機会に、積極的に開示交流することが行われている。しかし、その内容の十分な学科内での交換がなされていないとは言えない現状である。関連する研究のフォーラム等を行うことによって、学科内、あるいは大学内の交流を計ることの検討が必要と考える。

実施年度	研究名	担当教員	相手先
2002年度	情報デザインの設計手法による情報共有交換機構の通閉システムの研究	須永剛司	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所
	人とロボット間のインタラクション・デザイン(2)	吉橋昭夫・須永剛司・楠房子	日本電気(株)マルチメディア研究所
	東芝科学館 WEB サイトコンテンツ開発	原田泰・永井由美子・加藤道哉・北島督	(株)東芝デザインセンター
	InfoLead を用いた情報検索の研究	原田泰	日本電信電話(株) 情報流通プラットフォーム研究所
	大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究	吉橋昭夫	京王電鉄(株)
2003年度	映像音響インタラクション制作	三橋純・春日聡・(ヲノサトル)	アトビシステムズ(株)
	デジタルカメラの操作性向上に関する研究	須永剛司	オリンパス光学工業(株) 映像システムカンパニー
	インタラクションデザイン手法および関係性指向コミュニケーションメディアの研究	須永剛司	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所

## IV. 教育研究

インタラクティブデザインの研究	須永剛司	(株)日立製作所基礎研究所
情報デザインから見た次世代金融営業店の情報空間（の設計）に関する研究	須永剛司	沖電気工業(株)
子供向けビジュアル言語の研究	楠房子	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所
Mqbic システムによるデジタルマンガプレイヤー開発とまんがのウェブサイトにに関する研究	原田泰	(株)毎日新聞社総合メディア事務局 毎日インキュベーションセンター
甲南大学ビジュアルデザインに関する研究	原田泰	(株)毎日新聞社総合メディア事務局 毎日インキュベーションセンター
人とホットの間のインタラクティブデザイン（3）	吉橋昭夫	日本電気(株)マルチメディア研究所
大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究（2）	吉橋昭夫	京王電鉄(株)
現金自動取引装置（ATM）における伝達メディアとしての効果的表示方法に関する研究	吉橋昭夫	沖電気工業(株)
技術情報公開のためのコンテンツ開発に関する研究	原田泰	(株)NEC

産学共同研究一覧（表 -20）

科研費は含まず、研究活動の一部

### 芸術学科

#### ①教育目標

芸術の媒介者（学芸員、プロデューサー、編集者など）や享受者の創造性を育てるということを目指して来た。しかし、媒介者という言葉がいささか抽象的であり、学内外へのアピールという点で、問題があったように思われる。そのことを踏まえて、本学科の理念を2005年度に向けてより具体的にわかりやすく改訂した。芸術の4つの楽しみ、創造、鑑賞、研究、企画のそれぞれの楽しみの連鎖を自分のものとし、その楽しみの連鎖を多くの人々に手渡していける人材を育成すること、それが本学科の新しい教育目標である。

#### ②カリキュラム構成

[実態]

1, 2年次では、表現研究、現代美術史（日本・東洋・西洋）、芸術学原論、言語表現研究、コンピュータ概論などの、基礎となる科目を必修および選択必修として来た。

3, 4年次では、芸術学研究、文化演出研究、映像メディア研究などのコースに分かれた、比較的少人数のクラス編成によるゼミを設けて来た。また、1年次には「創造の現場」と称する、学内実技系による素材・技法等の基礎的な問題を論じる科目を設けて来た。2年次には「プロデュースの現在」と称する、本学科出身の多ジャンルにわたる専門家達によるプロデュースの実際を論じる科目を設けて来た。さらに、語学重視の方針を採り、第一外国語、第二外国語を必修として来た。4年次には、全員に

演習の担当者を指導教員とする、卒業論文（24,000字以上）を課して来た。

#### [現状の評価]

従来のカリキュラムの問題点を調査するアンケートを実施したところ以下の結果が得られた。まず第一に、1, 2年次での英語・コンピュータ教育について教育効果が芳しくないとするアンケート結果がでた。英語に関しては、語学のレベルやクラス・教員が自由に選べないので学習意欲が低下している。1, 2年次で必修に指定しているコンピュータ概論に関しては、ソフトの使い方を学習する程度にとどまり、卒業論文に集約されていく学習の全体の中でコンピュータ教育が位置づけられていないきらいがある。また3, 4年次のコース（ゼミ）に関しては、学生の関心が多極化し、特定の教員・コースに縛られない形での自由で多様な研究を願う学生が増えて来ていることも分かった。

#### [対処法]

新しい教育目標を達成するために従来のカリキュラムを新しいものに組み直す必要がある。英語に関しては、レベルとクラス・教員を選択できるシステムが望ましい。第二外国語に関しては中国語・韓国語の選択肢もあってほしい。さらに本学科独自で講読の授業を充実させたいと考えている。

コンピュータ教育は一貫した教育システムを導入する。1, 2年次のコンピュータ概論では、情報や資料へのアクセス手段として、またコミュニケーションのツールとして、インターネット上の各種サイトをどのように活用していくのかを教える。例えば「関心空間」のサイトを使いながら学生の関心を方向付けていくなど。また3, 4年次では収集した情報・資料を分析・再構成し、各種データベースを構築したり、インターネット上にウェブサイトとして公表していく技術を広く教えるコース（ゼミ）を設ける。大学院では情報・資料の収集・分析のみならず研究成果のプレゼンテーションや大学院生論文集の編集・出版のためのコンピュータ技術をも習得するゼミを設けたい。こうした英語力・コンピュータ・リテラシーの強化は、研究や企画の能力を側面的に向上させることが期待される。

新しい教育目標である「創造、鑑賞、研究、企画の楽しみの連鎖」を効果的に習得するカリキュラムについては、現在その概要を立案している。「創造の楽しみ」に関しては、従来の、表現研究、造形研究、言語表現研究、映像研究に加えて、1, 2年次で実技の基本を学ぶ実技講座を、集中講義・補講期間に実施したい。美術大学にある芸術学科として創造の現場に居合わせている特権を授業にも反映し、創造の楽しみを自ら知ることが、芸術全体の理解にとっても重要であることを強調したい。

「研究や企画の楽しみ」に関しては、3, 4年次のコース（ゼミ）で、来年度より本学科の全教員が実践系科目と理論系科目を平行して行うこととする。実践系科目は通年で4単位、3, 4年次で1コマずつ必修、理論系科目は半期で2単位、各教員は1年次で2科目行い、学生は3, 4年次で2コマずつ必修とする。卒論の指導教員はゼミの教員とは関係なく自由に選択できる。それにより、3, 4年次は最大で7人の教員に指導を受けることができ、近年の学生の関心の多様化に対応できる。また多様な理

論や実践の領域に触れることで、「研究や企画の楽しみ」に幅が出て、研究と企画の連携による成果も期待される。

「鑑賞の楽しみ」に関しては、従来のオフ・キャンパス（3年次対象）をさらに充実させて、1，2年次にも鑑賞体験の機会を増やしていきたい。

### ③教育効果

教育の効果については、全学で実施している授業評価を参考にして各教員は、毎年授業のあり方に改善を加えている。またカリキュラム構成の項で既に触れたように、2004年度4月より語学・コンピュータ関連授業に関してはアンケート調査を行い、その結果を考慮して来年度より新しい授業で臨みたい。

今後も頻繁にアンケート調査を行い、継続的に教育効果のあるカリキュラムを組みなおしていきたい。

### ④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員と非常勤教員の間には密接な交流、意見の交換が望ましいが、これまではこうした交流はそれほど活発ではなかったように見受けられる。また財政的に専任教員の数が限定されている現状では、非常勤教員にもこれまで以上に大きな役割を果たしてもらう必要が出てくるだろう。

昨年は非常勤講師との意見交流会（カリキュラム会議）を行い、カリキュラムの諸問題について検討した。2005年度以降の教育・研究に活用したい。

### ⑤学科運営の意思疎通

本学科では数年前より、教員・助手の間でメーリング・リストを活用して意見の交換を活発に行っている。

### ⑥研究活動

2000年度：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）

2001年度：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）

2002年度：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）、秋山邦晴氏資料による現代の音楽と美術の関係（海老塚）、鑑賞教育におけるツールの必要性（海老塚）

2003年：現代美術資料研究（村山）、瀧口・北園文庫資料研究（平出）秋山邦晴氏資料による現代の音楽と美術の関係（海老塚）、鑑賞教育におけるツールの必要性（海老塚）

本学科は1998年に現代美術資料室を創設し、本学科の教員が所蔵する貴重資料の委託を受けて、現代美術にかかわる特殊資料の収集・整理、デジタル・データベースの形成、インターネット上のウェブサイトへのデータベース公開を他大学に先駆けて行って来た。2000年4月には本学図書館所蔵の瀧口・北園文庫のウェブサイトを構築・公開し世間の注目するところとなった。平出・村山の共同研究は現代美術資料室や学外の有識者の参加するプロジェクトであり、研究発表に加えて資料展・シンポジウムも上野毛図書館文庫資料室で行うなど、瀧口・北園研究に画期的な役割を果たしたといえる。2002年度には海老塚によ



る秋山資料研究が加わり、音楽関係の資料を扱う事になり、資料室は現代芸術資料センターへと改めた。海老塚はまたセゾンアートプログラムと共同で、鑑賞教育のためのツールボックスセットとテキストを開発し、小学校や美術館における鑑賞教育の実践活動を進めて来たが、本学単独でも、**2002**年度に松本市美術館、神奈川県民ホールギャラリー、**2003**年度には八王子市教育委員会、島根県教育委員会セミナーで実践講座を行い好評を博している。以上の成果は、通常の教育・研究とも密接に連動している。

デジタル・アーカイブの設計・構築と芸術普及は **21** 世紀の社会において、最も注目値する未開発の領域であり、様々な新しい試みがなされようとしている。本学科ではこうした共同研究を通して、未来社会に必要とされているアーカイブ設計と芸術普及のスキルを実践と理論の双方の観点から探求していく予定である。

### ⑦ 就職支援

本学科では **2000** 年度からプロデュースの分野で活躍する卒業生を本学に招き、仕事内容や現場のアクチュアルな問題点について講義をしてもらう連鎖講座を設けて来た。また、個々の教育のネットワークを活用することが、学生の就職機会の増大につながっている。

### ⑧ 課題

当面の課題については現在進行中のカリキュラム改革に既にその回答が実験的に織り込まれているので、ここでは詳述を控えたい。各項目ごとにその分野での課題は指摘しておいた。

### ⑨ 大学院

#### A) 教育目的

大学院博士前期課程（修士課程）に関しては、美術館学芸員等のより高度の専門化養成を目指して来た。

理念としての大枠は、現状で良いと思われる。他大学からの入学者が多い点は好ましいが、学内からの進学者をさらに多くする必要がある。今年度の学部での改革を終えた後、**2005** 年度において、大学院の教育体制の、大幅な充実を検討する予定である。

#### B) カリキュラム構成

学部の本学科教員と、共通教育の美術史系教員によるカリキュラムを組んでいる。大枠としては、芸術学系、美術史系、文化演出論系からなり、修士論文指導教員を学生の学問分野に応じて、選定している。それなりにバランスの取れた構成ではあるが、専攻としての求心力がやや欠けているように思われる。**2005** 年度において改革を検討する。

#### C) 教育効果

修士論文等においては、一定のレベルの成果を収めており、また、修士課程在学学生による研究誌も充実している。学芸員等の採用実績や、評論の分野で活躍している人材もあり、それなりの成果を上げている。**2005** 年度において改革を検討する。

### ⑩専任教員と非常勤教員の役割

原書講読の一層の充実が望まれるなど問題点があり、2005年度において改革を検討する。

### ⑪学科運営の意思疎通

随時教員会議を開催しているが、共通教育美術史系教員とのより円滑な意思疎通が必要である。2005年度において改革を検討する。

### ⑫就職支援

美術館への就職などの紹介を積極的に行っているが、より一層の就職の増大をはかりたい。

### ⑬課題

先に記したように、不十分な事項については、2005年度において大幅な改革を検討する予定である。

## 共通教育

### ①学部の共通教育

本学において共通教育の役割は、大学教育4年間の中で基本学理を補強するという意味において極めて重要である。年々、知識が細分化され、全体を見通す能力が弱体化する現状を、未来社会をさらに健全に機能させるために総合的観点から、美術史、宗教学、物理学、材料学、文学、心理学、メディア論、デザイン論、外国語、考古学、文様史、文化史、その他、多種多様な科目を設置して、学生に総合的判断のできる能力を与えようという使命を、共通教育には与えられているものと認識するが、そのために毎年、カリキュラムの見直しをはかり、大学の要求、学生の要求を鑑みながら、授業を充実させている。2002～2003年度にかけては、廃止科目、統合科目、新設置科目の調整をはかったが、これらはまだ続行中の作業でもある。今後期待される。

#### A) 人文科学と社会科学

人々の心に訴えるすばらしい美術やデザインを制作する上で、豊かな人間性と幅広い教養は不可欠である。そうした、人間性と教養を培うのが、人文科学系の学問であり、共通教育では、哲学や現代哲学、倫理学、心理学、造形心理学、歴史学、日本文化史論、文学、美学、考古学、音楽など、数多くの人文系学科目を開講し、ゼミ（哲学・歴史・文学）では、教員と学生との直接的な交流の中で、より深い知識と幅広い視野を得られるよう、努めている。

また、デザインはもとより、現代の美術も、広い意味での社会との深い関わりを度外視しては、存在し得ない。共通教育では、学生がそうした社会的環境に幅広く、そして鋭い目を向け、考えていくことができるよう、社会学、法学、経済学、社会思想史を始めとする社会科学系の基礎的学科目を開講し、マスコミ心理学やマーケティング

理論、情報論など、時代の要求に即した科目も、必要に応じて開講している。

### B) 自然科学系科目と工学系科目（コンピュータ関連科目は除く）

本学には生物学、物理学、芸術と科学（自然科学）、数学、人間工学、画像工学等の科目があり、天文学関係は他大学教員の2回の特別講義を行っている。

環境問題と生物学、環境問題と自然科学（水と食、ホルモン）、環境問題と物理学（エネルギー物理学、温暖化防止）等に取り組んでいる。

画像工学に関してはホログラフィ実験、バーチャルリアリティを実施している。

### C) 芸術材料学

美術大学における作品制作は当然のことながら、非常に重要な作業であると考えられるが、それらの作品の多くは、現在も実際に存在する物質によって制作されている。

「芸術材料学」は、物質の性質を理解し、制作に役立てることを狙いとしているが、それは、自然科学的な知識や思考を獲得することであり、具体的には物理学、化学、動植物学、地学、鋼物学等々の広範な世界にわたっている。

この広範な世界をより理解し易くする方法として、研究室で蒐集した様々の材料サンプルの提示を行ない、それに関係する道具の取扱いなどを実際に示しているが、その他にも視覚的な情報の多様—図版や実写を含めたスライド、ビデオやDVDによる素材や技術・技法の紹介などを行なって来た。このほかに、例えばPCによる分子レベルでの化学反応のシュミレーションやアニメーション表現による物質の変化の様態の紹介などを行っており、一定の成果を得たものとするが、PCによる画像の制作などにはかなりの時間を要し、継続的に行なうには困難を感じている。また、実物サンプルについても、例えば顔料の原鉱石など主要なものが欠けており、今後の購入を考えている。また、将来的には実技教室との共同により、より具体的かつ現実的な材料へのアプローチを行ないたいとも考えている。

### D) メディア領域

授業の内容に関して、様々に工夫している。「デザイン史」などは、歴史的な内容を主とした講義であっても、歴史上の出来事・状況と、今日のそれらを必ず関連づけ、意味性を鮮明に立ち上げている。その結果を含め、授業そのものが形骸化しないようにつとめている。ビジュアル教材に関して、通り一遍のものではなく、つねに複数準備し、編集などを行ない、授業の中で使いやすいように工夫している。講義のテーマ、内容は、かなり高度なものを目指している。

### E) 語学

まず美術学部全学生に対して、外国語学習に関するアンケートを実施した。従来設置してきた外国語科目は英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語および留学生対象の日本語であったが、他に学生が興味を持っている言語、学びたいと思っている言語はあるのか、ということ調査することが狙いであった。その結果、アジアの言語に興味を持つ学生も多数いることがわかった。そこで、2002年度から試験的に中国語を1

コマ自由科目として開講した。2002年度、2003年度ともに100名を超える学生が登録して順調な経過が見られたので、2004年度からは中級クラスをもうけることを決定した。また、中国語に続き、韓国語も開講するという展望を持った。このようにして、欧米中心主義を改善し、学生に幅広い外国語学習の機会を与えるという方向に向かいつつある。また、ネイティブスピーカーのクラスや上級クラスをもうけた成果として、学生の間で外国語学習に対する熱意が向上し、留学を目指したり、実際に留学する学生が少しずつではあるが増えて来たのも良い兆候といえる。今後もよりきめ細かい、多様なクラス編成と教育内容の充実を目指している。

#### F) 東洋美術史

大学に入りたての学生に、それまでほとんど馴染みの無かった東洋美術史を教えるのは、大変困難を伴うものである。授業内容を練りに練り、授業方法も毎年改善し、試行錯誤の日々であるが、美術大学での東洋美術史講義において求められるものは、という問いには、未だはつきり答えられない。むしろこちらが学生諸君に問いかけ、その答えをバックアップして授業を組み立てているという現状である。いずれにせよ、何をどの程度まで習熟させるかという年間の授業の目標値を旨く設定することが肝要であろう。

#### G) 西洋美術史

造形表現の基本をさまざまな角度から考察する美術史は美術大学における重要な教科であることには疑問の余地がない。本学にはそれを時間的な流れに沿って講義する美術史概論、さらに個別の問題に対する理解を深める研究が設置されており、その完成として美術史ゼミが設けられている。西洋美術史に関しては、2000年度までややもすると近・現代に偏りがちであった対象領域を、2001年度から図像学や主題論など、ずっと広い観点に立って講義する方向へと修正を行い、学生の視野を広げることに役立てている。今後は語学系教科と連携しながら、原書を読みつつ問題意識を深めることの出来る学生の育成に努めたい。

#### H) 教職課程

教職課程は、本学学則第一章総則「第一条 本学は、広く造形芸術全般について高度な学理技能を教授研究し、あわせて国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナー並びに教育者研究者等を養成することを目的とする。」の大学使命の一翼を担う課程である。

1998年の教育職員免許法の改正により、義務教育免許状を取得する希望者は教育実習期間の延長（2週間→3又は4週間）や教職関係科目の履修科目の増加がもたらされた。新学習指導要領改訂に伴い、美術授業の削減により従来は中学校1年生で週2時間あった授業が1時間に削減された。美術の基礎・基本はもとより、芸術教科としての本領を発揮するには誠に厳しい教育現場の状況となっている。

このような美術教育を取り巻く現況において、教職関係のみならず教職関連領域の一般教養及び専門教養との連携をはかる必要がある。具体的には、美術教育実習充実、

少人数制による実習及び講義への取り組み、教育実習の研究授業訪問指導を全学で取り組む教育実習検討委員会の創設などである。この2年間で実技教員による研究授業への参加の方向性が生み出されて来ている。

教職課程は、毎年100～120名の取得者を輩出している。それとともに、学部卒業、大学院終了後そして企業等の経験者が科目等履修生及び教員採用の相談に来校する。本学を卒業後においても、進路、就職相談の受け皿としての一助に努めたい。

#### I) 学芸員課程

近年、美術館・博物館の変貌振りは著しく、組織の大変革がなされ、ひいては財政基盤まで含み大きく揺れ動いている。不動であるべき公立博物館が存亡の危機に陥ったり、入館者数の増加のみを狙う企画展が優先されたり、文化財の保護とそれに伴う修復や研究等はそっちのけという現状も見られる。危機的状況の始まりである。しかし、大学に設置された学芸員課程は、博物館法に則ったものであり、あくまでも文化財の保存と研究、およびそれに伴う展示・教育という流れの中で博物館の在り方を追求する立場を基本としなければならない。現状の複雑さに立ち向かうためには、基本を押さえなければならない。本学の学芸員課程では、その基本の認識と文化財の実際の取り扱い方と修復の基礎知識を学生に与える姿勢を崩しておらず、逆にこちらの方面を2004年度には、もう少し特化して、授業内容を充実させるべき策を予定している。後世にそれを伝えるために文化財優先策が必要とされる。

#### J) スポーツ科目（保健体育科目）

スポーツ科目は、スポーツ（体育実技）とスポーツ文化論（保健体育理論）およびスポーツ文化ゼミ、シーズン・スポーツ（ゴルフ、スキー、水泳）からなっている。スポーツでは、自らの身体を耕す主体者として、ソフトボール、バドミントン、パドルテニスなどの各種スポーツを導入している。年に2度行う体力テストは、学生の自覚的な健康や体力意識を促すきっかけにもなっている。生涯スポーツの観点からは、シーズン・スポーツとして自然とスポーツを台座に据え、集中講義形式で実施している。

また、スポーツ文化論では、実技実践を踏まえその意味や意義を論じる中で、実技と理論とが相互補完できるような構成をとっている。同様に、スポーツ文化ゼミでも、学生達のディスカッションを軸に、遊びとスポーツ、映像とスポーツなどの幅広い問題意識の醸成と実践に重きを置いている。

しかし、理想と現実の溝は否めない。将来的にスポーツ科目は、実技においても種目選択のセメスター制導入を検討しているが、上記の諸問題の克服が当面の課題である。

#### ② 大学院共通教育

##### [研究目標]

学理の尊重という創立以来の伝統のもとで、大学院では学部での教育を発展させて実技と学理との更なる調和・総合を目指した共通教育科目を開設している。その目的は、それぞれの分野で美術の専門家たらんことを目指す学生に、必要な理論を学ばせると

同時に、芸術に対する社会的な要請など、より一般的な視点から自らを見つめる機会を提供することにある。

### [現状]

大学院の拡大に伴って研究分野が専門化し、大学院全体の一元的な運営に問題が生じているのは前回の報告の通りである。大学院博士後期課程（博士課程）の設置によって各学科を横断するようなシステムを構築する契機は設定できたが、実際の運営上は未だに多くの問題があり、そのための施設整備も途上にある。

### [課題]

上記のような問題点はあるものの、基本的な方向性は固まりつつあり、それに基づいて学部・学科間を横断した議論の場の創出、多様な創作の実践と理論とを総合的に研究する施設および講義内容を整備してゆくことが今後の課題となっている。

## 造形表現学部

### 造形学科

#### ①教育目標

美術教育を夜間に行う学部として、基本的に全学生を“社会人”として扱うことを特徴とする。ボーダレス化する現代の社会において芸術の多様化においても社会人としての強い意識をもった表現活動を学ぶ場とし、中・高年者の再教育生涯教育の機会、さまざまなジャンルや年齢層を越えた美術教育を教育の基本理念としてかかげている。

一般入試による学生 70%

社会人入試による学生 30%

クロスオーバー化が進行している今日の絵画表現の中で本学科は各自が独自の表現世界を築けるような環境づくりを行うとともに、日本画・油画の基礎演習を行いながら、その枠にとらわれず概論・史論・技術論を学ぶとともにそれぞれの特徴を活かした古典技法を相互に学ぶカリキュラムを組み、さらに、版画・映像表現・立体造形・保存科学など関連したところから専門の分野までの美術教育の目標を組んでいる。

#### A) カリキュラム構成

##### カリキュラム概要

1, 2年次	3, 4年次
<ul style="list-style-type: none"> <li>●素描画、ドローイング</li> <li>●造形技法（日本画制作・油画制作）</li> <li>●古典技法（フレスコ・テンペラ）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●日本画制作</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>●油画制作</li> </ul>	
映像（2年次）、版画（3年次）、史論（1～4年次） 立体（4年次）、保存科学（4年次）	

カリキュラム概要（表 -21）

#### 1, 2年生

- ・日本画と油画のクロスオーバーな授業
- ・基礎過程の素描Ⅰ、素描Ⅱでデッサン・ドローイング（Ⅰ）前期（Ⅱ）後期を行っている。
- ・古典技法Ⅰ（絵巻模写）、古典技法Ⅱ（フレスコ）、古典技法Ⅲ（黄金テンペラ）、造形技法Ⅰ（混合技法）

#### 3年生

- ・木版画、銅版画、材料学、古美術研究

## 4年生

- ・立体表現、保存科学
- ・ギャラリーヨコハマ作品展
- ・卒業制作展
- ・五美大展
- ・日本画専門と油画専門の教員が共通に担当している。
- ・平面表現を中心として、インスタレーション、立体などは、場所的、物理的、人的要素を考慮して行っていない。
- ・造形表現学部の教育目標として、定員 30%以上を社会人枠としていることは本学科においてもその定員を維持し、社会人の制作意欲は目を見張るものがあり、成果を上げている。

## ②教育効果

これまでの卒業生は、半数以上が創作活動に専念する道を選んでおり、なかでも大学院に進学する者が多くいる。そのほか、ゲームソフト・宝飾関係・舞台美術など、表現活動の場を異ジャンルに求める者も多く見受けられる。また、最近の傾向として博物館学芸員や美術セラピスト、幼児から中高齢者の創造教育を推進する美術指導者など、美術関連の専門職につく者も目立つ。

## ③研究活動

本学科としての共同研究は1つのテーマを2年ないし3年間に渡り提案し研究を行っている。

## ○和紙の研究

2000～2002年度

## 【2000年度】

古典和紙の特性を日本画・油画の両分野から素材研究し、新しい技法を追求する。特質を同じくする日本画の分野からさらに新しい可能性を引き出し、また特質の異なる油画の分野から新しい可能性を追求する。福井大学教育学部・柏健教授の協力を仰ぎ可能であれば福井大学学生とのジョイントを試み、本学の新しい分野への積極的な取り組みの姿勢をアピールする。さらに両分野を新しい1つの分野とした検証も試み、本学科として将来における研究テーマを実証することを目的とする。研究地-福井県

## 【2001年度】

1年目の研究の目的、日本画・油画の両分野からの素材研究の成果をさらに考察を進め、特質を活かした新しい和紙素材と言えるものを作ることを研究テーマとする。1年目の成果に絵画用和紙として改良された古典紙（雲肌麻紙、鳥の子）を研究室の研究紙として特厚雲肌麻紙、特厚鳥の子紙、白土入り特厚麻紙、白土入り鳥の子紙を制作する。また、それらを土台として2年目は別種の素材を白土以外の顔料を漉き込み、新技法との融合を試みる。研究地-福井県



## 【2002 年度】

2年間かけて行った古典手漉き和紙の研究成果を発表することを目的とする。研究室で発案し特別注文した古典紙（特厚雲肌麻紙、特厚鳥の子紙、白土入り特厚麻紙、白土入り鳥の子紙）に、各自が工夫した顔料や技法などをそれぞれ提案し、作品として具体化してみる。そして、日本画と洋画という境界を越えた新しい絵画表現の展開を示すことにより、日本独自の素材である和紙の可能性を再認識してもらう。

## ○額の研究 2003 年度ー

## 【2003 年度】

額縁と絵画表現の関係を研究する。

油彩画や日本画表具の在り方を再考察し、額縁と作品の関係を問い直し提示することを目的とする。

研究室が研究し考案した額縁を実際制作し、それと合わせた作品を制作することにより絵画表現の新しい展開の可能性を見出す。

## ④課題

新しい美術教育の10年先を見すえ、美術教育現場の最高学府として実践的芸術活動を、どう考え、どう捉え、どう表現していくか、これからの芸術はどうあるべきか、を問いつつ、あらゆる課題をテーマとしてかかげて大学という研究機関としてのレベルを高めていく。具体的な課題については以下のとおりである。

## ・年間カリキュラムの絵画制作における作品の充実（表 I -22）

	油画	日本画
1 年生	デッサン 2 点・ドローイング 3 点	デッサン 2 点・ドローイング 2 点
	静物油彩 30 号・人体静物油彩 50 号 2 点	植物写生 20 号 2 点・静物細密画 50 号
	風景油彩 15 号 2 点	風景画 30 号・植物画 30 号
	フレスコ画・混合技法	絵巻模写・フレスコ画・混合技法
	計 10 点以上	計 10 点以上
2 年生	デッサン 1 点・ドローイング 3 点	デッサン 1 点・ドローイング 1 点
	静物油彩 30 号・人体静物油彩 50 号 1 点、 50～80 号 2 点	人物制作 50 号 2 点
	風景油彩 15 号 2 点	風景画 30 号・自由画 30 号
	黄金テンペラ	動物習作 箔に制作 30 号・絹に制作 20 号 黄金テンペラ・絵巻模写
	計 10 点以上	計 10 点以上
3 年生	造形制作 100 号 2 点	自画像制作 50 号・樹木及び風景制作 50 号
	造形研究 100 号 2 点	動物制作 50 号以上・自主制作 1 点
	自由制作 100 号 2 点	群像 100 号以上・人物（墨彩）30 号
	終了制作 50 号 2 点	終了制作 100 号以上 2 点
	版画制作	版画制作
	年間提出作品 600 号以上	年間提出作品 500 号以上
4 年生	造形制作 ・ 造形研究 ・ 卒業制作	造形制作 ・ 風景写生・造形研究 ・ 卒業制作
	各自テーマを決め制作	各自テーマを決め制作
	立体制作	立体制作
	年間提出作品 600 号以上	年間提出作品 500 号以上

(表 -22)

- ・作家としての意識をもつための課題外作品制作と発表。  
個展-複数の作品制作のため、表現する力と意識を高める。  
コンクール-他者の作品の中にあつて自己の作品のレベルを考察し、作品による自己表現を確立する。  
公募団体への出品
- ・アトリエスペースの拡大（面積および容積）

### ⑤その他

#### 志願者数を望む案

- ・地方へのアピールをする。
- ・環境設備の充実  
校舎の新設（学校の計画に従う）  
教員の研究室（教員の制作現場を見せることのできる環境）  
デッサン室（基礎技術の向上）  
共通工房（パネル制作、下地制作など）  
図書談話室（画集の充実、教員と学生のコミュニケーションの場）  
食堂（明るくておいしい食事）  
パソコン室（情報収集のため）

## デザイン学科

### ①教育目標

デザイン学科の教育・研究の基本的な理念・コンセプトは「コミュニケーション・デザイン」である。これは、人々のコミュニケーションとこれからあるべき姿をデザインし提案していくということであり、またデザインという営為を通してコミュニケーションの豊かな可能性を試し広げ、社会に資していくということでもある。

ビジュアルデザイン分野では、「ポスターから **Web** デザインまで」をテーマに、グローバルな視点に立ち、より良いコミュニケーションのための知的複合情報の視覚化に必要なデザイン力と感受性を養い、情報環境のプランニング、コーディネート等、幅広い能力を育む。

デジタルデザイン分野では、「ヒトとデジタルの未来を創る」をテーマに、情報やグラフィックスやネットワークコミュニケーションをコンピュータを活用してダイナミックにデザイン表現する手法と意義を様々な角度やメディアについて学び、人と生活、社会のこれからの新しいあり方に貢献し得るデジタルデザインとその環境を探究し、制作、提案する。

プロダクトデザイン分野では、「モノづくりから情報のデザインまで」をテーマに、人間と道具のあり方について、ハード、ソフト、システムなど多角的な観点から探究し、新しい価値を提案するため、道具の形態やはたらきについて、使われる状況、人間の理解の仕方と行動等を総合的に学ぶ。

スペースデザイン分野では、「インテリアから環境まで」をテーマに、人間と環境のあり方について、バーチャルな空間概念から、現実的な住空間や都市空間に至るまでを対象とする。コンピュータによる空間イメージの表現や、デザインサーベイ、モデリング等の技術を身に付け、空間デザインの各分野を総合的に学ぶ。

このような教育・経験を通じて、本学科では、高度な専門的表現力と同時に、幅広いデザインの総合力をも身に付けた、21世紀のデザイン各界が求める新しい人材を育成している。

なお、本学科では、日本で唯一の夜間開講デザイン学科という特長を生かした、社会人への再教育をとっても重視し大きな実績を持っている。また3年次編入学者に対しても、きめ細かく指導が行えるよう柔軟なカリキュラムが用意されている。

### [実態／評価／対応]

インターネットなどの告知、開示により社会人の入学が増加しており、その教育効果は着実に上がっている。また異分野交流のゼミの効果により、多様な教育効果も上がっている。

### ②カリキュラム構成

2年次前期までは基礎過程として、デザインをやっていく上で必要な、考える力、観察する力、造形表現する力、またコンピュータを道具として自由に扱うことができる力などを身につけることができるカリキュラムが用意され、入学時の志望専門分野に関わらず、自由に選んで学ぶことができる。

2年次後期からは、ビジュアル、デジタル、プロダクト、スペースの4つの専門分野に分かれ、より高度で先端的な学習と制作に入る。

また、本学科の特長である、分野・ジャンルの垣根を越えた交流・学習をめざしたテーマ別のゼミナールも多数用意されている。

また1年間を5つのセッションに分け、様々な専門分野のカリキュラムが構成されている。特徴的なのは3年次に開講された専門分野を跨いだゼミが多数開講されている。

### [実態／評価／対応]

セッションが同時進行するために、セッション末になると学内のファシリティや教員に負荷がかかる。できるならばセッション末をサミダレ式にづらす工夫も必要であろう。それにより負荷が分散でき、教員も他の講評会に出席も可能である。

### ③教育効果

4つの分野「ビジュアルデザイン分野」「デジタルデザイン分野」「プロダクトデザイン分野」「スペースデザイン分野」が1つの学科に集約されている効果は絶大である。つまり今後のデジタルを含むデザイン創作、活動において、縦割りの壁は大きな障壁であるからである。

そして社会人を多数入学させていることにより、若年層の学生に多大な影響を与え、教育の「質」向上に寄与している。

[実態／評価／対応]

社会人に開かれた学部を目指し、その社会的効果、学内学生への好影響、全体の質向上にも貢献しているが、社会人学生が昼間の仕事と夜間の学業を4年間両立させることは、時間的、経済的に負担であることが見受けられる。

### ④専任教員と非常勤教員の役割

専任教員は教育の質向上と、技術の進歩に伴う社会からの要請に応えるべくクリエイター、デザイナー予備軍としての教育プログラムの立案を行う。あわせて、コンピュータなどを使った先進的な教育を行う。非常勤教員の役割は、社会で先進的に実践している手法、コンセプト、技術などを応用し、専任教員では補えない部分の教育を実践している。

[実態／評価／対応]

専任教員の人数が減少しており、負荷が増大している。

非常勤教員においては、教育内容を陳腐化させないために、新たな非常勤教員への交代が必要である。

### ⑤学科運営の意思疎通

授業の進行、学生への指導などあらゆる問題は学科内の月例会議により、活発な意見交換により解決されている。

特に本学科の意思疎通、コミュニケーションは垣根を作ることなく良好なことは特筆すべき特徴である。

[実態／評価／対応]

学科内専任教員全員との意志疎通は極めて良好である。

## ⑥ 研究活動

実施年度	研究区分	研究名	担当教員	相手先
2000年度	産学	インホイール・モーターによる電気自動車デザイン・プロジェクト	武正秀治	協力：慶応義塾大学環境情報学部（清水研究室）、川崎市産業振興課
	産学	モバイル情報機器の研究	植村朋弘	協力会社：(株)日立製作所デザイン研究所
2000年度～2003年度	学内	メディア空間のビジュアル・デザインと構築法の研究開発	植村朋弘 須永剛司 永井由美子	協力：日本学術振興会・未来開拓学術研究
2001年度	産学	車体利用広告デザイン自主審査基準作成	太田幸夫	協力：東京都都市計画局建築指導部 / 東京屋外広告協会他
	学内	公共交通サイン（視覚言語）コミュニケーションデザイン	太田幸夫	協力：東京都交通局他
	学内	視覚言語の研究開発	太田幸夫	協力：AM デザイン事務所ア・ロン・マ・カス代表他
	産学	画面操作における知識空間のデザインに関する研究	植村朋弘	協力会社：(株)シーズ・ラボ
2001年度～2002年度	産学	「非破壊糖度計・アマイカ」の商品デザイン開発	武正秀治	協力：(株)アステム、川崎市産業振興課
2002年度	学内	広域避難場所表示シンボルのデザイン	太田幸夫	協力：防災情報機構 NPO 法人他
	学内	広域避難場所誘導サインの視認効果実地検証	太田幸夫	協力：NPO 法人ル・バンデザイン研究所、上田市役所他
	デジ タマ	通信放送融合型電子行政サービスシステムの開発	太田幸夫 猪股裕一	協力会社：(株)デジタマ、パナソニック デジタル ネットワークサーブ(株)
	デジ タマ	デジタルTVを活用した行政情報提供サービスシステムの開発	太田幸夫 猪股裕一 植村朋弘	(株)デジタマ、松下電器産業(株)、パナソニックシステムソリューションズ社
	産学	モーターを使った未来商品のデザイン提案	武正秀治	協力：オリエンタル・モーター(株)
	産学	デザインプロセス・新商品デザイン提案プロジェクト	武正秀治	協力：(株)東芝、キャノン(株)、ソニー(株)
	産学	蓄光素材による新商品デザイン提案プロジェクト	武正秀治	協力：(株)ブリッジワークス
	産学	ロボットの音声デザインの研究	植村朋弘	協力会社：日本電気(株) マルチメディア研究所他
2002年度～2003年度	学内	上野毛地域の文化的環境形成の研究	山中玄三郎	協力：五島美術館、世田谷区役所

2003年度	産学	アルミ展示パネル「アルパス」 研究開発	太田幸夫	協力：立山アルミニウム工業(株)
	学内	新蓄光性避難誘導標識の視認性 実験	太田幸夫	協力：名城大学藤田晃弘助教授、防災情報機 構、根本特殊化学他
	学内	国際安全標識のピクトグラムの 研究	太田幸夫	協力：ISO / TC145 / SC2 国内対策委員会
	デジ タマ	老人介護施設向けのタイルカー ペット施工デザイン及び監修	太田幸夫 猪股裕一	協力会社：(株)デジタマ、(株)リバル
	デジ タマ	次世代Web端末の開発	太田幸夫	(株)デジタマ、三洋電機(株)
	学内	江戸川区の地場産業「伝統工芸」 の新規商品デザイン提案	武正秀治	協力：江戸川区産業振興課、江戸川区伝統工 芸者2団体

研究活動一覧(表 -23)

学内：学内共同研究、産学：産学共同研究、デジタマ：デジタマ共同開発

## ⑦ 就職支援

企業からの求人に対して、活発な応募や教員による支援がなされている。

## [実態／評価／対応]

就職課からの求人、求職の情報が脆弱なために、インターネットを使った求人情報を提供すべく準備中である。

## ⑧ 課題

優秀な成績で卒業してゆく学生の中に社会人学生が極めて多く見受けられる事実からも、本学科の質を向上するうえで社会人学生をなるべく多く採用すべきである。その対応として、すでに大学を卒業またはそれと同等な資格を取得している入学生に対し、既取得単位に相応する「既取得単位の減免」措置が急務である。また高校や予備校だけでなく、社会人に対する本学科の教育内容やファシリティの告知、広報活動も急務と考える。

平成元年の美術学部二部開校時から率先してコンピュータを多用した教育を行って来たが、コンピュータ本体の低価格化、ソフトウェアのバージョンアップにかかる膨大な費用、インターネットなどのネットワーク費用など、当初の予算体系も著しく変化している。入学時に学生にコンピュータ関係の購入を義務づける方策も考慮する余地がある。

## [実態／評価／対応]

少子化による受験生の減少は避けられない。ゆえに本学科の特徴、差別化が求められている。そのもっとも大きな特徴は都内唯一の社会人に開かれた、デザインを主体にした、夜間の大学であることは言うまでもない。その特徴をますます告知・広報活動をすべきである。社会へのデザイン学科の告知・広報を広く強く行ないたい。本学科独自のインターネットでの告知・広報もますます充実させていきたい。

**映像演劇学科**

## ①教育目標

映像および演劇の領域にかかわる、あるいはそれら両領域をまたいで、清新な創作活動や表現活動を目指そうとする全ての者に、「表現」する精神とともにそれらの基礎を修得させ、創作者をはじめ広く文化産業に寄与する人材の育成を目的とする。

## [実態／評価]

「表現」する精神とともにそれらの基礎を修得させる教育方針は着実に浸透している。また映像と演劇をコース分けしない、両方ともに体験出来るから良いとする声が受験生から聞かれるのもその証しと思われる。映像と演劇を往還するユニークな学科の声。

## ②カリキュラム構成

四つの柱で構成する。(1)スタディ系授業群（歴史、概論、各論など理論研究）(2)メソッド系授業群（基礎的技術・技法、表現の方法開発など演習型）(3)FT系授業群（学年枠を越えて企画を立ち上げ創作し公開する実作実習フィールドトリアル）(4)卒業制作（個人またはグループによる企画作品の制作または研究論文）。これら柱を貫通するカリキュラムのテーマは学生個々に内在する「企画力」および「表現力」の覚醒・抽出とともにそれらの伸張・伸展をめざすことにある。

## [実態／評価／対処]

「表現」する精神は、「企画」を提案し、グループを立ち上げる姿の中に明確に現れる。これを実作に繋げる過程で、(a)機器機材の絶対数が不足、その機種も老朽化著しく至急な更新が必要 (b)学生が集うミーティングルームや工作室がなくプレハブでも急場を凌ぎたい (c)講堂、映像スタジオなど本学科の拠点となるべき施設管理が大変不便で改善の余地あり、などの問題が山積しているのが現状である。

本学科は、①入試を変える＋②授業を変える、を合い言葉に改革に着手した。その第一弾が自己推薦入試「生き方オーディション」である（2005年度入試実施予定）。

## ③教育効果

映像と演劇を区切らない（コースに分けない）両領域横断型の授業形態が学生の活気ある創作活動として定着しつつある。その証拠に年間200を越える企画が立ち上がり公開されている現状とともに卒業生の活躍が挙げられる。キャンパス中が常に劇場なのだ、という本学科の姿勢が徹底され注目されつつある。

## [実態／評価]

各種の映像コンクールなどの受賞者や本学科の卒業生で作る劇団など、卒業生の活躍が目立って来た。これも創設15年の成果である。そうした卒業生を臨時の講師として招くなど、現役学生とのネットワークを組み上げる時期が来ていると考え、そのいくつかは実行して来た。

## ④専任教員と非常勤教員の役割

在籍学生総数 300 名に対し、現在、専任教員 10 名が主にカリキュラムの柱(3)と(4)の指導に徹底して張り付き、学生の「企画力」および「表現力」の覚醒と伸張に努めている。非常勤教員は外部から最新の映像や演劇の研究方法及び創作・表現の今を注入することを任務に、主に(1)と(2)を担当している。

## [実態／評価]

昼夜間型の授業展開には一層充実した非常勤教員の補充が必要であり、その骨格や陣容についても検討に入った。また専任教員の着実な研究または創作の成果が厳しく問われる。将来は科学研究費補助金を申請し得る陣容を整えなければならない。また行政や教育機関との連携をも目指さなければならない。現在、そうした対外的な成果に乏しいのが現状であるのは否めない。

## ⑤学科運営の意志疎通

授業の進行状況、年間行事、学生の生活指導など多岐にわたる諸問題は月例の学科会議を通して、また中期計画などについては集中学科会議を頻繁に起こし、常に学科の教育姿勢が徹底されるよう立案、検討が重ねられている。特にこれらには必ず助手・副手も出席させ、その提案を重視し、機会ある毎に軽食会を兼ねたミーティングによって些細な問題をもフォローしている。

## [実態／評価／対処]

学科の方針は全スタッフの出席する学科会議で一切を協議し決定している。今後この方針は貫く。中でも鍵を握るのは、機材機器を管理し、授業進行を補佐し、学生の動向を身近に知る助手・副手の意見は重視したい。学生が助手・副手を頼るケースは万事に及び、従って教育効果の充実とともに学科内の意志疎通の密度を上げるためにも優れた助手・副手の役割は重要であると考えている。

## ⑥就職支援

卒業生の紹介などを含め日常の中で個々の相談に応じる。

## [実態／評価／対処]

学部全体でのキャリア教育、求人開拓にも工夫が必要。

## ⑦課題

特に社会人を優先入学させるべき造形表現学部にあつて、頻繁な創作活動を中核に据える本学科では社会人の時間的な制約が大きな負担ともブレーキーともなつて、せつかくの職場を放棄する例もある。

## [実態／評価／対処]

特に大卒社会人には彼ら優先の「ゼミ」など高度な授業内容が必要。これらは学部特有



の問題として工夫すべき。だが議論はないのが実情。

### 共通教育（造形表現学部）

#### ①教育目標

共通教育は、各学科の専門教育との関連を考慮しつつすべての学生に共通して必要な一般的教育をめざしている。それぞれの専門教育において、学生は創作・表現活動を行うべく専門的な技術や知識を学ぶ。しかし、それを使ってなにを創り、表現するかは各人の一個の人間としての生きかたと深く関わって来ざるを得ない。共通教育は、このような人間形成の基礎となる総合的な一般教養を培うことを目的とする。共通教育と専門教育は、いわば、車の両輪のごときのものであり、両者が調和をたもちつつ有効に機能することによって創造的なリーダーシップのとれる人材の育成をめざす。

豊かな人間形成のために最も重要な点は、人間とはなにか、どうあるべきかということについての絶えざる問いかけの姿勢を獲得することである。昨今、教養とはなにかについての議論が盛んであるが、この問いかけを、より総合的でより深いものとするための努力こそが真の教養とよばれるべきものであろう。このような姿勢の獲得のために、共通教育では、総合講座科目を設置している。ここでは、自然および社会と人間との関係をできるだけ多角的にとらえること、真・善・美などの価値にたいする哲学的な問いを機軸として人間の幸福についてのより深い理解が目的とされている。基礎理論科目では、各学科（造形、デザイン、映像演劇）の学生に共通する実技系の基本講座を設けることで、学科の仕切りを越えた新たなる創造の可能性を探求する。外国語科目では、多様な思考形式の理解と国際的なコミュニケーション能力の獲得を目指し、地球的視点に立った問題意識と創造力を喚起する。体育系実技科目では、身体の健康の保持としてのスポーツの重要性を認識し、精神・肉体のバランスの取れた人間形成を目標とする。その他、博物館・美術館のキュレーターを目指す学生を対象とした学芸員資格取得のために必要な科目が編成されている。

#### ②現状

共通教育に所属する教員が研究代表者として行なった学内共同研究として、2000年度に「大学における芸術と社会人教育について、---社会人学生と一般学生の共生---」がある。この研究では、一般学生の社会人学生への関心度をさぐった。その前年度（1999年度）の社会人学生および社会人学生卒業生が一般学生に対してもっている関心度の研究調査の裏付けとしての意味も含めて行なわれたものである。大半の一般学生は社会人と共に学ぶことに共感し、学習・研究の面のみならず私的にも影響を受けている実情が明らかになった。研究の方法としては、造形表現学部の一般学生にアンケート調査を行い、その調査結果を踏まえての、各研究分担者の研究報告と討論を重ねた。アンケート調査は、「一般学生と社会人学生の共生について」をタイトルとして質問を作り、また、自由に意見を記述できる欄も設けた。一般入学の学生を対象にし、実施期間は平成12年9月から12月までの3ヶ月間、回答数は186件であった。

2001年度には、「美術大学における教養について、---言語表現の在り方とその可能性について---」の研究を行なった。「教養」という主題を軸心に、新しい外国語のカリキュラムの検討・作成、さらに「ことば」についての基本的な研究発表・討論を行なった。この研究成果は、今後のカリキュラム改革に生かすことを念頭において行なわれたものである。

2002, 2003年度は、「総合的な視点からの、芸術におけるバロックの分析と考察」を行なった(2004年度も継続中)。バロックの概念が芸術様式の分析のためのメルクマールとして重要なことは周知の事実である。しかし、個別の芸術分野でのバロック様式研究はあっても、多様な芸術分野を貫いた共通のバロック概念についての研究はこれまでほとんどない。本共同研究は、多様な芸術ジャンルの専門家のそろっている本学、造形表現学部の長所を生かし、さらに学外からの研究者をも含めて研究分担者をより充実させて、総合的な視点からバロック研究を行なうものである。2002, 2003年度に行なった研究会で、各研究分担者の分担領域に関する発表を全員が終えている。従って、演劇、音楽、美術(西洋と日本)、文学、建築、都市に関してのバロック概念の検討の、具体的な事例がかなり充実した形で出揃ったことになる。この結果を土台とし、出版社との打ち合わせを済ませ、書物「バロック研究」(仮題)の出版の計画を実行しつつある。その中には、コラム、重要語句の用語解説、作家解説、文献表、概略年表、図版などを含めて、内容の充実をはかる。その結果に基き、さらに総合的な視点からの考察を加えて完成させたい。今後のカリキュラム改革では、ひとつのテーマを設定して、複数の講師によって構成される多元的授業の可能性も模索されており、その検討のためにも本共同研究の成果が生かせるのではないかと期待される。

このほか、生涯学習センターを中心に、広く学外の一般市民を対象として行なわれている生涯学習講座にも共通教育の教員が積極的に協力しており、その経験が学内の学生に対する授業に反映されるとともに、大学の地域貢献および地域住民との交流に資するところが大きい。

### ③ 課題

社会人に対して、より学びやすい環境を整えること。昼間に就労して、夜間に学ぶことを考えれば、社会人の様々な負担は大きなものがあり、学内の環境のみならず一般社会や企業と広く連携した環境の整備が必要である。学内においても、授業時間の検討や、一般学生とのよき相互影響の促進のための方策などを考える必要がある。

社会人に限らず一般学生をも含めた全体的な問題としては、第一に、総合講座の充実がある。講座の精選や補充、また、一つのテーマを複数の講師によって扱う授業の創設によって、総合性の質をより高めることも考えられる。さらに、学生が主体的に授業に参加し、自らの考えを整理し、説得力のある言葉でメッセージを伝えられるような能力を養うために、ゼミ形式のクラスを開設する必要もある。次に、基礎理論科目の充実としては、デッサン、写真、版画、コンピュータ・グラフィックスなど各学科の学生が共通して関心をもっている実技系の科目を、共通教育が率先して提案し新設する可能性もある。また、外国語に関しては、教育方法の改革のみならず、学生の外国語習得に対する基本的モチベーションを高めるための方策が重要である。これは、大学の国際化の努力とも方向を一にする。たとえば、外国人講師の短期・長期の招聘、国際的シンポジウムやイベントの頻繁

な開催などである。体育実技科目の充実は、学生の心身の健康を保ち、促進する方向で真剣に検討されなくてはならない課題である。芸術創作系の大学であることや夜間を中心としたかなり過密なカリキュラムが要求されることも重なり、心身の不調を訴える学生が少なくない。学生相談室の開設などによって既に対策が取られているが、健康教育や実際に体を動かすことによって心身のバランスを保つことはこれからますます必要になるであろう。

※学生・卒業生の受賞歴については、2000～2003年度の実績のみ表示した。

### 3. 入学試験（特別入試）

入学試験の選抜方法は、大別すると、一般選抜、推薦選抜、特別選抜に分けられる。本学では、大学自身や社会を取り巻く環境、教育制度、高等学校の教育組織編成等の変化に対応し、社会及び受験生の多様なニーズに応えるため、下記の入学試験を実施している。

美術学部            一般入学試験  
                          大学入試センター試験利用入学試験  
                          外国人留学生入学試験  
                          帰国子女入学試験  
                          3年次編入学試験

造形表現学部      一般入学試験  
                          社会人入学試験  
                          3年次編入学試験

大学院博士前期（修士）課程入学試験  
 大学院博士後期（博士）課程入学試験

美術学部及び造形表現学部の一般入学試験（美術学部大学入試センター試験利用入学試験、造形表現学部社会人入学試験を含む）については、入学・卒業グループで報告することとし、ここでは外国人留学生入学試験、帰国子女入学試験、3年次編入学試験、大学院博士課程入学試験など多様なニーズに応える特別入試について報告する。

#### ①美術学部外国人留学生入学試験

[ねらい]

世界から引きつけた優れた人材が、日本人学生と交流を持ち、互いに刺激しあうことで、世界水準の質の高い美術創作が出来る環境を構築する。

## [結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	28	25	9	8
2002年度	24	24	9	8
2003年度	49	42	15	14
2004年度	44	41	17	15

(表 -24)

## [点検・評価]

日本語による小論文と面接試験を課し、質の高い学生を確保するために慎重な選考を行っている。その為留学生は日本語面で不自由することなく授業に参加している。

## ③美術学部帰国子女入学試験

## [ねらい]

現代社会のニーズに応え様々な入試を実施している。国際化が進む現在、海外生活を通じ、異文化で得た貴重な経験や感性を本学で発揮させる狙いがある。

また、帰国学生が入学することにより、留学経験がない学生に大いなる刺激を与える相乗効果も期待している。

## [結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	24	20	7	5
2002年度	17	15	4	2
2003年度	19	18	8	8
2004年度	10	9	3	1

(表 -25)

## [点検・評価]

試験は各学科（専攻）とも小論文、実技試験、面接で判断しており、海外生活で身につけた異文化の理解力と、母国の客観的な理解が本人にどのように影響をしているかを見ている。結果として非常に勤勉な学生が多く、成績も優秀であり、周囲の学生においても良い相乗効果が得られている。

## ④美術学部3年次編入学試験

## [ねらい]

進学率の上昇や社会の多様化等、現実社会の動きによって、3年次編入学試験は、短期大学、専修学校卒業生等に多様な進路選択とさらなる学修機会を与えるうえで有効な試験制度である。

また、本学生にとっては在学途中からの外部からの入学者の受入れは互いの刺激となつて、大学全体の教育の活性化に一役かっている。

## [結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	62	57	18	16
2002年度	74	73	14	10
2003年度	57	52	15	12
2004年度	55	48	22	18

(表 -26)

## [点検・評価]

志願者数については2年目をピークに減少傾向にあるが、それでもなお当初見込んでいた以上の志願者数を確保できている。しかし、受験者数の減少（未受験者の増加）が2004年度入試にやや目立つ結果となったことに先行きの不安が危惧される。

導入してまだ4年と大きな傾向がつかみにくい状況にあるが、今後この減少傾向が顕著になった場合には、より具体的な募集ターゲットの明確化が必要になると思われる。

なお、合格者数に注目すると前3年間に比べ2004年度入試が大きく増加している。これは本学が3年次編入生の受け入れに対して教育指導上の指針が明確になってきたことの表れであり、今後もより積極的に募集していきたい入試形態であることは間違いない。

## ⑤造形表現学部3年次編入学試験

## [ねらい]

優秀な学生の確保。

大学・短大・高専・専門学校の在籍者や卒業者が、取得した単位を生かして新たに芸術を志す目的意識の高い優秀な学生を確保するため3年次編入学を実施している。

## [結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	37	35	9	7
2002年度	44	43	11	11
2003年度	26	24	9	9
2004年度	38	36	13	13

(表 -27)

## [点検・評価]

2001年度より3年次編入学試験を実施。

毎年、若干名の募集だが、編入学の目的である「優秀な学生の確保」は達成されていると思われる。（2002年度からは、合格した受験生が、すべて入学している。このように、芸術（入学）を強く希望する3年次編入学者にきめ細かく指導が行えるよう、また既に修得した基礎教育科目に対し、重点的に専門教育科目を受講できるようカリキュラムの構成も検討を続ける必要がある。

また、造形表現学部から美術学部への転部試験も実施している。

## ⑥大学院博士前期（修士）課程入学試験

[ねらい]

美術・デザインについて学部で得た知識・技能を深め豊かにする人材を求める。また、本学出身者にとどまらず外部からの優秀な人材をより多く獲得する

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	128	126	99	93
2002年度	166	164	124	122
2003年度	144	141	119	110
2004年度	152	150	129	123

(表 -28)

[点検・評価]

年々、外部からの入学者が増加している。デザイン専攻はポスター等を作成するなど、広報活動の成果が見られた。

## ⑦大学院博士後期課程入学試験

[ねらい]

修士までの専門の細分化をするのではなく、創作と理論のバランスがとれた総合的な人材を育成するため、幅広い興味やチャレンジ精神の持ち主を発掘したい。

美術に関する研究者、新たなメディアの進展に対応する人材養成のために募集を行う。

[結果資料]

入試年度	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
2001年度	11	11	9	8
2002年度	10	10	5	5
2003年度	11	10	4	4
2004年度	7	7	6	6

(表 -29)

[点検・評価]

志願者は外国人も多く、国際色豊かな、幅広い人材を確保することができている。しかし、2003年度に完成年度を迎えたばかりであるので、国内外ともに認知度が低いのではないかと懸念される。

## 4. 国際化

本学の理念は、「国際社会に対応する幅広い教養を身につけた人格の形成を図り、現代社会に貢献する優れた芸術家、デザイナーならびに教育研究者等を育成することを目的とする」と高らかにうたわれ、また「国際的な美術家やデザイナーが集まる創造的な環境を構築する」と述べられている。本学はこの理念の実現のために努力し、国際交流委員会はそのためのサポートを積極的に行っている。以下、そのサポートの現状について述べる。

本委員会は月に1度開催されている。各学科から選出された委員、ならびに教務部長、学務課長、教務部職員ほかが出席し、過去1ヶ月の間に進行した交流関係の諸事を報告し、また今後の展開について議論を交わしている。本委員会は、本学における国際的な交流に関する事柄をほぼ全てにわたって掌握し、必要なアドバイスや協力を行っている。

過去4年間において、本委員会が積極的に関与した重要なイベントは、(1) 東京国際ミニプリント・トリエンナーレ (2002年4月28日～6月30日) と (2) 日韓中教授作品交流展 (2002年11月13日～12月8日) である。3年毎に開催される東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展は、オープン・コンペによって選ばれた世界の版画を一同に集めて展示・紹介している。日韓中教授作品交流展は、本学の交流関係にある東亜大学校 (韓国)、清華大学美術学院 (中国) と合同で教授作品、計105点を集めた展覧会で2002年度は本学が主催校となった。

本学の他大学との交流協定状況は、次のとおりである (表 I -30 参照)。

協定大学名	所在地	協定締結日	交流事業名	協定内容
清華大学 美術学院	No. 34 Dongsahuan Middle Road. Beijing, P.R. China 100020	1991.11.02  再締結 2001.06.03	王明旨院長来訪 (1999.10.08) 日韓中教授作品交流展 (1998.10.18～10.24) (2000.01.25～01.30) (2002.11.12～12.08)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流 ・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項
弘益大学校	72-1 Sangsu-dong, Mapo-ku, Seoul 121-791, Korea	1996.06.17  再締結 2001.07.16	弘益大創立50周年記念展 (1996.10.21～10.26) 多摩美術大学と弘益大学 校との学生交流に関する 覚書締結 (2003.12.16)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流 ・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項
東亜大学校	840, Hadan-dong2, Saha-ku, Pusan 604-714 Korea	1996.07.31  再締結 2001.07.31	日韓中教授作品交流展 (1998.10.18～10.24) (2000.01.25～01.30) (2002.11.12～12.08)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流 ・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項
ヘルシンキ美 術大学	Hmeentie 135C, FIN-00560 Helsinki,	2000.11.04	短期交換留学 毎年(09.01～12.31)	・教員の交流 ・共同研究 ・学生交流

#### IV. 教育研究

協定大学名	所在地	協定締結日	交流事業名	協定内容
	Finland			・美術に関する資料・情報の交換 ・その他両大学が 了解した事項

外国大学との交流協定状況（表 -30）

本学を訪問する外国の要人は、非常に多い。2000、2001年度は数件であったが、2002年度は13件、2003年度は22件であり、その訪問者数は年々増加の一途を辿っている。本委員会は、時間の許す限り、訪問者と接触し、本学についての知見を深めてもらうと同時に、本委員会のメンバーもまた、外国の諸大学が求めているものを理解しようと努めている。以下は、国際交流の記録である（表 I -31 参照）。

年月日	所属機関・職位	受入部署
2003.11.02	国立雲林科技大学 林聡明 校長	教務部
2003.10.31	シルパコーン大学 シティチャイ グラフィックアート学科長	版画
2003.10.29	グリフィス大学 ポール・ジョリー学長代理	国際交流委員会
2003.10.28	シルパコーン大学/多摩美術大学 絵画学科版画専攻交流展	版画
2003.10.16	ロッテルダム芸術アカデミー リチャード・アウエルケルク学長	国際交流委員会
2003.10.08	スタンフォード大学 ディレクター サラ・リトル・ターンブル先生	デザイン
2003.10.07	シドニー・カレッジ・オブ・ジ・アーツ ロン・ニューマン学長	国際交流委員会
2003.10.03	ロイヤル・カレッジ・オブ・アート テキスタイル主任教授 クレア・ジョンストン	生産デザイン(テキスタイル)
2003.10.03	ヘルシンキ美術大学 ユリアナ・レバント副学長夫妻 インテリア&プロダクトデザイン教授 ユリヨ・ウィヘルハイモ	国際交流委員会
2003.09.26	シルパコーン大学 タボーン副学長	版画
2003.09.25	ソウル芸術大学 教務課長兼文芸創作科教授 イ・グァンホ	国際交流委員会
2003.09.19	シンガポール共和国大使館 一等書記官(産業)陳威翔	総務部
2003.08.07	ラオス外務省 ソムサクート大臣閣下	美術館
2003.07.11	シドニー・カレッジ・オブ・ジ・アーツ ロン・ニューマン学長	国際交流委員会
2003.07.10	ASEAN 諸国大使閣下	美術館
2003.07.01	中央美術学院 許平副教授	国際交流委員会
2003.06.20	フンボルト大学	情報デザイン
2003.05.14	サウサンプトン大学 ウィンチェスター・スクール・オブ・アート 絵画学科長 ステファン・クーバー	国際交流委員会
2003.04.16	ソフィア国立美術アカデミー スヴェトザル・ベンチェフ助教授	国際交流委員会



#### IV. 教育研究

2003.03.29	中国美術学院 宋建明副院長	国際交流委員会
2003.03.18	中央美術学院 潘公凱院長 他 5 名	国際交流委員会
2003.01.27	王立メルボルン工科大学 マーレイ国際交流委員長	国際交流委員会
2002.12.13	清華大学美術学院	美術館
2002.12.13	東亜大学校芸術大学	美術館
2002.11.19	アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン リチャード・コシャレック学長	国際交流委員会
2002.11.15	サウサンプトン大学ウィンチェスター・スクール・オブ・アート テキスタイルデザイン学科長 ロブ・ハドルストン	国際交流委員会
2002.10.16	シルバコーン大学 シティチャイ教授	版画
2002.10.08	バルセロナ美術大学 アントニア・ピラー副学長	国際交流委員会
2002.10.07	グリフィス大学 ラッセル・クレイグ教授	国際交流委員会
2002.07.01	ヘルシンキ美術大学 タピオ・ユリ・ヴィカリ教授	国際交流委員会
2002.05.22	タリン芸術工業大学 機械工学デザイン ティート・ティーデマン助教授	国際交流委員会
2002.05.21	漢陽大学 学長・副学長・デザイン教授	国際交流委員会
2002.04.08	サウサンプトン大学ウィンチェスター・スクール・オブ・アート テキスタイルデザイン学科長 ロブ・ハドルストン	版画研究室
2002.01.22	清華大学美術学院 環境芸術学部長	国際交流委員会
2002.01.07	ヘルシンキ美術大学学生作品展(テキスタイル棟にて)	生産デザイン(テキスタイル)
2001.11.21	上海市教育委員会	総務部
2001.06.30	ジョー・ブライス氏(日本美術研究者)	国際交流委員会
2001.03.22	アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン リチャード・コシャレック学長	国際交流委員会
2000.12.21	清華大学学院 呂振華自動車工学部長以下 7 名	生産デザイン (プロダクト)
2000.11.24	サウサンプトン大学ウィンチェスター・スクール・オブ・アート テキスタイルデザイン学科長 ロブ・ハドルストン	生産デザイン (テキスタイル)
2000.11.04	フィンランド国立ヘルシンキ美術大学 ユリヨ ソタマ学長	国際交流委員会

国際交流の記録(表 -31)

本委員会は本学に留学する学部学生、大学院学生ならびに、研究生を積極的にサポートしている。本委員会は、学生部と共催で留学生のための懇談会その他を開いて、留学生が抱える諸問題の解決に取り組んでいる。2004年9月には本部棟内に「国際交流コーナー」を設け国際交流の充実に努めている。本学の留学生の在籍状況は以下のとおりである(表 I-32 参照)。

外国人留学生は、韓国、中国、台湾など東南アジアからの受入れが多い。受入れ態勢は各学科によって若干異なっているが、私費留学生のほかに、国費留学生として大学院、研究生への受入れも多い。特に本学の留学生の場合は、既に本国において制作等の経験があり、専門性を求めて入学を希望してくる者が多く学業成績も優秀である。

本学は制作を通して、学生同士、学生と指導教員との結びつきが強い校風を持っているた

#### IV. 教育研究

め、さまざまな国出身の外国人留学生についても、学生個々の領域に合わせた柔軟かつきめの細かい指導が可能である。

日本語の修得においてはそれなりに困難を感じているようであるが、周りの友人に助けられたり、留学生の個々の領域に合わせたきめ細かい指導などを通じて、国際交流の役割を果たしている。日本人学生や出身国の先輩留学生をチューターとして、サポート体制を検討している学科もある。

年度		韓国	台湾	中国	マレーシア	イギリス	イタリア	イスラエル	ドイツ	アメリカ	ポーランド	ラトビア	ポルトガル	フィリピン	ペルー	オーストラリア	合計	総合計
2000年度	学部生	28	10	2		1		1									42	
	大学院生	14	2	4					1								21	71
	研究生	5	0	1				1								1	8	
2001年度	学部生	29	8	2		1											40	
	大学院生	17	3	3				1	1								25	81
	研究生	10	0	3		1	1		1								16	
2002年度	学部生	26	10	3		1											40	
	大学院生	24	2	4		1	1	1	1								34	81
	研究生	6	0	1													7	
2003年度	学部生	27	7	5	1												40	
	大学院生	21	2	5		1	1	1	1								32	85
	研究生	5	0	2						1	1	1	1	1	1		13	

留学生在籍状況(表 -32)

なお、本学は毎年、姉妹校であるヘルシンキ美術大学に学生を1名送り出しているが、本委員会はその選考責任の一旦を担っている。将来は、本学と姉妹校関係にある中国や韓国、あるいはタイなどの大学に学生を積極的に送りこみたいと願っており、そのための準備の一環ともなる「中国語」のコースや「韓国語」のコースが開講されている。

最後に、本学は毎年海外研修を希望する教師を海外に送り出している(表 I -33 参照)。

## IV. 教育研究

研修期間	研修先	学部・学科	氏名	研究課題
2000.05.08～ 2000.08.06	アメリカ ポルトガル スペイン 他9カ国	版画	森野真弓	アメリカ、ヨーロッパにおける版画の実情調査と表現研究
2000.06.09～ 2000.07.23	スペイン イタリア	造形	松下宣廉	スペイン絵画及びイタリア美術の研究
2000.07.15～ 2000.09.16	イギリス フランス スペイン 他7カ国	生産デザイン (プロダクト)	和田達也	ユニバーサルデザインの研究。欧州におけるユニバーサルデザインの実態と調査研究及び欧州大学におけるプロダクトデザインの教育の調査
2000.09.15～ 2000.11.16	ドイツ スイス フランス	グラフィックデザイン	草深幸司	構成主義ポスターの研究。1920年代からBauhausを起点にして発展してきた機能的・即物的・合理的グラフィックデザインの技法・思想を現代的観点から考察。
2001.06.21～ 2001.08.18	台湾	共通教育 (美術学部)	清田義英	台湾の仏教・宗教制度の研究
2001.06.24～ 2001.10.18	ロシア スウェーデン デンマーク 他10カ国	環境デザイン	岸本章	伝統的な環境の保存と再生に関する調査研究
2001.07.25～ 2001.09.20	イギリス スウェーデン ドイツ 他2カ国	映像演劇	檜山茂雄	映画文化の保存・展示とホログラフィ研究
2001.07.29～ 2001.09.21	ドイツ フランス 韓国	工芸	伊藤 孚	ガラス造形
2002.07.11～ 2003.03.31	ドイツ フランス イギリス 他2カ国	芸術	建島 哲	第二次大戦後の美術の比較美術史的研究
2002.07.15～ 2003.03.31	イギリス カナダ フランス 他5カ国	情報デザイン	港 千尋	19世紀民族学写真とそのデジタル化の研究
2002.07.15～ 2003.09.30	フランス イタリア ドイツ 他3カ国	共通教育 (造形表現学部)	小穴晶子	フランス18世紀の音楽美学
2002.09.02～ 2003.02.28	アメリカ ドイツ イギリス	生産デザイン (プロダクト)	安次富隆	最先端プロダクトデザインスキルの調査研究
2003.06.01～ 2004.03.31	アメリカ イタリア ドイツ 他2カ国	共通教育 (美術学部)	高橋周平	写真化・映像化された都市景観に対する考察
2003.07.22～ 2003.08.30	アメリカ	デザイン	猪股裕一	日本と米国デジタルデザイン教育の調査研究
2003.07.24～ 2003.10.03	イタリア ドイツ	工芸	池本一三	ガラス工芸におけるエナメル絵付け技法修得

海外研修派遣(表 -33)

## 5. 共同研究

### ① 目的

本学の教授、助教授、専任講師及び助手が共同で行う学術研究を助成することを目的とする。

毎年 11 月に募集し、選考により共同研究費を交付する。

研究者の構成は、学内外の研究者 4 人以上とし、多分野にまたがる専門領域とする。

### ② 採択基準、採択の手続き

共同研究費の予算額は、毎年度始めに理事会が定める。

共同研究費の交付の申請をしようとする者は、多摩美術大学共同研究費交付願により申請しなければならない。

共同研究費交付願に基づき申請のあった者のうちから、選考委員会により共同研究者と交付額を決定する。

共同研究費の採択にあたっては、各共同研究申請者の研究の趣旨、目的、研究計画を慎重に検討する。選考結果は、必ず年度当初の学科長会、教授会に照会することとする。

### ③ 研究成果の公表

研究課題名：調査・研究

#### A) 研究成果の報告について

イ. 報告時期：年月日

ロ. 報告先：教務部学務課、造形表現学部事務部

ハ. 報告様式：共同研究費研究成果報告の概要（保管部局、管理形態）

ニ. 報告をしていない場合は、その理由：

- ・研究成果物の作成の有無：有・無
- ・研究成果物の様式：報告書冊子
- ・研究成果物の保管・管理
- ・研究成果物を作成していない場合は、その理由：

#### B) 研究成果の公表について

イ. 公表の手段（例；学術誌名、学会名等）：

ロ. 公表時期：年月日

ハ. 公表していない場合は、その理由及び現在の状況：

ニ. ホームページの掲載状況についてみると、研究課題ごとに掲載内容にかなりの差があるのでホームページをもって公表とするのは無理な点がある。

ホ. 限定された部門、機関に配布される研究紀要集録は公表とはならない。

#### C) 研究成果の活用について（例えば、国会図書館への提供、特許申請、論文への引用、その他の活用があった場合は、その内容を具体的に記入すること。また、確認できる資料も添付することとする。）

イ. 研究者本人：

ロ. 他の研究者等：

活用については、共同研究の成果の具体的活用（教科書等）がなされているものについて記載すること。研究紀要集録は活用とはならない。

連名による論文の発表など、各研究者が共同で実施した内容を具体的に記入すること（確認できる資料も添付することとする）。

### ④ 課題

研究紀要の収録については、収録時期、紀要に代わる発表方法等に対する認識不足がある。ただし、美術大学という特性上、特に発表方法については、やむを得ないところもある。それらを補うため、成果報告をホームページで公開したり、成果報告が未収のものについては、一覧をホームページ上で公開し、問合せに応じられるような措置をとって来た。

成果報告の時期については、計画倒れになったものを除くと、紀要に代わるものに、発表等をすでに行っているものがある。共同研究の成果がより社会に還元され、納税者の理解が得られるような形で、取り組んでいきたい。

## § おわりに §

教育・研究グループが取り扱う事項は、各研究室 17 学科（専攻）、全学的教育方針の決定方法、入学試験（特別入試）の実施状況、国際交流、研究活動など、多岐に亘った。そのため網羅的にならざるを得なかった。

これら諸問題について、各セクションの垣根を越え議論を深め、問題解決をはかっていくことは、常に求められる課題である。今回の自己点検・評価活動においては、議論を深め問題解決を提示するまでに至らなかったが、その端緒となったという意味で有意義であったと言えるだろう。

## §はじめに§

これまで教職員の協力を得て、積極的に学生に直結する教育環境の充実、向上に取り組んで来た。今回、自己点検・評価活動として、資金的支援、学生生活支援、保健、学生相談での支援項目のデータを作成した。本学は学生のニーズ、期待に充分応えきれているか、現在おかれている現状を把握し、学内外の教育環境をより充実し、向上させるために何が必要か洞察し、まず認識し、学生が主役の大学とすべく取り組みを検証した。

## §現状報告・評価§

### <目 標>

少子高齢化とグローバル化の時代を迎え、産業構造や雇用形態なども大きく変化している現在、学生がより能力を発揮でき、より満足のできる職業選択やより充実した学生生活が送れるように支援していくことは、今日の大学に課せられた使命でもある。そして、従来にもましてきめ細かい多様な指導が必要とされている。

本学としては、できるだけ多くの有為な人材を育成して社会に送り出すために、以下の4つを目標とする「学生支援の目標」を掲げていきたい。

学生生活の充実向上に向け、修学・研究に専念し得る健全な学生生活の環境を整えることへの支援

将来の目的意識を明確に持ち、社会的・経済的に自立することへの支援

大学教育のもつ社会的使命を、実社会で遺憾なく発揮し役立てることへの支援

広く社会や文化の発展に貢献し得る人材を育成することへの支援

である。

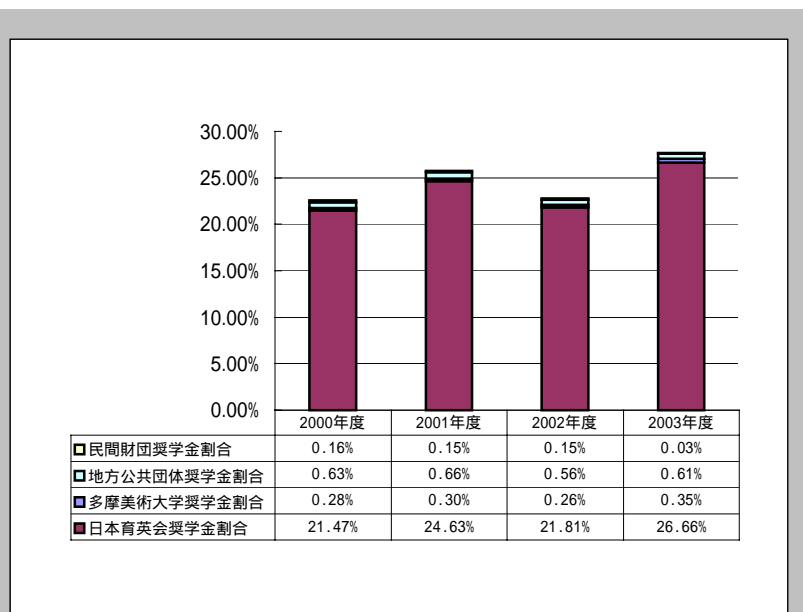
さらに、本学の持つ特性や独自性を活かすことに加え、社会の変化や新たな要請に対応し得る柔軟な組織を構築していく必要がある。ここに、本学オリジナルの支援体制が求められる由縁がある。

学生生活とは、その限られた時間の中でさまざまなものと遭遇しながら、おおよその人生設計と将来の目標を確立させる期間でもある。社会の入口に立つ重要な時期に、これらの支援を通じて、自らの学生生活が豊かで実りあるものとなるように、また将来へ向けての人生観や職業観を醸成することができるように“大学として手を差し伸べていくこと”が、これからの本学に課せられた課題であるとも言えよう。

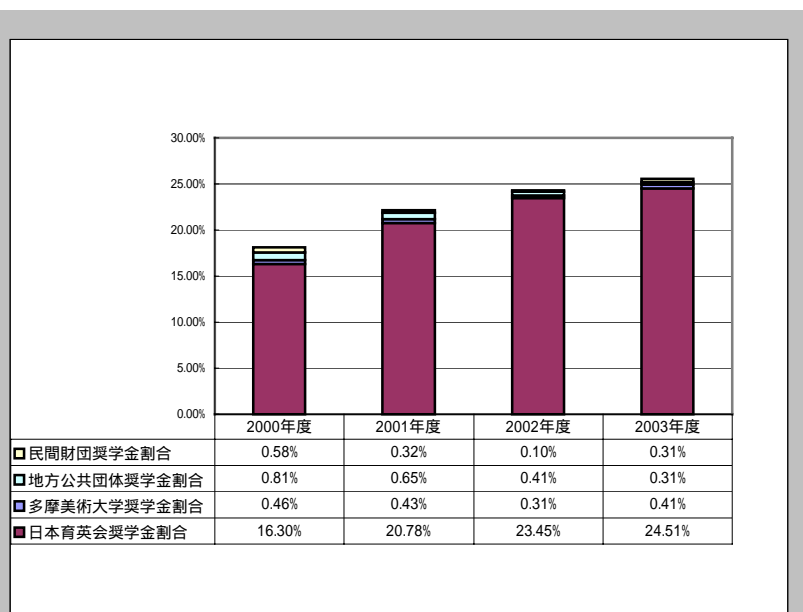
## 1. 資金的支援（奨学金）

### < 現状報告・評価 >

奨学金の受給状況は、以下の通りである。



奨学金受給率（美術学部）( 図 - 1 )



奨学金受給率（造形表現学部学部）( 図 - 2 )

学部	美術学部				造形表現学部			
	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
多摩美術大学奨学金	9	10	9	12	4	4	3	4
日本育英会奨学金	678	825	741	919	141	192	227	239
地方公共団体奨学金	20	22	19	21	7	6	4	3
民間財団奨学金	5	5	5	1	5	3	1	3
全奨学金受給者数	712	862	774	953	157	205	235	249
在籍者数（除く留学生）	3158	3349	3398	3447	865	924	968	975
奨学金受給率	22.55%	25.74%	22.78%	27.65%	18.15%	22.19%	24.28%	25.54%
大学院	大学院博士前期				大学院博士後期			
	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
多摩美術大学奨学金	3	5	6	5		0	1	0
日本育英会奨学金	73	66	51	76		2	3	1
地方公共団体奨学金	0	0	0	0		0	0	0
民間財団奨学金	3	4	4	4		0	0	0
全奨学金受給者数	79	75	61	85		2	4	1
在籍者数（除く留学生）	185	183	191	212		2	3	3
奨学金受給率	42.70%	40.98%	31.94%	40.09%		100.00%	133.33%	33.33%

奨学金受給者内訳（表 -1）

### 多摩美術大学奨学金

出願資格は本学2年生以上の学生であること。学業成績、人物とも優秀である者。経済的理由で学業の継続が困難な者。学部、大学院あわせて20名を毎年度始めに募集する。給付額は年間20万円で、年2回に分けて給付。当該年度1年限りとするが、次年度以降の再出願を妨げない。

多摩美術大学奨学金については、2004年度より大幅に制度が変更となっている（募集人数100名、年間40万円）。

### 日本育英会奨学金

国が行う奨学金制度で、現在本学でもっとも多くこの制度を利用している。大学は出願者の学業成績、家計状況、人物、健康などについて審査を行い、選考のうえ日本育英会（2004年度より「日本学生支援機構」に組織変更）に推薦している。また、高等学校在籍中に在籍高校を通じて出願し、推薦を受け、大学進学後に日本育英会の奨学金貸与を受ける方法（予約採用制度）もある。

### 地方自治体奨学金

学生の出身地の都道府県、区市町村が行う奨学金制度。本人または保証人が対象地域に在住していることが出願の必須条件になる。大学に募集用紙が届く場合は、掲示によっ



て学生へ周知している。

#### 民間財団奨学金

企業や美術関係者による奨学金制度がある。大学に募集要項が届く場合は、掲示によって学生に周知している。手続き上、大学によるとりまとめが必要な場合は、学生課が窓口になることが多い。

#### < 課 題 >

国内の経済状態も芳しくないことから、学生を取り巻く資金的状況は楽観できない。貴重な制作時間を、学費や生活費を手に入れるためのアルバイトで費やすことがないよう、今後も大学として、より資金が必要な学生に奨学金が行き渡る努力を怠ってはならない。

また、日本育英会をはじめとして各奨学金の採用者が増加する傾向にある。採用された奨学生に対して、学業や学費の納入状況を把握し、奨学生としてふさわしい生活を送るよう指導することも重要である。

また、多摩美術大学奨学金は、2004年度より採用枠、金額ともに増加した。しかし大学として給付型奨学金の充実をはかっていきたい。

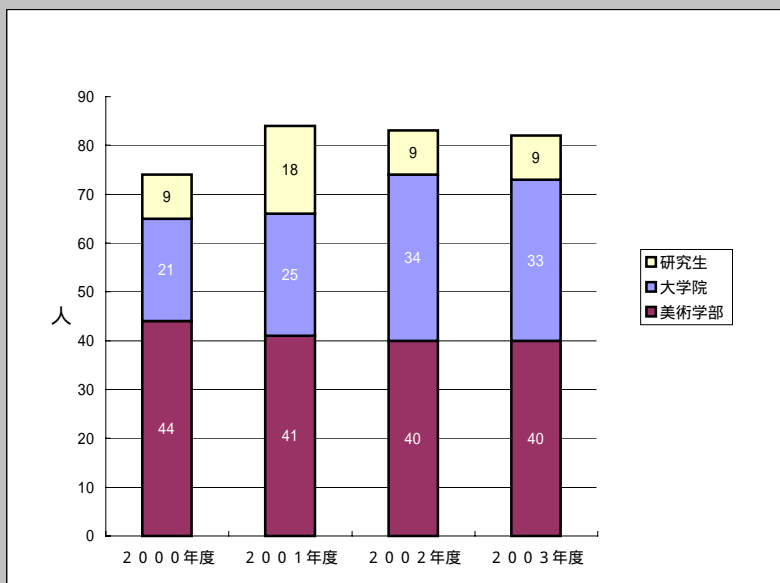
奨学金とあわせて、良質なアルバイトの確保も今後の課題となる。現在は学外からのアルバイト求人を学生課内で掲示しているが、学業に支障のないアルバイト（学内施設でのアルバイト等）についても学生に斡旋し、経済的にも安心した大学生活が送れるようにすることも学生支援の一つではないだろうか。

## 2 . 留学生支援について

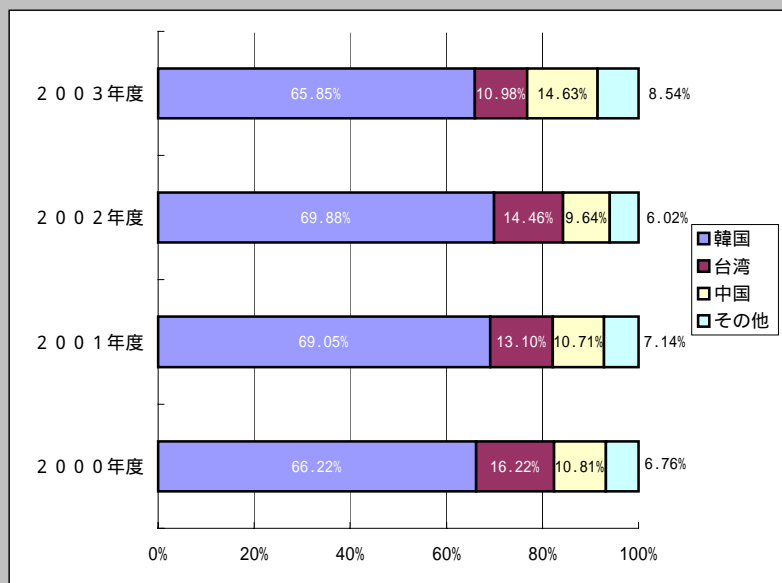
#### < 現状報告・評価 >

本学の留学生数について、2001年度に大幅に増加したが、その後は大きな変化が見られない。2001年度からの人数増は、研究生としての外国人留学生の受け入れ増加、その後大学院博士後期課程（博士課程）の開設等による（図 -3 参照）。

外国人留学生の奨学金については、応募資格が細かく定められている。また、奨学金等の経済的支援だけでなく、住宅機関保証や医療費補助といった支援も必要になり、例年多くの学生がその制度を利用している。



外国人留学生数の推移 (図 -3)



外国人留学生国籍割合 (図 -4)

2000-2003 外国人留学生データ	2000 年度					2001 年度				
	韓国	台湾	中国	他	合計	韓国	台湾	中国	他	合計
<b>在籍数(5月1日現在)</b>	<b>49</b>	<b>12</b>	<b>8</b>	<b>5</b>	<b>74</b>	<b>58</b>	<b>11</b>	<b>9</b>	<b>6</b>	<b>84</b>
(内訳) 美術学部	30	10	2	2	44	29	8	2	2	41
大学院	14	2	4	1	21	17	3	3	2	25
研究生	5	0	2	2	9	12	0	4	2	18
<b>(以下内数)</b>										
国費留学生(5月1日現在)	1	0	1	2	4	0	0	1	3	4
外国政府・交換留学生(5月1日現在)	0	0	0	1	1	0	0	0	1	1
私費留学生(5月1日現在)	48	12	7	2	69	58	11	8	2	79
国費留学生国内採用採用者	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
私費留学生学習奨励費採用者	8	3	1	2	14	13	3	1	1	18
私費留学生授業料減免採用者	40	12	5	2	59	41	11	4	1	57
地方自治体奨学金採用者	5	2	0	0	7	5	1	1	0	7
民間財団・その他奨学金採用者	10	3	0	1	14	9	0	0	1	10
住居機関保証利用者	3	0	0	0	3	2	0	0	0	2
医療費補助利用者申請件数	5	10	11	5	31	10	8	6	6	30
	2002 年度					2003 年度				
	韓国	台湾	中国	他	合計	韓国	台湾	中国	他	合計
<b>在籍数(5月1日現在)</b>	<b>58</b>	<b>12</b>	<b>8</b>	<b>5</b>	<b>83</b>	<b>54</b>	<b>9</b>	<b>12</b>	<b>7</b>	<b>82</b>
(内訳) 美術学部	26	10	3	1	40	27	7	5	1	40
大学院	24	2	4	4	34	22	2	5	4	33
研究生	8	0	1	0	9	5	0	2	2	9
<b>(以下内数)</b>										
国費留学生(5月1日現在)	0	0	1	4	5	1	0	1	6	8
外国政府・交換留学生(5月1日現在)	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
私費留学生(5月1日現在)	58	12	7	1	78	53	9	11	1	74
国費留学生国内採用採用者	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
私費留学生学習奨励費採用者	14	2	1	1	18	9	2	2	0	13
私費留学生授業料減免採用者	49	12	6	1	68	45	8	9	1	63
地方自治体奨学金採用者	1	2	0	0	3	2	0	0	0	2
民間財団・その他奨学金採用者	5	0	1	1	7	6	2	0	0	8
住居機関保証利用者	7	0	0	2	9	13	0	1	2	16
医療費補助利用者申請件数	13	12	2	11	38	16	6	4	8	34

外国人留学生詳細データ(表 -2)

< 課 題 >

留学生数の増加に伴い、様々な経歴を持つ留学生が入学するようになって来た。今までは、日本語学習のために、日本で何年か生活した後で入学する学生がほとんどであったが、現在では出身国で日本語を学習し、日本の高等学校レベルの学校を卒業してすぐに入学する学生も増えて来ている。今後は、今まで力を入れてきた奨学金等の経済的支援だけでなく、生活面での支援についても力を入れる必要がある。

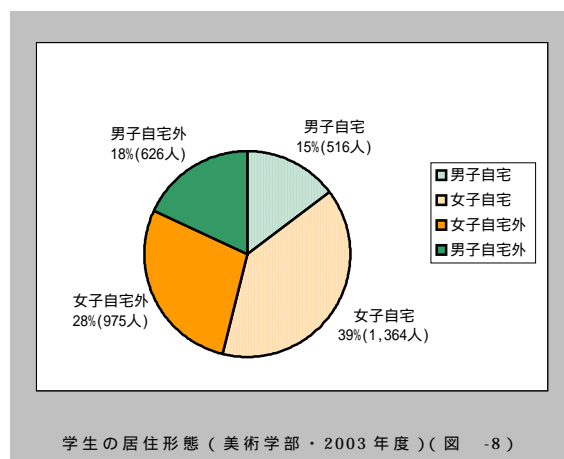
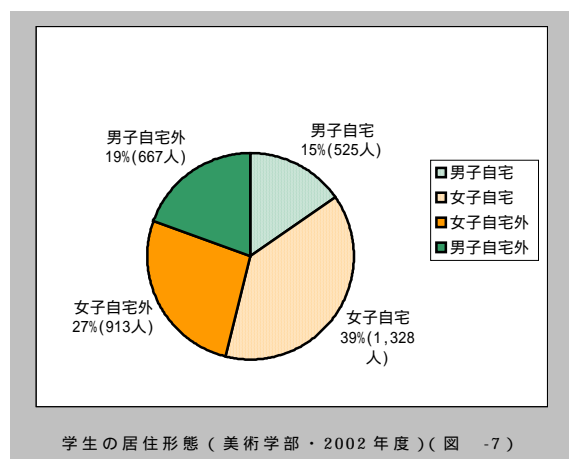
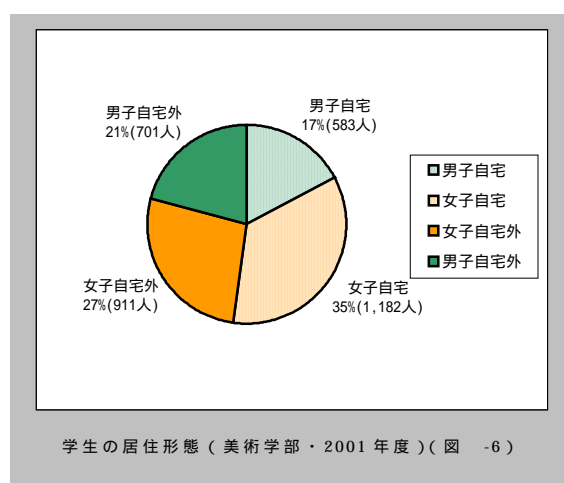
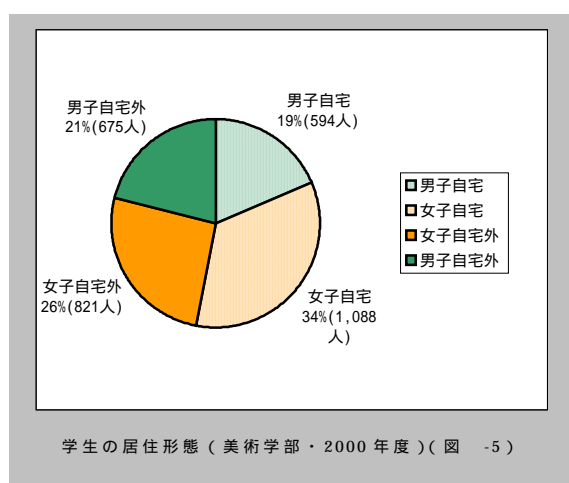
現在、留学生の在留資格に関する入国管理局への申請については、留学生個人が行っているが、2004年度からは「申請取次」(大学担当者が留学生のからの申請を審査し、とりまとめ、入国管理局に留学生に代わって提出すること)を行う準備を進めている。

卒業後の進路についても、大学が積極的に関わる必要がある。日本での就職を希望する留学生も増えており、就職支援についても、留学生とより緊密なコミュニケーションをとり、留学生が必要とする情報をもつ外部団体を紹介するといった支援も行いたい。

3 . 学生数の推移と居住形態の変化について

< 現状報告・評価 >

美術学部では、毎年女子学生数が増加している。全学生数に対する女子学生の割合も7割近くとなっている。女子学生の自宅通学率が高いことから、自宅通学学生の割合が増える傾向にある。

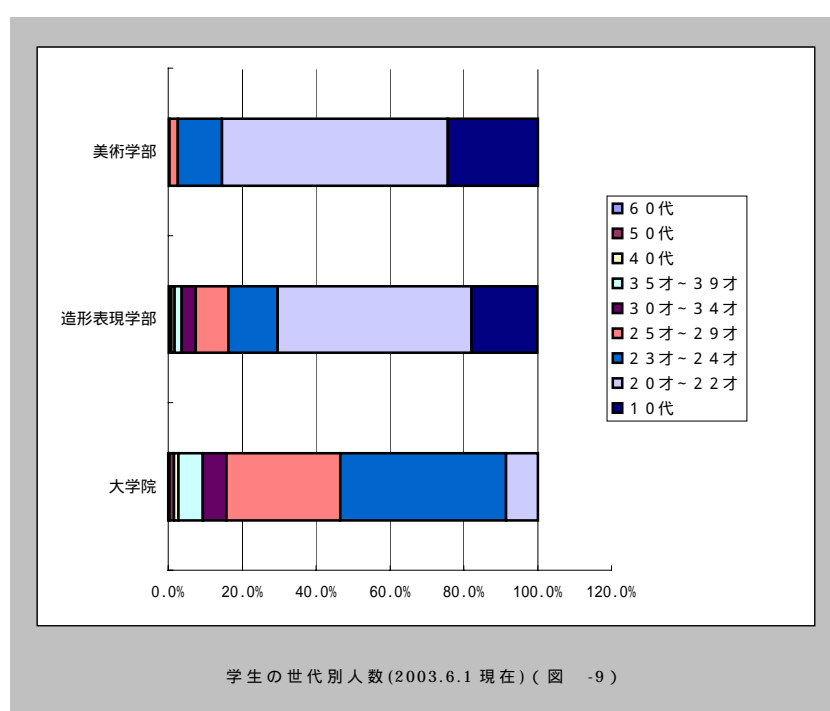


自宅外通学を希望する新生への住居紹介は、八王子キャンパスのみで行っている。2002年度入学生対象の住居紹介（2002年3月実施）までは、学生課が紹介する物件のみで行っていたが、2003年度入学生対象の住居紹介からは不動産業者（2社）と共同で住居紹介を行っている。

不動産業者へ依頼した理由は、大学付近から橋本駅方面をつなぐ久保ヶ谷戸トンネルの開通に伴い橋本駅方面へのアクセスが良くなり、学生の住居の希望も橋本方面が中心となって来たからである。大学での紹介物件の中心は大学近辺や八王子方面であり、学生のニーズに沿うことができなくなって来た。また、学生により多くの物件を比較検討してもらうためには、不動産業者に依頼した方が効率的である。

この2年間実施した業者紹介と、従来行ってきた大学紹介のみのどちらの方法が本学に適しているかは、もう少し実績を上げてからでないと比較はできない。

近年、学生の年齢分布も幅広くなっている。今後、入試制度の多様化等に伴い、高等学校を卒業して何年かの内に進学する学生だけでなく、一旦社会にでてから進学を希望する学生も増えて来ることが予想される。参考までに、2003年度時点の学生の年代別人数について掲載する。



### < 課 題 >

大学として、新生に安全で快適な居住空間の情報を提供することは、今後も必要であろう。業者選定の方法や、実施時期について検討を重ねながら、より良い住居紹介を実施していきたい。また、多様化する学生に対応できるような学生支援の方法を検討する必要がある。

## 4 . 課外活動

### < 現状報告・評価 >

#### クラブ・サークルについて

本学のクラブ・サークル団体は、八王子キャンパスのみに設置されている。

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
(公認) 体育連合会	13	13	13	13
(公認) 文化連合会	18	19	19	19
未公認団体	7	7	8	5
合計団体数	38	39	40	37

クラブ・サークル団体数の推移(表 -3)

クラブ・サークル数については、大きな変化はない。未公認団体については、いくつかの団体が継続性を持って活動したのちにクラブ・サークルへ移行しているが、ほとんどが1年限りで活動が終わってしまうため、継続性のない団体が多い。

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
(公認) 体育連合会	238	278	282	356
(公認) 文化連合会	602	654	548	565
未公認団体	88	62	119	68
合計人数	928	994	949	989
加入率 (合計人数/5月1日 付在籍学生数)	29.0%	29.3%	27.6%	28.4%

クラブ・サークル加入数・率の推移(種別)(表 -4)

クラブ・サークルへの加入学生についても、例年在籍者の約3割と、大きな変化はない。また、体育系クラブ・サークル、芸術祭実行委員会の事故防止意識向上のため、1991年度より「救急法講習会」を開催している。日本赤十字社の救急法講習会の本学での開催は、2003年度で12回を数える。

開催年度	講習会	日程	受講生	修了者	合格者
2000年度	日本赤十字社 救急法救急員養成講習会	7/17~19	25名	24名	24名
2001年度	東京消防庁 応急手当(上級救命)講習会	7/27	20名		
2002年度	日本赤十字社 救急法救急員養成講習会	7/22~24	38名	35名	34名
2003年度	日本赤十字社 救急法救急員養成講習会	9/2~4	42名	34名	34名

救急法講習会の開催状況(表 -5)

ボランティア活動について

・学外ボランティア

近年、学生課が窓口となって、学生が学外でボランティアを実施する機会が増えている。2003年度については、下記2カ所において、学生課が窓口となって、学生がボランティア活動を行った。

「精華祭」への参加（2003年10月25日 9:30～15:30開催）

知的障害者厚生施設「精華寮」(八王子市鎌水)の文化祭に本学より13名の学生が参加した(準備・運営協力2名、フラメンコ部(フラメンコ上演)6名、ジャンベ民族楽器部(楽器演奏)5名)。

なお、精華寮の方々には、11月の本学芸術祭の見学に来ていただき、交流が続いている。

「鎌水地域フェスタ」への参加（2003年11月8日 10:00～14:00開催）



(第二回鎌水地域フェスタでのフラメンコ部の公演風景)

地域交流と親睦、青少年の社会参加・貢献を目的とする第2回「鎌水地域フェスタ」に参加。八王子市立鎌水中学校を会場に、鎌水地域にある幼稚園、小学校、中学校、自治会等が参加する地域最大のイベントである。本学からの参加学生は、実行委員会との2ヶ月の打ち合わせを経て彫刻学科より作品展示(石彫、約10名参加)ならびに学生のクラブ等が出し物を披露した(3団体、38名:フラメンコ部15名、ジャンベ民族楽器部8名、和太鼓研究会15名)。

・学内ボランティア

1998年度より、学生課では、聴覚障害を持つ学生の授業・オリエンテーションに対して、ノートテイクボランティア等を派遣している。2000年度からの実施状況は以下の通りである。

	対象学生数	ノートテイク人数
2000年度	3	2
2001年度	3	3
2002年度	2	3
2003年度	1	7

ノートテイクボランティア実施状況(表 -6)

ノートテイク登録者数が年々増えているのは、前年度ノートテイクを行った学生が翌年度も継続してテイクを行うケースが多いことによる。

学生ボランティアの募集については、学内へのポスター掲示や、チラシの配布を行っている。ノートイクを利用する聴覚障害を持つ学生が、自分の友人を連れてくるケースもある。

< 課 題 >

近年の他大学における学生の自主的クラブ・サークル活動の様子を見ても、活性化している大学は国公立あわせて12.3パーセントと大変少ない。(「大学における学生生活の充実方策について」2000年6月14日文部省高等教育局) 本学においても、関連施設の充実をはかり、クラブ・サークルのさらなる発展を支援する必要がある。大学の支援体制についても、どのように取り組んでいくのか考えなければならない。

ボランティア活動については、大学としてその活動の基盤づくりをしなくてはならない。学生のボランティア活動をどのように支援していくのか、大学の姿勢を決めなくてはならない。

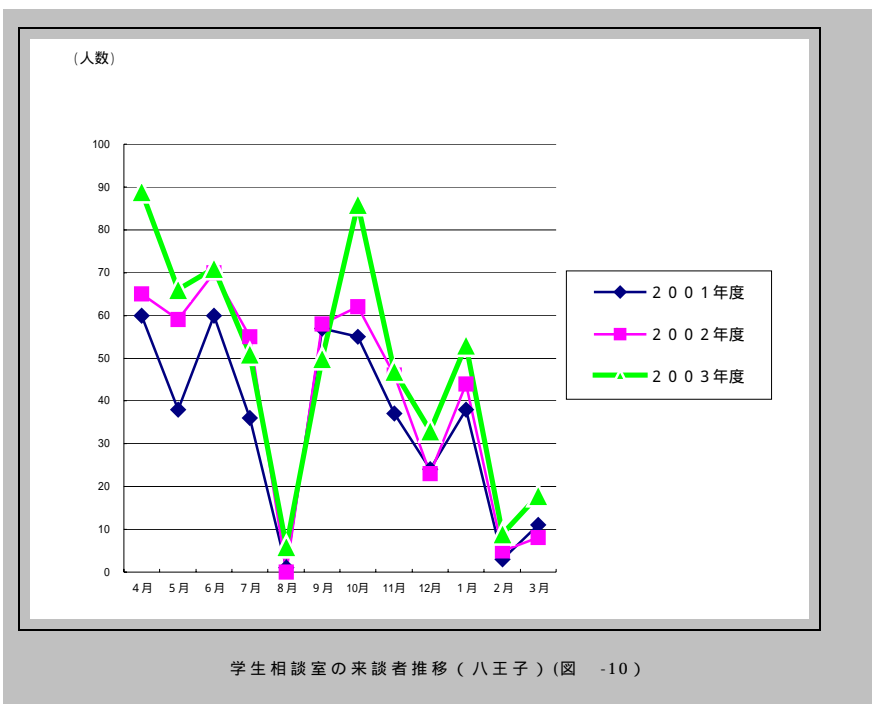
今後、現代社会に貢献する学生を育成していくためにも、地域との連携を視野に入れた学生の自主的行動を支援することが必要である。

5 . 学生相談室

< 現状報告・評価 >

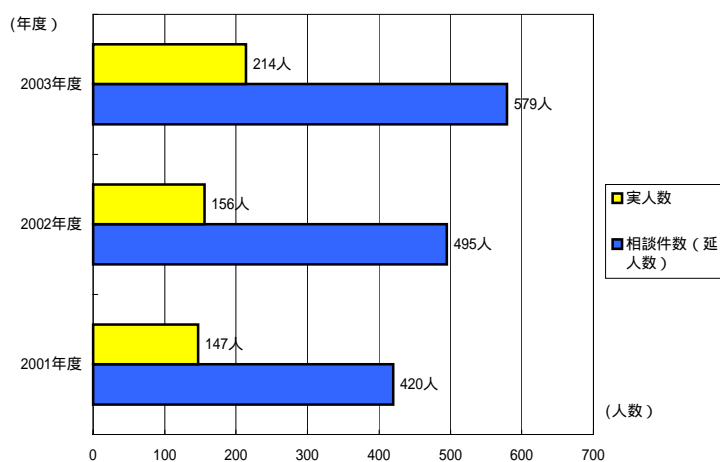
学生相談室は、大学教育の一環として学生個人が当面する諸種の問題について相談に応じ、助言指導をし、心身保健その他における問題の解決のため援助、指導を行い、学生生活の充実向上に協力することを目的として、2001年4月に開設された。

開設から2003年度までの八王子キャンパス学生相談室の利用状況については、以下の通りである。



4月に相談件数が増えているのは、新入生からの相談が増加することによる。また、学生相談室で休学や退学に関する相談も受け付けているため、1月に相談件数が増加している。

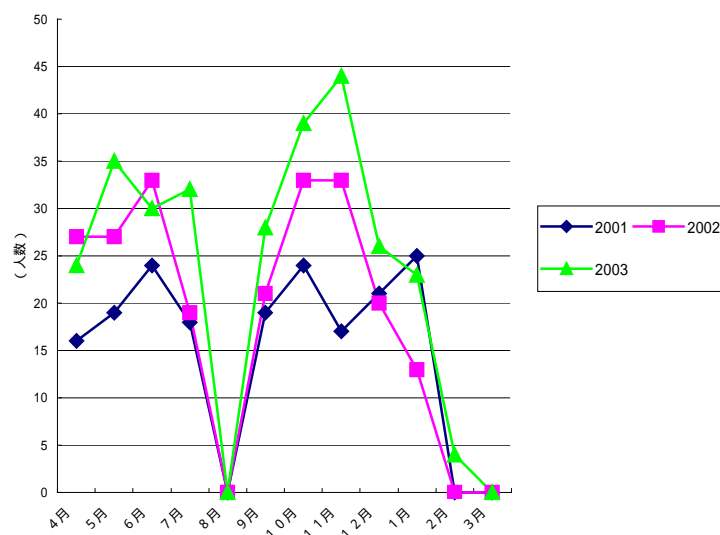




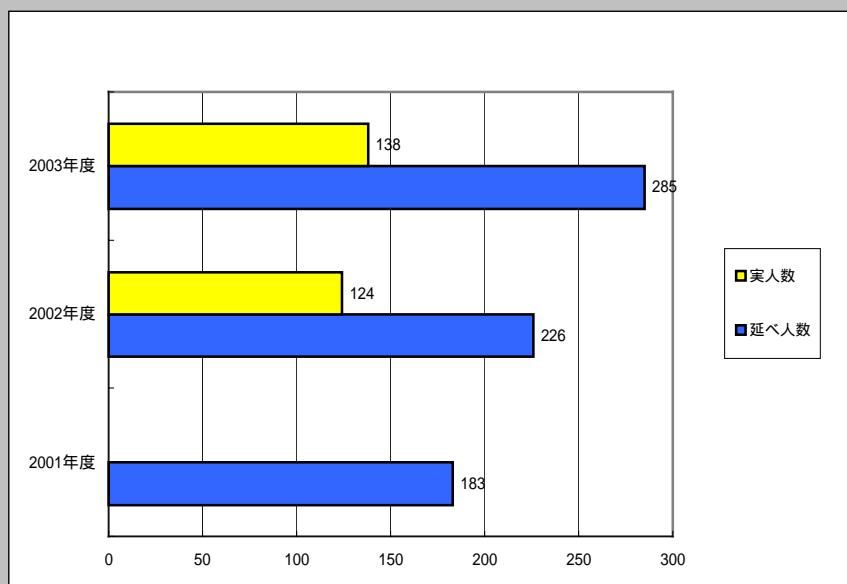
相談件数 (延べ人数) と年間実人数・八王子 (図 -11)

毎年学生相談室の利用は増加している。2001年度に比べて、2003年度は相談件数で約 1.4 倍、利用実人数で約 1.5 倍となっている。

上野毛キャンパス学生相談室の利用状況は、以下の通りである。



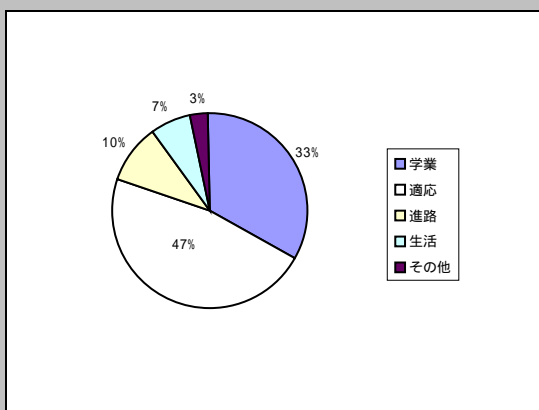
学生相談室の来談者推移 (上野毛) (図 -12)



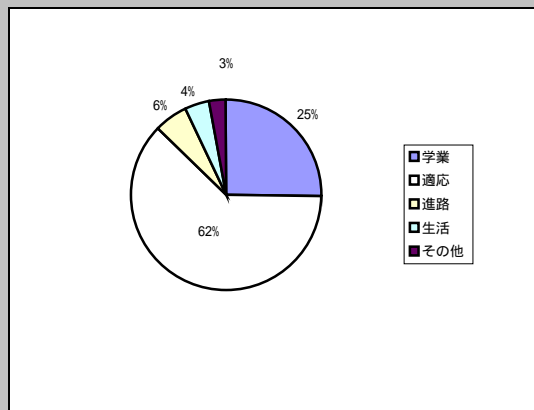
相談件数（遅べ人数）と年間実人数・上野毛(図 -13)

2001年度については、実人数のデータがないため非表示

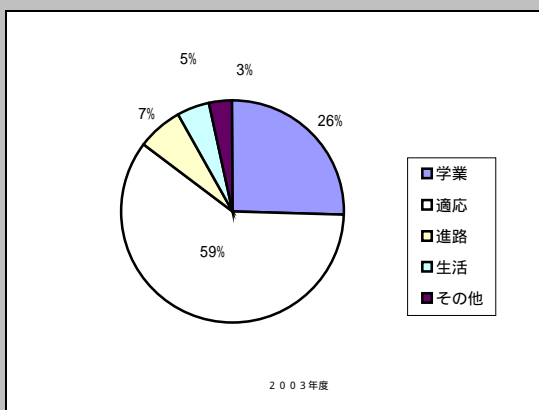
・相談内容構成率（八王子キャンパス）



相談内容構成率（2001年度八王子）(図 -14)



相談内容構成率（2002年度八王子）(図 -15)



相談内容構成率（2003年度八王子）(図 -16)

学業：履修、学業、退学、休学、転部、転学科  
 適応：精神衛生、心理・性格、対人関係、クラブ活動、  
 学生生活、サロン  
 進路：進路、就職、留学  
 生活：法律、家庭、家族、生活、経済、アルバイト  
 その他：コンサルテーション、その他

学生相談室で受け付ける相談内容は、上記の通り多岐に渡っていることがわかる。

学生相談室では教職員対象の学内研修として、年1度の研修会を行っている。学生相談員だけでなく、実際に学生と接する機会の多い研究室の助手・副手や、教務課職員等の参加もある。

### 教職員対象学内研修

2000年3月6日 「学生相談の基本について」

講師 菅沼 賢治 氏 千葉商科大学専任カウンセラー

参加者 教職員 19名

2001年10月3日 「来談学生の傾向と事例検討」

講師 苫米地 憲昭 氏 国際基督教大学 カウンセリングセンター長 専任カウンセラー

参加者 教職員 20名

2002年10月16日 「事例検討」

講師 駒込 勝利 氏 山梨英和大学教授 臨床心理士 大学カウンセラー

参加者 教職員 25名

2003年10月22日 「学内の連携による学生援助」

講師 伊集院 清一 氏 本学教授 精神科医 臨床心理士

参加者 教職員 約40名

### < 課 題 >

学生相談室への来室方法としては、学生の自発的な相談を待つことも重要であるが、実際に学生と接する機会の多い研究室からの情報を得て、学生相談での学生支援につなげることも必要になる。より一層研究室との連携が重要になる。

今後も多様な学生が入学してくることを鑑みると、大学カウンセラーの果たす役割は増加することが考えられる。

なお、現在学生相談室では年報の発行を予定している。利用状況の詳細については、年報の発行を待ちたい。

## 6 . 保健室

### < 現状報告・評価 >

例年 4 月に実施する健康診断の受診率については、毎年 90% 程度の学生が受診している。

	2000 年度		2001 年度		2002 年度		2003 年度	
	受診人数	受診率	受診人数	受診率	受診人数	受診率	受診人数	受診率
美術学部 1 年生	837	94%	861	98%	856	99%	859	98%
美術学部 2 年生	812	93%	809	91%	819	95%	844	97%
美術学部 3 年生	755	93%	783	94%	808	93%	830	96%
美術学部 4 年生	624	93%	747	93%	794	96%	822	96%
造形表現学部 1 年生	222	88%	232	92%	205	86%	228	93%
造形表現学部 2 年生	173	75%	191	78%	206	80%	181	80%
造形表現学部 3 年生	130	67%	169	76%	189	81%	184	73%
造形表現学部 4 年生	152	84%	154	80%	183	81%	210	85%
大学院生	193	92%	192	89%	240	95%	240	97%
研究生	17	77%	23	82%	17	94%	17	100%
合 計	3,915	86%	4,161	87%	4,327	90%	4,425	92%

健康診断の受診状況 (表 -7)

大学の正規の授業や、公認の課外活動（教育研究活動）中に生じた急激かつ偶然な外来の事故によって身体に傷害を被った場合に申請できる学生教育研究災害傷害保険(学研災)については、例年同じ時期に申請件数が増える傾向にある。事務手続きに関しては、学生課ならびに造形表現学部事務部において取り扱っている。

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
八王子キャンパス												
2000 年度	0	0	3	0	0	0	3	2	0	0	0	0
2001 年度	2	1	4	0	1	0	2	1	3	1	0	0
2002 年度	2	0	4	1	0	1	1	1	2	0	0	0
2003 年度	2	0	4	0	0	2	3	3	2	1	1	0
上野毛キャンパス												
2000 年度	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2001 年度	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	1	0
2002 年度	0	1	0	1	0	0	1	1	1	0	0	0
2003 年度	2	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	0

学研災保険適用者数 (表 -8)

< 課 題 >

保健室の業務の主となるのが、学生健康診断ならびにその事後指導である。健康診断受診指導については、学内での周知も徐々にはかれ、受診率も高い。学業を維持していくための健康指導と、工具の使用等に伴う制作におけるケガの防止策を保健室から発信していくことが今後の課題となる。また、保健室利用状況についても八王子・上野毛の両キャンパス共通の条件でデータをそろえ、検討する必要がある。

八王子キャンパスについては、留学生に対する医療費補助申請の業務も、今後留学生が増加することでさらに負担が増える。今後、大学規模の増大や、学生の多様化に対応するためにも、保健室のスタッフ数の増加についても視野に入れる必要がある。

7. 進路選択への指導について

進路・就職指導とは、学生ひとりひとりの希望とその能力や適性に応じた進路や職業を選択させるための「教育と指導」である。そして進路・就職指導を進めるには、「カウンセリング」が重要な役割を果たしている。

< 現状報告・評価 >

集団的學生支援の対策（学生全体への支援）

\* 各種ガイダンスの概要（延べ実施回数）

職業指導の一環として、毎年10月以降に「進路・就職のためのガイダンス」を実施。内容は、進路全般から就職に特化したものまで多岐にわたっている。

また、学科別にも行われ、各専攻学科に応じたきめ細かい指導により対応している。

ガイダンス・講座		2001年度		2002年度		2003年度	
		八王子	上野毛	八王子	上野毛	八王子	上野毛
10月	進路・就職ガイダンス	3	0	3	0	4	2
	就職登録説明会	0	0	0	0	2	2
11月	進路・就職ガイダンス	2	2	2	1	0	0
	就職登録説明会	3	2	1	1	1	0
	進路・学科別ガイダンス	10	0	11	0	11	0
	就職講座	1	2	1	1	2	3
12月	就職講座	2	1	2	2	1	0
	進路ガイダンス	0	0	1	0	1	0
翌年1月	就職説明会	1	1	1	1	1	1
翌年4月	進路説明会	1	1	1	1	1	1

就職ガイダンスの実績（表 -9）

就職講座は、「自己分析」、「エントリーシートの書き方」、「OB訪問の仕方と業界研究」などを取り上げており、翌年の卒業年次を迎えた年にも、就職ならびに進路の説明会を実施して万全のフォロー体制を敷いている。なお、年々実施時期が早まる傾向にあるの

で、今後その対応が必要である。

個別的な学生支援の対策（学生ひとりひとりへの支援）

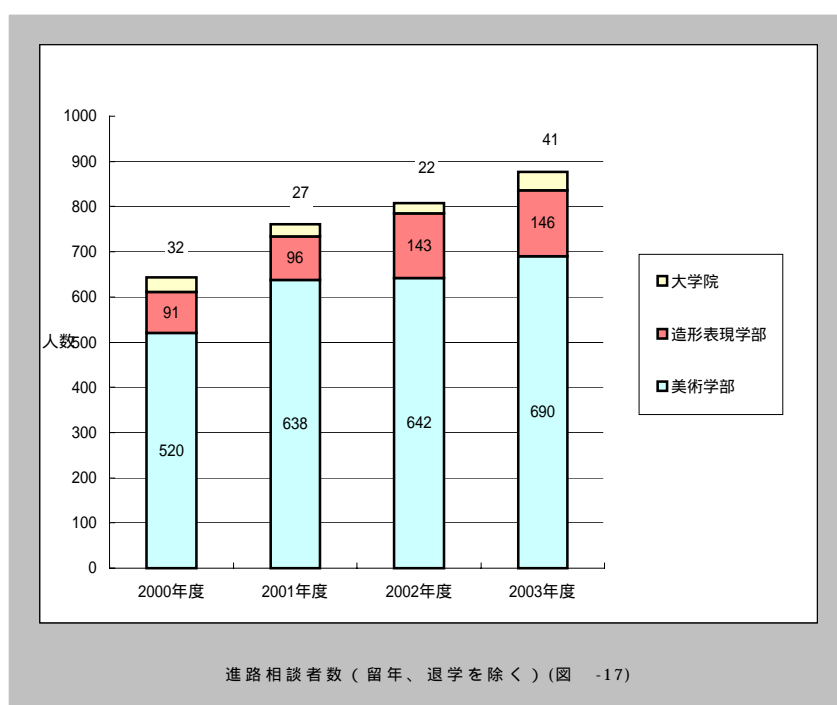
\* 進路相談受付け数の増大傾向

毎年、就職のみならず進学や留学などを含めた「進路相談」の受付人数も、学生数の増加に伴い、増える傾向にある。これは各学部全体（大学院を含む）にみられる傾向である。一方では、企業側としても「学生のより高度な質とより深い能力」を厳しく見極めていとも言える。見方を変えれば、大学の教育レベルを評価されるものであり、学生生活についても問われるものである。

多様な雇用形態や目的意識に対応した相談も増えつつあり、上野毛キャンパスの就職資料室を活用し、就職相談員を配備して造形表現学部の進路・就職相談にも応じる体制をとっている。さらに、求人情報などの「インターネット掲示板」の利用も始まり、休暇期間中などのフォローにも役立っている。

また、OBとのパイプの強さも本学の特色のひとつといえる。

現在、本学OBが関連する企業先数は1,371件（2004年5月現在）あるが、これも今後のOB交流会などの有力な「資源」として捉えていきたい。



< 課 題 >

まず、進路・就職指導について具体的に提言していきたい。そこで3つの視点からそのポイントを述べたい。

1. 職業教育・職業講座などの充実

現在「進路・就職ガイダンス」が始まるのは、3年生（院1年生）の10月頃となっているが、この時期をもう少し早めていきたい。そのために教員側の理解と協力も必要となる。

併せて、将来へ向けたキャリア形成のための指導（ガイダンス）や基礎的なパソコン教育などを組み入れたものとして充実させたい。

これらは、「進路・就職」を早い時期から動機づけるためにも必要であり、パソコン教育については、ファイナート（絵画、彫刻、工芸）系の学生にも積極的に取り組みさせていきたい。

企業側からの声としても、プレゼンテーション能力に対する期待は高いものがある。ポートフォリオの作り方を含めた「プレゼン講座」などの実施も検討したい。これらは、自己の能力をきちんと相手に伝える訓練として必要であり、実社会において求められる重要な要素でもある。その意味では、実践型の対応をはかっていきたい。教育上のスキルとして授業内で解決するか、あるいは就職支援として大学全体での取り組みにするかは検討を要するところでもある。

素質ある本学学生の潜在力を十分に開花させるためにも、必要な課題といえる。

## 2. 教職員の連携強化

就職指導委員との連携も含め、就職担当セクションと各学科（専攻）との双方向での協力体制を構築していく。また、随時適切なデータリサーチを実施し、現状の分析と併せ、要望などの吸い上げにも努めていきたい。

## 3. カウンセリングの充実化

本来、カウンセリングには3つの要素がある。

プレイスメントカウンセリング（就職相談）、ボケイショナルカウンセリング（職業相談）、キャリアカウンセリング（進路相談）である。就職指導を進めるにあたって、これらのカウンセリングが最も重要な役割を果たしている。従って、学生との対応においては、これらカウンセリングの状況に応じた使い分けが必要であり、その技術を磨いて質的向上をはかることが重要である。

以上より、これらの課題を克服していくうえで、2つのキャンパスを擁する本学としては、その一元化と相互間の温度差を解消していくことが前提であり、このテーマはまだ途上ながらも着実に前進していると言えよう。

また、本学が輩出した多くのOB達に支えられ、これらOBとの紐帯強化のもとにそのパイプの太さという強味を発揮しながら、これからも特色ある多摩美術大学を形成していきたい。

## §おわりに§

これまで学生支援全般について述べて来たが、ここで「今後の方針と考え方」を、以下の3点に要約したい。

まず今日の多様化する価値観の中で、学生の“生の声”を吸い上げてそのニーズを的確に捉え、問題の所在を明確にし、具体的に応えていくことが肝要である。大学からの支援も一方通行ではなく、学生のニーズを視野に入れた双方向のものとしたい。

そのためには、随時アンケートなどを実施して具体的な回答を提示していききたい。これは学生に安易に迎合するという意味ではなく、学生と対等に対峙し“コミュニケーション”していくことを通じて、大学と学生が同じ目線でものを考える力が、これからの大学にはますます必要とされているからである。

次に、学生支援の窓口である学生部や造形表現学部事務部をどのように利用していくかを常に懇懇しながら、日頃から学生達に問いかけていくことである。アンケートなどで実態を把握して、できるだけ多くの学生に対し、窓口部署に“目と足”を向けさせることが肝要である。

そのための施策と窓口部署の利用価値を高めることが、これからは一層重要とされて来る。

併せて、卒業生の追跡調査など卒業後の動向も視野に入れ、今後の課題として検討していきたい。

最後に、これらの視点を通じて、社会の変化や多様な価値観に対応した柔軟な組織づくりが必要とされる。これは大学全体として取り組むべきテーマではあるが、将来的には学生支援の方法も、大学組織の諸制度やその展開の中で徐々に変化していくものと思われる。

従って学生のみならず、大学や社会のニーズなどへの鋭敏な対応を視野に入れていくことも重要である。

学生支援で望まれることは、学生自らが目的を持って学生生活を送り、自分の専門性を高めて自分自身のライフワークを考え、自らの力で将来への道筋をつけられるように指導・支援していくことである。学生が大学で何を学び、そこから何を得て何ができるか、そして将来の希望について自信をもって語れるように、大学教育における学生支援のあるべき姿を確立していく努力こそが、いま本学に求められているとも言えよう。



## § はじめに §

本学は 1995 年より八王子キャンパス計画を着工するとともに、諸教育改革に取り組んで来た。2004 年 10 月に新正門が竣工したことで、9 年に亘る八王子キャンパス計画が一段落つくこととなった。

今回の自己点検・評価においては 2000～2003 年度という期間を取り払い、この 9 年間の取り組みと将来構想について述べることで本学の施設の状況が伝わるものと考えている。よって他グループとは異なった形での報告とした。

## § キャンパス整備の歴史と将来構想 §

### 1. キャンパス整備の歴史



#### < 八王子キャンパスの沿革 >

本学八王子キャンパスは、東京都の西部、多摩ニュータウンの最西部に位置する。キャンパス付近は、鐘水と称する地名にあるが、これは山肌から湧き出る水を汲むために竹をヤリ状に切ったものを刺して使ったことに由来するほど水の豊富なところで、キャンパス内にもかつて湧水がみられ、学生にも親しまれていた。かつてこのあたりには養蚕を主とする農家が谷戸部分に点在し、桑畑と水田と雑木林を背景として長く生活してきた歴史があった。また、キャンパスの北を走る柚木街道や隣接する野猿街道の近辺は、幕末から明治にかけて、八王子に集められた絹を横浜方面に運ぶ交易ルートとして栄えた歴史を持っている。



八王子キャンパス(1969年以前)

この地に1960年、本学は上野毛キャンパスの校地面積を補充するために、八王子校地(現在の八王子キャンパス)を購入して運動場を建設した。購入当時は、多摩ニュータウンの建設が実施される以前で、先見の目を持って事業に着手したことが言えよう。

1968年、文化人類学の権威として国際的に著名な石田英一郎博士が第2代学長に就任した。石田学長は学長就任と同時に本格的な大学改革案の作成に着手し、広く学内に意見を求め、21世紀とい

う新たな時代に対応し得る美術大学とはいかなる理念、学科構成、カリキュラムが望ましいかを検討した結果、八王子キャンパス移転に関するビジョンを発表した。この宣言は「石田ビジョン」として全学生および教職員の支持を得て、1969年多摩ニュータウンの建設が東部地域から開始されたのと時期を同じくして、現在の八王子キャンパスの移転計画が開始された。



八王子キャンパス(1969~72年)

1971年、新設の建築科の新生を含む1年次生の授業が八王子キャンパスで開始され、1974年には美術学部の移転が完了した。さらに、すでに設置認可を受けていた芸術学科が、内藤頼博第4代学長の時代の1981年に開講し、石田ビジョンは一応の完成を見た。

そして1994年と1997年には、長年教職員および学生が待望していた校地の拡張が実現することになった。多摩ニュータウン西部地区の整備は東京都によって

漸次進められていたが、八王子キャンパスの西側隣接地35,000㎡の購入が藤谷宣人第5代理事長の4半世紀に及ぶ粘り強い交渉によって1994年に実現した。

これにより、多摩ニュータウン事業の遅れにより停滞していた絵画棟、デザイン棟、彫刻工房棟群、工芸工房棟群、T A Uホールなど、新校舎の建築工事が一挙に再開された。1997年春には、絵画棟、彫刻工房の一部、学生クラブハウスがキャンパス計画第1期として落成し、大学院が八王子キャンパスに移転した。石田ビジョンの初期のプランにあった、美術学部の専門課程と大学院をつなぎ、教育・研究内容を充実する計画が遂に実現することとなった。1998年春には八王子キャンパスで最も大きな建物となるデザイン棟、彫刻工房棟群、工芸工房棟群が完成した。それに続き、テキスタイル棟群、T A



八王子キャンパス(2002年)

Uホール、グリーンホールが完成し、引き続いて2000年11月にはメディアセンターが完成した。

その後2004年3月にはレクチャーホールが、同7月には本部棟が完成した。

また2002年には、多摩ニュータウン計画の最終売却地である本校東側隣接地17,472㎡の購入が実現した。現在この東エリアには、八王子キャンパスの新正門と新バスターミナルの建設が計画されており、2004年10月完成した。このキャンパス東地区には、

藤谷理事長と第7代学長高橋史郎の将来構想の基となっている、情報化新時代に対応する八王子キャンパスの第3期計画として「新図書館」、「情報デザイン学科」と「芸術学科」が移転し、新たなカリキュラム展開を図る「新学科棟」建設を計画当中である。これらの建設も2007年の3月には完成し、1969年から始まった八王子キャンパスの壮大な計画も38年を掛けて、学生一人当たりの校舎面積が美術系大学では世界的なキャンパスが完成する予定である。



八王子キャンパス(2004年)

## 2. 新キャンパス計画へ向けたビジョンと運営

### <新キャンパス計画のビジョン>

1998 年におこなわれた学内の大幅な改組転換および情報デザイン学科の新設を機に再開された本キャンパス計画は、藤谷理事長の諮問機関として設立された八王子キャンパス建設整備委員会で、藤谷理事長、高橋学長（当時教務部長）を中心として石田構想に続く新しいキャンパス計画のビジョンと運営方法の検討が始められた。

### <新キャンパス計画の理念>

本学は、「自由と意力」を持った学生を育て、社会に送り出すことを使命としている。これがキャンパス設計のコンセプトでもある。学生を育てる環境作りとして、多摩の自然の中に創作活動を自由におこなえるアトリエの充実をはかった建築群を建てる。建物内外を問わず芸術やデザインにあふれた環境を計画する。教員や学生間での交流を促す施設を計画する。

また、第3期計画では、21世紀の地球環境問題にも配慮し、積極的に省エネルギー対策をデザインに組み入れ視覚化し、更によりキャンパス環境をめざし国際環境基準である ISO14000 番台の取得も視野に入れデザインと環境の融合をはかる。

### <キャンパス計画の設計組織>

本キャンパス計画が始まるにあたり、八王子キャンパス設計室が学内の教員を中心に組織され、学内調整やヒアリングを始め基本設計を行なっている。設計は1期、2期、3期と計画され、2期までの工事が完成し、現在は3期の設計を進めている。各期の実施設計は大手ゼネコンが支援し、現場監理は八王子キャンパス設計室がおこなっている。

### <敷地の特徴>

本キャンパスは北を柚木街道に、東を都道に、南を都が新しく建設した遊歩道に、西を国道16号線への抜け道にと四周を囲まれた敷地である。敷地南側には保存緑地も残されている。敷地面積は15,1561.41 m<sup>2</sup>。標高130～160メートルまでの起伏のある典型的な多摩丘陵の一角に位置する。この丘陵のアップダウンを最大限に利用して本キャンパスを計画したことが、大きな特徴である。高さに変化のあることは建築群を躍動させる可能性を含むものである。段を登り、振り返った時の新しい驚き、緩やかな坂を下る時の快感、様々な高低の中にできる自然な溜り場、そこでの教員と学生との語り、学生たちの談笑...欠点とされてきた坂を魅力あるキャンパスに変えることが、本キャンパス計画に課せられた課題であった。

近年、周囲は多摩ニュータウンの開発で切り開かれ、敷地からは橋本駅や相模原市街が一望できる。橋本駅からは1.6 km、バスで5分の距離にある。敷地内の最も標高のあるところには1969年に建設された共通教育センター（旧本館）が位置し、この建物を取り囲むように各棟が配置されている。敷地へのアプローチは、東側道路に面する新正門からとなる。



スクールバス

### <交通アクセス計画>

本キャンパスへは橋本駅、八王子駅からのスクールバスが運行していたが、キャンパスの発展に伴い 2003 年春からは橋本駅、南大沢駅、八王子駅から 1 日 110 便の路線バスが運行し通勤通学を支援している。民間バスではあるが、大学のイメージアップのためスクールカラーのブルーのラッピングバスも運行されている。

2004 年 10 月からは新正門の完成に伴い、本キャンパス内の敷地を一部バスレーン専用として提供し、各駅と多摩美術大学との路線バスが充実された。



配置計画ゾーン図

### <配置計画>

本キャンパスは、1969 年に建設されたレクチャーゾーン-----共通教育センター（旧本館）を丘の頂上に残し、その周りを取り囲むようにセンターゾーン、絵画ゾーン、デザインゾーン、工房ゾーン、大教室ゾーン、メディアテークゾーン、サービスゾーン、新学科ゾーンそれにスポーツゾーンの 10 のゾーンから構成されている。各学科は創作作業の形態や素材に応じグルーピングをして、独特のゾーン構成となっている。

### <敷地内道路計画>

本キャンパス正面玄関として、新正門から西へまっすぐに伸びる幅 10 m のクスノキ並木を設けた。この並木道は新しい本キャンパスのシンボルであると同時に、多摩美の理念である「自由と意力」現す象徴の木でもある。キャンパス内の絵画棟へはこの並木道を通してアプローチする。この並木道は西端で、本キャンパス西側外周路である「桜通り」につながる。桜通りは本学の同窓会である「校友会」が毎年桜の苗を寄贈し、これによって整えられた外周路である。

本キャンパス内には、もう一本、東側外周道路として「柳通り」が配置されている。この通りは名前のごとく柳を街路樹とする勾配 3 % のゆったりとした並木道で、学生の通学路として計画されている。



新正門のクスノキ並木

新バス停を降りた学生は、この柳通りを通過して、新本部棟で学内のインフォメーションを得た後、新図書館や新校舎、メディアセンターを通り修景池と安らぎの森をぬけ、中央広場に出ることができる。この桜通りと柳通りを二分して、中央には「中央り」が配置されている。キャンパス内の道路は、いずれも作品の搬入搬出を考慮して歩車兼用としている。

### <広場計画>

学生たちのコミュニケーションがうまくとれる施設を計画することは、キャンパス計画の中でも重要なテーマである。通学路、並木道、木陰、散策路その他の各所に広場、ポケットパーク等を設け、それらが連続しながら変化のあるネットワークを構成するように配置している。エントランス広場、彫刻の森、癒しの広場、中央広場、インターネット広場、イベント広場などを工夫している。それぞれの施設の性格からも、石、木、砂、あるいは花、水等を用い、またそれぞれの空間には、ベンチ、東屋、藤棚、ガレリア、修景池、水の流れる彫刻等を設け、素材、形態、色彩の構成を学ぶと共に学生の表現、パフォーマンスの場ともなるようにする。

### <キャンパス全体のアート計画>



関根伸夫の彫刻作品

本キャンパスの外部には、新正門北側には関根伸夫の彫刻作品、本部棟前には上野毛時代の歴史を刻む建畠覚造の彫刻、メディアセンター前には五十嵐威暢の彫刻作品などが配置されている。いずれも本大学の教授陣や本学に関係した作家たちの手によるものである。また同門南側に位置する彫刻の森にも著名な作家の作品を点在させ、キャンパス全体を作品で満たすことで、キャンパスすべてを生きた創造・教育の場と

する計画である。また、建物内にも本部棟玄関ホールの中村錦平の作品をはじめ、各作家にスペースを提供し作品を設置している。



八王子キャンパスの雑木林

#### <緑化計画>

昔、本キャンパスの敷地は多摩地区特有のクヌギ、コナラ、ケヤキなどの繁った雑木林であった。現在の修景池付近では蛍が飛び交う光景が見られた。この敷地に本キャンパスが計画され、隣接地まで多摩ニュータウンの開発が進められ、多くの木が切れ雑木林が失われた。キャンパス計画を進めるにあたっては、多摩の雑木林の再生を最優先に考え、旧グラウンド脇のイチヨウ並木と八重桜並木、ほか何本かの植栽を各所に

移植した。第1期工事当時敷地に残った林は、絵画棟と共通教育センター間の斜面の雑木林と、絵画棟の北面の竹林にすぎなかったが、その後正門前のクスノキ並木、東外周道路の柳通り、西外周道路の桜通り等が整備され、今後は修景池北側に大きな安らぎの森を計画中である。キャンパス計画第3期が完成する2007年には、多摩の雑木林に囲まれたキャンパスが再現する予定である。



修景池

#### <修景池計画>

テキスタイル棟と芸術学科棟にはさまれた池は、周辺の雨水の調整池でもあり、また八王子キャンパスの憩いの場でもある。調整池としては最大1000トンまでの貯水能力を持ち、下方の大栗川に流れ込む水量の調節をしている。また、修景池周辺には、もともと八王子キャンパス内に植えられていた木も移植されており、多種多様な植物は、四季折々の変化が感じられるよう配置されている。

新学科棟の建設に伴い、現芸術学科棟は解体撤去され、同地域の緑化を計画している。2007年には豊かな外部空間の創造、水辺空間による憩いの場、昆虫・水鳥・魚が棲めるビオトープとして学内のサンクチュアリー空間をめざしている。



自転車・バイク駐輪場

#### < 駐車駐輪場計画 >

本キャンパスは、各棟に分散して自動車駐車場が配置されている。これは、各学科棟への作品搬入を容易にするためである。キャンパス内への教職員の自動車乗り入れは制限がないが、学生は作品搬入時に限り特別許可されている。昨今のバイク通学の増加を考慮し、学生の安全をはかるために柚木街道沿いに教職員ならびに学生が利用可能な駐車場を第3期で設置する予定である。

バイクの駐車に関しては、現行

通り柚木街道沿い東北角の窪地とするが、上記の自動車用駐車場の増設によって、バイク利用者が減ることが予測される。自転車の駐輪に関しては、バイクと同じく柚木街道沿い東北角の窪地と、東道路の東南の角地を整備してこの用地に充てる。

### 3 . 各種建物施設



コンクリート打ち放しの校舎（彫刻棟）

#### < デザインコード >

本キャンパスでは、多摩丘陵の雑木林の中に佇みながら、絵の具箱を開けたように各所にデザインやアートの広がりを眺め、活動できるキャンパスをめざしている。そのような林の中に光を受けて建つ建築群として、主張しすぎない素材として鉄筋コンクリート化粧打ち放しを選び建築を計画している。建物が主役ではなくそこで行われる創作活動やコミュニケーションが主役となる。



## センターゾーン

本部機能と事務機能を持つ本部棟と新正門周りからなる。



本部棟

### <本部棟>

本キャンパスの新正門脇に多摩美術大学の正面玄関的役割を持って配置されている。理事長室、学長室、理事室等の法人運営ゾーンと、総務課、教務課、学務課、学生課、就職課等の学生支援ゾーン、大会議室、教職員ラウンジ等の教職員支援ゾーンの3ゾーンが、中庭を介して構成されている。東北側からの池越しにアプローチをする。外部からの訪問者や学生は、この棟でインフォメーションや学内情報を得る。

### <新正門>

本キャンパスは、第2期の完成と共に東通り沿いに新正門が完成した。ここには学内への進入をチェックする機能を持った守衛所を設けた。ここでは同機能の他にプラズマのモニターを設け、学内の案内情報等を学生に提供する。また同所のゲートでは、非接触型カードによる入構管理を行い教職員の在・不在を確認することができる。





新正門北側のバス停

<バス停>

本キャンパス新正門の北側には、同敷地を半公道的に扱い、路線バスを導入させたバス停を設けた。



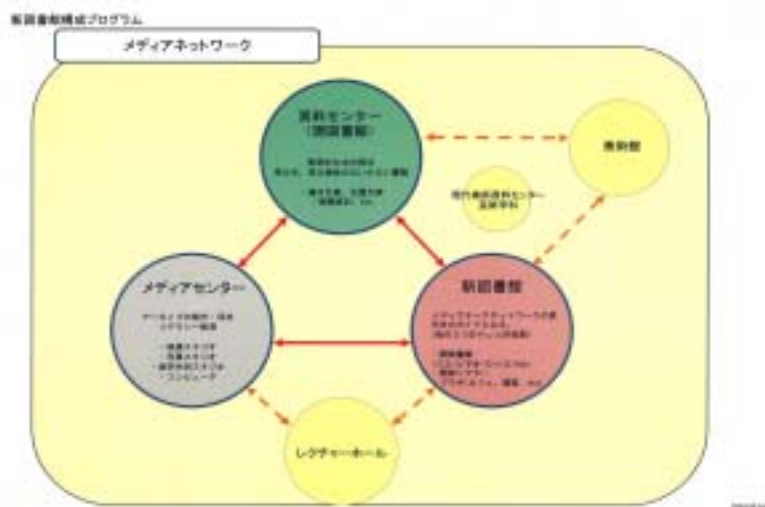
彫刻の森

<彫刻の森>

本キャンパス新正門脇に広がる彫刻の森である。クスノキ並木道を挟んで北側は関根伸夫の彫刻が象徴的な芝の広場、南側は多摩の雑木林の中に彫刻が点在する散策路を持った広場である。

メディアテークゾーン

本キャンパスでは新図書館（2007年3月竣工予定）、メディアセンター、資料センター（2007年12月竣工予定・旧図書館）、レクチャーホールの4つをまとめてメディアテークと称し、学内の新しい情報メディアのシンクタンクと位置づけている。「本」「紙」を媒体とした知識の吸収を主にした「新図書館」に対し、「情報」「インターネット」「メディア」の制作を主とした「メディアセンター」、更に「物」「触れる」こと



メディアテークの模式図

を通して研究する「資料センター」、「AV」を中心とした講義をおこなう「レクチャーホール」の4つの施設が、互いにネットワークを組み、不足を補完することで、他大学や研究機関に類を見ない美術、メディアの情報基地となる予定である。



計画中の新図書館模型

#### <新図書館>

本キャンパスの新正門脇の「彫刻の森」とけ込むかたちで、本学のシンボルとなる新図書館が、世界的に活躍する建築家で本学客員教授の伊東豊雄氏の手で現在基本設計が進行中で、これは2007年3月に竣工を予定している。

現図書館の蔵書12万冊に対し、30年後の30万冊の収蔵数を見込んでいる。デザインとアートの融合を図り、美大の特徴である美術書やデザイン関係、グラフィック

関係、展覧会カタログを中心に全開架をめざしている。書架と閲覧席を混在させ、全館が書庫でもあり閲覧室でもある。敷地の微妙な高低差を巧みに利用した図書館内にはカフェやフォーラムを配置し、本とデジタルの融合と共生を図り、イベント展示や授業を行うこともできる。学内の教員や学生、更に学外にも開かれた図書館機能となる予定で、デジタルアーカイブの機能も充実させた計画となっている。



メディアセンター

#### <メディアセンター>

メディアセンターは、来るべき時代のアートとデザインの可能性を追求し、人の創造力をどう現代に活かしてゆくかの思想実験の場であり、新しいアート&デザイン教育の中核となる研究・開発・教育の全学共通の横断型施設である。

施設はコンピュータリテラシー教育、コンピュータ編集室、メディア編集室、写真スタジオ、多目的スタジオ、産学共同室等からなる。今後の美術大学にとって最

重要課題であるデジタルアーカイブの作成・編集はメディアセンターで行なわれる。



現図書館

#### <資料センター（旧図書館）>

現在の図書館は新図書館の開館（2007年3月）と共に、資料センターに改装される予定である。資料センターはデザイン界のリーダーで本学の教授でもあった杉浦非水の資料ほか、瀧口修造文庫、北園克衛文庫、今井兼次作品資料、安斎重男現代美術資料をはじめ、各方面の著名人の資料の多摩美コレクションや文様研究所の収蔵品を整理の上、保管し展示研究をおこなう予定である。



レクチャーホールのホワイエ

#### <レクチャーホール>

本レクチャーホールは、300人の大々教室、200人の大教室、100人の中教室、一般教室群からなる全学科共通の複合施設である。大々、大各教室は大型プロジェクターを設置した階段教室でAV授業に使用される。中教室はU字型の階段教室で、中央に立体作品をプレゼンテーションできる他に例を見ない美術大学ならではの教室である。各教室の前にはガラス屋根のホワイエがあり、学生のコミュニケーションがはかれるように計画している。

るように計画している。

## 福利厚生施設



グリーンホール（食堂棟）

### <グリーンホール（食堂棟）>

キャンパス内に2カ所ある食堂棟の一つである。学生席300席と教職員専用ファカルティーとして60席を有している。その他に売店と画材店を併設している



TAUホール（多目的ホール）

### <TAUホール（多目的ホール）>

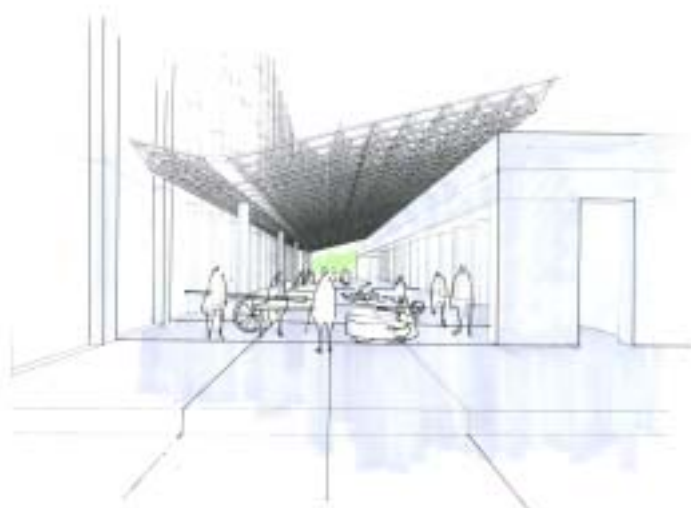
室内体育館の機能と、入学式・卒業式のセレモニーに利用する。



計画中の第2工作工房スケッチ

<第2工作工房>

デザイン棟に付属した工房の計画である。



計画中の工作工房増築スケッチ

<工作工房増築>

デザイン棟に付属した工房の増築計画である。



計画中の自由工作工房スケッチ

<自由工作工房>

共通施設の一つとして、自由工作工房の計画がある。この施設は各学科の学生が利用申告書を提出することによってスペースを借りることができる。スペースは4メートル×4メートルを1ユニットとして、課題にかかわらず4ユニットまで利用することができる。

## 4 . 各学科の構成



### < 各学科棟の特徴 >

現存の各学科棟は幾つかの学科、幾つかの専攻または幾つかのコースが集まって構成されている。これらの棟にはエントランス部分にギャラリーを設け、各学科の展示等を行うことで、各学科間の交流を図ることを目標としている。各棟は実習スペースを最優先に確保し、冷房設備を完備している。

また、各教員の研究室は一人当たり 15 m<sup>2</sup>均等としている。



ギャラリー（絵画棟と彫刻棟）

### < 絵画北棟 >

日本画、油画、版画の各専攻をまとめて絵画北棟として設計した。高低差の激しい敷地の欠点を長所とするように、前庭は傾斜地に雑木林がゆるやかに続き、その中を数段上っては踊場、また数段上って踊り場という川の流れのよどみのように踊場を配置したアプローチとなっている。本キャンパスの中で唯一残った北斜面の雑木林と、建物と道路とを一体化することを最重点として計画



絵画北棟

した。平面形は通風、自然喚気ということを最優先とし、片側廊下、中庭、そして雑木林との一体化を配慮した。日本画専攻と展示室は床暖房を設けた。



絵画棟

#### < 絵画棟 >

1981年に建設した絵画棟は、油画専攻が使用している。同棟には他に200席を有する食堂が設けられている。



デザイン棟

#### < デザイン棟 >

グラフィックデザイン学科、生産デザイン学科、環境デザイン学科、情報デザイン学科からなる本キャンパスの中で最も大きな建物である。デザイン系各学科の交流を深める目的から、1、2階を吹き抜いた大きな展示ホールを中心とした機能的な建築である。工作工房を別棟に持ち、実習を兼ねたデザイン教育の重視を建築に反映している。八王子キャンパスの一つのシンボルである銀杏・桜並木に平行に配置され、中央広

場を前面に、学生クラブ棟、グラウンドを背面にもつ、文字通りキャンパスの中心でシンボリックな建築である。





彫刻棟群

**< 彫刻工房群 >**

木彫、石彫、金属、諸材料、塑像棟が、理念の統一を守りつつ、複雑な機能をもつそれぞれの工房を、独立性と連帯性の両立というテーマでまとめて設計した。単調になりがちな工房群を独自の使い方を分析の上、各々に空間を与えながら構成した空間である。各棟の屋根の架構は、その工房の使用材料に呼応したかたちで建築材料が選択されデザインされている。



工芸工房群

**< 工芸工房群 >**

ガラス、金属、陶棟が彫刻工房群と同じように、理念の統一を守りつつ、複雑な機能をもつそれぞれの工房を、独立性と連帯性の両立というテーマでまとめて設計した。ガラスと陶の釜を中央広場に面して設け、学生たちの創造の現場自体を展示空間としてデザインした。



テキスタイル工房群

**< テキスタイル工房群 >**

中央広場にエントランスが面し、修景池に工房を面したテキスタイルの工房群である。彫刻棟、工芸棟と同じく理念の統一をはかりながら、デザインとアートの2コースのカリキュラムを内包するアトリエ群からなる複合施設である。

## 新校舎ゾーン



計画中の新校舎模型

### <新校舎>

情報デザイン学科のアートコースとデザインコース、芸術学科、および共通施設のメディア武道館から構成されている。情報デザイン学科はメディアとアートの共生をしながら、各々が芸術学科と所々で交流をもてる建物として計画中である。2007年完成予定。

### <軽食&学生支援ショップ>

東ゾーンの柳通り沿いに軽食と学生支援施設を設けた。学内には2つの食堂があるが、これらに競合しない形で、1階に軽食を中心としたカフェテリアを、2階には学生支援ショップを設けている。ここでは学生は軽食をとったり学生同士の談話に花を咲かせたり、ショップでコミュニケーションをとることができる。

## リサーチゾーン



共通教育センター

### <共通教育センター>

1968年に建設された本館を改修し、全学科の基礎教育を受け持つ共通教育、大学院の教室、ゼミ室、研究室からなる施設である。

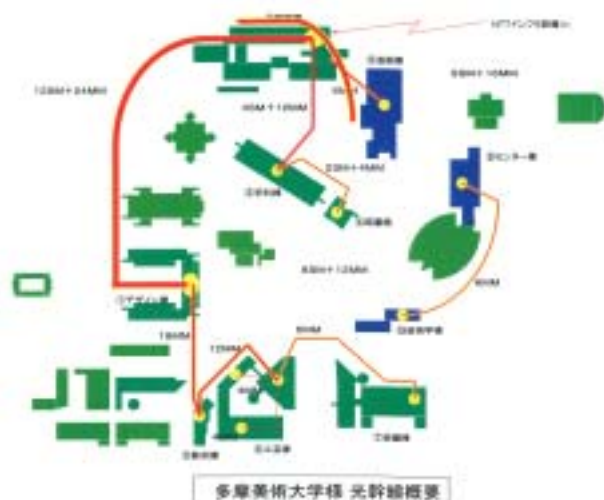


棟名サイン（T A Uホール）

<サイン計画>

アートとデザインを専門とする美術大学にあって、キャンパス内のサイン計画も重要な要素である。キャンパス計画に際しては、学内にUI委員会を立ち上げ、サイン計画を綿密に練り、各所に設置している。

5 . 情報システム



光幹線概要図

<WEB 環境等>

本学は、早くから光回線によるデータ処理を採用し、現在は下記の通りの光ケーブル基幹網が建物間を結んでいる。

また、学内には八王子、上野毛の両キャンパスで 28 台のサーバーが設置され、また、有線 LAN と無線 LAN が並行して設置され、各所でワイヤレスによるパソコン接続を可能にしている。

他にも、上野毛キャンパスと八王子キャンパスとはテレビ会議の設備を設け、頻繁に双方で同時

の会議をおこなっている。



無線LAN接続可能範囲図

## 6. 省エネ対策

### < センサー制御による照明設備 >

デザイン棟、本部棟には、センサーによりその場の明るさに応じて調光できる照明システムを備えている。昼光を積極的に利用することであかりの無駄使いをなくし、省エネとコスト削減に効果がある。また自動的に照度を調節することで、快適な視環境をつくることができる。

その概要と効果: デザイン棟の各教室の窓側一列目照明には、あかりセンサーが取り付けられている。このセンサーは周囲の明るさを検知し、照明器具へ信号を送る。照明器具は、その信号により調光を制御し、昼光の変化にかかわらず室内の机上面照度を一定の明るさに保つことができる。また、調光していることが、見た目ではわからないように設計されているため、心理的影響はほとんどない。また、実際の測定結果では、昼光利用できる時間帯において、北側、南側教室共1列目の照明器具は連続的に25%調光で運用できることが判り、常に設計照度である約1.0001x以上(初期値)は確保されていたことが判明した。また、昼光利用できなくなる時間(夕方)でも一定照度制御がおこなわれており、教室利用者に対して心理的な影響はほとんどないと考えられる。この調査結果を元に、年間の電力量とCO2排出量比較を行なうと、従来の照明器具に比べて年間で約33%の電力を削減でき、またCO2排出量も112(kgC)削減できるという結果が判明した。同システムは照明学会照明普及賞(優秀施設賞)を1998年に受賞した。このシステムは、2007年竣工予定の新図書館、新校舎にも採用を計画している。



太陽熱利用温水設備（TAUホール屋上）

< 太陽熱利用による温水設備 >

TAUホールと彫刻棟には、太陽熱の利用による温水シャワー設備を備えている。通常の作業後の使用はもちろん、その他に緊急災害時の緊急避難場所として機能することを考慮している。



太陽光発電設備（TAUホール屋上）

< 太陽光利用による発電設備 >

TAUホールの屋上には、太陽光による発電設備を備えている。TAUホールが緊急災害時の緊急避難場所としても使えるよう考慮し、停電になった場合でもTAUホール内に最低限の電気を供給できるよう計画されている。



中水高架水槽（本部棟屋上）

< 雨水利用による中水設備 >

絵画北棟、工芸陶棟、デザイン棟、工作工房、テキスタイル棟、グリーンホール、メディアセンター、レクチャーホール、本部棟には、雨水利用による便所排水設備を設置している。これにより、屋上に降った雨水を地下の雨水層に貯めておき、棟内の便所排水を雨水から製造される中水によってまかなう。この設備の導入により、自然エネルギーである雨水を積極的に利用することで上水の

利用を少なくしコストの削減を行っている。また、常時地下に水を貯めることで非常事態発生時(大震災等)における水の確保にもなる。調査結果では、デザイン棟の便所は雨水だけでほぼまかなえることが明らかになった。



氷蓄熱槽（本部棟屋上）

#### <氷蓄熱による冷房設備>

メディアセンターには一部氷蓄熱システムによる冷房設備を導入している。蓄熱とは、熱を蓄えることで様々なエネルギーを熱に換え再利用する方法で、これを利用したのが蓄熱式空調システムである。電気は貯めておくことができないが、熱エネルギーに変換することにより効率的な利用ができる。この場合は、深夜電力を利用し蓄熱槽に氷を作り、昼間にその氷を使い冷房をおこなう。夜間の電力は、昼間に比べ割

安なのでコスト節約と発電所の消費電力のピークを避け CO2 排出量の削減に寄与している。



屋上緑化（本部棟屋上）

#### <屋上緑化による断熱>

レクチャーホール、本部棟の屋上には断熱対策として植栽を設置している。これにより最上階の断熱による冷暖房のエネルギーを削減するとともに、屋上の利用者にとって視覚的安らぎを与えている。第3期で計画される新校舎の屋上にも、断熱対策と景観をかねて植栽を設置する予定である。多摩丘陵の一隅に佇む八王子キャンパスも年を経て、外構や屋上に緑があふれ、地域の環境に同化するよう計画している。

## 7. 環境保全



筆洗缶

### <排水の監視>

八王子キャンパスの大規模なキャンパス計画の推移とともに竣工した建物では、専門業者による全量回収(動植物油・鉱物油、有機溶剤、重金属などを含む溶液、その他有害物質を含む排水)を除いて、排水は全て公共下水道へ放流されている。環境問題に関心が高まっている時に大学として環境の保全、排水の監視に配慮するのは当然のことである。その対策を講ずるため研究室毎に使用薬品の種類・量および、その使用方法

・処置方法の確認を行い、研究室で使用している対象物質毎の「製品安全データシート(MSDS)」ファイルを作成し、各アトリエからの排水について専門業者による測定を実施した。排水の改善策の一環として、油画のアトリエ(絵画北棟、絵画東棟)の約100教室に、油彩の制作時に絵筆を専用の缶の中で洗えるよう「筆洗缶」の配置を行った。この筆洗缶は、他の美術系の大学で使用されているものを参考にして本学で制作したものである。この缶は、20リットルほどの市販されているペール缶に細工し、下部に水を張り、絵筆を洗う部分に網を設け上部に灯油を張ったものである。現在は年2-3回程度、処理資格をもった専門の許可業者に引き取り回収を依頼している。その他のアトリエにおいても、有害物質排出の疑いのある建物については、中継柵等を設置して、定期的に専門の許可業者による汚泥の回収を行っている。教職員、学生、取引業者に有害物質及び広く環境問題に関する意識の高揚をはかり、全学あげて環境の保全排水の監視に取り組んでいる。

### <廃棄物の処理>

キャンパスの各建物には、燃えるゴミ 燃えないゴミ(缶・ビン・ペットボトル)の専用ゴミ缶を配置している。缶、ビンについては、専用のコンテナを設けリサイクル業者に引き取りを依頼している。

美術大学なので石膏、金属、プラスチック等については、産業廃棄物として専用コンテナを設け専門の業者に回収を依頼している。木彫の作品制作に使用した木片の残りは、冬期にアトリエ内のストーブで薪として有効利用している。石の破材は一時ストックしておき、専門の業者に回収を依頼している。年間を通して、学部入学試験の前後、芸術祭終了後のゴミは膨大な量になり、その処置に苦慮している。現在は、業者に依頼して持出し処理を行っている。東京都や国の環境基準にあわせて、廃棄物の処理に対して前向きに取り組んでいる。

特に、各アトリエから排出される有毒な廃剤に関しては、T A Uホール北側に除外施設を設置埋設し危険物処理施設として機能している。今後、第3期工事では更に北側立体駐車場下部にも除外施設を建設予定でいる。

雨水排水に関しては、彫刻公園の下部と立体駐車場の北面下部に雨水抑制貯留層を埋設し、敷地内の大雨時の雨水処理に対応している。

**<八王子キャンパスの建設>**

- ・ 1997-2004年に建設した延床面積の合計は 57,165.221 m<sup>2</sup>
- ・ 1997.03.15 絵画北棟 RC造 地下1階・地上4階 2984.143 m<sup>2</sup> 延床 9843.664 m<sup>2</sup>
- ・ 1997.03.31 絵画北棟腐蝕室棟 S造 平屋 140.406 m<sup>2</sup> 延床 139.191 m<sup>2</sup>
- ・ 1997.03.31 絵画北棟危険物倉庫 S造 1F 8.798 m<sup>2</sup> 延床 8.798 m<sup>2</sup>
- ・ 1997.04.20 学生クラブ棟 RC造 地上2階 466.528 m<sup>2</sup> 延床 708.722 m<sup>2</sup>
- ・ 1997.03.31 一号井ポンプ室 RC造 B1F 0.000 m<sup>2</sup> 延床 77.850 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.03.31 彫刻諸材料棟 RC造 地下1階・地上3階 539.379 m<sup>2</sup> 延床 522.944 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.03.31 彫刻金属棟 RC造 地下1階・地上3階 576.240 m<sup>2</sup> 延床 566.190 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.03.31 彫刻塑造・キヤリ・鋳造・テラコッタ棟 RC造 地下1階・地上3階 1233.904 m<sup>2</sup>  
延床 3200.712 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.03.31 工芸ガラス・金属・陶芸棟 RC造 地上3階 2782.284 m<sup>2</sup> 延床 5909.53 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.03.31 デザイン棟 RC造 地上5階 2505.656 m<sup>2</sup> 延床 12231.877 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.03.31 工作工房棟 RC造 地下1階・地上1階 634.760 m<sup>2</sup> 延床 1207.553 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.12.20 TAUホール RC造 平屋 1710.058 m<sup>2</sup> 延床 1694.678 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.12.20 グリーンホール RC造 地下1階・地上1階 1262.907 m<sup>2</sup> 延床 1525.157 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.08.31 芸術学科棟改修 RC造 地下1階・地上4階 398.325 m<sup>2</sup> 延床 1952.202 m<sup>2</sup>
- ・ 1999.03.31 テキスタイル棟 RC造地下1階・地上3階 2103.485 m<sup>2</sup> 延床 4169.013 m<sup>2</sup>
- ・ 2000.10.31 メディアセンターRC造地下1階・地上4階 1198.178 m<sup>2</sup> 延床 4914.54 m<sup>2</sup>
- ・ 2004.02.28 レクチャーホール RC造地下1階・地上3階 2124.180 m<sup>2</sup> 延床 3301.250 m<sup>2</sup>
- ・ 2004.06.30 本部棟 RC造 3階 2498.330 m<sup>2</sup> 延床 5191.350 m<sup>2</sup>

**<八王子キャンパス既存の建物>**

- ・ 1969.04.14 共通教育センター(旧本館) RC造 B1F+4F 1711.825 m<sup>2</sup> 延床 7250.380 m<sup>2</sup>
- ・ 1972.01.17 体育館 RC造 2F 971.464 m<sup>2</sup> 延床 886.784 m<sup>2</sup>
- ・ 1977.02.04 図書館 RC造 B2F+4F 882.923 m<sup>2</sup> 延床 3019.843 m<sup>2</sup>
- ・ 1981.04.06 絵画東棟 RC造 B3F+5F 2368.194 m<sup>2</sup> 延床 6179.381 m<sup>2</sup>
- ・ 1996.06.30 グランド一期 9657.000 m<sup>2</sup>

**<八王子キャンパスの土木工事>**

- ・ 1998.03.00 絵画棟周辺整備(擁壁・翻道路・市水・排水・電気幹線他)
- ・ 1997.12.00 一号井ポンプ室周辺整備
- ・ 1998.03.00 彫刻棟周辺整備(道路・市水・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.04.00 デザイン棟周辺整備(中庭・道路・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.05.00 工芸棟周辺整備(道路・擁壁・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.05.00 テキスタイル棟周辺整備、修景池(造成・排水・電気幹線他)
- ・ 1998.08.31 テニスコート 2498.400 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.10.31 グランド2期 9657.000 m<sup>2</sup>
- ・ 1998.12.00 グリーンホール周辺整備(橋・舗装・排水他)
- ・ 1998.12.00 TAUホール周辺整備(舗装・排水他)



- ・ 1999.03.00 プラザ周辺整備（舗装・排水他）
- ・ 1999.03.00 テキスタイル棟周辺整備（舗装・排水他）
- ・ 1999.03.00 二号井ポンプ室周辺整備
- ・ 1999.11.00 メディアセンター粗造成
- ・ 2004.03.31 レクチャーホール周辺整備
- ・ 2004.07.31 本部棟周辺整備
- ・ 2004.10.30 正門周辺整備

## 8 . 上野毛キャンパス



### <上野毛キャンパス>



本館

本学は、法人本部と造形表現学部の置かれる上野毛キャンパスと美術学部並びに大学院の置かれる八王子キャンパスの二学部から成り立っている。

法人本部と造形表現学部の校地となる上野毛は、郊外住宅地開発のために1929年（昭和4）大井町線が上野毛を通り二子玉川まで延長されたことにより、住宅地として発展した。そして、電鉄会社が旅客を増やす為の沿線開発事業として帝国美術学校を上野毛に誘致したことから始まる。

上野毛キャンパスは、戦災により校舎の一部を焼失してしまうが、本学建築科講師佐藤次夫の担当で、



中庭



2号館



3号館

他に数人の建築科OBが手伝って1954年(昭和29)4月に再建が完成した。

その後、講堂(1958年(昭和33))、本館(1960年(昭和35))、1号館(1962年(昭和37))、図書館(1964年(昭和39))、2号館(1966年(昭和41))が建設された。また、講堂は1964年(昭和39)の東京オリンピック開催にむけての環状8号線の道路拡幅計画によって、前庭の半分と講堂建物の一部(作品展示室、図書室)が削除されて現在の形となった。

1989年(平成元)には、わが国では初めて夜間に美術教育を行う美術学部二部を上野毛キャンパスに開設した。この開設にともない、1989年(平成元)に映像・演劇の教育を行えるスタジオや最新のコンピュータ教育環境を整備した3号館を建設した。

1997年(平成9)から始まった八王子キャンパス整備計画の最中に、上野毛でも美術学部二部を造形表現学部として改組をおこない、社会人を中心とした昼夜間制の学部として各学科の充実に力を入れてきた。その間に、法人本部の建物の改装や教室の冷房化が順次行おこなわれ、業務及び授業環境も大幅に改善された。冷房化に関しては、公開講座が本格化してきた2001年(平成13)に講堂を行ったのを最初に、翌年には2号館とB棟、2004年に3号館の一部とA棟を行ない、キャンパス内に全て冷房が設置された。

また、上野毛キャンパスでは社

会人教育の一環として生涯学習に力を入れているが、この人気とともに施設の不足も目立ってきている。

本学は、今後も上野毛と八王子との双方で一つの大学を形成していく。学部や学科の構成が、双方の連携を更に強め双方に不足するものをお互いが補完するかたちで進めるためにも、八王子キャンパスの施設計画第三期の終了に引き続き、少子化に向け、次の時代を見通した更なる改組と上野毛のキャンパスの整備計画を検討中である。

#### < 上野毛キャンパスの改修工事 >

- ・ 1998.10.00 1号館改修 デザイン学科他
- ・ 1998.10.00 本館改修 共通教育
- ・ 1998.10.00 A棟改修 映像演劇学科
- ・ 1998.10.00 B棟改修 映像演劇学科
- ・ 1998.10.00 2号館改修 造形学科他
- ・ 1999.05.00 1号館・本館・2号館改修
- ・ 1999.05.00 上野毛校舎、本館及び1号館3階改修 法人本部
- ・ 1999.05.00 上野毛校舎本館玄関ホール壁面改修
- ・ 2001.04.00 講堂冷房改修
- ・ 2002.05.00 2号館・B棟冷房改修
- ・ 2004.08.00 3号館・A棟冷房改修

## 9 . 附属施設

#### < 富士山麓セミナーハウス（純林苑） >



山中純林苑

富士山麓セミナーハウス（純林苑）は、学生の教育活動並びに研究、研修を行う目的として 1966 年（昭和 41）に山梨県山中湖村に設置された。セミナーハウスの周辺は、国立公園特別指定区となっており、世界に類をみないハリモミ純林の貴重な森林となっている。

< 奈良古美術セミナーハウス（飛鳥寮） >



奈良飛鳥寮

奈良古美術セミナーハウス（飛鳥寮）は、奈良、京都のわが国古美術の鑑賞並びに研究の便宜をはかるため 1965 年（昭和 40）に奈良市窪之庄に設置された。現在も古美術研修の拠点として多くの学生に利用されている。

< 多摩美術大学美術館 >



多摩美術大学美術館

美術館は、1990 年（平成 2）に東京都多摩市に建築された「東京国際美術館」を改装し、八王子キャンパスに設置されていた「多摩美術大学附属美術館」が 2000 年（平成 12）4 月に移転して、「多摩美術大学美術館」として開館した。

美術館では、本学が所有している世界の古美術品、絵画、写真などの収蔵品数百点を定期的に入れ替えて常設展示するほか、年に数回の企画展を開催している。

また、学生の教育の場にするだけでなく、生涯学習講座等を通して広く地域、社会に開放している。

## §はじめに§

大学の公共性という視点から社会貢献をとらえていくなれば、美術大学という環境から生じる本質的な特徴とそれらの多種多様な連関を見出すことができる。

以下、各セクションが見出した、あるいは抽象された内容は、当然のことながら美術・芸術・文化・情報に依拠するといった共通の方向性を持ちながらも、個々のセクション独自の構造をも現す結果となった。

また、今回の分析には含めなかったが、社会への発信としては各学科、各学科間の協力、さらに教員の個人的なものまで視野に入れるならば、そこに数多くの他大学、多機関、多分野との共同研究、展覧会や講演会等々、多数の催事、イベントを行なって来た。

絵画学科油画専攻の南多摩病院における待合室の壁画制作「絵画が及ぼすヒーリング効果に関する研究」や同学科版画専攻の「東京国際ミニプリントトリエンナーレ」、彫刻学科の聖路加病院における「木との語り展」、生産デザイン学科テキスタイル専攻の「国際絞り学会」での活動、環境デザイン学科の「えどがわ伝統工芸産学公プロジェクト」、よみうりランドケアセンターにおける浴室壁画制作「高齢者のいやし空間に関する研究」、八王子市教育委員会パワーアップ講習会への講演・実技講座の協力等々、全ての学科において多様な社会貢献を多数行なって来た。



東京国際ミニプリントトリエンナーレ

CD-ROM 初回



木との語り展（聖路加病院）

## §現状報告・評価§

### 1. 生涯学習センターの活動

#### < 目 標 >

本学では、子供から大人まで全ての人々に美術・芸術の自由な拡がりを開放しようと 2000

年度から生涯学習プログラムをスタートさせた。

2002 年度には「生涯学習センター」を設立し、センターを通して更なる活動を拡大している。

本学の生涯学習は、単に高度かつ専門的な再教育の機会を提供することにとどまらず、芸術に携わる者の使命として、人々と歩みを共にし、真の意味での日常に息づいた文化を創造していくことを目的としている。

既存の価値観が混沌とした現代にあって、<美術＝人類の持った特別で良質な“あそび”>を楽しむ道筋のなかで、実際に見て触れ、感受し、思考しながら、自らで発見していくといった<生々しい視点>を共有し、来たるべき時代の新たな指標と可能性を発信していきたいと考える。



受講風景（生涯学習センター）

生涯学習センターの最大の特徴は、社会人のみならず子供も含め、年齢や職業、経験に関わらず全ての人に開かれているということであろう。

殊に、子供講座は本活動のひとつの大きな柱となっており、他では見られない特徴ある試みと言える。夏休みに実施されている『好奇心の学校 多摩美術小中学校』シリーズや、

土曜日を中心に行われている講座には、年間延べ約 1,400 名もの小中学生がキャンパスを訪れ、美術を様々な角度から楽しんでいる。

本学の講座は、子供に限らず成人であっても、特に初めて美術に接点を持った人がその「始まりの愉」に触れ、自らの手で美術と接していくことができるように構築されている。そのため、単にものを作るだけでなく、見ることや考えることといった柔らかな動作の境域の中で、美術に接することができる場の実現を目指している。

そしてそれらの試みが、学部の授業等では実現しにくい、生涯学習ならではの柔軟な形で、従来の固定化された方法へ新たな挑戦になることを目指している。そのためのアプローチの方法として、芸術全体を広く視野に入れた柔軟かであそびのある視点、講義と演習・鑑賞を組み合わせた総合的手法による探求、1 テーマを複数の講座群からアプローチする編成、また既存の分野・学科を超えた横断的な内容などによって、より本質に迫るための方法を模索し、常に新鮮なプログラムの提供に努めている。

### < 現状報告・評価 >

#### 講座数・受講者数の推移

2000 年度に年間 40 講座で始まったプログラムは、2003 年度には 143 講座にまで拡大した。年間の延べ受講者は、2,491 名（2000 年度）から 4,363 名（2003 年度）と 1.75 倍の伸びを示している。

殊に子供講座においては講座数の伸びが 3.8 倍であるのに対し、受講者数の伸びは 6.9 倍と、子供の美術教育に対する要請と期待とがうかがえる。実際、2003 年度には子供対象の講座数は全体の 2 割強でありながら、申し込み者数は子供が一般を上回ることとなった。また、この 4 年間での講義系講座の質量ともの充実ぶりも顕著である。

このように特徴あるプログラムは、2002 年のセンター設立時、プログラムの企画に関して総合プロデューサーの配置と教員らによる企画会議の設置が行われたことによって可能となった。この 4 年で本学の生涯学習活動の方向性のひとつが示されたと言って良い。

#### 講座構成（以下 内は 2003 年度データ）

1 年を春・夏・秋・冬の 4 期に分け、上野毛、八王子両キャンパスで主に開講されている。9 割 が上野毛キャンパス開講であり、これは、交通が比較的便利であること、学部授業が主に夜間に行われるため昼間のスペース利用が可能なことなどによる。

講座の形態も多様で、1 回完結あるいは短期集中型の講座が 約 4 割、週 1 回または隔週で全 3 ~ 20 回程度の連続型が 約 6 割 の他、開設当初から続く連続講座などもある。

大部分が小規模教室で行われ、講義が主のもの 33%、演習が主のもの 67% となっており、その他に年 2 ~ 4 回開催する講演「芸術と人生」シリーズ（受講料無料）も 11 回を数えた。

時間帯も平日・土曜、昼間から夜間まで、あらゆる受講生の要望に応じ、気軽に受講できるようなシステム構築に努めている。

#### 講師構成

講師は専任教員 59%、非常勤教員 11% の他、大学外で活躍される方を招いての



講座もプログラムの充実に貢献している。

#### 受講者構成

年齢構成は、15歳以下が42%を占める。一般講座では40～60歳代が中心であり、男：女比は3：7と女性が多く、殊に平日昼間の講座では顕著である。受講生の居住地はキャンパス周辺の東京都区南部、横浜・川崎市、多摩地区で84%を占めるが、遠方から通学する熱心な受講生も多い。

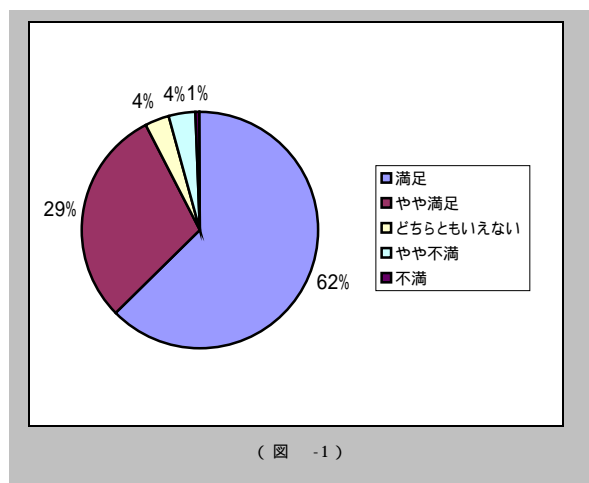
#### 学生・卒業生とのリンク

講座運営にはアシスタントなどとして学生の協力もある年間約200名。学生らにとって一般の方との交流は、大学で学んだことを活かせる場であるのみならず、授業とは違った貴重な経験を得る機会にもなっているようである。また、センターでは講座を学部授業と連動させて行うなど、学生へも成果を還元できる形を試みている。学生の中には、学部授業のほかに生涯学習講座を受講することで、専門分野以外へ眼差しを広げる助けとして活用している者もいる。

さらに卒業してからも、講師として協力を得るだけでなく、美術から遠ざかっていた者が再び制作や学習を始める場として利用したり、親となった若い卒業生が子供を受講させたり、あるいは学芸員や教員として働くなかでワークショップ運営の研究のために見学に来られたりと、卒業生が再度大学へ関わりを持つ場としても機能している。

#### 受講生の意見

##### Q1. 講座の内容に満足ですか？



2003年度秋期・冬期講座受講生から無作為抽出した400名への調査結果が図-1の通りである(回答率42%、子供講座は保護者が回答)。

内容には概ね満足であるという回答が多かった反面、設備・施設面や、講座の設定方法には改善要望が見られた。

##### Q2. そのようにお感じになったのはどのような点ですか(自由記述、回答数が多かったものを抜粋)

(満足している点)

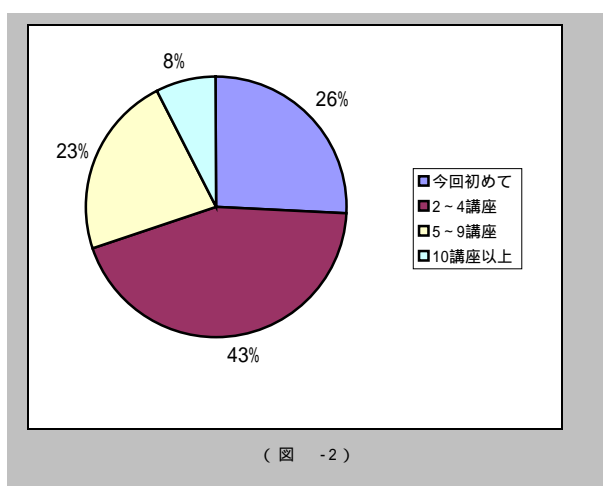
- ・熱心な教え方や質問の受け方など、講師やアシスタントの人柄・対応がよい(38名)
- ・散策や課外授業は、内容が充実していた(19名)
- ・カルチャーセンターとは充実感が違い、美大で学べた、教授から教えてもらえたことは大きな収穫(16名)
- ・〔こども〕帰ってきたこどもが話をする・作品を眺める・続きをするなどとても楽しそうにしていた(15名)

- ・初心者でも丁寧に指導してもらえた(9名)
- ・講義はビジュアル素材が多く分かりやすい(8名)
- ・〔こども〕学校や家庭とは違った体験であり、素材などに対する新たな発見ができた(8名)
- ・強制したり、個性を曲げることがない自由な雰囲気(7名)

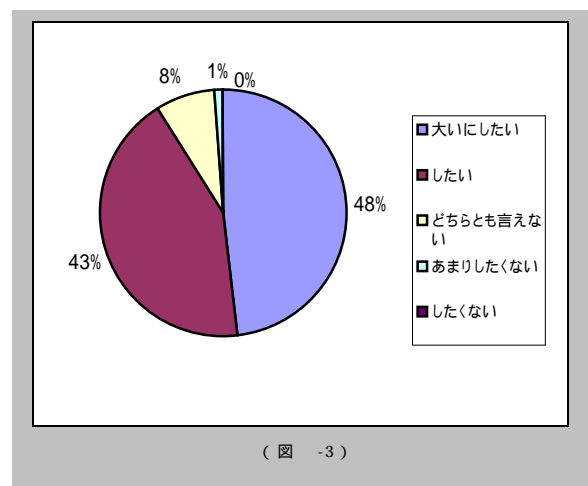
(不満・改善してほしい点)

- ・継続して受講できるようにしてほしい(21名)
- ・大学の施設や、実習機材、講義時のプレゼンテーション機材に不満(19名)
- ・講座の時間・回数が不足(13名)
- ・年間を通して開講してほしい(10名)

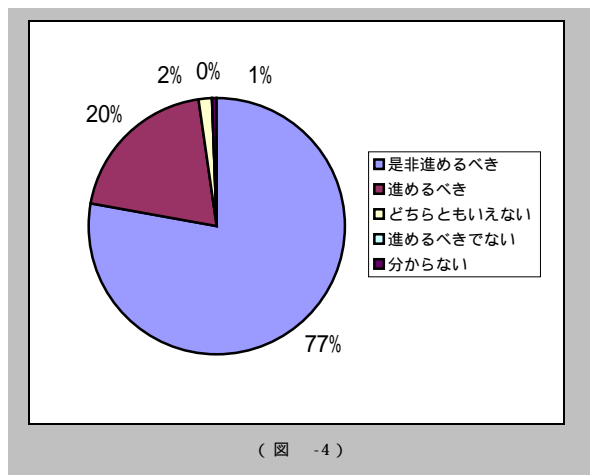
Q3. 今まで本学の講座をいくつ受講しましたか？



Q4. また何らかの講座に参加したいですか？



Q5. 多摩美術大学の生涯学習センターをはじめ、大学を社会に開放することをどう思いますか？



### < 課 題 >

この4年間は、本学の生涯学習活動の創成期であり、ひとつの基盤はできあがったと言える。今後とも、美術・芸術本来の自由さや拡がりを持つコンテンツを発信し続けていくことが第一の課題となるであろう。

その他に、それら講座での試みを、記録や報告としてまとめ、学内外で資源として活かせるような形にしていくこと、地域の文化拠点として、美術館などの文化施設や行政、民間などとの連携の方策を探っていくこと、有職者など新たな受講者層の開拓と講座の可能性を探ること、などが具体的な課題として挙げられる。

今後とも、大学の多層な教育チャンネルの一つとして、一般社会人、子供、在学学生を問わず、好奇心旺盛な全ての人々と大学とを繋ぐもう一つの「回路」として、柔軟な教育活動を展開していきたいと考える。

## 2. 産官学共同研究

### <目 標>

マルチメディアの研究開発教育を目的とするメディアセンターの活動の大きな柱のひとつが、産学官共同研究である。

本学にとって、生産、表現、伝達、情報などの分野における技術や手法の進歩・変化に対応し、あるいは先取りして研究開発教育を進めていくことは非常に重要なことである。また、本学で開発・創作した新しい技術や手法を社会に還元していくことが求められている。そのためには、企業や官庁との共同研究を通して、日進月歩、加速度的に進む技術・手法の開発・創作を追及していくことが必要である。また、第一線の専門家との相互刺激を通して学内を活性化し、知識や技術の発展・向上をはかっていくことが必要となる。

### <現状報告・評価>

2003年度において産官学共同研究の総数は21件・5研究室が関係した。そこには多くの教員・学生がその研究に携わった。その研究分野は多岐に渡っており、その研究の特徴も多様である。

ここでは2003年度に行われた産官学共同研究について幾つかの事例を紹介することにする。まず始めに環境デザイン学科の場合を挙げると、プロセスを大事にして教員がプロジェクトのモチベーションを高めつつ、実施に向けたしっかりとしたサジェッションを行いマネージメントして行くという教員主導の進め方を行っているのが特徴となっている。情報デザイン学科においては、共同研究先からは先端的なテーマが提示されており、NECとのロボット研究は、「対話する」ロボットのデザインというデザイン系の他大学に類を見ない先端の研究テーマもある。また、ATM研究画面での広告の研究については、銀行への各種規制撤廃後をにらんだ、今の時代ならではの時宜を得た研究テーマなどもある。

変わったところではグラフィックデザイン学科は、街の景観整備にむけて地方自治体との取り組みを始めている。建築物と屋外広告物の色彩の現況把握と問題点を抽出し、景観整備の方針と基準の策定を行うことである。

さらに環境デザイン学科の別なチームは、高齢化社会というテーマに取り組んだ研究もあり、シニア体験に始まり、高齢者の家庭への聞き取り調査、生活実態調査、長寿社会研究所の見学及びレクチャー等々、設計前の入念なスタディーを通して「老いと住まい」を提案する。

< 産官学共同研究の活動実績 >

2000 年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	(株)日立製作所デザイン研究所	デザイン	植村朋弘	「モバイル情報機器における愛着のデザイン」に関する研究
2	松下電工(株)	生産デザイン (フタバ外)	和田達也	ハローカルケア&グルミングデザイン
3	イーストマン・コダック社			The Digital Future: Sharing, Memories, Expression
4	(株)日南			時計

2001 年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	(株)サムソン 横浜研究所	生産デザイン (フタバ外)	岩倉信弥	Digital Convergence + harmony
2	富士写真フイルム(株)デザインセンター			Imaging & Information Next
3	(財)中小企業総合研究機構			眼鏡及びその技術を応用した特定分野の新製品の開発
4	(財)中小企業総合研究機構			「有田焼」のデザイン研究開発
5	(株)ソース・ラボ	デザイン	植村朋弘	画面上における知財空間のデザインに関する研究
6	日本電気(株)マルチメディア研究所	情報デザイン	須永剛司	人とロボットのあいだのインタラクション・デザインに関する研究
7	日本電信電話(株)NTTコミュニケーション科学基礎研究所			情報デザインの設定手法による情報共有交換機構の適用システムの研究
8	(財)中小企業総合研究機構	生産デザイン (テキスタイル)	高橋 正	「秩父ちぢみ」の季節限定商品から開放するデザイン研究開発
9	(株)大林組 技術研究所	共通教育	高橋周平	エコメント型防風装置のデザインに関する研究
10	(株)タイムクリエイト	環境デザイン	田淵 諭 岸本 章	サウストリート・アウトドアファニチャーの提案
11	(株)モスフードサービス	環境デザイン	田淵 諭 松澤 穰	新しいモスバーガーの提案
				・店舗の提案
				・システムの提案
				・ファニチャーの提案
				・エレメントの提案
12	三井ホーム(株)長寿社会研究所	環境デザイン	毛網毅曠 田淵 諭	エコー・カルデザインに関する提案
				・高齢者の戸建て住宅
				・地域の高齢者の共同施設

## 社会貢献

				・コミュニティセンター
13	京王電鉄(株)	情報デザイン	吉橋昭夫	工事現場用仮囲いにおける意匠の提案および実施の研究
14	(株)博報堂インフォグラフィクス			M-stage musicホタル検証に関する研究

### 2002年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	松下電器産業(株)パナソニックデザイン社	生産デザイン (プロダクト)	岩倉信弥	10年後の衣食住における未来家電の提案に関する研究
2	(財)中小企業総合研究機構			福井県鯖江地域での新しいデザインとEYEウェア-新商品の開発
4	(財)中小企業総合研究機構	環境デザイン	岸本章	有田プロジェクト-有田焼への提案-
5	日本電信電話(株)NTTコミュニケーション科学基礎研究所	情報デザイン	須永剛司	情報デザインの設計手法による情報共有交換機構の適用システムの研究
6	(株)マキングマシックス	生産デザイン (テキスタイル)	高橋正	高耐候性熱色システム「GRADESS」の用途及び新規市場開発並びに実現可能な画像表現(デザイン)及び使用素材の拡張
7	社会福祉法人誠美福祉会誠美保育園	環境デザイン	田淵諭	誠美保育園園庭改修工事 設計・管理業務
8	富士シティ(株)		松澤 穰	新業態店舗デザイン開発
9	三井ホーム(株)	環境デザイン	田淵諭 平山 達	高齢者の暮らしと生活空間に関する提案
10	(株)東芝デザインセンター	情報デザイン	原田 奏	東芝科学館 Web サイトコンテンツ開発
11	日本電信電話(株)情報流通プラットフォーム研究所	情報デザイン	吉橋昭夫	InfoLeadを用いた情報検索の研究
12	京王電鉄(株)			大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究
13	日本電気(株)マルチメディア研究所			人とホタルの間のインタラクションデザイン (2)

### 2003年度

	共同研究相手先	担当研究室	研究代表者	研究名
1	日本電信電話(株) NTTコミュニケーション科学基礎研究所	情報デザイン	楠 房子	子供向けビジュアル言語の研究
2	オリンパス光学工業(株)映像システムカンパニー	情報デザイン	須永剛司	デジタルカメラの操作性向上に関する研究
3	日本電信電話(株)NTTコミュニケーション科学基礎研究所			インタラクションデザイン手法および関係性指向コミュニケーションメディアの研究
4	(株)日立製作所 基礎研究所			インタラクションデザインの研究

## ・社会貢献

5	沖電気工業(株)金融ソリューションカンパニー金融ソリューション第一本部			情報デザインから見た次世代金融営業店の情報空間(の設計)に関する研究
6	(株)マキシングマシン	生産デザイン (テキスタイル)	高橋 正	昇華転写プリントシステム「GRADESS」の市場開拓の可能性を探る
7	日本コカ・コーラ(株)	グラフィック デザイン	田口敦子	アイテアリスプロジェクトに関する研究
8	川崎市まちづくり局計画部街なみデザイン課			川崎駅周辺環境対策検討調査(市役所通り色彩ガイドライン作成)
9	(株)スリーエフ	環境デザイン	田淵 諭 松澤 穰	新業態店舗デザイン開発
10	スリーエフ・オンライン(株)			情報端末のコンテンツ企画委託について
11	江戸川区 産業振興課			江戸川区と他美大と連携し伝統工芸産業を育成する
12	(株)NECデザイン	情報デザイン	原田 泰	技術情報公開のためのコンテンツ開発に関する研究
13	(株)毎日新聞社 総合メディア事務局			Mqbic システムによるデジタルマンガプレイヤー開発とまんがタウンウェブサイトにに関する研究
14	(株)毎日新聞社 総合メディア事務局			甲南大学ビジュアルデザインに関する研究
15	三井ホーム(株)	環境デザイン	平山 達	高齢者の暮らしと生活空間に関する提案
16	日本電気(株)マルチメディア研究所	情報デザイン	吉橋昭夫	人間とロボットの間インタラクションデザイン(3)
17	京王電鉄(株)			大型ビジョンにおける地域情報のデザインに関する研究(2)
18	沖電気工業(株)			現金自動取引装置(ATM)における伝達メディアとしての効果的表示方法に関する研究(ATM画面による情報提供に関する研究)
19	(株)東芝研究開発センター	生産デザイン (プロダクト)	和田達也	10年後の家庭の中で心を通わすスマートホームのデザインに関する研究
20	(株)本田技研研究所			10年後の新しい生活における未来モビリティの提案に関する研究(「日々を楽しくするモノ2015」に関する研究)
21	(株)リコール人間科学研究所			プレイヤーの後環の機構開発に関する研究
22	(社)福井県眼鏡協会			平成15年産・官・学共同による新デザイン・新機能アイウェアの研究開発事業

表 -1

学生にとっても、研究活動の過程を通して触発され、第一線の専門家の指導を受けながら自分の発想を具体化するために必要な知識や技術を習得し、自己の専門性を高めていく機会を得ることができる。これまでの本学の産学官共同研究活動はいくつもの優れた成果をあげてきており、企業等に高く評価を受けている。さらに、地域開発や産業の啓蒙に関

わる研究は地域の活性化や地域産業の発展に大きく貢献をしている。

実際、社会と関わりながらデザインや制作をすることで、大学教育では経験できない様々な判断や創造性を要求され、それに答えるべく、知力体力をフルに使っている。

相手先が自治体であったりする場合はその地域の社会的問題までも把握することとなる。学内の課題制作では起こりえない様々なトラブルや、外的な要因に振り回されることも多いがむしろ、それこそが実社会でのデザイナーの仕事の現実である。それらに立ち向かい、解決しようとする姿勢や、苦労の後に研究プロジェクトを成功に導いた時の学生の達成感とそれによって得た自信は、まさに得難いものとする。

また、パッケージデザインの研究を進めたグループにおいては、企業担当者のオリエンテーションを受けたりして、マーケティングコミュニケーションの概念を理解し、実践する機会を与えられ、緊張感の漂う制作過程を体験し、プレゼンテーションに対する認識の变革もあった。

関係各位からは総じて高い評価をいただいているようである。特に、学生の「大人としての」きちんとした対応について、学外の方から「素晴らしい」という驚きの声を聞くことが多い。担当教員からは大学で授業を通して知っている学生の「なんとなく頼りない」姿とは、180度異なっており、そのことにしばしば驚かされるという言葉も聴かれた。これも社会で学ぶ効果ではないだろうか。実際、研究成果においても様々な学会において高い評価をいただいている。

#### < 課 題 >

近年、知的所有権に関して、これまでに増して、企業は敏感になっている。共同研究の契約についても、この点で「議論」になることが非常に多い。また、企業側には、特許の専門家や法務部があり、専門的な書面や契約内容を提示されることがほとんどであるが、本学の現在のシステムではそれに対応できていない。特許の共同出願を持ちかけられるケースもあるが、出願費用・維持費用は大学負担しない基本原則がある為実施がままならない状況にある。研究のための緒条件を、どのようにして、より研究に有益で有利なものにできるか、研究の「成果」をどのように権利化するか、どこまで大学の権利として主張・確保するのか、など、現場の教員レベルでは判断が困難な局面に頻繁に出会っており、大学としての基本的な考え方や、制度整備、マンパワーの確保などの対応を早急に望まれる。また、環境デザイン学科では積極的にカリキュラムに取り込み実践し、成果を上げているが、学生を前面に押し出して取り組む産学官共同は、今後さらに学内での連携を深め、共に産学官共同という枠内で学科をこえたカリキュラムとして進めると良いのではないかと。

### 3 . 附属施設の活動

#### 附属メディアセンター

##### < 目 標 >



メディアセンター全景

メディアセンターには分野の異なる6つのセンターが集まって運営されている。上野毛メディアセンターを除きセンターごとに専門小委員会が設置かれ、運営・活動について随時審議され専門領域に応じ運営方針が決められている。

研究センターは、学内・学外とのコラボレーション、学内の共同プロジェクトや共同イベントの企画を行い、広く他大学や企業、諸組織

との共同研究などを推進している。情報センターはネットワーク施設の維持保守、利用状況の監視、障害解析、ユーザー管理やトラブル対策を中心としたネットワークの円滑な管理運営を行っている。映像センターは映像機器・施設の管理、点検、利用者への機材貸出し及び技術的サポートを行っている。写真センターは写真機材・施設の管理、点検、利用者への機材貸出し及び技術的サポートを行っている。別棟の工作センターは工作機械の管理の他、安全に使用するの為の基礎・技術講習を開講しており施設は授業、卒業制作、産学官共同研究等幅広く利用されている。また、上野毛メディアセンターは上野毛キャンパスにおいて映像スタジオ、講堂、写真スタジオ、メディアセンター講義室を管理している。

##### < 現状報告・評価 >

メディアセンターは美術系大学としては初めて全学共通利用できる施設として設計されその目的を達成する為以下のような特徴の有る施設が設置されている。

##### ・メディア・ウォール：

アート、デザインの100年の流れをオーディオ、ヴィジュアル、オブジェ、オリジナルのプロダクト、パネル、写真等の複合的なプレゼンテーション・システムを用いて多角的に展開した常設パノラマゾーンである。



・メディアホール



187 m<sup>2</sup>の広さをもつスタジオ・調整室とで構成され様々なイベント、シンポジウム、撮影、上演、講演、などのプログラムに対応できる多目的施設である。

・メディアルーム



上野毛キャンパスと直結するヴァーチャルデザインスタジオを持ち、新しいスタイルのCSCW（コンピュータ・サポータード・コラボレーション・ワーク）による創造と実験もめざしている。通常は一般的な視聴覚授業に利用できる。150インチのリニアプロジェクションシステムを採用。

・コンピュータスタジオ

コンピュータ・リテラシー教育を目的として設計されている。2階メディアプラザ内の出力ショップからアクセス可能なため、学生はMOなどのリムーバブルメディアでデータを持ち歩くことなく、作品などをメディアセンター内で出力することができる。

・3DCGスタジオ

3DCGスタジオは、映画、ゲーム等で多用されている3DCGを、表現手段の一つとして取り入れることができる環境と講座を、全学生に対して提供している。

・デジタルアーカイブルーム

学内教員作品、学生作品、卒業制作品の情報蓄積だけにとどまらない、独自の情報蓄積（AV情報・電子図書館）を行う。

・共同研究室

各学科間の共同プロジェクトや共同イベント、各教員間の共同研究だけにとどまらず幅広く外部との産学共同研究プロジェクトなどの共同事業を促進する拠点である。個別ブ

ースや多目的オープンスペースである。

・暗室スタジオ



各々20の引伸ばしブースを持つ白黒プリント暗室とカラープリント暗室があるほか、大型引伸暗室がある。

・撮影スタジオ



5.5m幅の白 Horizont 1面で、主光源はタングステン光を採用している。複写スペースも併設している。

・メディアプラザ

パソコン本体や周辺機器、ソフトウェア、デザイン材料、画材などの販売からコンピュータースタジオからダイレクト利用可能な大判出力、カラーコピー、印刷、パネル加工などのサービスがあり、また、自由に利用できるインターネットカフェも設置されている。



・別棟工作センター

木材機械室、樹脂機械室、金属機械室、塗装機械室に分れ機械工作機（マザーマシーン）が設置されている。

工作センターは2002年6月1日から世田谷区、瀬田文教サミット、多摩美術大学との

三者協力事業、交通安全ネームプレートの制作プロジェクトに参加している。2003年1月28日瀬田地区に15作品を設置し、2003年度新たな道のプロジェクトが進行している。地域活動としての「通学路の環境を整える名板作り」関連としてスタートし現在に至っている。産経新聞、日本工業新聞、テレビ東京など多くのメディアに取り上げられている。

## 多摩美術大学美術館

### < 目 標 >



多摩美術大学美術館全景

#### 多摩センター地区への移転・開館

美術館は1999年より準備を進めていた東京都多摩市の中核開発地域である多摩センター地区への移転を行い、多摩ニュータウンの中心的なターミナル駅である多摩センター駅前に同地区としては唯一の美術館として2000年4月1日にオープンした。

この移転については、当初八王子キャンパス計画において新美術館の建設計画も存在していたが、大学の社会貢献、地域参加の拠点として、より多面的で実質的な活動や交流を社会で展開し、キャンパス内施設ではなく市街地区での大学活動という戦略的視点から、「駅前」にある美術館施設の取得が実現した。

実際の施設は地上4階、地下1階の5層構造の中規模建造物であるため、著名な大規模公立美術館のようなものとは異なる、大学が運営する美術館としての特徴や理念を活かした運営を開拓することを前提とした。開館当初の段階では、美術系大学が運営する美術館としては稀有な存在であり、

キャンパス外に美術館を有するのは日本で初めての試みであった。また、従来のキャンパス内施設のとくより収蔵品のみならず企画展を開催し、学生に加えて学外からの利用者を誘致する一般公開に力を入れて来た。この市街地区での美術館の運営展開についても、その方針を発展させ、さまざまな美術活動や芸術資料を学生の社会参加のための糧や刺激にしてもらおうと同時に、一般市民に対しても美術大学から発信していく試みが、広く社会における芸術活動の土壌拡大と発展に役立つことを目指している。

なによりも、美術大学における美術館の存在が、大学内部における教育活動という枠を越え、対社会的な大学の使命を明示する重要な機関として機能することは、定常的かつ広域的に大学の存在をアピールすることとなり、そのフィードバックが大学内に、より多くの情報や事業の交流、連携、そして新規展開の可能性など、大学そのものの発展に大きく寄与することも願ってやまない。

#### キャンパス外施設としての活用

大学施設の一般公開ということを考えた場合、学外利用者にとって、施設へのアクセスは大きな問題

となる。移転前の運営や事業展開においては、まず大学キャンパスまでの移動が、当時としては頻繁かつ簡易に来訪しにくいというイメージが強く、また、キャンパス内においても決してアクセスの良い場所と施設機能があったわけではないため、一般来訪者にはかなりの労力と負担をかけるという課題があった。この点、移転後は多摩センター駅前（徒歩5分以内）の他の商業施設や文化施設の集中する地区に併設されることで、一般利用者のアクセスは飛躍的に負担が減った。また、駅前美術館というイメージは、一般の人たちの生活圏にある文化施設という親近感も増し、美術館への利用者数と理解が増すことが望まれる。

さらに、博物館実習、ワークショップをはじめとする美術館における教育活動は、実地の社会活動の体験や利用者との接点を多く持つことにより、実践的で柔軟性のある学習の機会を提供できる。これは大学や学生、大学関係者の社会参加を促すと同時に、一般利用者にとっても大学機関の活動に参加、体験することで、学術振興の意識（社会における大学の有用性）が高まることも期待したい。

### 地域社会との連携

美術館が設置される地域や社会にとっては、たとえそれが公立であっても、民間であっても、「美術館」であるという社会的機能からすれば、間違いなく「公共的な施設」とみなされる。そうした観点からも地域に対する美術館の位置づけには、広く地域社会に貢献、供与されるべき文化施設という性格も帯びて来る。

そもそも、大学自体も社会全体の学術振興、発展の集約専門機関として、きわめて公共性の高い機関であるという理念に依拠するので、「大学の運営する美術館」という存在は、公立美術館とは違う意味で公共性も高く、社会的信頼度も大きいと考えられる。したがって、大学美術館は地域社会においては、「開かれた大学」を広くアピールする実践的な機関としての使命や責任を伴うと言えよう。

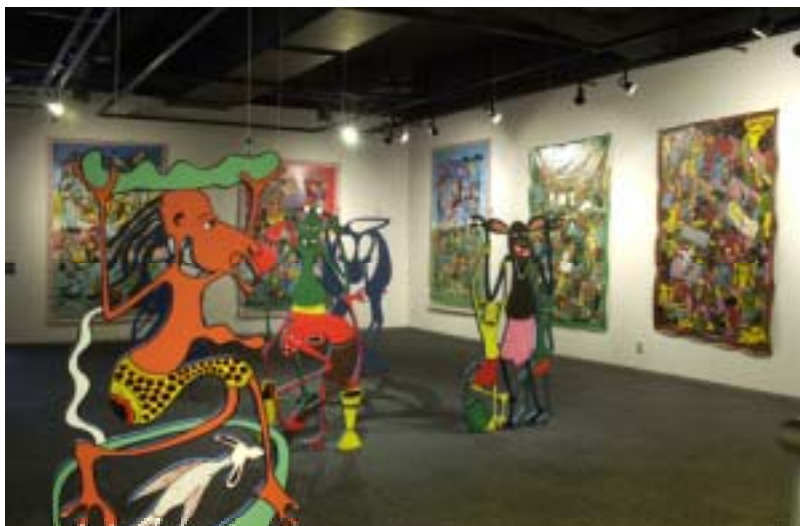
そうした美術館の活動は、美術大学の活動を広く社会に情報や知識を提供するという一面的なものばかりでなく、地域における文化活動や都市問題などについても、さまざまな協力や参加の窓口や、実施場所ともなり得る。それには美術館や大学への協力要請に対応するという社会貢献の受け皿になると同様、地域社会から大学に対するさまざまな支援や供与を有効に活用していく機会を得ることも期待できる。また、美術館や大学からの地域社会に対する提案や働きかけを実現する可能性も大きいと考える。

### < 現状報告・評価 >

2000年4月1日の開館より、以下のような展覧会事業を展開してきた。

#### 2000年度

- 「ベン・シャーン展」 人々へ 20世紀から 【4/1～6/25】
- 「サナーヤ・アフリカ！」 現代アフリカ美術に宿るもの 【7/1～9/3】
- 「イサドラ・ダンカン」 モダンダンス・神話から未来への視座 【9/9～10/22】
- 「プリントコンポジション 2000」 多摩美術大学版画の30年 【11/1～11/19】\*
- 「インドネシア染織の世界」【11/25～2/25】



「サヤ・アカ！」 - 現代アフリカ美術に宿るもの -

2001 年度

- 「所蔵作品展」 アンティークガラス + 彫刻 【3/18 ~ 7/8】
- 「所蔵作品展」 陶と磁 + 写真 【7/13 ~ 8/26】
- 「ズビネック・セカール展」【9/1 ~ 10/15】
- 「現代ポスターの主潮流とその周辺」 バウハウスからスイス派の巨匠へ 【11/1 ~ 1/14】
- 「オーダブル・ビジョン 1913 / 2002」【1/26 ~ 3/3】

2002 年度

- 「毛綱毅曠」 建築に込められたコスモロジー 【3/16 ~ 4/21】
- 「第3回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ展」【4/28 ~ 6/30】\*
- 「竹尾ポスターコレクション ポスターでみるヨーゼフ・ボイス」【7/10 ~ 9/1】
- 「重層する 鏡像曼陀羅華 田保橋淳展」【9/18 ~ 10/7】\*
- 「意向する繊維」 時の波動 展【10/16 ~ 11/4】\*
- 「日韓中教授作品交流展」【11/13 ~ 12/8】\*
- 「武田秀雄 漫画展」 今でも描いて遊んでいる 【12/14 ~ 2/9】

2003 年度

- 「所蔵作品展」 日本の古美術 + ベン・シャーン + 欧州版画 【2/19 ~ 4/27】
  - 「子供の王国絵本黄金時代展」 コドモノクニに集った画家たち 【5/10 ~ 6/8】  
古河市歴史博物館、盛岡市民文化ホールへ巡回
  - 「松本英一郎展」 Works 1968-2001 【6/15 ~ 6/30】\*
  - 「現代の東南アジア美術」 それぞれの視点 【7/11 ~ 9/7】  
福岡アジア美術館へ巡回
  - 「木村一生展」【9/14 ~ 9/27】\*
  - 「福島誠展」【10/5 ~ 10/20】\*
  - 「リヒャルト・パウル・ローゼ展」【11/1 ~ 2/8】  
大阪芸術大学博物館へ巡回
  - 「所蔵作品展」【2/15 ~ 2/25】
  - 「多摩美術大学博士課程展」【3/3 ~ 3/14】\*
  - 「高木 晃展-多摩美術大学退職記念-」【3/23 ~ 4/7】\*
- \*印のものは、大学行事としての交流展や退職記念展、特別展等。



「リヒャルト・パウル・ローゼ展」

年間、5～8事業の展覧会を実施し、1年を通してなんらかの展覧会を鑑賞できるよう、利用者に提供しつづけている。開催する展覧会も、広く美術に関係する多様性のあるテーマと内容から企画している。また、企画展以外に美術館の所蔵作品展や大学行事としての国際交流展や退職記念展もおりまぜながら、大学美術館としてのさまざまな特徴や独自性を活かした展覧会を実施してきた。

展覧会実施に伴う、入館利用者数の状況は以下の表（表 -2）のようになっている。

年度	展覧会名	会期	一般	大・高生	招待	多摩美生	その他	合計
2000 年度	ベン・シャーン	4/1～6/25	3,043	728	589	326	274	4,960
	サナーヤ アフリカ!	7/1～9/3	1,904	329	220	80	741	3,274
	イサドラ・ダンカン	9/9～10/22	564	90	122	46	75	897
	Print Composition 2000							
	多摩美術大学版画の30年	11/1～11/19	287	63	354	109	76	889
	インドネシア染織の世界	11/25～2/25	1,464	207	84	68	126	1,949
<b>2000年度 合計</b>			<b>7,262</b>	<b>1,417</b>	<b>1,369</b>	<b>629</b>	<b>1,292</b>	<b>11,969</b>
2001 年度	所蔵作品展 Part. ガラス+彫刻	3/18～7/8	1,281	184	100	118	129	1,812
	所蔵作品展 Part. 陶と磁+写真	7/13～8/26	231	43	4	23	170	471
	ズビネック・セカール	9/1～10/15	314	35	63	121	86	619
	現代ポスターの主潮流とその周辺	11/1～1/14	856	491	268	314	156	2,085
	オーダブルヴィジョン 1913/2002(同時開催:所蔵作品展)	1/26～3/3	438	117	73	40	50	718
<b>2001年度 合計</b>			<b>3,120</b>	<b>870</b>	<b>508</b>	<b>616</b>	<b>591</b>	<b>5,705</b>

2002 年度	毛網毅曠 建築に込められたコスモロジ ー	3/16～4/21	365	107	179	209	85	945
	第3回東京国際ミニプリント・トリエンナ ーレ 2002	4/28～6/30	1,225	230	254	328	251	2,288
	ポスターでみるヨーゼフ・ボイス(同時開 催:所蔵作品展)	7/10～9/1	503	179	72	57	377	1,188
	田保橋淳展-重層する鏡像曼陀羅華	9/18～10/7					951	951
	意向する繊維-時の波動	10/16～11/4					1,368	1,368
	日韓中教授作品交流展	11/13～12/8					769	769
	武田秀雄の世界	12/14～2/9	471	109	45	58	110	793
<b>2002年度 合計</b>			<b>2,564</b>	<b>625</b>	<b>550</b>	<b>652</b>	<b>3,911</b>	<b>8,302</b>
2003 年度	多摩美術大学美術館所蔵作品展	2/19～4/27	278	56	66	47	65	512
	子供の王国 絵本黄金時代展	5/10～6/8	1,537	231	193	200	211	2,372
	松本英一郎展 works 1968-2002	6/15～6/30					1,684	1,684
	現代の東南アジア美術	7/11～9/7	789	158	99	32	597	1,675
	木村一生展-多摩美術大学退職記念-	9/14～9/29					923	923
	福島誠展-多摩美術大学退職記念-	10/5～10/20					649	649
	リヒャルト・パウル・ローゼ	11/1～2/8	820	426	129	482	229	2,086
	多摩美術大学所蔵作品展	2/15～2/25	53	13	4	11	27	108
	多摩美術大学博士課程展	3/3～3/14					405	405
高木 晃展-多摩美術大学退職記念-	3/23～4/7					426	426	
<b>2003年度 合計</b>			<b>3,477</b>	<b>884</b>	<b>491</b>	<b>772</b>	<b>5,216</b>	<b>10,840</b>
<b>2000-2003年度 合計</b>								<b>36,816</b>

(表 -2)

多摩センター地区開館からの入館利用者の推移にみられる傾向としては、2000年度が同地域における新装開館、またキャンパス外の大学美術館という話題性も手伝って、開館記念展で5,000人弱の数値を上げたものの、それ以降は徐々に縮小していく。2001年度、2002年度もやや低迷を続けながら、年度始めや秋の主力となる企画展には増加の傾向がみられた。しかし、これが2003年度になると、年度始めより利用者数はほぼ安定し始め、特に企画展時の利用者数と関心度は促進しているように感じる。また、一般の公立館や商業施設内美術館などで争点となる招待利用者数も決して突出した数値ではない。

この傾向は美術館の立地である駅前地区の利用し易さを、学外利用者が次第に認知、定着させて来た結果と理解している。また、美術大学の運営する美術館としての特徴をアピールする上で、目玉となる定番のコレクション展示などに依存せず、美術大学や芸術分野の多様性をイメージさせる、バリエーシ

ョンに富む企画展の実施をこころがけたことで、観る側の選択肢と未知のものへの興味を誘発した。特に、2002～2003年度にかけては絵画、彫刻などファインアートと並ぶ、もうひとつの美術大学の顔といえるデザインについての企画展にも力を入れたことは、さまざまな反響と賛同を得た。

開館以来3年の期間を経たことで、多摩地域での美術館の存在も定着し始めた。開館当初の物珍しさ的な反応の後、興味本位な来館者の需要はむしろ縮小傾向になり、入館利用者数も一時落ち込みを見せた。これは、美術館の展覧会情報等の広報活動に多額の資金を投与して、商業的PRまで利用しようという路線をとらず、必要最小限の告知手段と公的な広報媒体への情報提供に留め、地道で草の根的な情報提供と利用者誘致を働き続けたことも影響している。しかし、その効果は次第に、近在の住民、多摩センター地区を利用する通勤、通学者を中心に、複数回の来館利用をするリピーターが目立つようになり、来館以外でも、電話、Eメール等での催し物の問い合わせ件数も増加傾向が出て来ている。また、当初より主要ターゲットとしていた実施企画内容を周知した目的型利用の増加とは別に、受付窓口にて、開催、展示内容を確認してから入館する、いわゆる「飛び込み」利用者も目立ち始めている。

同時に、地域における美術館の存在は、単なる来訪だけの目的ではなく、他の美術館やギャラリー、開催中または開催後、予定の展覧会についての情報を問い合わせるケースも増えている。また、美術館、展覧会というテーマに限らず、広く美術に関する情報や知識についての問い合わせや照会について対応する機会も増えている。

これらの状況を鑑みるに、小規模ながら特徴的な企画展を継続するという地道な運営であり、さまざまな商業メディアや広告活動の露出がほとんどない状態のため、絶対的な入館利用者数が他の著名な公立美術館や商業施設内美術館等との比較では見劣りするものの、数値的に現れない細かな反応や反響の積み重ねは、少なからず多摩美術大学美術館の存在と活用を地域社会にアピールする効果を与えていると考えられる。

美術館の来館利用者における美術館認知の浸透に伴い、より広域的な地域参加や社会貢献の機会も増えて来ている。多摩市および多摩ニュータウン地区では、唯一の美術館施設として運営を行っていることもあり、多摩市、八王子市などの自治体や近隣の事業所からの協力依頼や連携申し入れが様々なケースで寄せられている。また、多摩地区に限らず、遠隔の自治体や美術館、博物館、また各官公庁等との連携や協力関係も築かれて来ている。

具体的には、以下のような事例があげられる。

多摩市主催の市民公募展「TAMA デ アート」の企画協力

多摩市複合文化施設（パルテノン多摩）での企画展への協力

多摩センター駅前地区の「いきいき TAMA ふれあいフェスティバル」への参加

多摩センター駅前地区のクリスマスツリー企画協力、紹介（生産デザイン学科）

多摩市多摩センター活性化推進室との連携

京王線駅舎工事外壁デザイン企画協力、紹介（情報デザイン学科）

京王 SC ウェブサイトデザイン企画協力、紹介（情報デザイン学科）

八王子市立美術館建設準備協力

富山県福野町文化施設（ヘリオス）への企画協力

この他、美術館で実施してきた企画展の中でも、外務省の日本アセアン年（2003年度）の文化事業とし



て国際交流基金、シンガポール国立美術館との共催で行った「現代の東南アジア美術」のように各省庁、機関との協力体制の下に推進されたものもある。

美術大学が運営する美術館という特異性と、美術大学の知名度や信頼度もこうしたリファレンス、サポート活動の需要には大きく作用しているが、美術館が単なる作品展示、収蔵という機能だけではなく、そうした基本機能の延長として、様々な情報収集、交換の機能を有することにも起因している。特に美術館は他の大学施設以上に外部に対しての露出やアピール度も高く、大学そのものよりもアプローチしやすいという印象を与えているようである。現状としては、美術館業務として可能な範囲でできるだけ極めの細かい対応と、学内各部署との連携や連絡を心がけている。

### <課題>

多摩センター地区にはまだ公立美術館的な文化施設はなく、今後新たな建設の見込みもない状況から、市民や行政側から本学美術館に対する期待は、今後ますます高まるものと考えられる。

大学施設と地域の連携という観点より美術館の立地や地域連携について展望するならば、より地域社会の需要やサービスという考えを考慮した事業展開や対応を行う必要性を感じるが、大学としての自律性や独自性を活かした機軸も重要である。大学美術館が他の商業目的の文化施設とも違い、また運営上の制約を受けやすい官営施設などとも異なるオルタナティブに存在として、地域社会からの信頼や期待を持たれることには、そうした要素も大きく作用していると思われる。

今後も、実験的、拡張的、また基本的な美術啓蒙のため美術展や講座事業の企画運営も推進していくと同時に、更なる対外的な行政や公共機関、民間企業等との提携や協力事業なども推進、着手していくことも検討していきたい。今までの事例同様、美術館での対応という範囲にとどまらず、大学の各部署への橋渡し、連動といった柔軟な対応も必須であると考えている。

その意味では、そうした対応力に見合う美術館運営の体制強化や見直し、様々な外部および学内に対するネットワークの強化も重要な課題といえよう。これはある意味、美術館施設のハード的な側面以上に重要な運営資質となっていくであろう。特にこうした活動には、キーパーソンとなるスタッフや関係者の活動体制や人員配置、業務分担などのバランスや許容量が適切に施されることも重要であり、そのための対策も検討していくべきだと考える。

そうした学外への対応のための学内との連携や理解向上を、学生や教職員全体に浸透させていくことは重要な課題であり、在学生に対する美術館利用の機会の拡大と利用率の向上とともにより大きな効果をあげていく必要があると考える。

また、ミュージアムボランティアや友の会システムの導入といった市民や在学生、卒業生などが美術館の運営に関わる可能性を増やしたいが、受け入れ体制やシステム導入のための設備的状况を十分なものにすることが条件となり、なかなか早急な実現は難しい。その意味では美術館の地域への対外活動という形で、館外での事業展開や公共施設、企業空間へのアプローチも今後とも積極的に推進していく可能性を伸ばしたいが、そこに学内各部署のみならず学生、および卒業生などの大学に関係する有効な人材の活用やチャンスメイキングがあるべきだと考える。

美術館を通して、大学全体のイメージ戦略や社会貢献の中継点としての可能性を拡げるためには、学内的な連携の強化と学生の美術館に対する関心度や利用機会をより拡張することも重要と考える。具体策として、大学カリキュラムやとの連動や様々な研究活動との

連携にも、これまで以上に積極的かつ慎重に取り組んでいきたい。

## 附属図書館

### <目 標>

美術大学の図書館として日々学生および教職員の教育と研究を円滑に進めるため、美術という分野に内包されるあらゆる領域の資料を保存し、提供する。

また、図書館は単に本の貸出のためにだけあるのではなく、必要な情報を得るための機関でもあり、そのための重要な機能である参考業務（レファレンス・サービス）に重点を置き、常に新たな知識と情報を収集し、利用者へ提供する。現在図書館職員一丸となって力を注いでいる。

資料の多くを保存する八王子図書館（八王子キャンパス内）と、上野毛図書館（上野毛キャンパス内）があり、相互に専門分野である美術を中心に歴史的資料はもちろん、最新の資料を収集・保存している。

### <現状報告・評価>

#### 八王子図書館

蔵書数：和書約 7 万冊、洋書約 4 万冊、合計約 11 万冊。雑誌約 1,500 種類。

授業で必要となる基本資料から、専門的な研究資料までを含めた幅広い蔵書構成をとっている。特に美術関連の雑誌と外国の展覧会カタログ、作品目録（カタログ・レゾネ）の収集に力を入れており、その他の資料とともに学外研究者の利用も多く、質的に高い蔵書構成をめざしている。



八王子図書館の開架書庫と閲覧室

所蔵数	2001年度	2002年度	2003年度
図書(冊)	110,582	113,753	117,551
雑誌(種)	1,358	1,369	1,526

(表 -3)

貸出冊数(冊)	2001年度	2002年度	2003年度
学生	11,561	15,105	14,623
教職員	1,177	1,607	1,162
合計	12,738	16,712	15,785

(表 -5)

受入雑誌種数(種)	2001年度	2002年度	2003年度
和雑誌	668	634	681
洋雑誌	220	206	203
合計	888	840	884

(表 -7)

貸出利用者数(人)	2001年度	2002年度	2003年度
学生	8,852	10,486	10,266
教職員	544	564	602
合計	9,396	11,050	10,868

(表 -4)

受入図書冊数(冊)	2001年度	2002年度	2003年度
和書	1,711	1,407	1,552
洋書	1,811	1,827	2,313
合計	3,522	3,234	3,865

(表 -6)

### 上野毛図書館

蔵書数：和書約3万5千冊、洋書約1万冊、合計4万5千冊。雑誌約320種類。  
 故瀧口修造氏(1902～1979)の旧蔵書を中核とした瀧口文庫ならびに、故北園克衛氏(1902～1978)の関係資料からなる北園文庫を所蔵している。前者はダダ・シュルレアリスム関連の図書、ポスター、美術品など1万点からなり、後者は小規模ながら北園氏の個人詩集全冊と北園氏主宰の雑誌「VOU」全冊、自筆原稿、自筆句帖を含む貴重なコレクションである。両者ともに戦前から活躍した詩人・美術評論家であると同時に造形作家としても著名であり、近現代芸術研究にとって貴重な資料である。



上野毛図書館の開架書庫

両館とも、それぞれの学部、学科構成を視野に入れた資料の構成を心がけており、更なる資料の充実を図るべく努力している。

外部からの資料の検索を可能にすべくOPACをインターネット上に公開している。現在、そのデータの量は全資料の約7割程度である。全資料をデータベース化するのはもちろん、質の高いデータを利用者へ提供できるようにしていきたい。

また、瀧口、北園文庫のデータベースの一部もインターネット上に公開している。その内容は、1) 瀧口、北園文庫の由来とその概要、2) 瀧口修造・北園克衛年譜、3) 瀧口文庫目録(ダダ・シュルレアリスム専門図書・美術カタログ)、北園文庫目録、4) 瀧口、北園文庫資料の紹介と研究などである。

資料自体の公開も機会をみて行って来たが、今後はデータを充実し、多くの人に利用して欲しい。

2002年4月に相模原市と相互利用に関する協定を締結した。この協定により、相模原市民並びに本学の学生および教職員の図書館相互利用の利便がはかられた。また、この協定は相互の図書館の蔵書構成を補完するものとしても機能しており、公共図書館、大学図書館それぞれのメリットを生かすものとなっている。

#### < 課 題 >

基本的文献資料としての図書・雑誌の充実を図り、「書籍」という形態以外の資料収集にも努めなければならない。

利用と保存という相反する問題に対応すべく、資料のデジタル化など有効な手段を取り

入れていく必要がある。

従来型の保存図書館としてだけでなく、情報発信型の図書館として、施設、運営両面からの充実をはかっていきたい。

## 4．高（中、小）大連携

### < 目 標 >



多摩美術大学  
多摩美術大学・鎌水小学校

1991年6月の大学設置基準の一部改正により、学生以外の者を科目等履修生として受け入れ、その学習の成果に適切な評価を与えることができるようになった。また1998年12月3日（10教指高第164号）には都立高等学校長の都立高等学校での学校外における学修の単位認定に関する指針が示された。それらにより高大連携の実施の環境が整い、実施がし易くなって来たといえる。

本学は高等学校のカリキュラムの多様化、専門化が進んでいる中、高校での学習を基礎に大学での学習を深めたいという生徒のニーズ、大学の授業を受講することで大学進学の意味を考えさせたいという高校のニーズに対応して来た。実際に高大連携授業を実施している東京都立片倉高校生徒の本学への志願者数は増えて来ている。

社会貢献の視点からも高（中、小）大連携を通して高（中、小）校生自身のニーズを理解し、美術・造形教育の振興に繋がるような息の長い連携が求められていると考えている。

### < 現状報告・評価 >

高（中、小）大連携は始まって間もないこともあり、実績として行なわれた連携授業は片倉高校と鎌水小学校の2校である。

#### 東京都立片倉高等学校との連携

片倉高校造形美術コースの生徒を対象とし、「大学での高度な学習を体験し、より一層の学習意欲と技能を高め、将来の進路について考えさせる一助とする。また高校教育と大学教育との連携教育を促進するための手だてとする」という目的で連携授業が開始された。

2000年3月末より授業内容や授業形態、実施日程等を両校で協議し、2001年度から毎年連携授業を実施している。絵画学科版画専攻が開始当初から実施し、実施形態は実技教科である美術の特性を生かして短期（例年、本学のオープンキャンパス1日と夏期休暇中の4～5日間）で行なわれている。授業内容は高校の施設・設備では学習できない内容を考え、版画や素描の学習を中心に行っている。実技内容についても大学1年生が学習する内容にして、高校では学べない技術の習得ができるよう設定している。

専門性を強くした授業を行ないたいこともあり、版画講座も木版画、銅版画、リトグラフの3版種から高校生が最も体験したい版種を決めることができる。本学でも一つの版種に対し、教授1人、助手2～3人ついてきめ細かい指導を心がけている。

(表 -8 は絵画学科版画専攻と片倉高校間で連携授業を行なった実績である。)

年月日	内容	受入数
2001/7/13.14 オープンキャンパス および 7/27.28	石膏デッサン、木版画、銅版画、リトグラフ	18名(高2.3)
2002/7/13 オープンキャンパス および 7/22.23.24.25	木版画、銅版画、リトグラフ	22名(高2.3)
2003/7/12 オープンキャンパス および 7/22.23.24.25	木版画、銅版画、リトグラフ	9名(高2.3)

(表 -8)

### 八王子市立鏈水小学校との連携

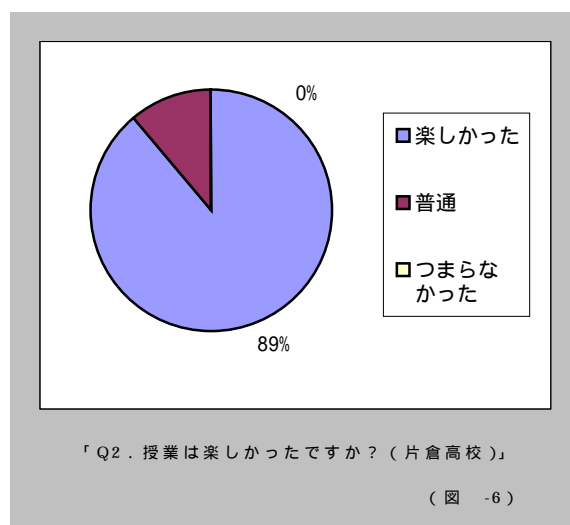
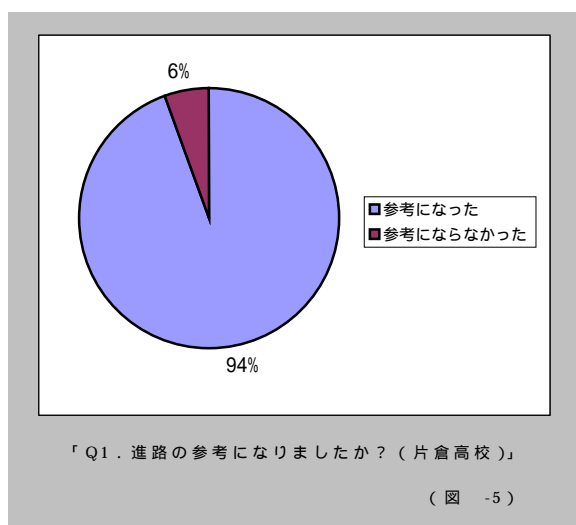
鏈水小学校との連携は、「小学生の創造性支援」というテーマの大学側の研究から端を発した。1999年度に情報デザイン学科より発案、工芸学科、グラフィックデザイン学科、生産デザイン学科プロダクトデザイン専攻、生産デザイン学科テキスタイルデザイン専攻、環境デザイン学科の共同研究として八王子市教育委員会に協力を求め、同じ八王子市にある鏈水小学校を選定した。当初は大学側から持ちかけた話であったが、交流を進めていく中で小学校側からも要望を示してもらい、双方の目的が合致する形になっていった。つまり、連携の意義をお互いが見つめ直し、新たなメリットを見出していったのである。

大学側としては小学生の創造支援に取り組み、本物の造形教育に触れることによって子供は何を感じるのかを探ることができる。それ以外にも参加学生が小学生の指導に加わることで学生自身が教育・研究効果をあげることができ、また大学の在り方や方向性を再考する機会になった。小学校側からは、高い専門性をもつ大学の造形教育にふれることによって造形教育授業の研究にもなると歓迎された。開かれた学校づくりを進めるため、地域の学校との連携、交流をはかることができたと言える。(2000年度は図 -9の内容で行なわれた。)

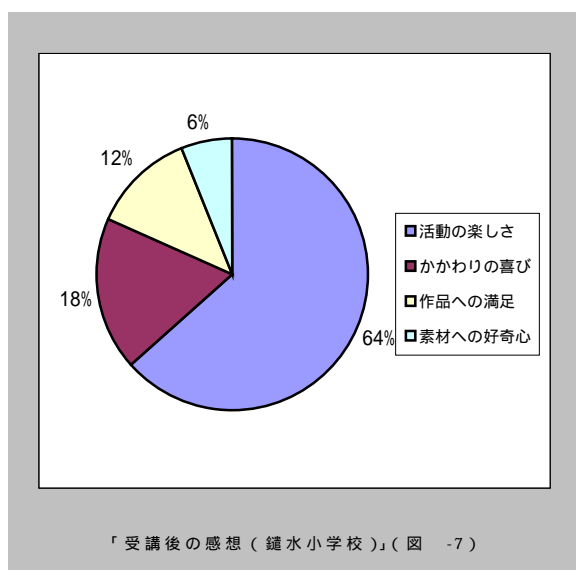
年月日	内容	受入人数	学科
2000/5/12	フェルトを使って	羊毛からフェルトボール、お面を作成する	38名(小5) 生産テキスタイル
2000/6/29	ダンボールのいすの模型作り	段ボールでいすの模型を作り、色つけをする	40名(小5) 環境デザイン
2000/7/5	パソコンを使ったグラフィックデザイン	パソコンを使って移動教室の思い出を写真やイラスト、文章にまとめレイアウトを工夫する	41名(小5) グラフィックデザイン
2000/7/14	段ボールのいす作り	多摩美大のオープンキャンパスに参加する	40名(小5) 環境デザイン
2000/12/14	アニメーションの作成	小学生がキャラクターデザインを作成し、それをもとに大学生がアニメーションを作成する	40名(小5) グラフィックデザイン

(表 -9)

< 課 題 >



片倉高校生徒の受講後のアンケート結果を見ると、大多数の生徒が大学での学習での大学の様子を知り、自らの進路の参考になったと答えている。高校生にとってはこの事業は進路啓発と結びついているのが分かる。(図 -5、6：2001年度片倉高校生アンケート結果)



一方、鑓水小学校生徒の受講後のアンケートを見ると、美術活動の楽しさやかかわりの喜びなどが多いことが分かる。(図 -7：2000年度鑓水小学校アンケート結果)

同様に本学の学生側の意見としても、交流授業によるかかわりの中で、少なからず色々な面で刺激を受けていることが明らかになった。受講生に「教える」という立場を意識することによって環境や発想、意欲、表現方法など、様々な観点で自分の造形活動を、そして自分自身を見直すきっかけになったようである。どちらの連携授業も今後も行なって欲しいとの要望が多く、双方の美術・造形教育への動機づけとなっていると言えよう。

< 課 題 >

連携することの意義は、実際に連携をすすめる中で、様々な立場から検証していくことによって明確になるものであると言える。また、連携が継続・発展していくためには、双方にあるメリットを明確にして、それらを一層確かなものにしていくための努力が必要である。さらにはメリットを当初からねらい（ニーズ）として明確に位置づけるといった、いわば新しいニーズの開発が必要である。そして、片側のニーズだけでなく、双方のニーズがいわば相乗りする形にしていくことが重要な視点になっていくであろう。

## §おわりに§

大学の歴史の中で培ってきたもの、知識や表現を広い意味で社会に還元していくことが現代社会における大学の大きな存在意義となって来ている。

これまで多くの発信を本学は進めて来たが、いまだコミュニケーションという意味での情報交通の多くは研究機関と学生との間のものであり、社会へ向けての交通量が活発であるとは言えない。

社会貢献といった活動は、本学の社会における存在意味、その価値を理解してもらうことのほかに、研究機関としての必要性を問うための方法論でもあり、現代社会の中で美術・芸術・文化の重要性を伝え、それらを社会において具現化するための道具でもある。



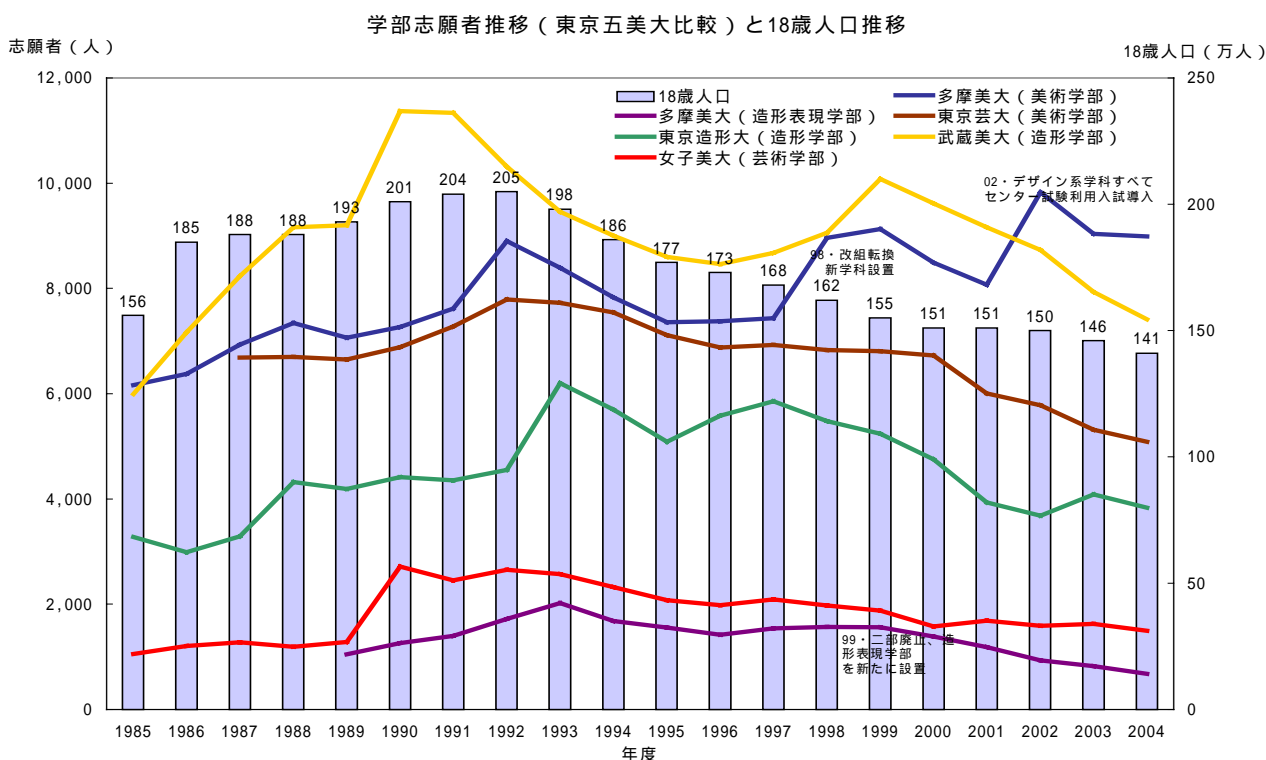
## §はじめに§

入学・卒業グループにおいては、「受験生が大学に何を求めているのか?」、「社会が卒業生に何を求めているのか?」という観点から、「需要」を測ることを目的とした。なお、「需要を測る」という主旨から 2000～2003 年度という期間を取り払い、長期的な推移を検証することとした。

## §現状報告・評価§

### 1. 入学について

#### 志願者数



(図 -1)

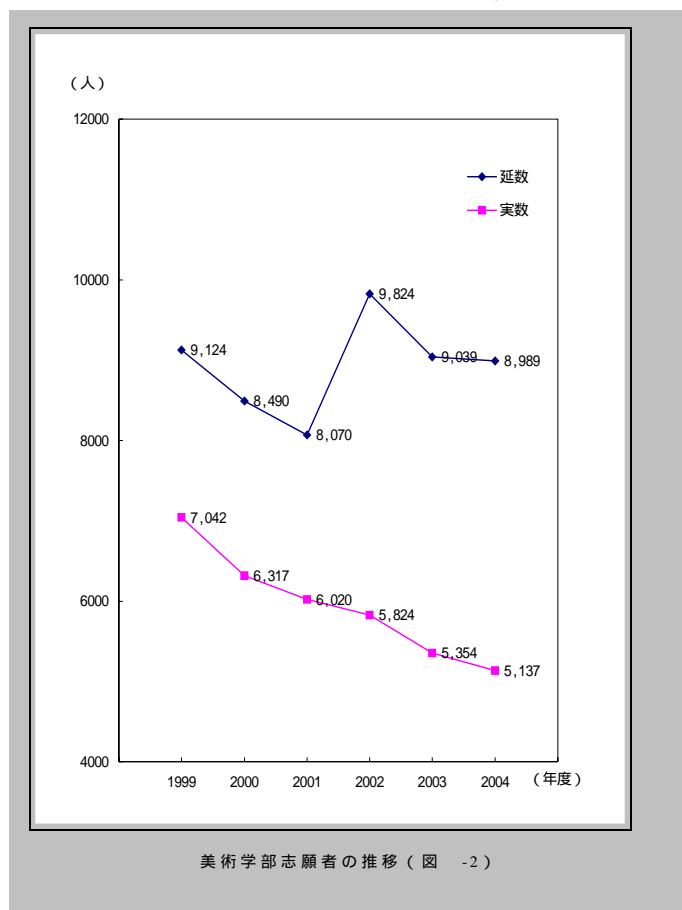
#### <分析・報告・評価>

18歳人口 200万人時代から、他の主要美術系大学の志願者数が減少しているなか、本学美術学部の志願者数は年度によって多少の波はあるが、全体的に右肩上がりを示している（図 -1 参照）。これは主に 1998 年度の改組転換・新学科設置、また 2000 年度入試で一部の学科が取り入れ 2002 年度からデザイン系学科すべてが導入した、センター試験利用入試などの入試改革が成果としてあげられる。センター試験を利用することによって同一学科を 2 回出願することが可能になり、また試験日程なども工夫され一人が美術学部内を最大 10 通り出願できるようになっている。

< 課 題 >

しかし、一見好調に見える志願者数も、併願の増加による志願者延数であり、現実的な志願者実数は大きく減少していることを認識しなければならない。

1999年度7,042名いた志願者実数も、2004年度には5,137名と約30%減少しており、これは同時期の18歳人口が約10%の減少率であることを考えると、かなり危機感を持たなければならない(図 -2 参照)。また造形表現学部は、状況がもっと深刻で、社会人教育を念頭においてはいるが、一般入試の志願者は約60%の減少で、18歳人口の減少ということだけでは説明しにくい状況がある。



美術系大学志願者の内、優秀な層は限られている。これら優秀な学生確保のために、今後ますます、美術・デザインを志望するところざし高く、質の良い受験生に、本学を第一志望と考えてもらえるような魅力ある大学づくりをしていかなければならない。

また他の美術系大学とも連携しながら、小・中学校の早い段階で意識づけを行い、美術・デザインを学びたいという層のすそ野を、拡大していくことも必要になって来るだろう。

**倍 率**

一般的に倍率には2種類の計算方法がある。

**ア) 志願倍率 (志願者 ÷ 入学定員)**

入学試験前、出願終了時に発表する倍率

**イ) 受験倍率 (受験者 ÷ 合格者) 合格者は補欠繰上合格者を含む**

入学者が決定した後に発表する実質倍率で、受験生にとって重要な指標

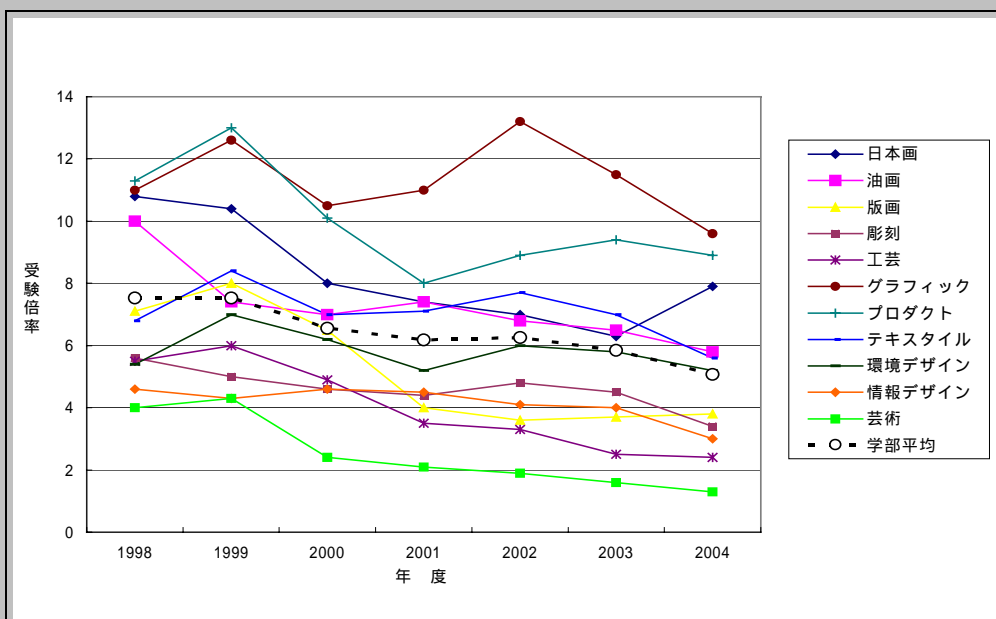
(図 -3 ~ 6 参照)

これまで学内において倍率の定義が統一されていなかったため、今回その定義づけを行

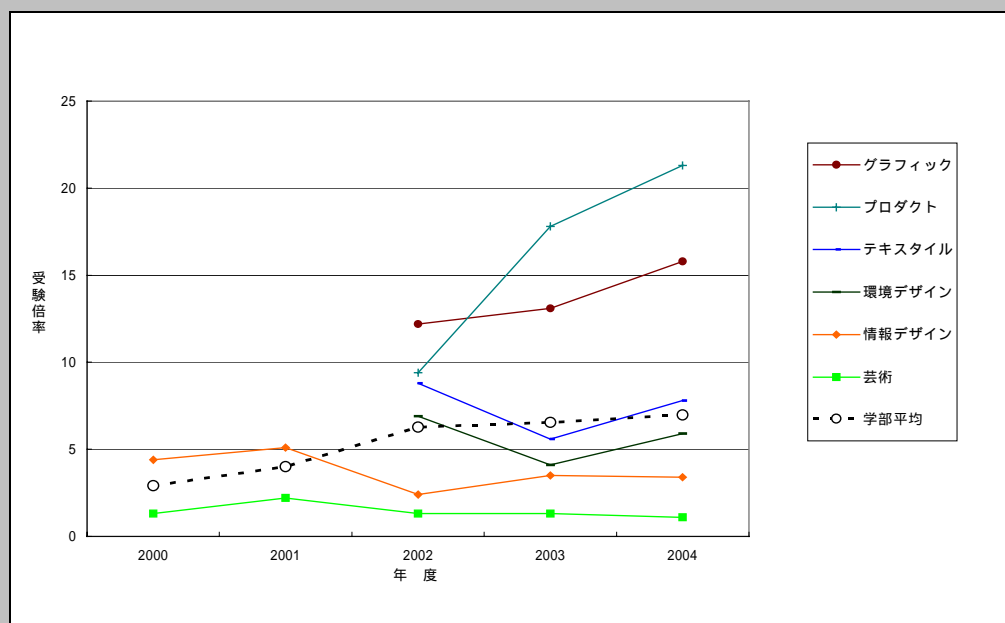
った。美術学部は 1998 年度から、造形表現学部は 1999 年度から、新たに入試結果資料をまとめなおした。特に、受験倍率を出すために、合格者は補欠繰上合格者を含む数を集計したことは特記事項であろう。

受験倍率は、入学定員が異なっても一定の基準で、志願倍率では伝わりきれない、外部からみたそれぞれの需要度が分かるものである。

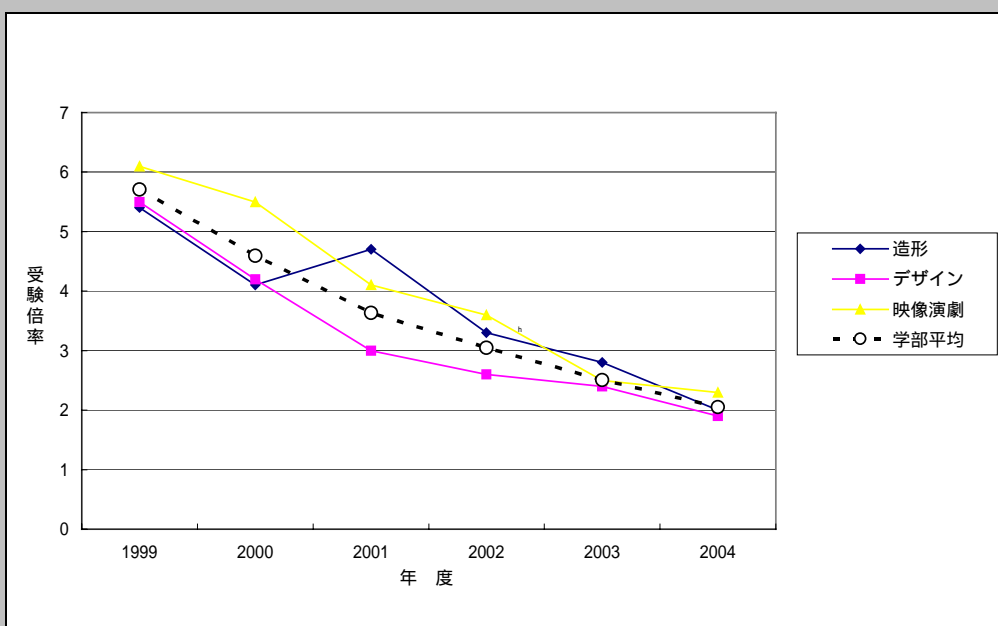
< 分析・報告・評価 >



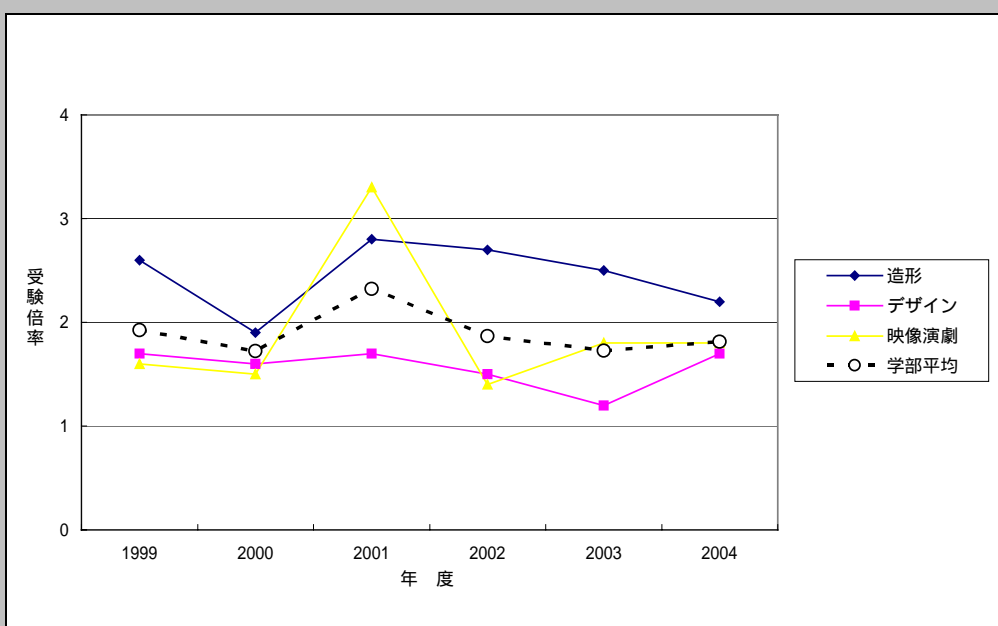
美術学部（一般入試）受験倍率とその推移（図 -3）



美術学部（センター試験利用入試）受験倍率とその推移（図 -4）



造形表現学部（一般入試）受験倍率とその推移（図 -5）



造形表現学部（社会人入試）受験倍率とその推移（図 -6）

ここ数年、美術学部の一般入試の志願倍率は横ばいであるが、受験倍率は全体的に緩やかに下降している。各学科間で受験倍率の差も激しいため、はっきりとは言い切れないが学内併願の多さが影響し、一人がいくつもの学科（試験方式による同一学科内も含む）に合格して、受験倍率を下げていることもある。また、当然のように、合格しても他大学へ逃げてしまっていることもある。これは歩留まりに関係することで、今後それぞれの学科

---

でしっかりと読み解いていく必要があるだろう。特にセンター試験利用入試を実施している学科の併願については必ず調査が必要である。

また造形表現学部は、社会人入試は比較的安定しているが、一般入試は志願者数と同様に全学科が大きく下降している。これも学科ごとで読み解くことは重要だが、学部として見直す必要があるかもしれない。

#### < 検討・課題 >

しかし、ここで注意しなければならないのは、受験倍率イコールその大学の魅力だと安易に結びつけてはいけないことであろう。受験倍率はひとつの指標ではあるが、極端に言えば、受験倍率が低くても、受験生の質が高いことの方が重要であり、倍率が見せかけのブランドでは困るのである。やみくもに試験内容を優しくするようなことはできるだけすべきではないだろう。ただし、入学後どのような人材でも、優秀な人材として社会に送り出すことができるという方針がある場合、それはひとつの戦略として考えることもできる。

上記のように、受験倍率だけを断片的にとりあげるのではなく、入学時の質をより高める教育内容、また社会にどれだけの人材を送り出せるのか等を総合的に判断して魅力ある大学であるかどうかを考えていく必要があるだろう。

## 美術学部

## 1998 年度（一般入試）

学科・専攻・コース	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
絵画学科日本画専攻	35	496	475	44	35	10.8	14.2
絵画学科油画専攻	135	1715	1627	162	133	10.0	12.7
絵画学科版画専攻	35	414	375	53	35	7.1	11.8
彫刻学科	30	271	256	46	33	5.6	9.0
工芸学科	60	444	431	78	62	5.5	7.4
グラフィックデザイン学科	185	2468	2402	219	180	11.0	13.3
生産デザイン学科（プロダクト）	30	531	497	44	29	11.3	17.7
生産デザイン学科（テキスタイル）	40	513	495	73	45	6.8	12.8
環境デザイン学科	80	819	759	141	84	5.4	10.2
情報デザイン学科	120	894	835	181	125	4.6	7.5
芸術学科	60	396	367	91	64	4.0	6.6
<b>合計</b>	<b>810</b>	<b>8961</b>	<b>8519</b>	<b>1132</b>	<b>825</b>	<b>7.5</b>	<b>11.1</b>

## 1999 年度（一般入試）

学科・専攻・コース	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
絵画学科日本画専攻	35	439	427	41	35	10.4	12.5
絵画学科油画専攻	135	1451	1393	187	135	7.4	10.7
絵画学科版画専攻	35	446	424	53	36	8.0	12.7
彫刻学科	30	260	250	50	33	5.0	8.7
工芸学科	60	496	483	80	63	6.0	8.3
グラフィックデザイン学科	185	2539	2473	196	182	12.6	13.7
生産デザイン学科（プロダクト）	30	525	507	39	28	13.0	17.5
生産デザイン学科（テキスタイル）	40	579	554	66	44	8.4	14.5
環境デザイン学科	80	844	779	111	81	7.0	10.6
情報デザイン学科	120	991	942	221	122	4.3	8.3
芸術学科	60	554	499	115	64	4.3	9.2
<b>合計</b>	<b>810</b>	<b>9124</b>	<b>8731</b>	<b>1159</b>	<b>823</b>	<b>7.5</b>	<b>11.3</b>

## 2000 年度（一般入試）

学科・専攻・コース	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
絵画学科日本画専攻	33	416	402	50	36	8.0	12.6
絵画学科油画専攻	132	1239	1197	172	136	7.0	9.4
絵画学科版画専攻	33	366	337	52	36	6.5	11.1
彫刻学科	30	259	246	54	34	4.6	8.6
工芸学科	60	411	404	82	65	4.9	6.9
グラフィックデザイン学科	177	2317	2247	215	191	10.5	13.1
生産デザイン学科（プロダクト）	30	430	405	40	31	10.1	14.3
生産デザイン学科（テキスタイル）	40	519	502	72	44	7.0	13.0
環境デザイン学科	78	878	792	128	85	6.2	11.3
情報デザイン学科	80	821	801	176	84	4.6	10.3
芸術学科	44	324	288	121	49	2.4	7.4
<b>合計</b>	<b>737</b>	<b>7980</b>	<b>7621</b>	<b>1162</b>	<b>791</b>	<b>6.6</b>	<b>10.8</b>

## 2000 年度（センター試験利用入試）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
情報デザイン学科（A・B方式）	40	378	360	82	47	4.4	9.5
芸術学科	15	132	102	77	12	1.3	8.8
<b>合計</b>	<b>55</b>	<b>510</b>	<b>462</b>	<b>159</b>	<b>59</b>	<b>2.9</b>	<b>9.3</b>

## 2001 年度（一般入試）

学科・専攻・コース	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
絵画学科日本画専攻	31	384	369	50	37	7.4	12.4
絵画学科油画専攻	129	1278	1226	165	138	7.4	9.9
絵画学科版画専攻	31	271	254	64	36	4.0	8.7
彫刻学科	30	220	204	46	34	4.4	7.3
工芸学科	60	355	345	98	65	3.5	5.9
グラフィックデザイン学科	169	2250	2184	198	180	11.0	13.3
生産デザイン学科（プロダクト）	30	363	335	42	32	8.0	12.1
生産デザイン学科（テキスタイル）	40	480	464	65	44	7.1	12.0
環境デザイン学科	76	724	662	128	87	5.2	9.5
情報デザイン学科	80	831	798	176	86	4.5	10.4
芸術学科	43	273	236	113	51	2.1	6.3
<b>合計</b>	<b>719</b>	<b>7429</b>	<b>7077</b>	<b>1145</b>	<b>790</b>	<b>6.2</b>	<b>10.3</b>

## 2001 年度（センター試験利用入試）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
情報デザイン学科（A・B方式）	40	487	442	86	44	5.1	12.2
芸術学科	15	154	120	54	20	2.2	10.3
<b>合計</b>	<b>55</b>	<b>641</b>	<b>562</b>	<b>140</b>	<b>64</b>	<b>4.0</b>	<b>11.7</b>

## 2002 年度（一般入試）

学科・専攻・コース	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
絵画学科日本画専攻	30	369	358	51	37	7.0	12.3
絵画学科油画専攻	125	1212	1178	173	134	6.8	9.7
絵画学科版画専攻	29	235	217	60	36	3.6	8.1
彫刻学科	30	197	188	39	34	4.8	6.6
工芸学科	60	309	304	93	66	3.3	5.2
グラフィックデザイン学科	137	2241	2204	167	155	13.2	16.4
生産デザイン学科（プロダクト）	25	361	347	39	26	8.9	14.4
生産デザイン学科（テキスタイル）	32	454	441	57	35	7.7	14.2
環境デザイン学科	59	708	670	112	75	6.0	12.0
情報デザイン学科	80	747	726	178	88	4.1	9.3
芸術学科	37	279	250	130	50	1.9	7.5
<b>合計</b>	<b>644</b>	<b>7112</b>	<b>6883</b>	<b>1099</b>	<b>736</b>	<b>6.3</b>	<b>11.0</b>

## 2002 年度（センター試験利用入試）

学科・コース	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
グラフィックデザイン学科	25	1379	1363	112	27	12.2	55.2
生産デザイン学科（プロダクト）	5	195	188	20	5	9.4	39.0
生産デザイン学科（テキスタイル）	8	243	238	27	8	8.8	30.4
環境デザイン学科	15	441	429	62	11	6.9	29.4
情報デザイン学科	40	316	233	99	44	2.4	7.9
芸術学科	20	138	121	90	24	1.3	6.9
<b>合計</b>	<b>113</b>	<b>2712</b>	<b>2572</b>	<b>410</b>	<b>119</b>	<b>6.3</b>	<b>24.0</b>

## 2003 年度（一般入試）

学科・専攻	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
絵画学科日本画専攻	30	327	323	51	35	6.3	10.9
絵画学科油画専攻	120	1116	1085	168	132	6.5	9.3
絵画学科版画専攻	27	226	205	55	36	3.7	8.4
彫刻学科	30	218	213	47	34	4.5	7.3
工芸学科	60	240	236	96	65	2.5	4.0
グラフィックデザイン学科	129	2038	1996	174	155	11.5	15.8
生産デザイン学科（プロダクト）	25	356	337	36	30	9.4	14.2
生産デザイン学科（テキスタイル）	32	398	380	54	35	7.0	12.4
環境デザイン学科	57	548	526	90	69	5.8	9.6
情報デザイン学科	80	721	697	173	87	4.0	9.0
芸術学科	36	210	186	113	50	1.6	5.8
<b>合計</b>	<b>626</b>	<b>6398</b>	<b>6184</b>	<b>1057</b>	<b>728</b>	<b>5.9</b>	<b>10.2</b>

## 2003 年度（センター試験利用入試）

学科・専攻	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
グラフィックデザイン学科	25	1493	1470	112	25	13.1	59.7
生産デザイン学科（プロダクト）	5	230	214	12	5	17.8	46.0
生産デザイン学科（テキスタイル）	8	260	252	45	9	5.6	32.5
環境デザイン学科	15	99	90	22	16	4.1	6.6
情報デザイン学科	40	439	390	112	42	3.5	11.0
芸術学科	20	120	102	81	23	1.3	6.0
<b>合計</b>	<b>113</b>	<b>2641</b>	<b>2518</b>	<b>384</b>	<b>120</b>	<b>6.6</b>	<b>23.4</b>



## 2004 年度（一般入試）

学科・専攻	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
絵画学科日本画専攻	28	362	356	45	37	7.9	12.9
絵画学科油画専攻	118	1027	996	171	134	5.8	8.7
絵画学科版画専攻	25	200	192	51	36	3.8	8.0
彫刻学科	30	177	172	51	34	3.4	5.9
工芸学科	60	234	228	96	66	2.4	3.9
グラフィックデザイン学科	121	1931	1893	198	151	9.6	16.0
生産デザイン学科（プロダクト）	25	347	339	38	28	8.9	13.9
生産デザイン学科（テキスタイル）	32	350	342	61	35	5.6	10.9
環境デザイン学科	55	612	590	118	69	5.2	11.1
情報デザイン学科	80	617	596	200	83	3.0	7.7
芸術学科	35	190	168	134	48	1.3	5.4
<b>合計</b>	<b>609</b>	<b>6047</b>	<b>5872</b>	<b>1163</b>	<b>721</b>	<b>5.1</b>	<b>9.9</b>

## 2004 年度（センター試験利用入試）

学科・専攻	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
グラフィックデザイン学科	25	1457	1439	91	31	15.8	58.3
生産デザイン学科（プロダクト）	5	240	234	11	6	21.3	48.0
生産デザイン学科（テキスタイル）	8	271	266	34	10	7.8	33.9
環境デザイン学科	15	475	463	78	18	5.9	31.7
情報デザイン学科	40	371	338	100	44	3.4	9.3
芸術学科	20	128	104	93	27	1.1	6.4
<b>合計</b>	<b>113</b>	<b>2942</b>	<b>2844</b>	<b>407</b>	<b>136</b>	<b>7.0</b>	<b>26.0</b>

## 造形表現学部

## 1999 年度（一般入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	28	283	234	43	37	5.4	10.1
デザイン学科	80	679	560	101	94	5.5	8.5
映像演劇学科	45	486	398	65	63	6.1	10.8
合計	153	1448	1192	209	194	5.7	9.5

## 1999 年度（社会人入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	12	44	42	16	12	2.6	3.7
デザイン学科	20	47	42	25	24	1.7	2.4
映像演劇学科	15	24	22	14	13	1.6	1.6
合計	47	115	106	55	49	1.9	2.4

## 2000 年度（一般入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	28	223	194	47	37	4.1	8.0
デザイン学科	80	609	489	116	104	4.2	7.6
映像演劇学科	45	491	415	76	69	5.5	10.9
合計	153	1323	1098	239	210	4.6	8.6

## 2000 年度（社会人入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	12	28	28	15	13	1.9	2.3
デザイン学科	20	29	28	17	16	1.6	1.5
15	6	6	313	119	100	2.6	4.9
映像演劇学科	45	295	247	68	63	3.6	6.6
合計	148	841	716	235	200	3.0	5.7

## 2001 年度（一般入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	28	220	193	41	36	4.7	7.9
デザイン学科	80	471	396	131	107	3.0	5.9
映像演劇学科	45	399	330	81	70	4.1	8.9
合計	153	1090	919	253	213	3.6	7.1

## 2001 年度（社会人入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	12	51	47	17	17	2.8	4.3
デザイン学科	20	32	29	17	17	1.7	1.6
映像演劇学科	15	10	10	3	3	3.3	0.7
合計	47	93	86	37	37	2.3	2.0

## 2002 年度（一般入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	28	176	156	48	37	3.3	6.3
デザイン学科	75	370	313	119	100	2.6	4.9
映像演劇学科	45	295	247	68	63	3.6	6.6
合計	148	841	716	235	200	3.0	5.7

## 2002 年度（社会人入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	12	42	40	15	13	2.7	3.5
デザイン学科	25	32	29	19	16	1.5	1.3
映像演劇学科	15	17	17	12	11	1.4	1.1
合計	52	91	86	46	40	1.9	1.8

## 2003 年度（一般入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	28	151	135	48	37	2.8	5.4
デザイン学科	75	338	294	124	99	2.4	4.5
映像演劇学科	45	245	207	82	62	2.5	5.4
合計	148	734	636	254	198	2.5	5.0

## 2003 年度（社会人入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	12	39	38	15	13	2.5	3.3
デザイン学科	25	29	27	23	20	1.2	1.2
映像演劇学科	15	19	18	10	9	1.8	1.3
合計	52	87	83	48	42	1.7	1.7

## 2004 年度（一般入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	28	104	91	46	36	2.0	3.7
デザイン学科	65	254	207	108	84	1.9	3.9
映像演劇学科	45	216	176	77	63	2.3	4.8
合計	138	574	474	231	183	2.1	4.2

## 2004 年度（社会人入試結果資料）

学科	入学定員	志願者	受験者	合格者	入学者	受験倍率	志願倍率
造形学科	12	33	33	15	14	2.2	2.8
デザイン学科	35	54	53	32	30	1.7	1.5
映像演劇学科	15	21	21	12	10	1.8	1.4
合計	62	108	107	59	54	1.8	1.7

## 大学院美術研究科博士前期課程（修士課程）

## 2001 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
絵画専攻	70	70	60	56
彫刻専攻	14	14	13	12
デザイン専攻	34	33	18	18
芸術学専攻	10	9	8	7
<b>合計</b>	<b>128</b>	<b>126</b>	<b>99</b>	<b>93</b>

## 2002 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
絵画専攻	89	88	72	72
彫刻専攻	12	12	11	11
工芸専攻	12	12	8	8
デザイン専攻	45	45	29	27
芸術学専攻	8	7	4	4
<b>合計</b>	<b>166</b>	<b>164</b>	<b>124</b>	<b>122</b>

## 2003 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
絵画専攻	70	69	59	54
彫刻専攻	13	13	13	13
工芸専攻	16	15	13	13
デザイン専攻	35	34	28	25
芸術学専攻	10	10	6	5
<b>合計</b>	<b>144</b>	<b>141</b>	<b>119</b>	<b>110</b>

## 2004 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
絵画専攻	71	69	61	59
彫刻専攻	11	11	10	10
工芸専攻	13	13	13	12
デザイン専攻	52	52	37	37
芸術学専攻	5	5	5	5
<b>合計</b>	<b>152</b>	<b>150</b>	<b>126</b>	<b>123</b>

---

 大学院美術研究科博士後期課程（博士課程）

## 2001 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
美術専攻	11	11	9	8

## 2002 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
美術専攻	10	10	5	5

## 2003 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
美術専攻	11	10	4	4

## 2004 年度

専攻	志願者	受験者	合格者	入学者
美術専攻	7	7	6	6

## 入試結果資料の注意事項

- 合格者は補欠繰り上げ合格者を含む。
- 2003 年度以降プロダクトデザインとテキスタイルデザインの両コースは、それぞれ専攻となり入学定員などの表記を分けることになった。そのため今回は、それ以前に合算されていた数値を比較できるよう分けて表記した。
- 2003 年度、情報デザイン学科に情報芸術コースと情報デザインコースができたが、今回コースを分けて表記した。  
2004 年度、造形表現学部社会人入試で A 日程（全学科）と B 日程（デザイン学科のみ）が実施されたが、日程を分けて表記した。

**歩留まり**

歩留まりとは、下の枠内に書いてある通り、資料請求から入学までをトータルに分析していくものであるが、今回は合格 入学の部分にのみ注目してある。単純に、合格者がいったい何人入学したのかということで、その割合が高ければ高いほど、本学の需要度が高いと考えることができる。ただ残念なことに、一人がいくつもの学科(試験方式による同一学科内も含む)に合格している場合など、本学に入学してはいるが、手続きを行った学科(同一学科の試験方式も含む)以外は、欠員扱いのため、純粋に本学の需要度と断定できず、あくまでも目安としての資料となっている。

資料請求	オープンキャンパスなど のイベントへの直接参加	出願	合格	入学
------	----------------------------	----	----	----

**< 分析・報告・評価 >**

今回はあくまでも目安であるが、大学全体というより、ひとつの学科に着目すると面白い見方をすることもできる。

例えば受験倍率が低くても、この歩留まり率が高い学科がある。これはその学科が第一志望もしくは学びたい学科で、受験生にとって入学後やりがいのある内容があると考えても良いのかもしれない。これは十分需要度があるとみなしても良いのではないだろうか。そのような内容については、受験生からアンケートなど取る必要があるかと思うが、優秀な人材を確保することは、実際どれだけ第一志望の学科もしくは学びたい学科を作れるかが問われてくることでもある。

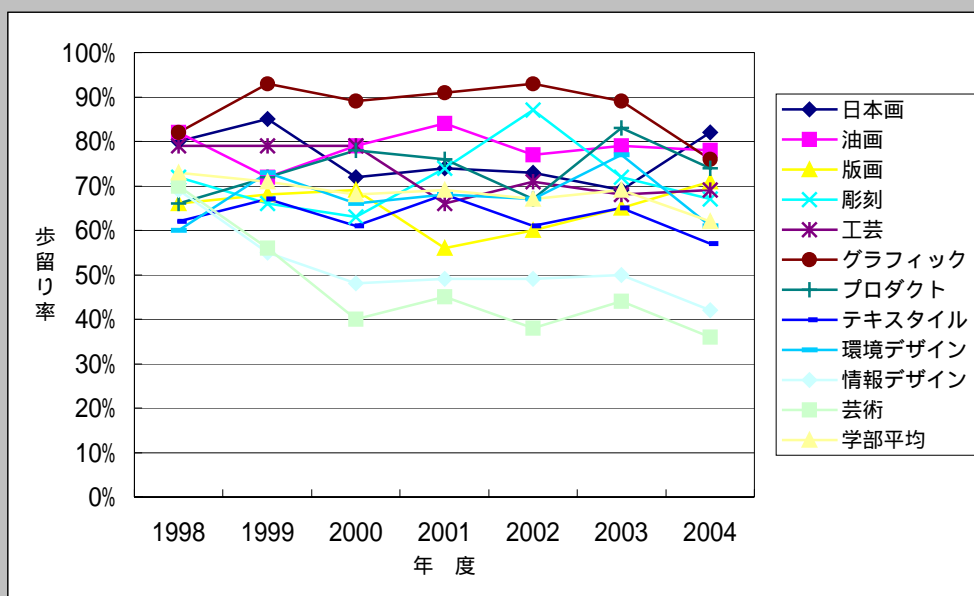
**< 課 題 >**

今後、より正確な資料を作成するため、関係部署が協力して、延数や実数の問題なども解決し、歩留まりひとつひとつの流れに数字の割合だけではなく、中身の分析もしていく必要があるだろう。

美術学部の2004年度入試を例にとれば、資料請求が約10,000件(高校2年生以下も含む)、オープンキャンパス来場者が約3,000名、出願が延数で約9,000名(実数で約5,000名)、入学定員が約700名、合格者は延数で約1,500名、入学者は実数で約850名である。このうち入学した受験生はどの時点から本学に興味を持ち、どのように本学と関わり、どこに魅力を感じ、何で本学に入学したのかを明らかにしていく必要があるだろう。

美術学部（一般入試）歩留まりとその推移

学科・専攻・コース	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
絵画学科日本画専攻	80%	85%	72%	74%	73%	69%	82%
絵画学科油画専攻	82%	72%	79%	84%	77%	79%	78%
絵画学科版画専攻	66%	68%	69%	56%	60%	65%	71%
彫刻学科	72%	66%	63%	74%	87%	72%	67%
工芸学科	79%	79%	79%	66%	71%	68%	69%
グラフィックデザイン学科	82%	93%	89%	91%	93%	89%	76%
生産デザイン学科（プロダクト）	66%	72%	78%	76%	67%	83%	74%
生産デザイン学科（テキスタイル）	62%	67%	61%	68%	61%	65%	57%
環境デザイン学科	60%	73%	66%	68%	67%	77%	61%
情報デザイン学科	69%	55%	48%	49%	49%	50%	42%
芸術学科	70%	56%	40%	45%	38%	44%	36%
<b>平均</b>	<b>73%</b>	<b>71%</b>	<b>68%</b>	<b>69%</b>	<b>67%</b>	<b>69%</b>	<b>62%</b>

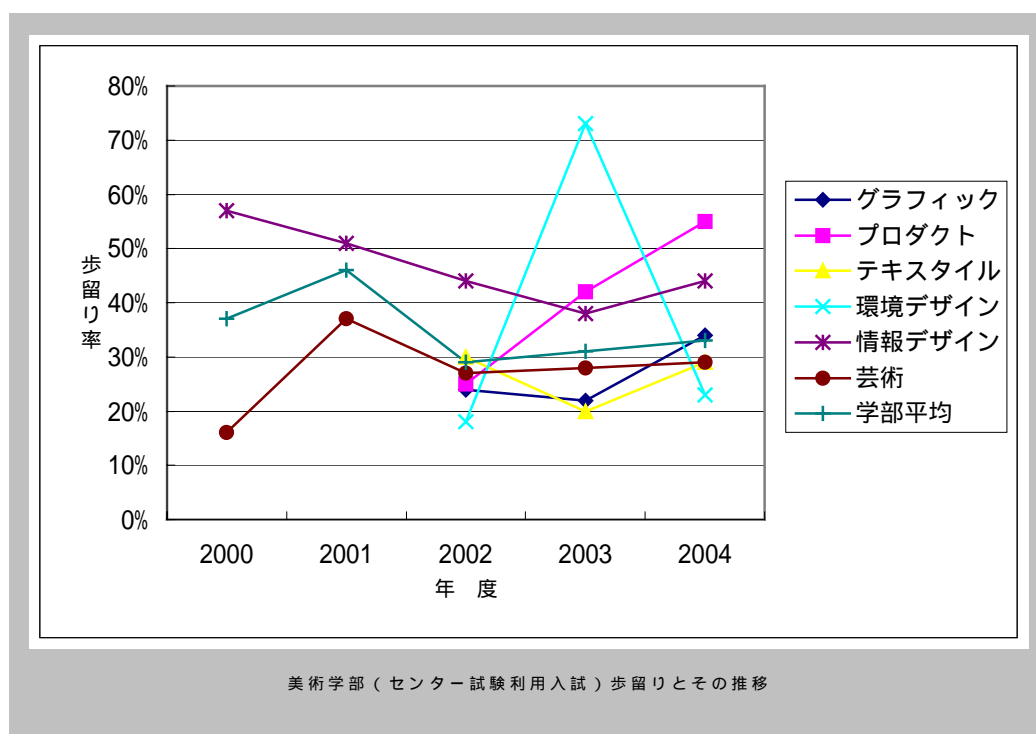


美術学部（一般入試）歩留りとその推移

美術学部（センター試験利用入試）歩留まりとその推移

学科・専攻・コース	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
グラフィックデザイン学科			24%	22%	34%
生産デザイン学科（プロダクト）			25%	42%	55%
生産デザイン学科（テキスタイル）			30%	20%	29%
環境デザイン学科			18%	73%	23%
情報デザイン学科	57%	51%	44%	38%	44%
芸術学科	16%	37%	27%	28%	29%
<b>平均</b>	<b>37%</b>	<b>46%</b>	<b>29%</b>	<b>31%</b>	<b>33%</b>

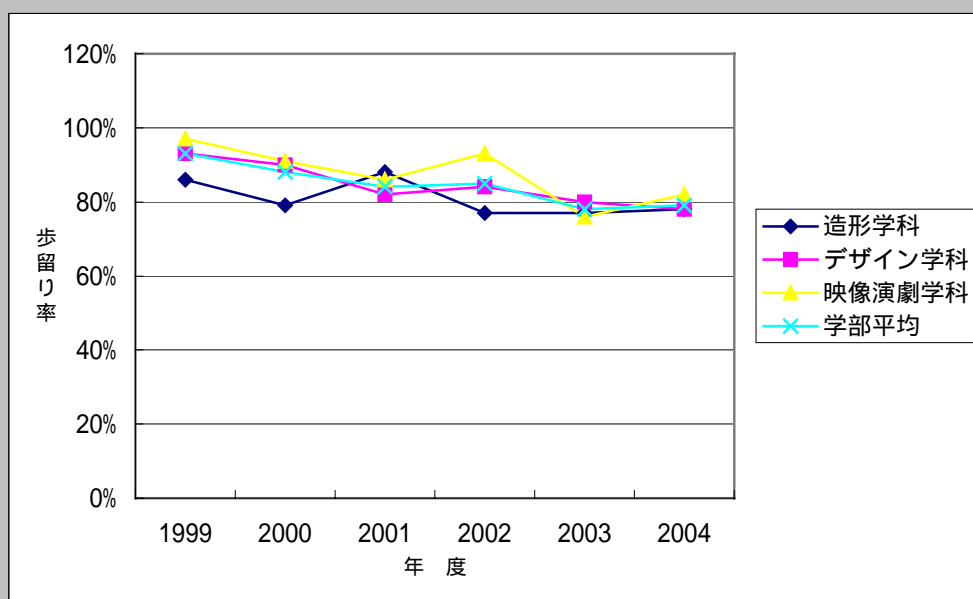
2003年度、環境デザイン学科は同一学科内で一般入試とセンター試験利用入試を併願することができなかった。そのためセンター試験利用入試の歩留まりが非常に高くなった。なお2002、2004年度は同一学科内で併願することが可能であった。





造形表現学部（一般入試）歩留まりとその推移

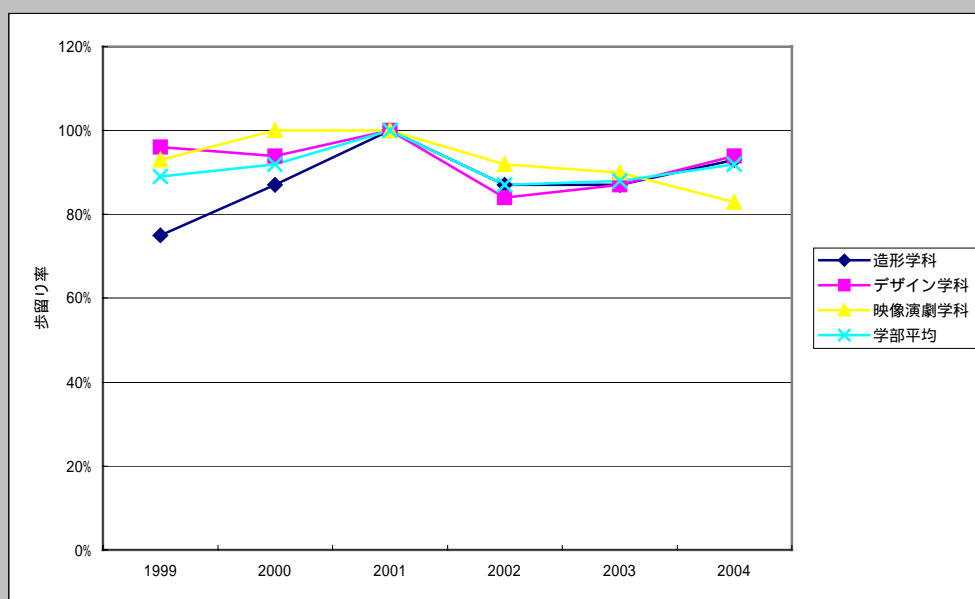
学科	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
造形学科	86%	79%	88%	77%	77%	78%
デザイン学科	93%	90%	82%	84%	80%	78%
映像演劇学科	97%	91%	86%	93%	76%	82%
平均	93%	88%	84%	85%	78%	79%



造形表現学部（一般入試）歩留りとその推移

造形表現学部（社会人入試）歩留まりとその推移

学科	1999	2000	2001	2002	2003	2004
造形学科	75%	87%	100%	87%	87%	93%
デザイン学科	96%	94%	100%	84%	87%	94%
映像演劇学科	93%	100%	100%	92%	90%	83%
平均	89%	92%	100%	87%	88%	92%



造形表現学部（社会人入試）歩留りとその推移

## 2. 卒業について

### < 分析・報告・評価 >

#### 美術学部

1999～2003年度（2004年3月卒業）の5年間は、学生定員増が完成期を迎えた時期である。この定員増で、女子学生数がさらに増大した。

1999年度の男女比55%が、57%、57%、63%、65%と推移して、さらに女子はその比率を増加させて来ている。

#### 就職

この5年間の求人件数・求人数はほぼ横這い状態であったが、大学への求人他にネット上での求人が増えたことを勘案すれば、求人状況は安定していたと言えよう。

しかし、求職者に対する採用者の比率は女子の増加に反比例して、減少して来た。

1999年度の内定率は84%から71%、83%、77%、73%と減少したが、これは女子学生の求職増が基底にあると思われる。

男女雇用機会均等法が法制化されて19年が経過したが、求人市場では相変わらずの女子に厳しい状況は変わっていない。

それにもかかわらず本学は、情報誌に見るように、求人件数、求人数、採用者数、採用企業（優良）等に於いて他の美術系大学を制して来た。

#### 進学

大学院への進学をはじめとする進学率は、学生数の増加と比例することなく、過去5年間微増に留まって来た。

1999年度11%から、12%、13%、12%、そして2003年度の進学率は13%であった。

但し、進学先は大きく様変わりした。

これまでは、東京芸大・筑波大と云った美術系大学院が主な進学先であったが、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学等への進学者が出て来ている。これは、研究テーマの広がり、進路幅の拡大が見られるだけに大学院修了後が非常に楽しみである。

#### 造形表現学部

美術学部二部の時代（1999～2001年度卒業）と、造形表現学部改組後の卒業生の進路状況は一変し、就職・進学とも質量ともに大きく変革を遂げた。

#### 就職

一覧表からも分かるように、美術学部二部当時の1999年度が52%、51%、51%、造形表現学部への改組後、2002年度と2003年度がともに69%にまで就職決定率は上昇したばかりでなく、内定企業も著名な企業が多くなって来た。

今後、まだまだ質・量ともに飛躍する余地は十分にあると思われ、期待できる。

#### 進学

進学率は改組前より改組後が低下して来ており、今後を注視していきたい。

単に授業料高に起因しているとは思えないが、社会人にあつての進学は厳しい環境下に

あると思われる。

1999年度以降における美術学部、造形表現学部、大学院進路状況

美術学部	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数	1,017	1,167	1,175	1,052	1,030
求人数	1,932	1,955	1,958	1,565	1,339
卒業生数	653 (361)	620 (352)	765 (440)	795 (500)	811 (526)
就職希望者数	274 (125)	303 (193)	338 (208)	422 (276)	379 (252)
就職者数	230 (128)	214 (124)	281 (166)	327 (214)	276 (181)
進学者数	74 (36)	75 (45)	98 (52)	93 (55)	102 (68)
自営業者数	8 (3)	3 (2)	5 (1)	6 (1)	12 (4)
その他・無業	341 (194)	328 (181)	381 (221)	369 (230)	421 (273)

( )は女子

造形表現学部	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数	991	1,137	1,154	1,046	1,023
求人数	1,883	1,576	1,747	1,450	1,330
卒業生数	175 (100)	169 (100)	175 (102)	212 (145)	226 (149)
就職希望者数	67 (39)	69 (38)	79 (42)	85 (59)	89 (61)
就職者数	35 (17)	35 (22)	40 (23)	59 (45)	57 (38)
進学者数	12 (8)	11 (3)	14 (10)	12 (7)	10 (8)
自営業者数	3 (1)	1 (1)	5 (1)	4 (2)	9 (4)
その他・無業	125 (74)	122 (74)	116 (68)	137 (91)	150 (99)

( )は女子

大学院	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数	139	172	318	227	234
求人数	264	212	326	292	280
卒業生数	103 (53)	92 (41)	103 (52)	88 (49)	121 (63)
就職希望者数	37 (16)	34 (16)	28 (13)	40 (25)	24 (13)
就職者数	29 (7)	28 (14)	19 (6)	23 (15)	23 (13)
進学者数	1 (1)	10 (3)	4 (1)	6 (4)	7 (2)
自営業者数	3 (1)	1 (0)	1 (1)	1 (0)	4 (0)
その他・無業	70 (44)	53 (24)	79 (44)	58 (30)	87 (48)

( )は女子

学科別（美術学部）による進路状況

絵画	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数	1,017	1,167	1,175	1,052	1,030
求人数	1,932	1,955	1,958	1,565	1,339
卒業生数	192 ( 106 )	198 ( 112 )	203 ( 119 )	197 ( 130 )	207 ( 149 )
就職希望者数	60 ( 38 )	67 ( 46 )	45 ( 31 )	67 ( 47 )	55 ( 41 )
就職者数	51 ( 30 )	42 ( 29 )	42 ( 27 )	44 ( 28 )	38 ( 31 )
進学者数	44 ( 19 )	44 ( 26 )	57 ( 35 )	44 ( 29 )	52 ( 38 )
自営業者数	2 ( 0 )	0 ( 0 )	2 ( 1 )	3 ( 1 )	3 ( 3 )
その他・無業	95 ( 57 )	112 ( 57 )	102 ( 56 )	106 ( 72 )	114 ( 77 )

( )は女子

彫刻	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数	1,017	1,167	1,175	1,052	1,030
求人数	1,932	1,955	1,958	1,565	1,339
卒業生数	31 ( 19 )	32 ( 19 )	28 ( 16 )	31 ( 14 )	33 ( 17 )
就職希望者数	4 ( 3 )	5 ( 4 )	4 ( 4 )	6 ( 5 )	5 ( 2 )
就職者数	2 ( 1 )	3 ( 2 )	4 ( 4 )	5 ( 4 )	6 ( 4 )
進学者数	13 ( 5 )	9 ( 5 )	12 ( 4 )	9 ( 4 )	11 ( 6 )
自営業者数	0 ( 0 )	2 ( 2 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	3 ( 0 )
その他・無業	16 ( 13 )	18 ( 10 )	12 ( 8 )	17 ( 6 )	13 ( 7 )

( )は女子

工芸	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数			1,175	1,052	1,030
求人数			1,958	1,565	1,339
卒業生数	0 ( 0 )	0 ( 0 )	55 ( 40 )	67 ( 52 )	62 ( 50 )
就職希望者数			16 ( 14 )	24 ( 23 )	22 ( 19 )
就職者数			14 ( 12 )	21 ( 20 )	8 ( 7 )
進学者数			6 ( 2 )	18 ( 11 )	13 ( 8 )
自営業者数			0 ( 0 )	1 ( 0 )	0 ( 0 )
その他・無業			35 ( 26 )	27 ( 21 )	41 ( 35 )

( )は女子

グラフィック	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数			1,175	1,052	1,030
求人数			1,958	1,565	1,339
卒業生数	0 ( 0 )	0 ( 0 )	170 ( 90 )	181 ( 99 )	182 ( 104 )
就職希望者数			125 ( 74 )	146 ( 86 )	142 ( 91 )
就職者数			104 ( 59 )	118 ( 72 )	96 ( 61 )
進学者数			8 ( 2 )	6 ( 2 )	5 ( 1 )
自営業者数			1 ( 0 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )
その他・無業			57 ( 29 )	57 ( 25 )	81 ( 42 )

( )は女子

生産デザイン	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数			1,175	1,052	1,030
求人数			1,958	1,565	1,339
卒業生数	0 ( 0 )	0 ( 0 )	64 ( 54 )	82 ( 54 )	66 ( 36 )
就職希望者数			39 ( 17 )	58 ( 35 )	49 ( 24 )
就職者数			32 ( 23 )	42 ( 23 )	44 ( 20 )
進学者数			2 ( 3 )	4 ( 3 )	5 ( 5 )
自営業者数			0 ( 0 )	0 ( 0 )	2 ( 0 )
その他・無業			30 ( 28 )	36 ( 28 )	15 ( 11 )

( )は女子

環境デザイン	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数			1,175	1,052	1,030
求人数			1,958	1,565	1,339
卒業生数	0 ( 0 )	0 ( 0 )	84 ( 52 )	71 ( 49 )	89 ( 58 )
就職希望者数			38 ( 26 )	41 ( 28 )	44 ( 31 )
就職者数			28 ( 19 )	34 ( 25 )	34 ( 22 )
進学者数			3 ( 1 )	2 ( 1 )	1 ( 1 )
自営業者数			1 ( 0 )	0 ( 0 )	2 ( 0 )
その他・無業			52 ( 32 )	35 ( 23 )	52 ( 35 )

( )は女子

情報デザイン	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数			1,175	1,052	1,030
求人数			1,958	1,565	1,339
卒業生数	0 ( 0 )	0 ( 0 )	103 ( 53 )	114 ( 68 )	124 ( 79 )
就職希望者数			53 ( 29 )	68 ( 47 )	50 ( 36 )
就職者数			39 ( 21 )	54 ( 38 )	43 ( 32 )
進学者数			7 ( 4 )	6 ( 1 )	10 ( 5 )
自営業者数			0 ( 0 )	1 ( 0 )	0 ( 0 )
その他・無業			57 ( 28 )	53 ( 29 )	71 ( 42 )

( )は女子

芸術	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度
求人件数	1,017	1,167	1,175	1,052	1,030
求人数	1,932	1,955	1,958	1,565	1,339
卒業生数	61 ( 40 )	52 ( 30 )	58 ( 36 )	52 ( 34 )	48 ( 33 )
就職希望者数	23 ( 17 )	22 ( 18 )	18 ( 13 )	12 ( 5 )	12 ( 8 )
就職者数	17 ( 12 )	9 ( 6 )	18 ( 10 )	9 ( 4 )	7 ( 4 )
進学者数	9 ( 7 )	2 ( 1 )	3 ( 2 )	4 ( 4 )	5 ( 4 )
自営業者数	0 ( 0 )	0 ( 0 )	1 ( 0 )	1 ( 0 )	2 ( 1 )
その他・無業	35 ( 21 )	41 ( 23 )	36 ( 24 )	38 ( 26 )	34 ( 24 )

( )は女子

2000 年度卒業後の状況（学校基本調査）

		専門的・技術的職業					事務従事者	販売従事者	サービス職業	運輸・通信	その他	計	
		建築・土木・測量	情報処理技術者	教員	保健婦・看護婦	美術・写真・デザイナー・音楽・舞台							その他
絵画科	男			2		13	1	2			3	21	
	女			4		19	1	2	1		1	28	
彫刻科	男					1						1	
	女					1						1	
デザイン科	男					66	1				1	68	
	女	2				75	1	1	1		2	83	
建築科	男	5				3		1				9	
	女	2				1						3	
芸術学科	男					2	2				1	5	
	女					4	1		1		4	10	
絵画学科（二部）	男					1					1	2	
	女					3						3	
デザイン学科（二部）	男		1	1		9		3			2	16	
	女					10	1	2				13	
芸術学科（二部）	男					2						2	
	女					1	1					2	
絵画専攻（大学院）	男			5		3	1	2				11	
	女			1		1		2			1	5	
彫刻専攻（大学院）	男					1		2				3	
	女			1								1	
デザイン専攻（大学院）	男			1		4		2				7	
	女			1			1					2	
計		9	1	16	0	220	11	19	3	1	0	16	296

職業別就職者数（学校基本調査）

		建設業	製造業										運輸	卸売業	小売業・飲食店	金融・保険業	不動産業	サービス業				その他	計	
			食料品・飲料・たばこ・飼料	繊維工業	衣服・その他の繊維	出版・印刷等	鉄鋼業	金属製品	化学工業	一般機械器具	電気機械器具	輸送用機器器具						その他	医療保健	教育	非営利団体			その他
絵画科	男女				1						6							4		8	2	21		
彫刻科	男				1						16							6		2	3	28		
	女										1											1		
デザイン科	男		1	5			1		3	3	20									29	6	68		
	女		4	5	2		1		1	2	25									32	11	83		
建築科	男	2											1			1					5	9		
	女																				3	3		
芸術学科	男女		1	1							1			1							3	5		
絵画学科(二部)	男										2	1									4	1	10	
	女										1											1	2	
デザイン学科(二部)	男			1					2		4	1		1				1			5	1	16	
	女																	2			8	3	13	
芸術学科(二部)	男																				2	2		
	女																				2	2		
絵画専攻(大学院)	男			1							2							6			1	1	11	
	女			1							1							2				1	5	
彫刻専攻(大学院)	男										1							2					3	
	女																	1					1	
デザイン専攻(大学院)	男								1		1							3				2	7	
	女																	1				1	2	
計		2	5	1	14	4	0	0	2	0	7	6	81	2	1	2	0	1	0	28	0	106	34	296

産業別就職者(学校基本調査)



## 2001 年度卒業後の状況 (学校基本調査)

		専門的・技術的職業					事務従事者	販売従事者	サービス職業	運輸・通信	その他	計	
		建築・土木・測量	情報処理技術者	教員	保健婦・看護婦	美術・写真・デザイナー・音楽・舞台							その他
絵画科	男			1		9		1			1	12	
	女			2		21	1	2			2	28	
彫刻科	男					1						1	
	女					1		1				2	
デザイン科	男	1		1		57					2	61	
	女	1		3		68	1	1			3	77	
建築科	男	6				4						10	
	女	5				3					1	9	
芸術学科	男						2				1	3	
	女					1	3	1			1	6	
絵画学科 (二部)	男											0	
	女					1	3				2	6	
デザイン学科 (二部)	男					9	2				2	13	
	女					11	1					12	
芸術学科 (二部)	男											0	
	女					4	1					5	
絵画専攻 (大学院)	男	1		1		2	2				2	8	
	女			1		4		2				7	
彫刻専攻 (大学院)	男			1								1	
	女											0	
デザイン専攻 (大学院)	男					3	1					4	
	女	1		1		2	1					5	
芸術学専攻 (大学院)	男			1								1	
	女						2					2	
計		15	0	12	0	201	2	23	3	0	0	17	273

職業別就職者数(学校基本調査)

		建設業	製 造 業										運 輸	卸 売 業	小 売 業・ 飲 食 店	金 融・ 保 険 業	不 動 産 業	サ ー ビ ス 業				計		
			食 料 品・ 飲 料・ たばこ・ 飼 料	織 維 工 業	衣 服・ そ の 他 の 織 維	出 版・ 印 刷 等	化 学 工 業	鉄 鋼 業	金 属 製 品	一 般 機 械 器 具	電 気 機 械 器 具	輸 送 用 機 器 器 具						そ の 他	医 療 保 健	教 育	非 営 利 団 体		そ の 他	
絵画科	男											4			1					1		4	2	12
	女			3	2			1				10			1					1	1	7	2	28
彫刻科	男											1												1
	女							1				1												2
デザイン科	男		1	1	1	1	2				4	3	14								1	30	3	61
	女	1		2	6	3						20		1							2	38	4	77
建築科	男	2																				8		10
	女	1				1									1							5		9
芸術学科	男															1	1				1	2	1	6
	女																					2		3
絵画学科(二部)	男																							0
	女			2						1		1									1	1		6
デザイン学科(二部)	男			2			1					2									2	4	2	13
	女			2	2					2		3										3		12
芸術学科(二部)	男																							0
	女																							0
絵画専攻(大学院)	男											1					2				3			8
	女			2				1				1									1			7
彫刻専攻(大学院)	男																				1			1
	女																							0
デザイン専攻(大学院)	男			1	1																		2	4
	女											1											2	5
芸術学専攻(大学院)	男																					1		1
	女					1															1			2
計		4	1	3	19	11	2	1	3	0	7	4	58	0	1	4	3	1	0	20	1	110	20	273

産業別就職者・学校基本調査

2002 年度卒業後の状況 (学校基本調査)

		専門的・技術的職業						事務従事者	販売従事者	サービス職業	運輸・通信	その他	計
		建築・土木・測量	情報処理技術者	教員	保険婦・看護婦	美術・写真・デザイナー・音楽・舞台	その他						
絵画学科	男			2		14							16
	女			2		21	2	1					26
彫刻学科	男												0
	女					2	1						3
工芸学科	男					2							2
	女			1		9	1						11
グラフィックデザイン学科	男					41	1						42
	女			1		51			1			3	56
生産デザイン学科	男					16		2					18
	女					14							14
環境デザイン学科	男	3				4		1					8
	女	1				14				1			16
情報デザイン学科	男			1		15		2					18
	女					16		2	1				19
芸術学科	男					4	2					3	9
	女					1	1	4				4	10
デザイン科	男												0
	女					1	1	1					3
建築科	男					1							1
	女					1							1
絵画学科 (二部)	男					1					1		2
	女					3						1	4
デザイン学科 (二部)	男					7	2					4	13
	女					13	1						14
芸術学科 (二部)	男												0
	女				1	1		1				1	4
絵画専攻 (大学院)	男			5		1		1					7
	女			1		3							4
彫刻専攻 (大学院)	男			1			1						2
	女												0
デザイン専攻 (大学院)	男					3							3
	女					1		1					2
芸術専攻 (大学院)	男												0
	女											1	1
計		4	0	14	1	260	13	16	2	1	1	17	329

職業別就職者数(学校基本調査)

		建設業	製造業										運輸	卸売業	小売業・飲食店	金融・保険業	不動産業	サービス業				その他	計	
			食料品・飲料・たばこ・飼料	繊維工業	衣服・その他の繊維	出版・印刷等	化学工業	鉄鋼業	金属製品	一般機械器具	電気機械器具	輸送用機器器具						その他	医療保健	教育	非営利団体			その他
絵画学科	男女			1									5		1			1	2	1	3	2	16	
彫刻学科	男女				1	1					1		14		1			1	2		5		26	
工芸学科	男女												2								1		3	
グラフィックデザイン学科	男女		1		1								5		1					1	2		11	
生産デザイン学科	男女		2		6	4	2						8		1					1	32	3	42	
環境デザイン学科	男女				2		1					6	5	1		1				1	29	3	56	
情報デザイン学科	男女				2							2	7		1	1					2		18	
芸術学科	男女	1		1									3	1						1	8		8	
デザイン科	男女				1	1					3	2			1					1	8		16	
建築科	男女				2	1						5								2	10		18	
デザイン科	男女				3	1						1	1						1	4	3		9	
建築科	男女														1						1	1	3	
絵画学科(二部)	男女											1										1	1	
デザイン学科(二部)	男女					1					1	1			1						5	5	13	
芸術学科(二部)	男女					1						1									10	2	14	
絵画専攻(大学院)	男女											1						1			2		4	
彫刻専攻(大学院)	男女											1							6		1	1	7	
デザイン専攻(大学院)	男女												1						1	1	1	1	4	
芸術専攻(大学院)	男女																			1	1		2	
計		1	3	2	14	14	7	0	0	1	11	7	66	3	2	11	0	0	3	21	4	140	19	329

産業別就職者(学校基本調査)

2003 年度卒業後の状況（学校基本調査）

		専門的・技術的職業					事務従事者	販売従事者	サービス職業	運輸・通信	その他	計	
		建築・土木・測量	情報処理技術者	教員	保険婦・看護婦	美術・写真・デザイナー・音楽・舞台							その他
絵画学科	男			1	13	2				1	17		
	女			3	18		5	1		1	28		
彫刻学科	男				1						1		
	女			1	3						4		
工芸学科	男				1					1	2		
	女				16		3	1			20		
グラフィックデザイン学科	男				39					1	40		
	女				65	1	1				67		
生産デザイン学科	男				17		1			1	19		
	女				21		1				22		
環境デザイン学科	男	6			3						9		
	女	3		1	12		2			3	21		
情報デザイン学科	男				11		1			3	15		
	女				28		4			3	35		
芸術学科	男				4	1				1	6		
	女						1	1		1	3		
デザイン科	男										0		
	女										0		
建築科	男										0		
	女										0		
造形学科	男									1	1		
	女				1		6	2			9		
デザイン学科	男				6		1			2	9		
	女				23		1			1	25		
映像演劇学科	男				1			1			2		
	女			1	5	3	1	1			11		
絵画専攻 （大学院）	男			1	2		1		1		5		
	女			4	1		3			1	9		
彫刻専攻 （大学院）	男				1						1		
	女										0		
デザイン専攻 （大学院）	男				1		1				2		
	女			1	1		1				3		
芸術専攻 （大学院）	男										0		
	女				1					1	2		
計		9	0	12	1	295	7	34	7	1	0	22	388

職業別就職者数（学校基本調査）



## § おわりに §

「現状分析」とその共有化は、本学および各部署の「目標」を設定するための大変重要な作業であり、またこの作業は、内の一体感、外への競争力のための、「総合力」を高める有効な手立てである。同時に「現状分析」を効果的にするには、成果の評価基準（何がよくて何が悪いか）を明確にしておく必要がある。

本来は、入学・教育・卒業と、一連の流れを通して俯瞰するのが望ましいと考えるが、中でも、「入学・卒業グループ」が纏めたデータは、重要な評価基準の一つとなるはずだ。その評価基準をつくるためには、定点観測、時系列、彼我比較などの幅広い正確な客観データが要求される。

本グループとして、各部署がどのようなデータがあれば「現状分析」が可能か、という観点で、あるべき姿を標榜するところからからはじめた。しかし、学内にあるデータの種類およびレベルが、フィールドにおいては、ファインアート、デザイン、昼間、夜間など多岐にわたり、シンキングレベルも、経営レベル、教育の現場レベル、実務担当レベルとさまざまで、膨大でかつ各所に点在している現状が判明した。

結果として今回の作業は、今まで纏まっていなかったこれら現有データを拾い上げ、大学全体として統合整理したというレベルにとどまった。したがって、現状分析をするためのデータとみなすには無理があることを重々承知している。しかし、現有データを統合整理するだけでも多くのことが読み取れるという、ある種の光明を得たところが今回の成果とも言え、その観点でこの作業は有意義であった。

今回の作業で

受験者数、倍率、歩留まり

（どのレベルなら良しとするのかを判断する彼我比較材料はなし）

就職率、就職先

それぞれの時系列変化

など、現有するデータの大学全体レベルの統合整理ができたものの、今後大学全体および現場レベルで、競争力のあるブランドをつくり上げるために、

社会からどう見られているか？ 期待されているか？

企業からどう見られているか？ 期待されているか？

受験者からどう見られているか？ 期待されているか？

などの客観評価を知る必要があると考えている。

その他にも、

企業、卒業生、高校／予備校のアンケートなどの必要性は？

専門調査会社による社外内の評価の必要性は？

また、

大学の評価基準をどう見出していくか？

各学科・専攻の目標によって評価の指標は異なるのではないか？

など、今後の課題が見えてきたところと認識している。

## § はじめに §

管理運営に求められるものは、学生に提供するカリキュラム、学生支援活動などさまざまなプログラム提供に際し、その価値を高めるための制度をつくることに他ならない。一方で、大学における資源（人、金、モノ、手間など）は有限であるため、経営上、その価値を付与するプログラムは取捨選択の必要がある。

この際、より多くのプログラムに価値を付与すること、より高い価値を付与することが求められる。そのためには、一つ一つのプログラムが最短距離（金、手間、学生にとっての利便性など）で最大の効果を得るべく注意しなくてはならない。一つ一つのプログラムから最短距離で最大限の効果を引き出すことにより、結果としてより多くの、高い価値を持つプログラムを学生に提供することが可能となる。

そのためには、プログラムの取捨選択を行なうこと、それぞれが独立したプログラムを有機的につなげることが必要となるだろう。学生が求めるものが多様化する一方、大学の資源は企業に比べ柔軟性に欠ける。よって、プログラムの取捨選択と有機的連鎖は、これまで以上に重要である。これらを実行する制度づくりを担う管理運営（マネジメント）は、これまでになく注目されなければいけない。

本章では、意思決定のあり方、事務組織のあり方、財政状況、資源投下のあり方を中心に考察することにする。

## § 現状報告・評価 §

### 1. 意思決定のあり方

#### < 現状報告・評価 >

「本学 50 年史・創設期の人びと 3・村田晴彦（奥野健男稿）」から抜粋すると、本学は「1 円の金もないところから学校をつくり出し、借金を重ね、次々に校舎をたてる手腕」で創設され、「金策の苦労は 1975 年（昭和 50）頃まで続き、給料日には村田理事長自ら銀行に赴いて座り込み、緊急融資を懇願する綱渡り的手品のな経営が続いた」。こうした厳しい経営環境の中、「各分野のそうそうたる学者を、すばやく目をつけ、熱意を持ってくどき、給料はろくに払えないが、礼と信をもって尽し、多摩美術大学に参加してもらおう」という物心両面において教職員が一致団結して、今日の発展を築いて来た歴史がある。近年、国立大学の法人化、私立大学の経営逼迫等の要因により、理事会機能の強化、ガバナンスの確立が叫ばれているが、本学は創設期から強いリーダーシップに基づくトップダウン形式を先取りして来た。

しかし創設当時と決定的に違う要因として、学生数、教職員数、施設設備、カリキュラム等のスケールが圧倒的に大きくなったこと、学生の求めるものが多様化しているということが挙げられる。質、量ともに高いものが求められる今日では、組織だった機能が必要とされる。情報を共有する機能、その情報を基にプログラムを取捨選択する機能、プログラムの決定を伝達する機能が求められる。



尤も、本学においてもこれらに対応すべく各種委員会等を設けている。しかし、これら委員会等が必ずしも機能していないこともある。主要な定例会議である教授会、大学院委員会、学科長会、教務主任会議、大学院教務委員会、カリキュラム委員会、国際交流委員会、入試委員会、入試運営委員会だけでも、1年間で計26回、議題数は539議題となった(2003年度実績)。これら以外に各種委員会、部会が相当量ある。又、委員会の下に分野ごとの小委員会を設けて、委員会の議題を検討しているところもある。これら会議を網羅すると、膨大な労力を掛けていると言って良いだろう。

一方、これら会議の構成メンバーを見てみると、各学科から1名づつを選出するという形が多い。その為、一人がいくつもの委員会や部会に重複している例が多い。会議だけでなく、自らの教育・研究活動、研究室の運営も勿論、業務として行っている訳だから、会議負担が重くなっている。その結果として、構成メンバーの中でも会議運営に温度差が見られる。出席率が低くかったり、単なる報告で終わってしまっている会議がまま見受けられる。又、職員が会議運営にあたっているが、委員として委嘱されていない場合が多く、意見集約の機能に欠けると思われる。

規程上位置づけられていない各種委員会等もある一方、逆にそれらが活発に活動している場合もある。各種委員会等の規程上の位置付けと実際の活動状況が必ずしも一致していない現状があるようだ。意思決定の経路に若干の混乱が見受けられる。

今回の自己点検・評価活動を行なうにあたって、各研究室、事務セクションに対してヒアリングを行なったが、その中でも各学科間の調整や大学全体の方向性を求める声が多かった(巻末資料参照)。これら課題を改善するためには「意思決定のあり方」を整理し直す必要があるだろう。

規程で位置付けられている委員会等

組織名	組織構成	取り扱い事項	位置付け
理事会	理事7～9名、監事2～4名	学校法人の事業を達成する全ての事項	最高議決
評議員会	評議員19～21名	予算、借入金、重要な資産の処分	議決
		予算外の新たな業務の負担又は権利の放棄	議決
		合併	議決
		解散(私立学校法第50条第1項第3号)	議決
		残余財産の処分、帰属先の選定	議決
		収益事業に関する重要事項	議決
		寄附金、寄附財産	議決
		寄附行為の変更	議決
		法人の業務に関する重要事項	議決
		運用財産のうち不動産、積立金の管理	諮問

		寄附金の募集	諮問
		剰余金の処分	諮問
		寄附行為の施行細則	諮問
		法人の業務に関する重要事項	諮問
教授会	教授、助教授、講師	入学、休学、退学、転学、卒業	審議
		試験及びその結果	審議
		学生定員、教育課程	審議
		学生指導及び賞罰	審議
		教授、助教授、講師、助手の任免	審議
		学則により決定を教授会によるべき事項	審議
		学長、理事会の諮問事項	審議
大学院委員会	学長、大学院担当教授、学長の指名する者	入学、休学、退学、修了	審議
		教育課程	審議
		試験及び課程修了の認定	審議
		学生の賞罰	審議
		規則により決定を大学院委員会によるべき事項	審議
		学長、理事会の諮問事項	審議
協議会	学長、学部長、学科長、学長の指名する者	学則、重要な規則の制定、改廃	諮問
		学部、学科その他重要な施設の設置、廃止	諮問
		教授、助教授、講師、助手の任免	諮問
		学生定員	諮問
		学部その他機関の連絡調整	諮問
		大学の運営に関する事項	諮問
図書館運営委員会	図書館長、学長の委嘱する委員若干名	図書館運営に関する重要事項	審議
美術館運営委員会	美術館長、学長の委嘱する委員若干名	美術館運営に関する重要事項	審議
入学試験委員会	学長、教務部長、学部長、学科長	入学試験に関する基本的な事項、学部間の連絡調整	審議
入学試験運営委員会	教務部長、学部長、学科長、学科から選出された者1名	入学試験実施上の重要事項	審議
メディアセンター運営委員会	メディアセンター所長、学長の委嘱する委員	メディアセンターの管理、運営	審議
		メディアセンターの施設の利用	審議
ネットワーク委員会	メディアセンター所長、理事長の委嘱する者	ネットワークの管理運営に関する重要事項	審議
部課長会	事務管理職	事務全般の連絡、調整	連絡調整

規程で位置付けられていない委員会等

組 織 名	組 織 構 成	取 扱 事 項	位 置 付 け
自己点検・評価部会	各学科から選出された者		理事長、学長の諮問機関・教育充実検討委員会中の部会
カリキュラム検討部会	各学科から選出された者		理事長、学長の諮問機関・教育充実検討委員会中の部会
生涯学習部会	各学科から選出された者		理事長、学長の諮問機関・教育充実検討委員会中の部会
カリキュラム委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
規則委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
施設委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
就職指導委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
日本育英会委員部	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
図書委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
研究紀要委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
美術参考委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整
国際交流委員会	各学科から選出された者		教授会の審議事項の調整

各種委員会等の位置付け（表 -1）

< 課 題 >

以上、意思決定のあり方には次の問題点が挙げられる。

各種委員会等の活動状況に温度差があり、名目と実態の乖離により混乱が生じていることがある。

実を伴わないメンバー構成により、機動的な会議開催に支障がでているところがある。複数の委員等の掛け持ちによる負担のため、一つの会議に取り組むという環境にない。職員の役割が会議運営に留まっているため、実行を伴う意見集約の機能に欠ける。

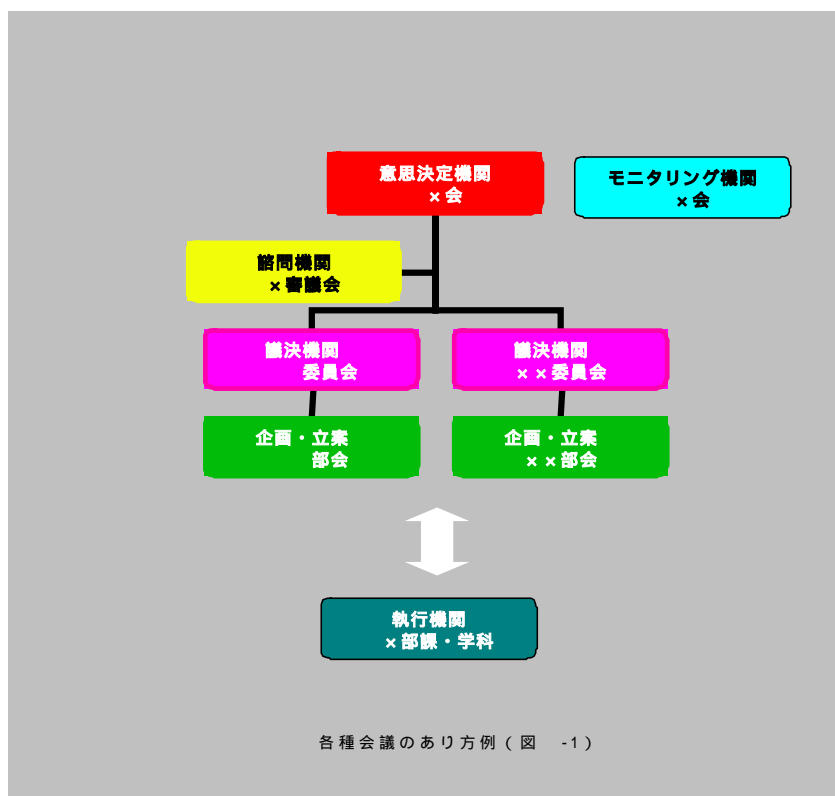
これらの課題を改善するための具体的方策は、以下のとおりと考えられる。

各種委員会等を機能別に階層を分け、かつ階層ごとの名称統一を行なうことで、各種委員会等への理解を学内共有する。例えば、議決機関＝委員会、企画・立案機関＝部会、諮問機関＝審議会など（表 -1 参照）。

メンバー構成を絞り、機動的な開催を図る。

会議負担を軽減し、各委員会等での審議を実質的なものとする。

職員を必要に応じ、委員委嘱し意見集約機能を高める。



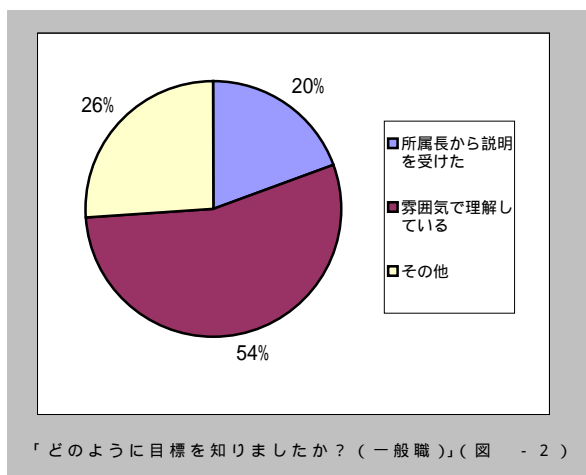
これら整理を行い、図 1 のように階層ごとに色分けするなど工夫を施した組織図を明示する。それにより各種委員会等の目的や位置付けをビジュアル化し、学内共有を一層進めることが出来る。このような技術的な取り組みも有効だろう。

## 2 . 事務組織のあり方

### < 現状報告・評価 >

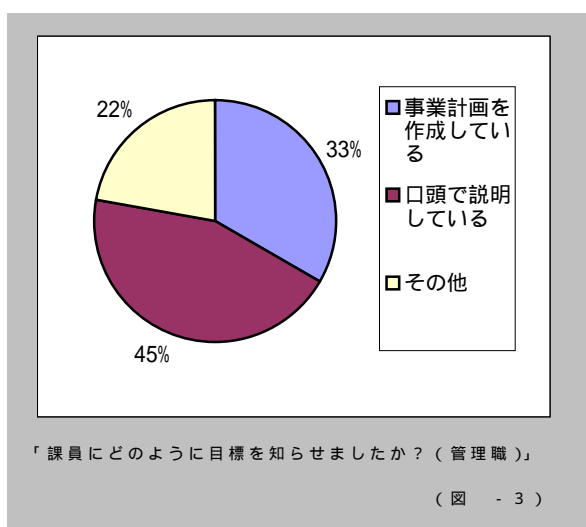
「意思決定」を具体的な形に変えていくためには、「意思決定」がどのようなものであるかの共通認識、すなわち「目標」の周知が前提となる。周知された目標に基づき執行すること、その効果を測ること、加えるべき修正点を系統立って提示することが、行政機関としての事務セクションの役割である。ここでは個別事例ではなく、行政機関として事務セクションが機能しているかの検証を行なう。

今回の自己点検・評価活動に際し「マネジメント体制に関する職員アンケート」と称して、目標の周知がなされているか、目標の伝達方法はどのようなものか、目標の修正のための提案がされているか、構造的な問題はないのか、という視点をもって職員（管理職、一般職別）を対象にアンケートを行なった。目標管理を導入していない現状、どのような結果が出るか、注目される場所であった。詳細は割愛するが、結果の概略は次の通りであった。「所属部署の目標を知っているか（知らせているか）？」という設問については、非常に高い割合で目標の周知と理解がある結果がでた。一般職について「何となく知っている」というレベルまで含めると 80% が目標を理解していると回答した。一方、管理職について「だいたい知らせている」というレベルまで含めると 75% が目標を課員に知らせていると回答した。



この結果については信頼できる数字であるだろうか？一般職に対して行った「どのように目標を知りましたか？」という設問について、「所属長から説明を受けた」としている者は20%に過ぎない。

半数以上が、「雰囲気理解している」としている(図 - 2)。これを見る限り、知っていると回答した「目標」は、組織としてのミッションを行うに足る「目標」とは言えず、課員一人々が日常業務を通して感じた自己解釈と見ることができる。一方、管理職に対して行った「課員にどのように目標を知らせましたか？」という設問について、事業計画を作成している者は33%に過ぎない(図 - 3)。これらより、管理職者が「目標」を伝えつつも、課員には十分伝わっていないことが伺える。又、課員は自らの解釈を「目標」と捉え、業務にあたっていると言えるだろう。



目標の認識経路にズレが生じていることは理解できた。しかし、認識経路にズレが生じていたとしても、結果としてその目指すところが同じであれば問題はないのかも知れない。しかし各々の「目標」が同じでなかったら、今後の

改善が必要となる。

同アンケートでは、記述式でその原因を探った。その結果、目標管理、人事評価、人材育成システムの不備に関する記述と、コミュニケーション不足に対する記述が多かった。これら制度上の問題と、前述した目標の認識経路、コミュニケーションの齟齬を総合的に考えると、次のように問題を指摘することができる。

### < 課 題 >

本学では、大学全体の方針が正確に伝わっていないように思われる。

そのために、長期計画に基づき管理職が目標を設定し得る環境とは言えない。その結果、課員の目標に対する意識に差があり、自己流の目標設定に陥っている。これら状況は、組織としてミッションを行うに足る目標を導き出すに至らず、場合によっては大学の利益にならないこともある。

目標管理を進めて行く制度的裏づけが乏しく、問題を個人の資質や責任に転嫁しがちな環境にあると言える。又、人事制度が機能していないために職場のモチベーションの低下、コミュニケーションの齟齬が生じて、問題解決を困難にしている。

しかし、課員が自らの提案を実現すべくその職責を果しているか、管理職が課員の提案を系統的に捉え、制度づくりに取り組むべくその職責を果しているか、検討の余地

がある。制度上の問題を言い訳として責任を転嫁していないか、の認識を持つ必要があるだろう。

職責については、上長がより高い責任を負うものであるから、経営、運営の方針を明示することがまず求められる。それを形に表すための制度の整備が急がれると伴に、職員一人々々がその職責について再考する必要がある。

これらの対応策として、評価者訓練を含む管理職研修及び職階別研修を実施している。又、2～3年後を目途に目標管理の導入、人事制度の充実を計画している。

目標管理が導入され、業務がスムーズに遂行されるようになれば目標の共有、伝達、コミュニケーションの向上など期待できる。しかし、これらの施策が効果を上げているかの自己点検・評価と伴に、第三者による評価も必要であろう。

上記アンケート結果により改めて認識できた問題については、従前より問題意識を持っていた。対応策としてコンサルティング会社のもと、2001年10月22日～26日と10月29日～11月1日の週から各々3日間(計6日間)、各事務セクションで業務量調査を行った。この調査については、各自が定められた期間中に自身の業務内容を書きとめ、その結果を表-2のように業務レベル、作業レベルごとに集計し、事務量の把握、適正人員配置の基礎データを収集するものである。

その結果、業務ロスが比較的高いこと等の指摘があった。全体的な考察として、

業務革新には時間がかかると思われる

業務の共有化が必要である

管理職の人材育成が最急務であると考え

の指摘があった。これら問題解決のため、各種職員研修を実施している。2000年各種研修3回、2001年14回、2002年6回、2003年8回行なっているが、自己点検・評価活動に際して行った「マネジメント体制に関する職員アンケート」(2004年6月実施)の結果からも、その成果が現れるには一層の努力が必要と考えられる。

経路期間合(平成3年09月~11月日:8日間)																全期間合計	
所管業務	展開された業務	詳細業務	下位業務	作業a	新規作成	作成	計算	パソコン入力		会議(臨時)	転記	修正	作り直し	指示待ち	その他		
				作業b													1
法人業務	理事評議会 人事務管理	HRP	開催	1	中												
			人的管理	2													
			給与データ管理	3													
			私大退職金	4													
			雇用保険	5													
			労災保険	6													
			人事考課	7													
			異動昇格令	8													
			研修企画	9													
			研修実施	10													
			業務効率	11													
			人事データ	12													
			人事資料	13													
大学運営業務	大学関係 申請届出		学校基本調査	31	略												
			学校実績調査	32													
			科学研究調査	33													
	部課長会 運営業務		入試	34													
			開催	35													
	上野毛 キャンパス総務	予算管理	業務予定表作成	36													
			予算案作成	37													
	物産調査	施設管理	予算管理簿管理	38													
			物品購入伝票	39													
			校印刷物作成	40													
			営繕関係	41													
			清掃	42													
			警備	43													
			防火	44													
			食堂	45													
			物品管理	物品管理													46
			物品データ管理	47													
	付属施設管理		美術館施設管理	48													
			セミナーハウス管理	49													
			講堂管理	50													
テニスコート管理			51														
その他所管以外の業務			52														
作業合計																	

(表 - 2)

### 3 . 財務状況

#### < 現状報告・評価 >

さて、管理運営体制によってプログラムの選択を行なう際、それが限定される要素として「財政」が大きなものとなる。それでは本学の財政状況を見てみることにする。

1990年代のバブル経済崩壊後は、固定資産価値の激しい下落や不良債権によるバランスシートの不均衡が問題視され、一般企業のみならず金融機関までも倒産や合併連衡を繰り返し、その間リストラ等による雇用不安が社会問題となり混乱を一層複雑化させた。

最近ようやく、長期に亘る経済活動の低迷から脱し国内景気の回復が認められつつある一方で、原油の供給不安などからその価格が高騰し世界の経済に悪影響を及ぼす懸念が生じるなど、景気の本格的な回復までの道のりには厳しいものがある。

その間18歳人口は1992年度205万人をピークとして、2003年度146万人と59万人(約30%減)減り、さらに3年後の2007年度には130万人と75万人(ピーク時より約37%減)減る。

また昨年の出生率は1.29%と依然として減り続け出生者が18歳になる2022年度には113万人にまで減少する。

大学・短大への進学希望者も2007年度には69万9千人にまで減少し、入学定員の総計とほぼ一致し数字上で、志願者全員が入学可能となる「全入時代」が当初の予測の2009年より2年早まることが文部科学大臣の諮問機関、中央教育審議会の試算で明らかになった。

全入は計算上のことで、学生確保で新設校や短大ではすでに厳しい状況が続いている。

少子化や専門学校人気で大学・短大の志願者数は減り続け、今年度大学では29.1%、短期大学では41.0%が定員割れに陥っている。

このような状況下でも規制緩和政策や護送船団方式からの転換で、大学の新規参入や入学定員枠の拡大は続き、減り続ける志願者の確保に向けて学校間の競争はますます熾烈になり、敗者は学校統合や倒産など淘汰の時代へ向け経営上の大きな試練に立たされている。

また一方、国立大学は今年4月からの法人化により、研究成果を生かすためTLO(技術移転機関)への出資や大学債による資金調達も可能となるなどその優位性は高まっている。

このような大学激動の環境下で、学校法人の使命である建学の理念に基づいた、教育研究活動を永続的に維持発展させるために必要な財源を、いかに確保するかが財政上の最も大きな課題である。

- A. 財政計画により学校法人が健全に維持されるか？
- B. 学生の修学上の経済的負担が公平かつ適正であるか？
- C. 教育研究施設設備が適切に充実されているか？

以上の長期的展望に立った計画の策定が重要である。

そのためには、本学の財政状況を的確に分析し実態を把握することが必要である。

以下、消費収支計算書、貸借対照表などの計算書類をもとに本学の財政状況について分析を行った。



## 1. 消費収支計算書

消費収支計算の目的は毎会計年度の消費収入と消費支出の内容および財政均衡の状態を明らかにするためのものである。

消費収入は帰属収入から基本金組入額（当該会計年度に施設、設備等の固定資産の取得〈将来計画を含む〉に充てられた額や、基金および支払資金として保持する額）を控除した額である。

この消費収入から消費支出（人件費、教育研究経費、管理経費、借入金利息等の当該会計年度消費する資産の取得価額および用役の対価の額）を対照し、均衡の状態をみることにより教育研究活動の維持発展と永続化をめざすものである。

### （1）消費収入の部（表 -3）

#### 学生生徒等納付金

1999年度の学費収入額を100%とした場合の2003年度の増加率は15.2%高くなっている。

この間、授業料などの納付金は据置のため、増加分は1998年度開設の美術学部情報デザイン学科（入学定員120名）や1999年度開設の造形表現学部（入学定員200名）〈前進の美術学部二部は入学定員160名〉などの学生数の増加によるものである。

学生数の増加も一巡した後、2002年度と2003年度の比較では増加率が0.5%と僅少になっている。

本学の帰属収入の約86%を占めていることを良く認識し学費計画を立てなければならない。

#### 手数料

ほとんどが入学検定料であるが、1999年度の収入額に比較して2003年度は85.4%と減少傾向が止まらない。

18歳人口の減少、景気低迷による国公立大学志向、一人当りの志願数減少、専門学校人気など私立大学離れが進行するなか、一人でも多くの志願者確保に向け一層の努力が必要である。

#### 補助金

補助金は帰属収入のうち、学生生徒等納付金につぐ財源であるが1999年度の収入額に比較して2003年度は96.3%と減少している。

その主なものは国庫補助金（私立大学等経常費補助金）である。

推移は、1999年度をピークに5億円台後半で推移し傾向としては、一般補助金は減額傾向で特別補助金は微増傾向である。

今後も特別補助金獲得に向けた特色ある教育研究を実践する努力が必要である。

#### 資産運用収入

資産運用収入は、国債、財投機関債、金融債、事業債などの有価証券および預貯

金からの受取利息が中心であるが、低金利政策の実施により 1994 年度以降長期金利は減少の一途を辿り 2002 年度には 10 年国債の運用利回りが 0.5%まで低下した。

銀行預金もそれに連動し 2 年大口定期預金金利が 0.03%の水準となっており、増収をはかるためには、長期的な資金計画を立案し預貯金から有価証券へ短期運用から中長期運用へと資金をシフトさせ、運用対象もリスクの存在を充分認識しつつ、かつ運用基準に沿った金融商品での運用に心がける必要がある。

現在の運用基準は株式、株式投資信託、株価指数連動商品、為替リスクの存在する金融商品は運用対象外としている。

( 2 ) 消費支出の部 ( 表 -3 )

人件費

1999 年度の人件費を 100%とした場合の、2003 年度までの 4 年間の増加率は 12.8%で年平均 3.2%である。その間、教職員数の変化を見ると教員が 169 名から 187 名へ 18 名増加、職員が 153 名から 148 名へ 5 名減少、合計 13 名増加していることもあり人件費は抑えられているといえよう。

さらに、定年退職規程(職員 68 歳から 63 歳に引下げ<経過措置あり>、教員 70 歳から 67 歳に引下げ)の変更、教職員選択定年規程の導入や職員役職定年規程が施行されるなど人件費抑制の努力がなされている。

また、人件費は専任教職員数が多いほど膨らむ傾向なので人件費の総量抑制の方策として兼務教職員の任用、人材派遣や業務委託契約などによる外注化も積極的に進める必要がある。

教育研究経費

1999 年度の教育研究経費を 100%とした場合の、2003 年度の増加率は 29.7%となっている。

主たる増加はコンピュータの周辺機器や外注された業務委託にかかる経費、1994 年度から継続されている八王子キャンパスの整備等にかかる減価償却費である。

今後、新增設された施設や設備に対する補修や更新などの経費も増加が予想されるので十分に資金計画へ反映させなければならない。

借入金利息

1999 年度の借入金利息を 100%とした場合の、2003 年度の減少率は 21.4%である。

1999 年度末の借入金残高は 62 億円、2003 年度末の借入金残高は 57 億円と 5 億円減少したことと、1999 年度以降実施の借入金金利が 0.90~0.98%と非常に低金利であるためである。

( 3 ) 消費収支差額の部 ( 表 -3 )

次年度繰越消費収入超過額

1999 年度の次年度繰越消費収入超過額 55 百万円であったが八王子キャンパス整

備にかかる固定資産（土地、建物）取得分や将来計画に基づく第2号基本金組入額の増加などによる基本金組入額が大きく2003年度では20億円の消費支出超過、繰越残高も15億円の消費支出超過となった。

なお、今後も教育研究活動を永続的に維持発展させるためには、長期に亘る支出超過を避けて早期にその解消に努めなければならない。

## 2. 貸借対照表

貸借対照表上の『資産の部』には、教育研究活動に必要な施設設備等の長期間に亘り使用する資産を『固定資産』に計上し、次年度の教育研究活動に使用するものや、運営に必要な資産を『流動資産』に計上する。

『負債・基本金及び消費収支差額の部』は、資産の部に計上された資産の調達源泉を明らかにする。

これは、負債の「他人資金」か基本金及び消費収支差額の「自己資金」か、を表示することである。

また、教育研究活動の充実・向上には資産が多いほど目的を達成できるが、反面、負債が増加すると消費収支差額を減少させ、「教育研究条件の整備」と「財務の健全性」は相反することになるので、両者が維持・調和される財政計画が必要である。

### (1) 資産の部 (表 -4)

#### 有形固定資産

1999年度の有形固定資産を100%とした場合の2003年度の増加率は24.4%であり、この間も校地を取得しレクチャーホールが竣工するなど、1994年度に掲げた八王子キャンパス整備計画が順調に実施されている。

#### その他の固定資産

1999年度のその他の固定資産を100%とした場合の2003年度の増加率は61.4%であり、将来計画の引当資産や保有有価証券の充実振りが窺われる。

#### 流動資産

1999年度の流動資産を100%とした場合の2003年度の増加率は10.3%でその間、八王子キャンパス整備計画を進めつつも支払資金が維持されている。

### (2) 負債の部 (表 -4)

#### 固定負債

1999年度の固定負債を100%とした場合の2003年度は95.9%で4.1%の減少である。

#### 流動負債

1999年度の流動負債を100%とした場合の2003年度は112.3%で12.3%の増加である。増加の要因は、前受金の増加と預り金（各学科の実習預り金）の増加である。

(3) 基本金の部 (表 -4)

第1号基本金

1999年度の第1号基本金を100%とした場合の2003年度は131.7%で31.7%の増加である。

増加の要因は、八王子キャンパス建設整備、新学部・学科設置等にかかる固定資産取得分の組入れによるものである。

第2号基本金

2003年度から2007年度まで「多摩美術大学整備資金」として毎年15億円の組入れ計画が始まったものである。

第3号基本金

多摩美術大学奨学基金の増加によるものである。

3. 財務比率分析

本学の経営状況および財政状態の平均的傾向を知るために、過去4年間の私立大学芸術系19法人と医歯系学部を除いた私立大学部門平均との比較をした。

(1) 消費収支の財務比率 (表 -5)

一般的に、財務内容の健全性が図られている状況とは、帰属収入で消費支出がまかなわれ余剰額があり、これにより基本金組入額がまかなわれ、さらにある程度の余剰額(消費収支差額)がある状況である。

a) 人件費比率

人件費の帰属収入に対する割合を示す重要な比率で、一般的には低い値が良いとされる。

人件費は消費支出のなかで最大の部分を占めているため、この比率が特に高くなると消費支出全体を大きく膨張させ消費収支の悪化を招きやすい。また人件費の多くは固定費であり性格上、一旦上昇した人件費比率を低下させることは容易ではない。

本学は、芸術系部門平均と比べ低い値で安定推移している。これにより相対的に教育研究の充実に回せる資金が多くなる。

ただし、この比率だけではなく教職員の構成、人数、年齢、勤続年数などの他、一人当りの実額にも配慮する必要がある。

b) 人件費依存率

人件費の学生生徒等納付金に対する割合を示す関係比率で、低い値が望ましいとされる。

この比率は人件費比率や納付金比率により影響を受けるが、一般的に人件費は学生生徒等納付金の範囲内に収まっていることが望ましいとされる。

人件費依存率の本学の値は、46.2%で芸術系部門平均 65.6%と比べると 19.4%低い比率である。

c) 教育研究経費比率

教育研究経費の帰属収入に対する比率で、高い値が良いとされる。

この支出には、消耗品費、光熱水費、旅費交通費の他、教育用固定資産にかかる減価償却額が含まれている。これらの経費は教育研究活動の維持・発展のためには不可決であり、消費収支の均衡を失わない範囲での高い比率は望ましい。

本学は、26.7% (2002年度)と芸術系部門平均 25.4%に比べて 1.3%高い比率である。

d) 管理経費比率

管理経費の帰属収入に対する比率で、低い値が良いとされる。

管理経費にも、教育研究経費と同様な小科目があるが、これは教育研究活動以外に支出されたもので学校法人の運営のためにはある程度はやむを得ないが低い方が望ましい。

本学は、3.7% (2002年度)と芸術系部門平均 13.6%に比べて 9.9%低い比率である。

e) 借入金等利息比率

借入金等利息の帰属収入に対する比率で、低い値が良いとされる。

この比率は、借入金等の額および借入条件等によって影響を受けるが、借入金利息は資金調達を他人資本に依存しなければ発生しないものであるため、比率は低い方が望ましい。

本学は、1.9% (2002年度)と芸術系部門平均 0.8%に比べて 1.1%高い比率であり、その内容は八王子キャンパス整備に要した借入金の利息である。

f) 消費支出比率

消費支出の帰属収入に対する比率で、低い値が良いとされる。

この比率は、当該年度の帰属収入から、人件費、教育研究経費、管理経費、借入金利息など消費支出として消費された割合を示すもので、消費収支分析上最も重要である。

この比率が低いほど自己資金は充実し経営に余裕があるといえる。逆に、この比率が 100%を超えると基本金組入前で消費収入が赤字であり、著しく経営が窮迫していることになる。

本学は、72.8% (2002年度)と芸術系部門平均 94.4%と比べて 21.6%低い比率である。今後もこの水準を維持する努力が必要である。

g) 消費収支比率

消費支出の消費収入に対する比率で、低い値が良いとされる。

この比率が 100%を超えると消費支出超過（赤字）となり、一般的には収支が均衡する 100%前後が望ましいと考えられるが、消費収入は基本金組入額により大きく左右される。

本学は、100.3%（2002年度）と均衡がとれている。

(2) 貸借対照表の財務比率（表 -5）

相反する「教育研究」と「財務の健全性」の調和が維持されているかの観点から、財務分析を実施する必要がある。

1) 固定資産構成比率

固定資産の総資産に占める構成比率で、低い値が良いとされる。

教育研究事業には多額の設備投資を必要とするため、この比率が高くなるのが学校法人の財務的特徴であるが、この比率が特に高い場合は資産の固定化が進み流動性に欠けると評価される。

しかし、各種の「引当特定資産」も「その他の固定資産」として扱われることに注意が必要である。

本学は、72.4%（1999年度）、75.5%（2000年度）、74.1%（2001年度）74.3%（2002年度）と芸術系部門平均 86.6%（2002年度）に比べて 12.3%低い比率であるが、八王子キャンパス建設整備進行とともに比率が上昇している。

m) 固定負債構成比率

固定負債の総資金に占める比率で低い値が良いとされる。

固定負債の内容は長期借入金、学校債、退職給与引当金であり長期にわたり償還または支払う債務であり高い値は好ましくない。

本学は、15.0%（2002年度）と芸術系部門平均 7.8%と比べて大きく乖離しており負債額の大きさが窺われる。

n) 流動負債構成比率

流動負債の総資金に占める比率で低い方が良くとされる。

この比率は短期的な債務の比重を示したもので、財政の安定化のためには低いほうが望ましい。

本学は、7.5%（2002年度）と芸術系部門平均 7.1%と比べ 0.4%高く各学科の実習預り金の額が比率に影響を与えていると考えられる。

o) 自己資金構成比率

基本金と消費収支差額を合計した自己資金の総資金に占める比率で高い値が良いとされる。

この比率は、資金の調達源泉を分析する上で最も重要な指標であり、高いほど財政的に安定しており、50%を割ると他人資金が自己資金を上回っていることを示す。

本学は、77.6%（2002年度）と芸術系部門平均 85.1%と比べて7.5%低い比率でこの面からも負債額の比率の大きさが窺われる。

p) 固定比率

固定資産の自己資金に対する割合で、土地、建物等の固定資産にどの程度自己資金が投下されているか、資金の調達源泉とその用途を対比させる関係比率であり低い値が良いとされる。

固定資産に投下した資金の回収は長期間にわたるため、投下資金は返済する必要のない自己資金を充てることがのぞましい。

本学 95.8%（2002年度）と芸術系部門平均 101.7%と比べて下回っているが、八王子キャンパス整備の進行とともに比率が大きくなっている点に注意しなければならない。

q) 流動比率

流動負債に対する流動資産の比率であり高い値が良いとされる。

一年以内に償還または支払う流動負債に対して、現金預金などの流動資産がどの程度準備されているかという短期的支払能力を判断する指標である。

本学は、343.4%(2002年度)と芸術系部門平均 188.9%と比べて高い比率である。

ただし、最近は資金運用上有利な長期有価証券等への資金移動があり、単に判断できない面もある。

r) 総負債比率

固定資産と流動負債を合計した負債総額の総資産に対する比率であり低い値が良いとされる。

この比率は総資産に対する他人資金の比重を評価する重要な関係比率であり、50%を超えると負債総額が自己資金（基本金 + 消費収支差額）を上回り、さらに100%を超えると負債総額が資産総額を超える債務超過となる。

本学は、28.9%（2002年度）と芸術系部門平均 17.5%と比べて 11.4%高い比率である。この指標からも負債額の大きさが窺える。

(3) 財務分析からみた結果

財務比率表（表 -5）より

消費収支計算書関係

本学が勝っている指標

- ・ 人件費比率
- ・ 人件費依存率
- ・ 教育研究経費比率
- ・ 管理経費比率

ほぼ同水準の指標

- ・ 特になし

本学が劣っている指標

- ・ 借入金等利息比率
- ・ 補助金比率

- ・消費支出比率
- ・消費収支比率
- ・学生生徒等納付金比率
- ・基本金組入比率

貸借対照表関係

本学が勝っている指標

- ・固定資産構成比率
- ・固定比率
- ・流動比率
- ・前受金保有率

ほぼ同水準の指標

- ・流動負債構成比率

本学が劣っている指標

- ・固定負債構成比率
- ・自己資金構成比率
- ・総負債比率
- ・負債比率
- ・基本金比率

以上の結果から

帰属収入のうち消費支出額の割合は小さく、その用途は人件費や管理経費の占める割合が特に小さい。その分教育研究活動にまわす資金が多くなり、消費支出構成としては優れている。

施設拡充にかかる支出をまかなうために多額の借入が実行され、借入金等利息比率、総負債比率、負債比率などが上昇し自己資金構成比率が低下した。

借入金返済支出や借入金利息支出の割合が大きい。

< 課 題 >

今後の課題

増加した有形固定資産の維持管理にかかる経常費、取替更新時の資金確保。  
引続き展開される施設設備充実計画に対する中長期財務計画に基づく運営。  
全学あげてのコスト意識の啓蒙、極力無駄を省く姿勢での管理運営。

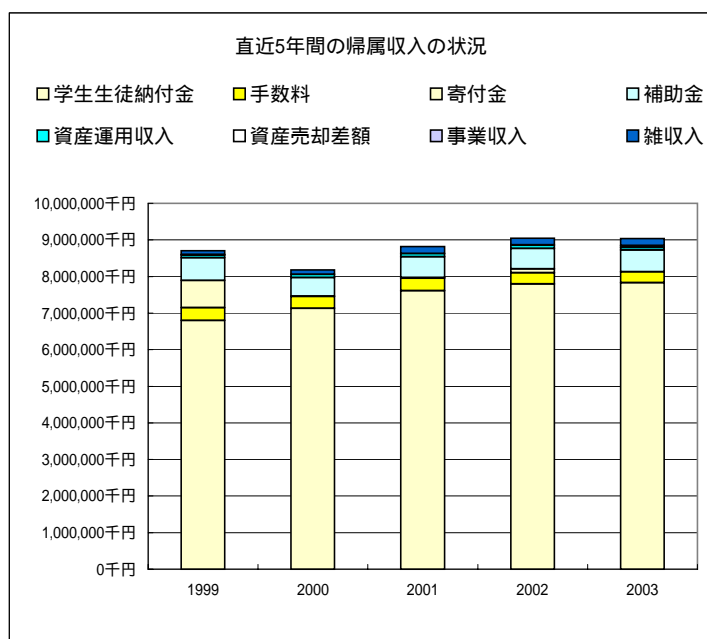


直近5年間の消費収支の状況

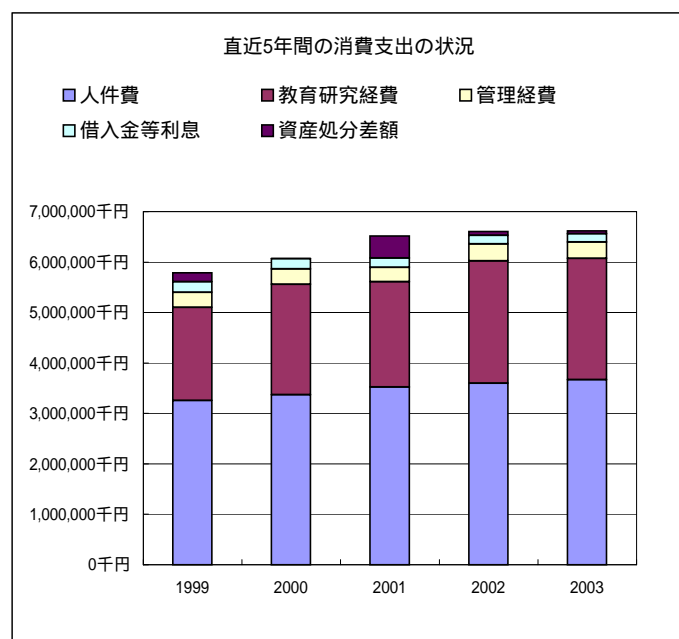
【単位千円】

科目	年度		1999年度比	年度		1999年度比	年度		1999年度比
	1999年度	2000年度		2001年度	2002年度		2003年度		
学生生徒納付金	6,795,102	7,127,405	104.9%	7,612,167	112.0%	7,792,562	114.7%	7,828,890	115.2%
手数料	350,147	328,702	93.9%	341,636	97.6%	312,024	89.1%	298,898	85.4%
寄付金	748,921	8,559	1.1%	15,709	2.1%	103,064	13.8%	4,053	0.5%
補助金	614,514	509,112	82.8%	573,185	93.3%	562,945	91.6%	591,660	96.3%
資産運用収入	71,495	86,156	120.5%	85,666	119.8%	87,243	122.0%	70,249	98.3%
資産売却差額	296	1,940	655.4%	1,484	501.4%	1,966	664.2%	48,046	16,231.8%
事業収入	0	17,292	----%	30,303	----%	37,545	----%	72,240	----%
雑収入	106,567	120,076	112.7%	192,076	180.2%	182,391	171.2%	194,787	182.8%
帰属収入合計	8,687,042	8,199,242	94.4%	8,852,226	101.9%	9,079,740	104.5%	9,108,823	104.9%
基本金組入額合計	2,742,003	1,957,410	71.4%	1,980,490	72.2%	2,487,762	90.7%	4,555,707	166.1%
消費収入の部合計	5,945,039	6,241,832	105.0%	6,871,736	115.6%	6,591,978	110.9%	4,553,116	76.6%
人件費	3,253,831	3,372,318	103.6%	3,524,185	108.3%	3,598,666	110.6%	3,670,969	112.8%
(退職給与引当金繰入額)	(143,419)	(157,596)	(109.9%)	(222,361)	(155.0%)	(197,149)	(137.5%)	(236,719)	(165.1%)
教育研究経費	1,850,922	2,184,682	118.0%	2,087,824	112.8%	2,423,608	130.9%	2,400,046	129.7%
(減価償却費)	(810,654)	(934,394)	(115.3%)	(972,665)	(120.0%)	(1,028,634)	(126.9%)	(1,091,886)	(134.7%)
管理経費	293,648	307,443	104.7%	283,287	96.5%	335,013	114.1%	325,543	110.9%
(減価償却費)	(44,848)	(49,953)	(111.4%)	(53,674)	(119.7%)	(57,367)	(127.9%)	(74,393)	(165.9%)
借入金等利息	211,869	202,813	95.7%	186,931	88.2%	173,805	82.0%	168,547	79.6%
資産処分差額	177,231	4,710	2.7%	434,471	245.1%	77,834	43.9%	53,405	30.1%
消費支出の部合計	5,787,501	6,071,966	104.9%	6,516,698	112.6%	6,608,926	114.2%	6,618,510	114.4%
当年度消費収入超過額	157,538	169,866	107.8%	355,038	225.4%	16,948	10.8%	2,065,394	1,311.0%
前年度繰越消費収入超過額	102,478	55,060	53.7%	224,926	219.5%	579,964	565.9%	563,016	549.4%
次年度繰越消費収入超過額	55,060	224,926	408.5%	579,964	1,053.3%	563,016	1,022.5%	1,502,378	2,728.6%

(表 - 3)



(図 - 4)



(図 - 5)

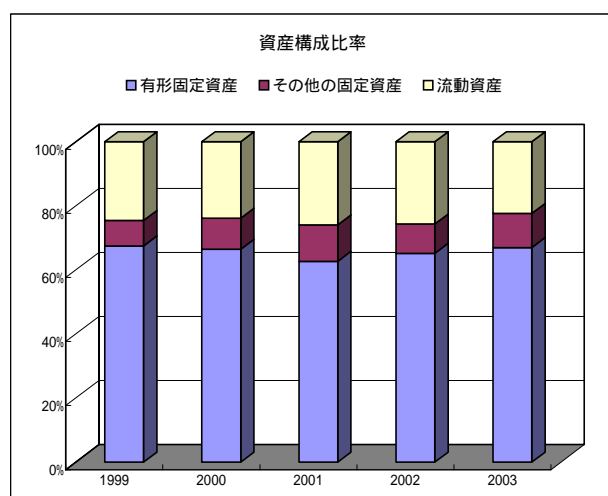
直近5年間の財政状況 < 貸借対照表 >

【単位千円】

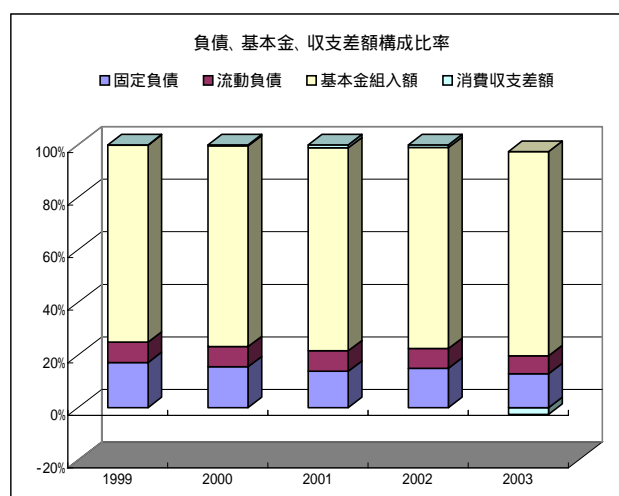
科目	1999年度		1999年度比	2001年度		1999年度比	2002年度		1999年度比	2003年度	
	1999年度	2000年度		1999年度	1999年度比		1999年度	1999年度比		1999年度	1999年度比
固定資産	34,365,020	36,016,347	104.8%	36,522,160	106.3%	39,421,405	114.7%	42,753,426	124.4%		
有形固定資産	30,739,970	31,448,137	102.3%	30,918,034	100.6%	34,579,140	112.5%	36,902,022	120.0%		
その他の固定資産	3,625,050	4,568,210	126.0%	5,604,126	154.6%	4,842,265	133.6%	5,851,404	161.4%		
流動資産	11,177,644	11,293,380	101.0%	12,792,956	114.5%	13,616,632	121.8%	12,329,549	110.3%		
資産の部合計	45,542,664	47,309,727	103.9%	49,315,116	108.3%	53,038,037	116.5%	55,082,975	120.9%		

科目	1999年度		1999年度比	2001年度		1999年度比	2002年度		1999年度比	2003年度	
	1999年度	2000年度		1999年度	1999年度比		1999年度	1999年度比		1999年度	1999年度比
固定負債	7,823,057	7,333,114	93.7%	6,804,440	87.0%	7,932,344	101.4%	7,505,836	95.9%		
流動負債	3,513,611	3,643,341	103.7%	3,841,875	109.3%	3,966,078	112.9%	3,947,212	112.3%		
負債の部合計	11,336,668	10,976,455	96.8%	10,646,315	93.9%	11,898,422	105.0%	11,453,048	101.0%		
基本金	34,150,936	36,108,346	105.7%	38,088,836	111.5%	40,576,598	118.8%	45,984,570	134.7%		
第1号基本金	32,647,702	34,604,612	106.0%	35,575,102	109.0%	38,962,864	119.3%	42,984,571	131.7%		
第2号基本金	1,000,000	1,000,000	100.0%	2,000,000	200.0%	1,000,000	100.0%	1,500,000	150.0%		
第3号基本金	102,234	102,734	100.5%	112,734	110.3%	212,734	208.1%	212,734	208.1%		
第4号基本金	401,000	401,000	100.0%	401,000	100.0%	401,000	100.0%	435,000	108.5%		
基本金の部合計	34,150,936	36,108,346	105.7%	38,088,836	111.5%	40,576,598	118.8%	45,132,305	132.2%		
消費収支差額	55,060	224,926	408.5%	579,964	1053.3%	563,017	1022.6%	1,502,378	2,728.6%		
負債、基本金、消費収支差額の部合計	45,542,664	47,309,727	103.9%	49,315,115	108.3%	53,038,037	116.5%	55,082,975	120.9%		

(表 - 4)



(図 - 6)



(図 - 7)

## 財務比率表

比 率	算 式	評 価	大学部門平均				芸術系部門平均				本 学			
			1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度
a) 人件費比率	$\frac{\text{人件費}}{\text{帰属収入}}$		%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	
			50.9	51.1	51.7	52.0	52.5	55.9	53.1	53.1	41.0	41.1	39.8	39.6
b) 人件費依存率	$\frac{\text{人件費}}{\text{学生納付金}}$		68.0	68.6	69.4	69.3	64.8	69.3	66.2	65.6	47.9	47.3	46.3	46.2
c) 教育研究経費比率	$\frac{\text{教育研究経費}}{\text{帰属収入}}$		24.1	24.6	25.6	26.7	22.5	21.3	24.8	25.4	23.3	26.6	23.6	26.7
d) 管理経費比率	$\frac{\text{管理経費}}{\text{帰属収入}}$		7.3	7.4	7.5	7.8	7.8	7.8	9.0	13.6	3.7	3.7	3.2	3.7
e) 借入金等利息比率	$\frac{\text{借入金利息}}{\text{帰属収入}}$		0.8	0.8	0.7	0.6	0.9	1.2	1.1	0.8	2.7	2.5	2.1	1.9
f) 消費支出比率	$\frac{\text{消費支出}}{\text{帰属収入}}$		84.3	85.4	87.7	89.6	84.3	87.8	89.1	94.4	72.9	74.1	73.6	72.8
g) 消費収支比率	$\frac{\text{消費支出}}{\text{消費収入}}$		102.8	103.6	104.4	105.3	96.8	102.9	106.0	108.6	97.4	97.3	94.8	100.3
h) 学生生徒等納付金比率	$\frac{\text{学生納付金}}{\text{帰属収入}}$		74.9	74.4	74.5	75.1	81.1	80.8	80.1	80.9	85.6	86.9	86.0	85.8
i) 補助金比率	$\frac{\text{補助金}}{\text{帰属収入}}$		12.8	12.2	12.5	12.6	8.4	10.8	8.9	8.5	7.7	6.2	6.5	6.2
j) 基本金組入比率	$\frac{\text{基本金組入額}}{\text{帰属収入}}$		18.0	17.5	16.0	14.9	22.6	14.7	15.9	13.0	31.6	23.9	22.4	27.4
k) 減価償却費比率	$\frac{\text{減価償却額}}{\text{消費支出}}$	—	10.8	11.0	11.1	11.6	11.1	10.5	11.4	11.4	14.8	16.2	15.7	16.4
l) 固定資産構成比率	$\frac{\text{固定資産}}{\text{総資産}}$		81.6	82.1	82.5	83.4	84.3	84.0	86.2	86.6	72.4	75.5	74.1	74.3
m) 固定負債構成比率	$\frac{\text{固定負債}}{\text{総資金}}$		9.4	8.9	8.6	8.4	8.7	11.3	9.0	7.8	17.2	15.5	13.8	15.0
n) 流動負債構成比率	$\frac{\text{流動負債}}{\text{総資金}}$		7.0	6.6	6.5	6.3	6.4	7.3	7.6	7.1	7.7	7.7	7.8	7.5
o) 自己資金構成比率	$\frac{\text{自己資金}}{\text{総資金}}$		83.6	84.5	84.9	85.4	84.9	81.4	83.5	85.1	75.1	76.8	78.4	77.6
p) 固定比率	$\frac{\text{固定資産}}{\text{自己資金}}$		97.6	97.2	97.2	97.7	99.4	103.3	103.3	101.7	100.5	99.1	94.4	95.8
q) 流動比率	$\frac{\text{流動資産}}{\text{流動負債}}$		262.2	269.6	269.7	265.7	242.8	217.7	182.2	188.9	318.1	310.0	333.0	343.3
r) 総負債比率	$\frac{\text{総負債}}{\text{総資産}}$		16.4	15.5	15.1	14.6	15.1	18.6	16.5	14.9	24.9	24.9	21.6	22.4
s) 負債比率	$\frac{\text{総負債}}{\text{自己資金}}$		19.6	18.4	17.8	17.2	17.8	22.9	19.8	17.5	33.1	30.2	27.5	28.9
t) 前受金保有率	$\frac{\text{現金預金}}{\text{前受金}}$		311.9	320.8	326.6	325.0	349.4	335.2	314.7	298.1	197.9	167.1	231.0	385.2
u) 基本金比率	$\frac{\text{基本金}}{\text{基本金要組入額}}$		94.7	95.1	95.8	95.7	90.7	93.6	95.8	94.8	96.1	94.8	96.0	93.9

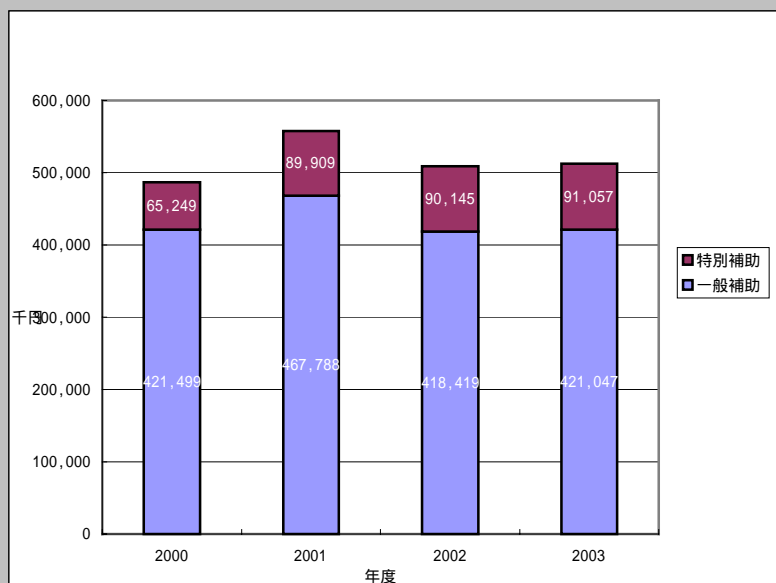
大学部門平均値（除く医歯系）・芸術系平均値は、日本私学振興・共済事業団編【今日の私学財政】2003年度版より抜粋。

（表 - 5）

## 4 . 資源投下のあり方

### < 現状報告・評価 >

学生にとって何が必要であるかという情報を共有し、その情報を基にプログラムを取捨選択し、プログラムの決定を行い、財政状況を勘案し資源投下を行なうことが、管理運営に求められることである。それでは本学の資源投下の現状はどうだろうか。分かり易い例で、本学の補助金交付状況を見てみよう。



本学の私立大学等経常費補助交付額金(図 - 8)

2000～2003年度に交付された補助金額は、図-8のとおりである。一般補助は学生数、教職員数によって、決定するものである。プロジェクト性を持つ特別補助交付額は同図のとおりであるが、その多くは実施済み事業の寄せ集めの性格が強い。補助交付を見込んだ予算づけをするなど、本来の意味でのプロジェクト性を有するものは少ないのが実情である。

当該期間で、本来の意味でのプロジェクト性を有する事業は、第3回東京国際ミニ

プリント・トリエンナーレ(2001年度・3,000千円交付)、@tamabi.Ver2借入(2003年度・2,200千円)だけである。他に図書館の蔵書検索システムも補助金を見込んだ予算づけを行っているが、プロジェクト性は薄い。プロジェクト性を持つ事業の割合は、2000年度0%、2001年度3.37%、2002年度0%、2003年度2.42%となる。2003年度には上記特別補助ではないが文部科学省の施設整備費補助金により、学内LAN(7,365千円交付)とレクチャーホールマルチメディア設備(48,306千円交付)の申請を行った。これら2件は準備期間を設け、ある程度のプロジェクト性を持つことができた。

### < 課題 >

補助金について言えば、補助金を持ち出しの穴埋めとして捉えるのではなく、選択と集中を行なうための、インセンティブとして利用することが必要であろう。美術学部絵画学科版画専攻が中心となり行い、2001年度に3,000千円の交付を受けた「第3回東京国際ミニプリント・トリエンナーレ」([http://db.tamabi.ac.jp/timpt/default\\_j.html](http://db.tamabi.ac.jp/timpt/default_j.html))などが好例であるだろう。本展は、ホームページ上で世界各国から作品を公募し本学美術館で展覧会を開いたものである。公募作品の選考過程では、分類、整理作業を学生と伴に行なった。又、カタログをCD-ROM化し「現代版画論」の授業において電子教材として利用する他、ホームページで映像データを公開した。これらにより、作家、学生、社会人を含めた教育

のシンポジウム化の立ち上げを狙ったものである。

この取り組みについては、学生と社会の交流、資料の電子化、研究活動の充実など全学的にも関心の持たれるプログラムである。同様のプログラムに興味のある学部・学科を有機的に繋げることで、全学的な取り組みとして、より価値の高いプログラム提供が可能であるし、補助金の交付も期待できる。その為には補助金委員会などを設け、事業の選択を行なう必要が生じる。又、その活動を通して、大学の目標を明確化できるだろう。

労働集約型産業である大学にとって、大きな比重を占める人件費についても同様のプログラムの取捨選択と資源投下の原則が適用されなくてはならない。近年、雇用環境の中で注目されている考え方がある。ホワイトカラーの生産性の向上、雇用ポートフォリオという2つの考え方である。については、生産性の向上をダイレクトに表現しにくいホワイトカラー（大学教職員は特に）に求められるものは、「価値を生み出す/生み出す計画を立てる仕事」であるとされている。については、正規社員、パートタイマー、派遣社員、高齢者再雇用、アウトソーシングなど多様な雇用形態を適切に組み合わせるということである。

「人」が大きな財産である大学において、いわゆる雇用ポートフォリオを安易に実施してしまうと、学生へのプログラム提供という重要事項に齟齬が生じる恐れがある。一方で、重い負担となる人件費の抑制は大きな課題である。そのため、学生にとって何が必要であるかの見極め、適正な人員配置（人数、雇用形態等）と、相応の支払いが求められる。これを見極めるための方策として、これまで述べて来たように管理運営（マネジメント）がこれまでになく注目されなければいけないのである。

## §おわりに§

1996年以降の八王子キャンパスの大整備、1998年以降の大幅な学部・学科改編によりスケール拡大の問題が生じた一方で、それに対応できる管理運営体制まで着手できなかったことが問題解決を困難にしている。大学自身の状況、取り巻く環境が激変する中で、これまでの方法だけでは困難な時代を乗り越えられず、目標管理の導入が必須となる。

そのためには「1.意思決定のあり方」で明らかとなった各種委員会等の混乱を整理し、機能させることが必要である。プログラム選択に際しての判断基準となる情報を共有し、選択結果を確実に実行することが求められる。それらを機能させるためには、職員が単なる執行者としてでなく政策秘書的役割を負うことが重要である。「2.事務組織のあり方」で述べた事務組織の問題点は、早急に改善されるべきであろう。これらが両輪となって初めて、有効な資源投下を行なうこと、すなわち学生にとって価値あるプログラムを提供することが可能となるだろう。実行のキーワードとして、「有機的つながり」と「取捨選択とその表明」がポイントになるだろう。

### § 外部評価報告について §

今回の外部評価報告については、外部評価委員に来校して頂き座談会の形で行なった。また、その議事録を「外部評価報告」とした。その理由として今回の自己点検・評価活動は、認証評価機関による評価（認証評価）に備えた準備として行った。そのため認証評価のように、多岐かつ詳細に定められた基準に基づき分析を行なった訳ではない。点検・評価が報告書の形で現れるよりも、そのプロセスでより多くの教職員の参加を期待したからである。

そのため点検・評価されていない項目が、良いもの、悪いもの双方含まれていると思われるため、正確な評価というのは難しいと考えられる。また座談会という形式を採った方が、本学の現状を分かり易く伝えるものと考えているためである。

なお外部評価については日程の関係上、「管理運営」と「それ以外の分野」とに分けて座談会を行なった。

- ・外部評価報告（管理運営に関して）
- ・日時：2004.12.20（月） 14:00～16:00
- ・場所：上野毛キャンパス本館会議室
- ・出席者：和田義博委員  
柿本静志総務部長、中島和彦経理部次長、安楽康彦経理課長補佐、筆記：総務・石井

<議事録>

柿本）認証評価機関による評価も法制化されて私たちもその準備を進めていますが、今回の自己点検・評価活動については、その準備の一環として大学独自の基準で行ないました。認証評価機関の基準に達していませんが、率直なご意見を頂ければ幸いです。自己点検・評価活動を行い纏めてみましたが、振り返ってみるとまだまだ足りないという部分もありますが、実態を受け止めて改善につなげたいと考えています。

和田）大学評価と言っても、ものさしが無いと難しいですね。

柿本）私も学位授与機構の国立高専の評価をお手伝いしましたが、どのようなものさしで、ということは難しかったですね。

和田）認証評価機関自体についてもその機関へのランクづけというものが生じるでしょうね。認証評価はある場面ではそれ自体が大事なのでしょうがその評価を受け止めて、大学が自らを改善していくことが大事なんだと思います。

それでは自己点検・評価報告書を事前に確認して、コメントを纏めてみました。それに沿ってお話します。今回のコメントについても、認証評価機関の基準を意識したものではありません（指摘ポイントは文末に記述）。



中島）実際に認証評価に向けて動き出すと、新たに改めるべき事項が見えてくるのかなあ、と考えています。

和田）管理運営について、意思決定のあり方、事務組織、財政状況、自己点検・評価と管理運営という点についてコメント致しました。

「意思決定のあり方」について、各種委員会の位置づけ、運営状況、委員等の人選など、分析・評価し、その改善に向けた提案がなされていますが、それはよろしいかと思います。しかし個々の委員会への改善案が検討されていますが、学校法人全体の意思決定の効果的な体制について触れていませんがいかがですか？例えば、理事長を補佐する体制など。また、外部の有識者等からの意見聴取と適切な反映、外部理事による活発な意見を反映させる体制について触れていませんか？

柿本) 理事の中には非常勤ですが、博報堂の会長や元東日本放送会長など2名外部理事がおります。最近の流れから見ると、若干足りないかな、と思われる部分もおありでしょうが、博報堂など美術関係にとって重要な位置を占めており、非常な有益なご意見を頂いております。

和田) 記載されていないだけなら、自らの良いところは積極的にアピールされるのが良いでしょう。自己点検・評価という、どうしても欠点ばかり書いてしまいがちですが、良いところは是非記載頂きたい。適正な評価に繋がりますから。

和田) 「事務組織」についてですが、各事務職員のアンケートを行い、事務職員の法人運営に関する意識の程度、職場内でのコミュニケーションの状況等の評価が行なわれています。また事業計画の周知徹底についても検討されています。これは優れた点と言えるでしょう。

結果として、目標管理や人事制度の見直しなど様々な問題提起がされていますが、真摯に取り組んでおられるんだなあ、ということが伺えます。

ですが事務組織が学校法人の意思決定に参加できる体制が整っているかどうか、記載されていません。その体制が整っていないと、教学一辺倒になりますし、その決定が単なる“決定”として事務組織に降りてくるようでは問題がありますね、いかがですか？例えば事務系出身の理事などいらっしゃいますか？

柿本) 制度として常務理事や事務局長というのがありますが、現在空席になっています。その分、各部門長と理事長の連携を強化しています。毎週1回の部長連絡会、毎月1回の部課長会を開催しています。これにはすべて理事長も参加し、方針の伝達、確認や各部門の現状や課題などが話し合われています。ここでは教学、管理運営すべての問題について検討していますし、各部門においてフィードバックも行なわれています。

和田) 私も他大学で役員をやっておりますが、事務系出身の理事がいますね。また、各部長が事務方として参加していますね。

中島) 現在の理事長は事務局長経験者ですので、理事長自身が事務にあかるくその役目を負っています。又、事務方は理事長のサポートをする形で参加しております。

和田) そうですか、了解しました。それはとても大切なことですね。



柿本) ただ、外から見た場合分かり難いですね。事務方の意見は中島が申した形で反映されていますが、制度として外から理解しやすいようにできたら、と思っています。

和田) 常務理事とか事務局長という形はこだわりませんが理事会は決定機関ですから、事務組織がそこに参加していると言う方が分かりやすいことは確かですね。すでに申しました教学一辺倒になりがちな体制ではありませんよ、という理解でよろしいですね。

柿本) 仰るとおりです。お金が絡むような問題や他の様々な問題も、必ず事務方ととり理事会に諮りますので、教学一辺倒となることはありません。



和田) 認証評価についても、教学と理事会の関係など重視されていますね。

和田) つづいて「 財政状況と資源投下」について、触れさせていただきます。

過去5年間の財政分析や大学部門及び芸術系部門との全国平均と対比分析が行なわれています。これは優れた点でしょう。

収支計算については、消費収支計算書の分析が行なわれていますが、資金収支計算書の分析が行なわれていません。これについては八王子キャンパスの整備のため、どのように資金が動いているか見難いですね。

これらの分析を見ますと、当法人は帰属収支が非常に良いですね。圧倒的に人件費、管理経費が少ないからでしょうね。人件費、管理経費が低いということは努力をされているということですね。それによる帰属収支の超過額が、八王子キャンパスの整備に生かされているということですね。

八王子キャンパス整備に関して、財政計画、執行状況、資金計画が記載されていません。また、外部資金について、寄付金や科研費などの記載もありませんが？

中島) もちろん、それらの計画はあります。ここで触れていないだけです。共同研究などメディアセンターを通して、非常に積極的にやっております。寄付金についても来年が70周年ですので、70周年事業の施設整備のための寄付金を検討しております。

和田) 積極的にお考えであるなら、アピールされた方が良いですね。文部科学省でも、一般補助から特別補助に重点を移すなど、一律の補助をやめて、「良いものに補助を出す」という方針に転換していますね。これは金額の多寡でなく、その流れに対する積極性が大切のようですね。

和田) 資源投下については、人的配分について触れていますが、物的配分について触れていませんね。物的配分については、課題としてあげられていますが、これに対する対処方法が記載されると良いですね。

中島) 例えばですが、今年度予算から減価償却引当金を計上し、将来の施設更新計画に備えています、記載上では課題としてあがったままになっていますが。

和田) 国立高専の認証評価でもあがりましたが、「学校の目的に沿った教育活動を将来にわたって適切かつ安定して遂行するために必要な資産を有しているか。また、経常的収入が確保されているか」については適切ですね。



また、適切な計画の策定と関係者への明示、それを実施する予算管理について記載がないので評価できません。予算管理は、学校の達成する目的があり、明示され、予算要求があつて、予算編成され、予算策定され、審議され、実施するというものですから、予算管理は一項目付け加えた方が良いですね。

もちろん、されていると思いますが。

柿本) 記載がないだけで、予算編成の調整を行い、実行予算時に再び審議をかけております。二重にやっておりますので。

和田) 「 自己点検・評価と管理運営」についてですが、評価した課題について改善していくシステムに関する記載

がありませんが？現在の課題としてお持ちなのかも知れませんが。

柿本)現在の課題となっています。この自己点検・評価部会は、理事長、学長に直接繋がる教育充実検討委員会の一部会です。その他、カリキュラム検討部会、生涯学習部会があります。自己点検・評価部会をご承知のおりの活動です。今後どのように自己点検・評価部会に取り組んでいくのか、他2部会とも協力してやりたいと考えております。実際には組織規模も小さいので、各種委員会の構成メンバーが重複するなどの問題が生じるのですが。

和田)それはあり得るでしょうね。“兼務”というのは悪いことではありませんから。同一人がやるにしても、その場その場で、立場を分けて考えれば良い訳ですから。

柿本)まだそれら体制は未整備ではありますが、今回、自己点検・評価活動について今までになく多くの教職員が関わったのは大きかったと思っています。これをきっかけに良い方向に行きたいと思っています。

和田)それこそ大学評価の本来の目的ですね。失敗例としては、上から言われて、書けそうな人が書いてしまうというのはダメですね。みんなが意見を言い合って改善するのが良いのですね。一人が書いた方が、上手く書けますが、それでは意味がありませんから。

柿本)今回はみんなでやったので時間がかかりました。全教職員の意識が変わったとは思いませんが、かなり意味あることだと思っています。

和田)それを通じて、お互いが参画して意識を高めるのが良いですね。上手い方法でやられたのだと思います。

中島)それに関して自己点検・評価活動の一環として、理事長、学長が各学科にヒアリングを行ないました。その結果、必要なものが早速、予算要求され予算策定の迅速化、意思決定が早くなりましたね。

和田)30年ほど前の古い話で恐縮ですがトヨタの看板方式というのが有名ですね。あの当時社員一人々々の提案制度というのがありましたが、ある企業の方が「正直、大変で頭が痛いんですよ」という話を伺ったことがあります。その時気づいたのが、大切なのは提案の中身そのものやそれによるコスト削減といったことではないですね。それより桁外れに違うのは毎日漫然と9時 5時で勤務するのではなくて、一人々々がもう一度自分の仕事を見直すということなんですね。自己点検・評価も同じで、みんなが一生懸命やることの効果が大切なんですね。認証評価でそれが評価されるかということ、それはまた違った問題なのですが。



柿本)確かに報告書の書き方や、認証評価基準により必ずしも正確な評価が加えられるとは言えないんでしょうけど、自ら改めるべきところは意識して前進のきっかけをつかめればと思っています。確かに温度差はまだありますが、一人でもそういう教職員が増えてくれれば良いと思っています。

先ほど、人件費率についてお褒めの言葉を頂きましたが、これについても他大学との比率比較とかではなく、

その金額が仕事内容に比して本当に高いのか、安いのかまで考えていかないと、と思っています。

中島) 自己点検がゆえに出したい数字を出せないということもあります。例えば、他大学との比較とか。もっと踏み込んで分析も出来るのですが、他大学のご都合もありましょうから。

中島) 財務的な問題としては、最近では財務公開についてもあげられますね。

和田) そうですね。自己点検・評価報告書では触れられていないようですが、アピールされた方が良いですね。

中島) 報告書では触れていませんが、学内広報誌や事務所で閲覧などに供しています。監査の内容についても、公認会計士から監査の概要書を記載して貰い、それを監事に提出しています。

和田) 公認会計士は、文部科学省に提出する監査報告書以外にご覧になっている？

中島) そうですね。公認会計士に監査概要書を作成して貰い、監事に対して文書による報告を行なっています。口頭で「公認会計士から適正な処理がされているとの報告を頂きました」だけではややもすれば監事とのすれ違いが起きがちなので、補足説明を必ずするようにしています。

和田) 監事からの意見は他には付かないのですか？

中島) 何かあれば、当然記載して頂くことになっています。

国立大学などでは、監事の職務というのまだ理解が浸透していない部分もありますね。

和田) 私も私立大学や独立行政法人の監事もやっていますが、企業、私立大学、独立行政法人、国立大学の順に監査に対する意識が変わっていますね。私学法の改正で私立大学の監査については機能するように措置されましたが、独立行政法人、国立大学法人はまだまだ機能していないところがありますね。

中島) 会計処理に対する世の中の見方が変わって来ましたからね。

柿本) 国立大学の評価も収支の意識が殆どないので、それをどう評価するのは難しいですね。私立大学の場合、どんなに優れた教育をしていても収支に問題があれば評価は変わってきますが、国立大学にはそれが無い訳ですから。収支を問わないで、独法化というのも私立大学の立場からすると理解しにくいものもありますね。

和田) そうですね。国立大学法人は予算で縛られますが、予算の範囲内なら良いということになりますね。収入はあがって来ないで、支出だけがあがって来ますから。結局、足りないものは運営交付金で賄われますしね。ただ、独法化の意義として国から切り離すことで、会計面だけでなく運営についても透明性を高めるということなのでしょうね。また、独法化の動きや独法評価委員会による評価によって、活性化はされた印象を受けますね。



中島) 東京都はもっとシビアですね。例えば、東京都美術館ですとか、来場者一人あたりのコスト計算とかホームページ上で出していますよね。

和田) 一般の会社なら、社長はそれこそ会社の存亡を担って日々苦勞されている訳ですからね。

柿本) 国立大学だけでなく、国立高専も合併する動きがありますね。

中島) 都立大学も合併されましたし。

和田) 独立行政法人も長期計画、中期計画というのがあって、その終了までに存続させるのかの可否が問われるようで、合併の動きもあるようです。そういう意味で、すべての法人が努力を求められるようになりましたね。競争が全て良いという訳ではありませんが、競争社会の中で責任を持った運営をすることが求められるのでしょ。

中島) それを行い、いかに公表するか、が大切なのでしょうね。

柿本) それでは時間になりましたので。今日はありがとうございました。

～和田委員よりの評価コメント～

以下、評価コメントについては上記議事録において補足説明を行なっています。

#### 意思決定のあり方

- ・各委員会等の位置づけ、運営状況、委員等の人選等、それぞれの委員会等の状況について、分析・評価し、その問題点について指摘しており、その改善に向けた提案がなされている。
- ・個々の委員会等の機能的な活用については検討されているが、学校法人全体としての意思決定の効果的な体制が整っているかについて、触れられていない。例えば、理事長を補佐する体制が整備され、機能しているか、教学と法人事務組織との意思決定についての関係、関わり等について、整備・運用されているか等についての記載がない。
- ・外部の有識者等からの管理運営に関する意見聴取がなされ、適切に反映されているか、また、外部理事が選任され、理事会にて、活発に意見を反映させる等の体制が整っているかについての記載がない。

#### 事務組織

- ・事務組織については、各事務職員に対してアンケートを行い、意識調査等を実施しており、事務職員の法人運営に関する意識の程度、職場内でのコミュニケーションの状況等について評価が行なわれている。また、決定された事業計画等の周知徹底についても、検討されている。
- ・結果として、計画・目標とその達成に関する意識の把握、目標管理と人事制度の見直し等、様々な問題提起がなされている。
- ・事務組織が、学校法人の意思決定に参加出来るような体制が整っているかについて、触れられていない。また、事務組織がそこで決定された事項を達成出来るような体制になっているのかについて、記載されていない。

#### 財政状況(含む、資源投下のあり方)

- ・過去5年間の財政状況及び経営成績の経年分析を行っており、また、大学部門及び芸術系部門について全国平均と対比して分析が行なわれている。
- ・各収支項目、貸借対照表項目及び分析比率につき原因の詳細が記載されている。
- ・収支計算については、消費収支計算書の分析が行なわれているが、資金収支計算書の分析が記載されていない。
- ・八王子キャンパス整備に係る事業について、財政面からの計画、執行状況等が触れられていない。比率分析等で、少々触れているのみである。また、これを含む今後の計画につき、設備投資及び借入金返済計画を含んだ資金計画の状況等について記載されていない。
- ・外部資金の活用に関しては、検討されているが、特別補助金のみがその対象となっており、寄付金や科研費、共同研究事業等による収入等を積極的に活用する必要性について記載されていない。
- ・資源配分については、人的資源の配分について検討されているが、施設設備等の物的資源についての記載がない。八王子キャンパス整備のために実施した借入金の返済、今後の設備に関する維持管理費増加について記載がない。
- ・学校の目的に沿った教育活動等を、将来にわたって適切かつ安定して遂行するために必要な資産を有しているか。また、経常的収入が確保されているかについては、適切である。
- ・学校の目的を達成するための活動の財政上の基礎として、適切な計画等が策定され、関係者に明示されてい

---

るかという観点からすると、記載が必ずしも十分とは言えない。

- ・学校の目的を達成するため、教育活動（施設・設備の整備含む）に対し、校内において明示された方針に基づいて、適切な資源配分がなされているかについて言えば、予算管理についての記載がないために、評価できない。

#### 自己点検・評価と管理運営

なお、自己点検・評価の目的は、点検・評価の結果、改善すべき事項があれば、当該事項について、検討し、改善していくことにある。したがって、評価結果によって具体的な改善を行うシステムが整えられ、機能させなければならないが、その点について記載がなされていない。

以 上

- ・外部評価報告（管理運営以外に関して）
- ・日 時：2004.12.22（水） 9:30～16:00
- ・場 所：八王子キャンパス、上野毛キャンパス
- ・出席者：會田雄亮委員、岡島達雄委員  
 森下清子自己点検・評価部会長、清田義英美術学部長、米倉守造形表現学部長、柿本静志総務部長  
 恩蔵昇総務課長、中島和彦経理部次長、荒川直教務部事務部長、田中誠二造形表現学部事務課長  
 筆記：総務・石井

・スケジュール

9:30～11:30	関係者挨拶・八王子キャンパス見学
11:30～12:30	昼 食
上野毛キャンパスへ移動	
14:00～14:30	上野毛キャンパス見学
14:30～16:00	座談会

・キャンパス見学









## &lt;議事録&gt;



森下) 既にご覧頂いています自己点検・評価報告書と関係資料、本日のキャンパス見学で多摩美術大学がどのような点を改善すべきか、率直なご意見頂けたら幸いです。既に12月20日に管理運営については和田義博先生にご意見頂いておりますので、教育・研究を中心にご意見をお願い致します。先生方のご意見を基に、色々と改善、発展に結びつけることができれば、と考えております。



會田) 私の大学経験から言いますと、多摩美術大学は一番キャンパスも設備も良く非常にすばらしい大学だと印象を持ちました。画期的なのは、各学科がそれぞれギャラリーを持っていることですね。学生が自分でつくったものをちゃんとした場所で発表できるということは、これは一番嬉しいことですね。以前学長を務めておりました東北芸術工科大学も多摩美を参考に、サロンと展示場を備えた研究棟をつくるなど色々と改善しました。ただ多摩美に限ったことではありませんが、日本の大学や教育に対して感じていることがあります。

「日本文化の基盤」というものの恩恵を私たちの世代は受けています。例えば、建物があって、その中に

調度品があって、日常使うものがある。それぞれが非常に質が高く、バラエティーに富んでいて、日本人の感性がそこに表明されているんですね。床の間などは季節々々の花や軸、置物を飾って自らの季節感を表現する、日本が誇る世界で唯一のプライベートなギャラリーだと思っています。また、素足で畳を踏むとか、下駄を履くと言った日本人の「素足の感性」が失われています。「日本文化の基盤」が失われていく時代に、美術大学の担う責任というのは非常に大きいですね。

美術大学はどうしても創作中心になり作家養成に重さが置かれる傾向にありますね。しかしピカソが10人いても、その国の文化は生まれないものだと思います。私は若い頃、アメリカにおりました。アメリカは非常に刺激も強く新しい芸術が沢山生まれているんですが、日常は非常に粗末なコーヒーカップでコーヒーを飲むといった有様なんですね。良い家庭で使われている品質の良い器などは、ほとんどがヨーロッパや日本から輸入されたものという、惨憺たる状況です。日本もそのようになって来たのかなあ、とも思うのですが、それを失ったら日本の存在価値は無くなりますね。「日本文化の基盤」をもう一度育てるような芸術的なづくりをもう少し考えられないものか、と考えています。

東北芸術工科大学でもそうでしたし、東京芸術大学でも、多摩美術大学でもそうですが、設備も人材もいる、しかし思想的裏付けといいますが、「日本文化の基盤」ということを考えたとき、大きな意味での芸術教育はこのままで良いのかと疑問をもっています。キャンパスを見学致しまして、多摩美術大学でもそういった矛盾はないのかなあと思いました。

もう一点として、多摩美でも国際交流に力を入れておられるようですが、海外の学生の意欲は素晴らしいですね。東北芸術工科大学とスタンフォード大学で協定を結ぶために、スタンフォード大学を訪問したのですが、日本では見られないキリッとした東洋の若者がいました。優秀な日本の学生はみんなここに居たのか、と思ったのですが、そのほとんどが中国、韓国系の学生だそうです。日本からの受験者数は一番多いそうですが、合格して在籍しているのは数%程度だそうです。

6・3・3・4制の大学の機構のままで、依然として大学入学後、一般教養を行なっていますが、かつての予科みたいに2年くらいで一般教養を終わらせ、大学では専門教育を徹底的にやる、ということが出来ないものかなと考えています。海外の学生と比べると、そこに力の差が出ていますね。そのあたりを多摩美ではどのようにお考えですか？

岡島) 自己点検・評価報告書を見て、非常に中途退学者が少ない、ほとんどが4年間で卒業しているというのに気がつきました。悪い年、悪い学部で7%くらい、ほとんど1%程度というのは、どのような基準で卒業させておられるのだろうかと思いました。

観点を变えて、生涯学習センターについて高齢者だけでなく多く子供の参加が多いというのは、非常に将来が楽しみで良いことだと思います。また受講料についてですが、無料であるならこれだけ受講者が多いのですから有料を考えても良いのかなあ、と、有料であるならどの程度を狙って受講料の設定をされているのかなあと思いました。

それと小中高との連携授業ですが、受験生対応ではないんでしょうが結果として、連携高校からの進学率があがったというのは両者にとって良いことかと思います。

また他大学では真似できないこととして、学外美術館を持ち社会の接点として大学の情報発信と、社会からの動向を掴むことをしていることですね。さらに資料センター構想なども、新設大学にはできない良い資産をお持ちだと思います。

図書館の蔵書数ですが、11万冊というのは一般的に少ない方だと思いますが、公共図書館との連携でそれぞれの持分を生かして補完するというのはうまいシステムだと思います。

森下) ありがとうございます。まず會田先生が仰られた「思想的裏付けをどのように教育に反映するか」という課題は、教育の根本ですね。本学では、教養教育を通じた思想的裏付けについては主に共通教育にそれを委ねることにしています。実技は各学科で責任を持って行い、その根底にあるものの考え方の広がりも共通教育を通して行なうということを中心に、清田学部長を筆頭にカリキュラム検討部会を立ち上げてカリキュラム改革をしつつあるという状況です。

會田) 共通教育というのはどの程度のレベルですか？

清田) たまたま今日、ロンドン大学のお客さんが見えてまして、會田先生の仰られた大学における専門科目の話題が出たところでした。

會田) 欧米の大学では、ほとんどが専門科目を徹底的に行いますよね。欧米ではほとんどが大学に行く前にジュニア・カレッジのようなところに行きますね。そこで一般教養を終わらせてしまう。大学というのは専門大学です。アメリカも日本と同じく6・3・3・4制を採っていますが、実際にはジュニア・カレッジのようなところに行く人が多いですね。また出入りも自由ですし。世界と競争していく訳ですから、その力の差を痛切に感じます。大学院を強化するということが良く言われますが、それはどこの国でもやっていますから、学部における力のギャップを埋めないといけませんね。場合によっては、それこそ小・中・高・大の一環教育というのも一つの手ですね、素人考えですが。

清田) 共通教育の問題としては卒業単位が124単位ですから、専門科目で概ねカバーでき共通教育科目をあまり履修しなくても、卒業できてしまうという傾向があります。



森下) 例えば環境デザインの建築分野ですと、會田先生が仰った建築のための一般教養と専門科目で卒業できてしまう。そうすると必要であるはずの教養教育が欠けてしまいますね。昔は卒業単位が多かったですが、124単位に卒業要件が変わりましたから。

會田) そうですね、教養教育は必要ですね。美術系ですと、技術、知識の習得に時間が取られてしまいますしね。今度、私の事務所ではじめて多摩美出身の学生を採用しました。面接の時に色々を見せて貰いましたが、弱いところはプロダクティブな部分なんです。オブジェは造れるが、ちゃんとした皿が造れない。オブジェも悪くないですが、もう少し基本的なものもあって良いんじゃないかな、と思います。

例えば私の専門の陶芸ですと、大学において自分の釉薬と土を自分で造っているか疑問なんです。報告書を見ると、6週間くらいのテクニカルというコースがあるようですが、その期間では自分のもののできる十分な時間ではないですね。その技術が欠落していると、結局、釉薬や土を買うことになってしまう。私のところでは、粘土から釉薬まですべて自家製です。プロというのは、そういうものなんです。そこが昔の教育と違うところですね。確かに今は便利になりましたが、ある意味、芸術優先の甘やかしとも言えますね。根っこができて来なくて、人を使う人間として逆に言えば2、3年間は使えない、再教育をし終えたところで、独立してしまうという悪循環ですね。

清田) 大学の学園祭では陶芸の学生が造った器などが、飛びぬけて人気があるようですね。

會田) それが基本ですね。

米倉) 「日本文化の基盤」というのは全く同感ですね。それは日本人の美意識の「発生」をさぐる問題ですから。共通教育において、本当にやらなくてはいけないことです。私が学部長を務めております造形表現学部は、社会人入試により社会人を多く受け入れております。一般の大学を終えてきている学生も多いので、比較的楽に実技に入るといってもあります。

その中での理論系教員の役割は、実技系教員と一緒に授業を担当することで見えてきますし、それによる教

育効果もあがっていますね。例えば、理論系教員と実技系教員が一緒になって一つの科目を担当することがあります。造形学科での批評会は、理論系と実技系教員が一緒になって話し合うのですが、そこで話題になるのは、やはり會田先生が言われたような「日本文化の基盤」ということなんです。

會田) それは教育制度だけでなく、日本そのものの問題ですね。

米倉) 美術系大学のシステムそのものはヨーロッパ風にできていますから、それを引き戻すのは大変なことなんです。

清田) 岡島先生にご意見頂きました図書館の蔵書数についてですが、新図書館を計画しておりますして30万冊を目標にしております。

またドロップアウト率の低さですが、転学部・転学科、3年次編入などによる離籍は含めておりませんのでドロップアウト率が低くなっています、ご注意ください。ただドロップアウト率が低いのは、目的を持って学んでいる学生が非常に多いと強く感じますね。

それから小・中・高との連携ですが、始まってから間もない取り組みです。鑓水小学校、片倉高校、都立芸術高校と連携を行っております。

荒川) とくに鑓水小学校とはここ5年くらいになります。鑓水小学校の場合、受験生の囲い込みとかいうことではなく、PCを用いた教育技術の研究を行なっている教員の研究活動がきっかけでした。それが発展して、鑓水小学校の学外実習、本学でのオープンキャンパスに相互で参加したり、本来の連携の意義が生かされた価値ある取り組みだと思っています。

岡島) 手伝いをする学生もやりがいを感じていらっしゃるんですか？

荒川) そうですね。本学独自のアンケート実施や、教育委員会による評価においても双方にとって非常に有意義であったことが検証されました。

會田) 鑓水小学校と交流していることは非常に良いことですね。日本の制度というのはなかなか変わりませんから、そのような連携をとおして独自の教育システムを創るというのは私立大学ならですよ。

米倉) 私がセンター長を務めています生涯学習センターの講座でも、定員をすべてオーバーするほど子供の受講者が多くなっています。教えている教員の中でも、ここで美術の面白さを教えておかないと将来、美術学校に行く人間がいなくなってしまうのではないかと、という危機感を持っていますね。「多摩美術小学校」と称した講座なんです、非常に子供が興味を示しており、現場では手ごたえを感じています。

會田) 行政の遅れは、現場で解消できるのかも知れませんね。

米倉) 岡島先生からご意見頂いた生涯学習講座の有料、無料については双方あります。無料講座を開いて興味を持って頂いて、有料講座につなげたいと思っています。

荒川) 生涯学習講座については、通信制の高校から授業として受講したいという申し出もあって、話しが進んでいます。弾力化の中で色々な広がりが出てきていますね。

會田) 多摩美ではセメスター制は行っていないんですか？

清田) 再来年あたりに導入しようと検討しています。

會田) どのようなシステムで検討されていますか？

森下) 前期・後期型です。通年科目は、前期1・後期2と分けて行なう予定です。

會田) 単位のプール制はお考えですか？

清田) まだそこまで議論が進んでおりません。

會田) 日本で一番行なって欲しいのが、単位のプール制ですね。セメスターで単位を発行して、5年とか10年とかその単位を有効にする、そうすると出入りが自由になりますから。

日本の一番の問題は「学生」という社会層を持っていることですね。大学は義務教育でも何でもないので、親がかりにならずに自らの責任で大学に行くのが良い。そうすると4年間ずっと大学に通うのは無理ですから、単位の持ち歩きによって自分のペースで大学に通うことができますね。こういうシステムを是非、日本でも取り入れて欲しい。その突破口を作れるのは私立大学だと思います。

會田) 単位互換、セメスター制を活かすのが、プール制ですね。そういう自由度が広がると日本の教育制度は良くなりますね。

柿本) 放送大学がそのような制度ですね。

岡島) 教育の自由度ということだと、9月入学もありますね。琉球大学では9月入学・卒業制度があります。地

の利と言いますか、ハワイやインドネシアなど太平洋地域の留学生が400人を超えています。多くの国が9月入学ですから、スムーズな受け入れが可能ですね。9月入学でない国があっても入学には準備期間が必要ですから、その意味でも9月入学は有効ですね。以前は留学生がそれほど多くありませんでしたが、9月入学を取り入れたところ、留学生が増えて来ました。

會田)今の制度ですと、留年者の9月卒業というのが殆どですからね。

荒川)すでに9月入学をやっている大学が話題になりましたよね。ただ、カリキュラムや学事の問題が生じますね。4月、9月制の2つを並行してカリキュラム、学事を行なう必要がありますから。



會田)一つ的手段として、「飛び卒業」というのもあるんじゃないでしょうか？優秀だから半年前に卒業を認めるという制度を作っておけば、海外との学生交換が楽になりますね。多摩美の交換留学は、どんな期間でやってますか？

荒川)ヘルシンキ大学と3ヶ月と6ヶ月でおこなっています。

會田)短期だと3ヶ月が良いですね。6ヶ月だと両国での試験や卒業制作のことがあり、難しいですね。

會田)現場に戻っての質問をさせて頂いて良いですか？工芸学科の中で、金属、陶、ガラスとコースがありますが、それぞれのコースを勉強できるようになっていますか？

荒川)コースは分かれています。3つの素材を勉強できるのが、1年次になります。それを解消する為に今年から推薦入試と一般入試の二本立てとしました。推薦入試は従来どおりコース別、一般入試はコースを分けない試験形式を取りました。1年次は全員で授業を行い、2年次よりコースに分かれていく仕組みに改めました。

森下)やはり、そこは問題だという認識がありシステムを改めました。

會田)金属、陶、ガラスのコースごとで立派な設備があるのですから、1年次だけでなく力のついた3年次くらいに3素材を扱う講座があると面白いですね。

私みたいに環境造形の仕事をやりますと、焼き物をコンクリートにどう貼れば良いか、鉄骨をどう扱えば良いか、という技術的な問題が生じます。折角、設備をお持ちなのですから学生の内に、それらの技術を学んだ方が良いでしょう。

荒川)これまでも他の素材を扱う課題の授業があり、学生の作品には陶・ガラス・金属の素材を結びつけたものも制作しています。

清田)教育システムについてお話頂きましたが、岡島先生からご意見頂きましたドロップアウト率や、會田先生にご意見頂きました教養教育など、教育目標の話題についてさせて頂きたいと思います。ドロップアウト率については、先ほど申し上げた数字は転学部・転学科、3年次編入など活発ですので、実質の出入りは若干多くなっています。いかがですか？

岡島) それでも1割ほどですよ。私が経験した工学部では多いところでは50%ということもありました。数学が出来なければ、取れるまで進級できないと言うように。すべての大学ではないですが、多くの大学で大量に進級できなかったり、卒業できなかったりで指導を受けていますね。

「それは厳しく良い教育をしているんだ」と今までは言ってきましたが、これからは教育体制の見直しが求められるのではないのでしょうか？

森下) 逆に教え方が悪いのではないか、ということになりますね。

岡島) そういうことにも、なりかねませんね。それで最近、「この学部・学科を出たら卒業時に、が出来ますよ」ということを明確に示すようにしています。それに沿うように教育を進め、一人一人チェックしていくという取り組みを行なっています。それをハッキリさせれば、学生の意欲も引き出すことができますね。多摩美のドロップアウト率が非常に低いので、先ほどその質問をさせて頂いた次第です。

岡島) それと教養教育についてですが、先ほどお話のあった学科に所属するオープン科目をベースにして教養教育を行なっていくということになるのですか？

森下) そうではないですね。最近は各学科のジャンルの垣根を越えた動きが見られます、例えば油画の学生がPCを用いて作品を創ったり。各学科の専門科目を他学科の学生が履修できるオープン科目というものを設けました。それらの動きに対応するのが、オープン科目の活用です。

清田) 今までファインアート系、デザイン系が各学科ごとに別個に動いてましたので、それを全学的なものに開放しようと考えている次第です。

森下) 思想的な裏付けを担って行くのは共通教育で行なうことになります。美術大学の学生として、どのような教養が必要なのか、議論して行く必要が生じ、検討しております。

會田) 「日本文化の基盤」を創りたいということ、属に言う教養ですよ。

清田) 私は歴史学と日本文化史論をやっております、會田先生にお聞きしたいのが赤坂憲雄さんの東北学ですが、大学ではどのような位置づけを取られているのですか？

會田) 東北学というのは文化財修復と同じように、一般に興味を持っている方は沢山いるんですね。逆にそれだけ広がりを持っている訳ですから、講座を設けるだけでは弱いので東北文化研究センターを設置しました。大学と県それぞれから5千万円ずつ運営費を出し、そこに専任教員4名を配置して講座を行なう格好です。ある意味では独立採算ですね。友の会を作ったり、出版したり工夫をしていますね。

それと他に文化財保存修復という学科がありまして、従来の洋画に留まらず、仏像とか日本の文化財含めた文化財保存修復研究センターを設置する動きに繋がりました。そこらじゅうに教材がある訳ですから、学生は実地の勉強ができますし、保存修復のビジネスとしても考えていけますね。

その意味で今日、多摩美を見学して一番感銘を受けたのは、NHKと共同で川本喜八郎さんのアニメーション撮影 (<http://www.idd.tamabi.ac.jp/kihachiro/>) に学生が取り組んでいたことですね。あれは素晴らしい教育ですね。実際に使うものですから手を抜けませんから、怒られ怒られしながら実地の技術を修得していくのは良いことですね。産学共同を盛んにされてるようですが、今日見学しました撮影などは一番感銘を受けましたね。

清田) それでは共通教育の位置付けというのは、東北芸術工科大学ではどのようなものでしたか？

會田) 私が辞める前に「教養を考える」という委員会を作って根本的に考え直しました。デザインや芸術系の大学に即した、それらの素養を高める一般教養のあり方はないかと議論しました。

当時、一般教養の先生が孤立していました、制度上必要なだけだとか、片隅に追いやられて。これでは優秀な人材も流出しますし、これでは拙いということになりました。芸術に直接関わる一般教養のあり方を補強しましたね。例えば、一般教養でのPCの講義でも、「自分の自画像が書けること」というのを課題にしました。そうすると実社会でも割とツブシが利くんですよ。大問題ですね、それは。

岡島) 先ほど中途退学者の卒業要件で申上げたことにもなるのですが、會田先生が言われたように、「この学部を出れば、PCで自画像が書けますよ」とか「この学部を出れば、自分の土、釉薬が作れますよ」ということを明らかにすることが出来ないものかと思えますね。そうすると、卒業認定もハッキリしますし、入学者も目標がハッキリして来ると思えますね。いくらかの大学で目標を掲げるようになって来ているようですね。

それがカリキュラムに反映されていくのが一番良いのじゃないか、と考えております。

教養教育については、多くの大学で教養を無くし教養の教員を専門学科に入れていきます。その教員がいる間

は教養的講義ができますが、その教員が定年を迎えると教養的講義ができる人がいなくなってしまいますね。と言いますのは、学科所属ですから学科の意志が強く働き、教養的な講義ができる人を必ずしも選ばなくなってしまいます。教養教育というのは専門のための基礎になるということは確かにありますが、いわゆる教養の専門の方というのが生き残る余地が必要ですね。

會田) 大学の伸びるのは人材ですから、採用、昇格の基準や手続きをどのようにされていますか？教授会で全て決めると言う訳ではありませんか？

柿本) 制度的には教授会は資質審査という位置付けで、最終決定は理事会です。学科の意見は尊重しますが、理事長、学長が多角的に審議します。

また人数は少ないですが、任期制、特例勤務という制度を使って人材の確保に努めています。

會田) 東北芸術工科大学は公立並みにスタートしましたので、すべて教授会で決定して膠着してしまい困りましたね。自分より優秀な人材を呼んでこないとか、学科の恣意的な昇格になりがちであったり弊害が生じました。そこで教授会から人事を離し人事委員会を設け、学科からあがったものをオープンにしました。人材が大切ですから、大事なことなんですね。

荒川) 理事長、学長、学部長、研究科長、教務部長がヒアリングし大所高所の審議を諮り、バランスに考慮していますね。



森下) 人事委員会という名称はついていませんが、ヒアリングがその役割を負っていますね。

それでは時間もそろそろですから。今日はお忙しいところ、貴重なご意見を頂きましてありがとうございました。今日頂いたご意見を様々な形で検討し、役に立てて行きたいと考えております。本日はありがとうございました。

以上

---

---

今回の自己点検・評価活動については巻頭で述べたとおり、来るべき認証評価に備え、「全学を挙げて、自らの足元を見直すこと」そのものを重視した。

資料については一般的に、点検・評価に用いたフォーマットや、諸統計などの補足資料の掲載が望ましいと思われる。しかし、第一の目的である「全学を挙げて、自らの足元を見直すこと」に立ち帰り、諸統計に囚われず、本学の「今とここ」の息づかいを感じられる資料を掲載することとした。

資料については、自己点検・評価活動の一環として理事長、学長、学部長、教務部長による各研究室等へのヒアリングの議事録及び、授業評価アンケートの集計結果を掲載した。多摩美術大学の「今とここ」を感じ取って頂けたら幸いである。

なお、上記フォーマット等については自己点検・評価部会のホームページで公開している (<http://www.tamabi.ac.jp/accredit/index.htm>)。



## 日本画

- ・日 時：2004.6.24 13:30～14:30
- ・場 所：日本画研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長、  
市川教授、戸田教授、榊田教授、米谷教授、  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

- ・日本画を多様な絵画表現のなかのひとつとして捉え、長い歴史を持つ東洋絵画の中の日本画とは何かを考え、次の世代での豊かな日本画の創造を目指すことを教育目標にしている。
- ・特徴的なことは、学年持ち上げりの担任制を敷いている。しかし、担任以外の先生にも積極的に指導を仰ぐように学生には指導している。
- ・多様な学生の確保ができるような入試方法をとっている。又、選考については、全員で行うので公正な選考を同時に行うことができる。
- ・入試の選考については、かつてトップクラスが他大学に流れたということがあった。そのため、多摩美でしか育てない学生を選考するようにしている。

### 評価と課題

#### （良い点）

- ・日本画では、年2回のコンクールを行っている。昔からずっと続いている伝統であり、小手先の諸改革には無い、根源的で骨太の教育方法だと自負している。又、その際には担任教員はあまり口出しせず、他の教員の意見を聴くことで多面的な教育を行える。
- ・批評会では、専任教員だけでなく、名誉教授などに参加して貰い風通しの良い、幅の広い視点を取り入れるようにしている。特別講義などのその一環だ。
- ・今年は、入試広報用としてフライヤーを作った。学生にとっては、自分の作品が取り上げられることで、活気が出てくる。
- ・受験生も多様化していて、将来CGをやる為の基礎力を養う目的で日本画を希望するという受験生もいる。日本画の方針としては、技術のみではなく卒業後、プラスになることを4年という短い期間でやって欲しいと考えている。既存の概念を壊したり、新しいものを作ろうとする好奇心旺盛な学生が出ていることは良いことだと思っている。
- ・そのような「日本画」というジャンルに囚われないところが多摩美の日本画の魅力である。
- ・学生の意欲が非常に高く、「臥龍桜日本画大賞展」や「佐藤太清公募美術展」などで大賞や入賞を数多く果している。その結果が口コミとして、現在の実績としてつながっていると思う。

#### （問題点）

- ・今の学生は、他の先生に指導を仰ぐように指導しても、なかなか自分から積極的に指導を仰ぎに行かない。
- ・最近では打たれ弱い学生が目につく。学生時代に、自分の制作活動に対するビジョンを、どうやって自らのものにして行くか学んで貰うのが難しい。打たれても伸びてくるような学生を育てていくのが重要と言える。

#### （その他、改善案など）

- ・作家にとっては、良い師との出会いが大切だと思っている。一方で、教員の出校のあり方も考えないといけない。質と量を同時に満たして行かないといけない。
- ・日本画を国際化の観点から考えていく時、「日本画」という定義を色々と考えていく必要があると思う。

## 油 画

- ・日 時：2004.6.24 10:00～11:00
- ・場 所：油画研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
今井教授、岡崎教授、木嶋教授、鶴見教授、野田教授、堀教授、室越教授、菊地助教授、小泉助教授  
筆記：総務・石井

## 現状の報告

- ・1, 2年生の基礎実技期間については、学生の多様な表現、ニーズ、或いは特徴のある教育カリキュラムを検討し、この約10年をかけ、共通課題中心から徐々にジャンル(教室)別のカリキュラムへと移行している。2002年よりそれ以前の6教室制から、具象、抽象、同時代美術の3つのグループ制へと変更した。
- ・2004年度(本年度)からはグループ制(学生による希望選択制)が1年前期より行われることとなり、以降、1年後期、2年前期、3年前期の計4回のグループ選択が可能となった。このことで、各グループの独自性がより強調されるとともに、その都度の学生の移動によって、油画全体として活性化がなされた。1, 2年生は教室スペースの問題もあり、学生の希望が偏った場合は抽選となることもある。3年生以上は、ある程度教室スペースの遣り繰りを努力することによって、学生の希望に沿うようにしている。

## 評価と課題

## (良い点)

- ・グループ(あるいはさらに細分化されたクラス)ごとのカリキュラムが先鋭化できる。
- ・様々なジャンルを、自由に学べるのが多摩美油画の魅力だと考えている。志願者数が・特段減っていない理由の一つでもあると思う。
- ・他学科とのつながりを促進するために、他のファインアート系および、情報アートコース等との授業を含めた交流を試みようとしている。

## (問題点)

- ・グループ間の移動はできるだけ配慮しているが、アトリエの環境等のため、すべて自由というわけにはいかない。
- ・同様にスペースにゆとりがないので、卒業製作時(11月頃～)に4年生が十分にスペースを使えるようにするため、3年生のスペースが犠牲になっている。
- ・キャンパスが整備されハード面が良くなった一方、他学科との人間的つながりが希薄になっている。これは学生にとって決してよいことではない。

## (その他・改善点など)

- ・アトリエ環境の改善に向け、絵画棟の整備をお願いしたい。その一環として自由デッサン室等の、学科を越えた有効利用および交流の可能性が開けるのではと考える。
- ・転部、転学科のハードルを低くすることで、他学科との交流が促進し、またその棟の整備と同調しながら、油画としての在籍実数の増加も視野に入れている。
- ・大学院生について、本年度制作スペースを犠牲にしても、年間を通じた発表スペースを、大学院アトリエの一角に検討したが、諸事情により実現しなかった。八王子という立地を考えると、都心にサテライト的な展示スペースが出来ないものか?
- ・美術館も、企画、やり方によっては、十分集客能力が見込まれるので、学外に対するアピールもさらに必要であると考え。
- ・日本の美術教育は、近代以降「アカデミズム」あるいは「基礎」に対して、疑問符を投げ掛けることなく現在に至った経緯がある。その意識すら薄れる昨今ではあるが、我々はつねにその疑問符を自らに問い続けなければならない。それは「デッサン力」についても同様である。
- ・現代の美術の動向をみると、ただ一方向に積み重ねていけばよいといった、ステレオタイプな成立の仕方ではなくなった。基礎からオリジナルにいてもよいし、オリジナルが先行し、それをきっかけにベーシックに立ち返るあり方があってもよい。
- ・各学科の横のつながりにおいて、共通教育のあり方がキ・ポイント。講義室で講義を聴くのと、制作現場で聴くのとでは大きな違いがある。共通教育の先生がアトリエに来て、我々と共同で授業をすることがあっても、学生には刺激になるであろう。

スペース等、もろもろの環境整備が実現するならば、学部、大学院とも在籍学生枠の拡大も検討していきたい

### 版 画

- ・日 時：2004.6.24 11:15 ~ 12:15
- ・場 所：版画研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
小作教授、小林教授、森野教授、渡辺教授
- 筆記：総務・石井

#### 現状の報告

- ・自己点検・評価「各研究室の現状分析」により現状報告

#### 評価と課題

##### (良い点)

- ・退学する学生が少ない。学生のケアを研究室、助手・副手が相当細かくやっている結果だと思う。
- ・版画の国際性を考えて、ミニプリント展 ([http://db.tamabi.ac.jp/timpt/default\\_j.html](http://db.tamabi.ac.jp/timpt/default_j.html)) やシルパコーン大学 (タイ) との交換展、海外での各教員のワークショップ、実技指導など積極的に行ってきた。国際性を備えた学生育成のために現代版画論では、実用英語の力が必要と考え、取り組んできた。国際コンクールの応募要綱が読めること、英語のメールが送れること、HPを英語で作れること、を実践して来た。版画設立から10年でそういった力を備えた卒業生が育ってきた。

##### (問題点)

- ・博士後期過程については、実技と理論とのつながりが必要である。研究室と理論系教員とのコンタクトを高める意味で、講評会には理論系教員にも入って貰うように積極的にやっている。協力もあり、制作現場に参加して貰っている。指導は、作品だけ見てという訳に行かない。修士の時に何をやって来たのか、制作過程はどうであったか、修士の学生の中で博士後期の学生がどのような位置にあるのかを明確にする必要がある。理論系教員と実技系教員の密な連携が必要である。

##### (その他、改善案など)

- ・版画の志願者倍率が下がってきている。しかし中身を見してみると、倍率の高い他学科を蹴ってくる学生がいる。入学者の質は高くなっていると考えている。又、版画とデザイン系の併願も増えており、「自分のやりたいことが何か」ということを受験生がどれくらい意識しているか、分からない部分もある。片倉高校との高大連携も積極的に行っているから、受験生の版画に対する認識も上がってくると考えられる。高大連携等の取り組みを更に進めて行けば認識も上がり、版画単独受験者も増えるだろうと考えている。
- ・国際性を備えた学生育成のために、共通教育の先生方にも実践的語学教育(会話面など)でお手伝い頂きたい(語学教育の考え方は勿論理解しているが)
- ・版画は日本において国際発信できるジャンルだと誰しも認めている。予算があれば色々取り組みたい。特に最近はPC技術も進み、コストも安くなっている。
- ・美術館の使用について、一定期間学生の展示に開放するようなことがあっても良いかと思う。

## 彫刻

- ・日時：2004.6.30 13:30～14:30
- ・場所：彫刻会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
安倍教授、石井教授、工藤教授、竹田教授、水上助教授  
筆記：総務・石井

## 現状の報告

- ・1、2年次では彫刻の全体像が分かるように基礎的教育を行う。3年次以降、専門に分かれ素材と志向性について、教員との1対1の人的交流を通して教育を行っている。
- ・その成果は、学内ギャラリーや、八王子彫刻展などの産学官共同研究（<http://www.tamabi.ac.jp/choukoku/kagai.htm>）を通して発表している。

塑像：卒業後に地域社会と密接した人材を育成したい。地道な昔からの技法をしっかりと学び、地域に還元できるような教育を心がけている。

金属：学生が造りたいことのイメージを膨らませ、金属でどのように表現するかを手助けしたいと考えている。学生自身の経験を形にしていく過程が大切だと思っている。

木彫：木という素材の特性上、基礎力が問われる。学生時代にしか学べない様々な基礎力（道具の研ぎ、扱い方も含め）を育成したい。確かな思考性テクニックに基づき、優れた作家に開花して欲しい。

石彫：基礎力をつけることが基本。一方で、最近の学生は素材に拘らず、学習意欲が旺盛。石彫自体、日本での歴史が浅く、その可能性がまだあるので、意欲的に取り組みたい。

諸材：学生個人の表現に対する考え方によって、何を表現するのかが違ってくる。学生との対話を重視して行きたい。

## 評価と課題

## （良い点）

- ・公募展は二科の他、行動展、新制作など。コンペは健在だ。学生には、外に出て積極的に発表するように、アドバイスをしている。
- ・卒業後は、二足の草鞋で制作活動をつづける場合が多い。制作と経済的なバランスで、時間、場所も掛かるので大変なようではあるが、PC関係の仕事が意外に多い。彫刻制作の段取り、というのがPCのプログラム設計などなじみ易いかもしれない。他に教職や工芸の仕事をしている人が多い。
- ・紀要などに発表した技法講座は良い成果を出していると思う。DVD化などすれば、他学科にも十二分に応用可能な手法だと思う。

## （問題点）

- ・八王子キャンパスが整備されて他学科との交流が少なくなった。油画、工芸、環境などと共通の部分があるとも思うが。
- ・美術教育を通して社会に貢献できる人材を育てたい。その為には、基礎教育が重要だが、彫刻は分野ごとの高度な技術修得も必要である。それを疎かにすると一つ一つの技術が軽いものになってしまう。その折り合いが難しい。今の学生は、朝早く来て仕事をするとか、健全な生活、精神を持って制作するという事が足りない部分がある。健全な精神を持った学生を育てるのも基礎教育だと思っている。
- ・外国のコンペが減ってきている。立体部門は難しいと言うことと、国際的にもコンペが減ってきている。

## （その他、改善案など）

- ・芸大はセンター試験が終わると、実技に集中できる。多摩美は直前まで、学科の勉強が必要。芸大と日程が重なっていないが、試験に臨む余裕が無く、どちらか選べるとすると余裕のある芸大に流れてしまうのかも？
- ・油画が立体や映像のジャンルを始めているが、絵画を突き詰めると当然のことで、良いことだと思う。ただし学生がどういう教育を目指して入学して来るのか、難しい問題もあるので、交通整理は必要だろう。油画出身の博士課程の学生を一部受け入れているが、制度として考えるのは難しいと思う。ただ指導が必要なら、個人的にどんどん来て貰えば良い。
- ・助手・副手の負担増を何とかしたい。

- ・事務仕事が増えてきているので、事務パートを考えたい。

### 工 芸

- ・日 時：2004.6.30 11:15～12:15
- ・場 所：工芸ミーティングルーム
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
奥教授、中村教授、野口教授、池本助教授、井上助教授、小林助教授  
筆記：総務・石井

#### 現状報告

学生は非常に楽しんでやってくれている。特に問題はないと考えるが、志願者が減っているのと、卒業生への支援が課題だと考えている。

#### 評価と課題

##### （良い点）

- ・志願者減に対応して、2005年度より自己推薦入試や一般入試の変更を行う。1年次にすべての分野を実習するプログラムにも変更を検討している。専門離れなどに対応した。何らかの起爆剤になればと考えている。
- ・昔、工芸分野は芸大しかなかった。展示会は三越や高島屋で、というのが相場だった多摩美の工芸が出来たことで、貸し画廊などで個展を開くという新しいスタイルが出来た。こうした新しい形を示すことで受験生にもアピールできると思う。
- ・共同研究で「新しい工芸教育をめぐる状況分析と総合研究」シンポジウムを行う予定だ。卒業生やジャーナリストも来るので、多摩美で作った新しいスタイルをアピールできると思う。又、どんな教育が良いのか、議論の場にしたい。
- ・工芸は世界的マーケットに対応できる。今までカリキュラムの中で理論の部分が弱かったので、工芸史や、大学院でのディベートの授業を取り入れた。自分の言葉で、説得力を持ってプレゼンテーションする力がこれからは必要。学生も熱心にやっている。

##### （問題点）

- ・志願者が減ってしまった原因がつかめない。工芸という分野が、若い人たちに伝わりにくいのかも知れない。但し、大学院では増加傾向にある。
- ・今までは1年生から専門分野に分けていた。予備校に聞くと18歳では、どの分野に進むべきか決められないと言う。若い人の専門離れもあるので、その辺の対応をしないといけないかも知れない（2005年度入試では、自己推薦入試では各専門分野別の募集、一般入試では志望プログラムを分けずに募集する）。基本線は崩さないようにしたいが。

##### （その他、改善案など）

- ・卒業してから5～10年の期間が作家にとって非常に重要である。卒業後のケアを考えたい。例えば、自治体と協力して廃校を利用し、制作の場としても良いと思う。卒業生にとっては制作の場が確保できる、自治体にとっては若い人の活気と文化的支援というメリットがある。作家養成と社会貢献にもなるだろう（廃校利用などの形なので、大学にとっても負担はない）。多摩地域には廃校になるところもあると聞くので、是非大学として検討願いたい。工芸だけでなく他学科にも広げられる話だと思う。

## グラフィック

- ・日時：2004.6.28 16:15～17:15
- ・場所：グラフィック会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
秋山教授、田口教授、中島(祥)教授、片山助教授、澤田助教授、小泉講師  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

- ・コミュニケーションデザインの本質を軸に、内容の充実を志向している。そのことが結果として最先端分野を拡充していくという好循環の構造を常に追求している。
- ・このことは少子化現象に対して危機感を持たばもつほど重要視される。
- ・1,2年次で基礎的力を身につけ、3,4年次で複合的に科目選択が可能なカリキュラム構成を取っている。分野別では、広告105・表現65・伝達20名くらいの比率でコースに所属し、分野の選択は、学生の希望に添って行われている。
- ・それらを補う意味で、産業界において第一人者として活躍中の卒業生を中心とした特別講師を、年数回招いて第一線の現場からの刺激を与えている。特別講義は、他学科を含め平均300名ほどの学生が受講している。熱気溢れる講義が行われ、学生の評価も高い。
- ・あくまでもデザイン教育がどうあるべきかを中心に据えて、大学として正攻法の改革を行う。

### 評価と課題

#### (良い点)

- ・2年3年に進級する際、28科目全てについて1週間通してのオリエンテーションを行っている。基礎課程から専門課程への橋を架ける時間と捉え、自分の進む道を真剣に考えて欲しいということと、自分の選択する以外の分野への理解を深めて貰うことが狙いである。遅刻はしないこと、休んだ場合はその科目を取らせないなど、非常に厳しく行っている。
- ・写真系講座(清水・十文字先生)、Webデザイン系講座(福井・福田先生)、アニメーション制作系講座(斉藤先生)を充実させた。今後も更に拡充すべき分野と考えている。
- ・こうした取り組みを、受験生に分かりやすいように説明する。受験生向けフライヤーの工夫：カリキュラムの全貌が分かるように工夫した。年次を追って、誰が、何を、どんな意図で教えてくれるのかをダイアグラム化(マップ化)して示している。
- ・合格者の質を上げ、実質の難易度を高めるために、レベルの高い入学者を確保するよう努めている。そのために採点日を増やす等、教員一丸となって努力をしている。
- ・本学科も近年、社会貢献活動として、産学共同研究・官学共同研究を実施している。

#### (問題点)

- ・理論系科目の拡充が進んでいない。教員数の枠の問題もあり難しい。今後、各コースともに、研究分野に力を入れたい。

#### (その他、改善案など)

- ・授業環境の整備をお願いしたい。

##### 1. 専任教員の増員

他学科に比べ、学生一人あたりの教員数が少ない。スケールを考えると、効率的授業の必要性についてはよく理解しているが、専任教員の定員枠について現時点より、さらに緩和を要望したい。一方で各コースの理論系を強くしたい。それが大学院の充実につながればと考えている。広告コースでは、他大学との提携の話も持ち上がっている。そこで、その核となる理論系教員についても専任教員枠を要望したい。

##### 2. 教室面の整備

他学科と比べると面積が少ない。機材等が設置された作品制作室の整備を進めたい。一方で講座を拡充していることからの教室不足も理由である。これらの点を改善すれば、良い教育環境が学生から受験生に伝わり還流される。プレゼンテーションルーム用の部屋などあると学生には有益であると考えている。教育環境の基本的充実が学生の制作意欲を高め、良い影響を及ぼす。

## プロダクト

- ・日 時：2004.6.30 10:00～11:00
- ・場 所：プロダクト研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
岩倉教授、川上教授、和田教授、安次富助教授  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

- ・2001年にプロダクト5ヵ年計画を作成し、2002年4月より実施し2年を経た。プロダクトデザインにおけるビジョン、目標、実施要領を定めた。
- ・ビジョンを「世界に通用する自立したデザイナーの育成」とし、目標を達成するために、入学、教育、進路の各課程において、カリキュラム、設備、人材のあり方を検討した。
- ・以下、評価と課題についても、「各研究室の現状分析」に詳細に亘り分析されているので、主だった質疑内容とする。
- ・産学協同プロジェクト  
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/nec/nec98.html>  
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/nec/nec99.html>  
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/jcma/jcma.html>  
[http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/sony/sony\\_a.html](http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/sony/sony_a.html)  
[http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/sony/sony\\_b.html](http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/sony/sony_b.html)  
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/kodak/kodak.html>  
<http://www.tamabi.ac.jp/product/002pub/mew/mew.html>

### 評価と課題

#### (良い点)

- ・新入生の中には入学当初、グラフィックや環境に行きたかったという学生もいるが、2年になるころにはプロダクトに来て良かった、と言う。転部・学科する学生もいない。
- ・工具管理を学生に任せしたのは、非常に効果があった。工具長を決め、貸し出しや紛失について、責任を負わせている。その結果、4年生が工具の使い方を教えたり、卒業制作やオープンキャンパスを下級生が手伝うようになったり、学生の自主性と連帯感を出すのに成功した。

#### (問題点)

- ・入試結果については堅調であるが、センター試験の中から若干の辞退者があり、どこに流れて行っているのかわからない。何らかの調査が必要だと考えている。

#### (その他、改善案など)

- ・予備校訪問に行くと家具をやりたいという受験生から、「プロダクトデザインと環境デザインでは何が違うのか？」と質問を受ける。工業家具と木工家具の住み分けを受験生の希望に的確に応えられるように示すことが大学としての責任だと思う。
- ・家具デザイナーに限った就職先というのは非常に少ない。出口のことも考えて行かないと。
- ・就職は年々成果を上げ、今年の実績は8割方決まるころまで来ているが、かつてのように大企業が主という状況ではない。産業形態が変わり SOHO やフリーでやるような形態も増えている。プロダクトデザイナーが求められる場が多様化した結果だと思う。就職先の選択の幅が増えてきているので、企業回りをして適材適所の就職支援活動をしたい。
- ・シーメンスから、インターンシップと産学協同、リクルーティングを目的に申し入れが来ている。目標としている世界に通用するデザイナーの育成が急務だ。
- ・その為に、工学系とは違った美大の特色を出して行くこと、デザインに対する確固たる考えをもっている人材を育てないといけない。
- ・又、実践的な技術として、語学が必要。実際に日立からは、4年間でとにかく英語をやってくれと言われた。近年では、英語によ

るメール、レジュメ、ポートフォリオ作成やプレゼン、ディベート能力が必要だ。大学院では必須だ。

### ・大学院の課題

1. 現状、1つの部屋で、大学院教育、産学官共同研究、サロンTAMA・Pと入り乱れてやっている。内と外、上と下の交流が出来て良かったが、高いレベルの教育・研究が求められているということを痛切に感じる。プロダクトには大学院は必要無いという、かつての考え方を変えなければいけない。
  2. 学部教育のみの現役デザイナーの再教育、工学系学生のダブルスクール、ASEAN 諸国の学生の教育機能として、大学院は必要と思う。八王子には工学系大学含め、大学も多いし、場所も広いし、下宿先も安い。大学院教育に八王子はうってつけだと思う。
  3. 高卒に目を向けるのは当たり前だが、現役 17 万人のデザイナーの再教育に目を向ける必要がある。
- ・プロダクトの領域がますます広がると感じている。インダストリアルに、クラフツ（木、ガラス、金属、セラミック etc）、イノベータータイプ・デザイン（バイオ、ロボット、宇宙技術 etc）などへの拡大。インターフェイスなどの分野と、どうつげて行くか、デザインそのものの概念を問い直す必要がある。

## テキスタイル

・日 時：2004.6.26 16:15～17:15

・場 所：テキスタイル研究室

・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長

弥永教授、高橋教授、橋本教授、檜垣教授、皆川教授、柏木助教授、川井講師

筆記：総務・石井

### 現状の報告

- ・学生の意識として、就職に対する希望が非常に強い。その多様なニーズに応えるカリキュラムに取り組んでいる。
- ・カリキュラムの基本は、1、2年生で染と織の基本をしっかりと学ぶ。3年生以降に、染と織いずれかに分かれて行く。又、その中でサーフェスデザイン、ウェアテキスタイル、繊維造形と言った3つの専門分野を選択して行くことになる。

### 評価と課題

#### （良い点）

・テキスタイルという幅広い領域をカバーしたカリキュラム改革を行った。

1. 3つの専門分野をカバーするカリキュラム。
2. 国際的視野を広げるための特別講義（ラーセン先生）。

・就職を意識したカリキュラム改革を行った。

1. 実践的なポートフォリオの作成技術の習得。
2. イラストレーター、フォトショップを使ったPC技術の習得。
3. 縫製技術、工業用ミシン等の実践的な技術習得（奥田、水野先生）。
4. テキスタイルの現場を知って貰うための連鎖講座の実施。

・良質の受験生を集めるために、フライヤーの作成、HP、学科紹介ムービーなど作成し、予備校などにも説明へ出向いた。

#### （問題点）

・産学協同研究については積極的に行い、卒業制作に学生が取り入れるなど、学生の意欲向上に非常に有益である。しかし企業の事情もあり、カリキュラム決定前に産学協同の計画が具体的になることが少ない。授業の課題と、産学協同が重なると、学生の負担が増えてしまう。スケジューリングの課題がある。大学院生と産学協同を結び付けていくのも一つのやり方だと考えている。

#### （その他、改善案など）

・入口と出口の問題が、一番の課題だと考えている。企画広報や就職課とも連携して、キメ細やかにやって行きたい。



- ・学生の要望が多様化している。ウェアテキスタイルの分野を取って見ても、服を作りたいとか、靴を作りたいとか様々だ。要望に応えるように一層努力して行かなくてはならない。
  - ・留学生の受入や派遣、対応を充実できれば、と考えている。
  - ・テキスタイルは、幅広く国際性も有しているので、社会貢献につながる。
1. 「絞り」という言葉は世界で通用する言葉になっている。ファイバーアートからテクスチャまで非常に幅広い。国際絞り学会の話が持ち上がっている。シンポジウムとワークショップに世界各国から 300 名以上は参加が見込まれる。社会的意義と共に学生や受験生へ良い影響がでたらと思う。詳細は色々詰めないといけないが。
  2. 共同研究のバナナ・テキスタイル・プロジェクト (<http://www.tamabi.ac.jp/tx/home/intoro02.html>) では、八王子繊維試験場、NPO、NGO、大使館などと連携をして取り組んでいる。将来的に非常に有望であり、学生も意欲をもってあたっている。

## 環境デザイン

- ・日 時：2004.6.28 13:30～14:30
- ・場 所：環境デザイン研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
飯島教授、川原教授、田淵教授、平山教授、山下教授、渡部教授、岸本助教授、松澤助教授  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

- ・1年生では全体で基礎を学ぶ。2年以降、インテリア、建築、ランドスケープの3つの系に分かれている。3つの系は、実技は選択可能、学科目は選択必修により分けられる。クラスの比率はインテリア3、建築2、ランドスケープ1の割合になっている。
- ・これら3つの系を縦糸として、産学協同を横糸にし複眼的に学べるように考えている。

### 評価と課題

#### (良い点)

- ・3つの系の教育課程をハッキリと示しているのので、環境デザインで何をやりたいのか?ということが決まっている学生が多い。受験生も環境デザインが第一志望という受験生が多い。
  - ・パウハウスの原寸の教育や、手で考え作る教育から、PC 迄幅広いデザイン教育を行っている。
  - ・産学共同研究を企業、自治体、他大学とも積極的に行っている。社会に広くある問題と向き合うことで複眼的な視野を養うことを考えている。
  - ・これら取り組みは、美術大学らしい環境デザイン分野へのアプローチが可能になると考えている。又、企業や自治体、他大学との交流の中で、プロデュース的なまとめ役としての役割を育成できるのではないかと考える。勿論、こうした能力は就職のための力になる。
  - ・上記のように広く社会にある問題と複眼的な見方を以って向き合う教育課程は、美術大学の特性を活かした環境デザイン分野の新しいアプローチを生み出すことが出来ると考えている。例えば屋上緑化が注目されたり、ランドスケープにおける表現力の必要性が、クローズアップされている。デザインを切り口に、造園や都市計画と言った領域に広げて行きたい。
  - ・環境デザインへの改組により、毎年こうした教育課程を終えた建築デザイナーを60人送り出せるようになったのは、社会との情勢を見るに良いタイミングだった。
  - ・実際に就職先は、乃村工芸社や丹青社、地方自治体、コンサルタント会社、ディベロッパーなど、バブル崩壊による影響は若干あるが、他相当な倍率を突破して就職をしている。
  - ・又、一般学生にも良い影響を与えるだろうキャリア入試を来年から行う。
  - ・こうした取り組みを受験生につなげるために、受験生のアプローチを考えている。
1. 「環境デザイン」という言葉を、受験生に分かりやすい言葉で伝える。
  2. 教育課程を明示して、4年間で何を学べるかを伝えている。
  3. それら説明を教員だけでなく学生に手伝って貰い、予備校周りを行っている。身近な先輩の話も聞くことで、受験の難関に足踏みするのではなく、入学してからの楽しさ、一緒に加わりたいという気持ちを持って貰えるようにアプローチしている。又、オ

ーブンキャンパスでのアピールも重視している。

（問題点）

- ・産学協同研究について、企業相手なので1年前から計画して、ということは難しい。学生の負担やスケジューリングの問題がある。

（その他、改善案など）

- ・産学協同研究について環境デザインでは単位になるが、他学科が参加した際、単位は他学科の判断に任せることになる。全学的に単位の仕組みを考えないと、産学協同研究は上手く行かないと思う。スケールのこともあるので、新しいシステムを考える必要があると思う。
- ・大学院に力をいれたい。家具制作・デザイン、環境デザイン、産学協同プロジェクトの3つの柱で、6年生教育を考えていかなくては行けない。そのためにも、学内からの進学率を高めたい。大学院も産学協同を広め、社会との関わりの中で、複眼的な視野を育成するように一層の努力をしたい。
- ・企画広報部とも協力して、こうした取り組みを取上げて欲しい。

### 情報デザイン

- ・日時：2004.6.30 16:15～17:15
- ・場所：情報デザイン研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
久保田教授、須永教授、森協助教授
- ・筆記：総務・石井

現状の報告

開設時の4年間を第1期として、2002年度以降を第2期と位置付けている。第1期から2期への変化の要因として、情報デザインの領域がファインアートまで広がってきたこと、多人数（120名）教育の問題が出てきたこと、が挙げられる。このため、専門性の整理と確立、コース制による人数の適正化を行った。コースをデザインと芸術に分け、各コース3スタジオ、計6スタジオで全体を構成している。第2期からはコース別入試も行われている。

評価と課題

（良い点）

- ・最近の新生は、確実に情報デザインの中身を知って入って来ている。
- ・センター試験の利用など複数入試制度により、人文や理数系に強い学生も入学して来ている。お互いの能力をシェアして授業をやっている（理数系が得意な学生がプログラムを書き、美術系が絵を描くことで作品づくりにおいて共同しているなど）
- ・編入学生が優秀で他の学生に非常に良い影響を与えている。
- ・産官学共同を通して他学科との交流が深まってきた（東京工大・GD、明治大・ベンツ・PD、江戸川区・ED）。又、他大学との実験授業も行っている（東大情報学環・水越伸）
- ・文部科学省内でも、メディア芸術という言葉が認知されて来たようだ。学生がメディア芸術祭で優勝したこともあり、情報デザインの評価も高い。情報デザイン学科がメディア芸術という分野の成果や目標を示す社会的役割を担う段階まで来ている。
- ・インターンシップなど、企業からの申し出が多い（今年度はシーメンスなど海外企業からの打診もある）。又、デザインコースでは、インターフェイスやユーザビリティなど専門性に対する社会的なニーズが隆盛である為、インダストリアル領域への就職が広がって来ている（ソニー、日立、東芝、パイオニア、トヨタ、デンソー、クラリオン、パナソニックなど）
- 一方、WEBデザインなどのビジネスが個人やSOHOによる形態に世の中が変わって来ている。その流れを受け、芸術コースでは個人で独立することを前提に小さなWEBデザインの会社に就職しているケースも多い。

（問題点）

- ・ここ数年、教育カリキュラムと組織の改革を行ってきたので、どうしても内向きになってしまった。社会にメッセージを伝える必要が

あると感じている。フライヤーなど広報をさらに充実させ、教育研究の内容を外に伝えていきたい。

- ・2期以降、設置科目を大きくりに変更した。社会情勢へのカリキュラムの適応度が増したが、英語など細かい知識やスキルなどの提供のバラツキが授業ごとで目立ってきた。

（その他、改善案など）

- ・PCは安くなったが、ハイエンドの映像・音響機器は依然安くない。地上波デジタルの時代を見越すと、ハイビジョンレベルに耐えうるハイエンド機器を扱える人材が必ず必要になってくる。そうした業界に人材を送り込むチャンスだ。ハイエンドの映像・音響機器の整備と、それに対応した技術職員が必要だ。
- ・ファイン系の学科でもメディアアートの分野に取り組んでいる。学科改編や制度ではなく、何らかの学内で共同するプログラムがあると良いと思う。
- ・コンピュータとネットワークの充実、それらのハード、ソフトウェアの整備が、情報デザイン学科の教育基盤になっている。その特徴を維持し、有効に運営するために人的な負荷がかかっている。スタッフの増員を不可欠な課題と考えている。
- ・大学院を充実させたい。現在の大学院では各学科バラバラでやってるので魅力に乏しい。

## 芸術

- ・日時：2004.6.30 14:45～15:45
- ・場所：芸術学科会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
海老塚教授、建畠教授、西嶋教授、村山教授  
筆記：総務・石井

現状の報告

キュレーターやエディターなど、媒介者として芸術学に関わることを基本として来たが、うまくアピール出来ていない欠点があった。美大の芸術学科だからこそ、を考え大幅にやり方を変えた。

評価と課題

（良い点）

- ・大幅なカリキュラム変更
- 1. コース制を廃止し、ブラックティス、セオリー系に分け、3、4年では両方取らないといけな。企画と研究両面がカリキュラムに反映される。
- 2. 創造、鑑賞、研究、企画をメインとする。他学科に協力して貰い、制作の現場に触れること、オフ・キャンパスで質の高い催しに触れて、感動体験を学ぶこと、「プロデュースの現在」の授業で一線で活躍する卒業生と触れ、意欲を出させ、さらには就職につながるようにしたい。
- ・コース制を廃したので、共通教育の科目の履修が可能になり、カリキュラムが整理された。
- ・フライヤーを作成して、上記四位一体のカリキュラムと卒業生の活躍を伝える。
- ・進学相談会では2日間、時間をとって詳しい説明をする。WEBにつなぎ、アーカイブの紹介もし、受験生にアピールする。
- ・様々なアーカイブにより、教育のバックアップを行っている。  
<http://archive.tamabi.ac.jp/issues/>  
<http://bunko.tamabi.ac.jp/bunko/preface.htm>  
アーカイブへのアクセスも多く、社会貢献の役割もある。全学的にアーカイブをどのようなものにして行くのか、という議論も必要ではあるが。

（問題点）

- ・大学院生は、外部進学者と内部進学者が半々くらい。「現代美術を研究するなら多摩美」として、外部に知られているのは良いが、内部進学者を増やして行きたい。

- ・学部の改革で今年は、大学院まで手が回らなかった。大学院でプロデュース系もやるのか、研究に特化するのか、結論がまだ出ていない。大学院の問題について、議論の俎上にのせる場の必要を感じる。

（その他、改善案など）

- ・実践的な語学教育の必要性を感じている。共通教育とも話し合いたい。
- ・専任教員6名、時代に対応した任期制 or 特例勤務の体制を基本と考えている。理解願いたい。

### 共通教育（美術学部）

・日 時：2004.6.28 11:15 ~ 12:15

・場 所：八王子本館理事長室

・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長

勝間教授、佐原教授、大道教授、西谷教授、秦教授、バーナード教授、高橋（周）助教授

筆記：総務・石井

現状の報告

基本学理の補強、知識の細分化に対応した総合的知識の習得を目的にしている。そのために、カリキュラムの廃止、統合、新設を行い、現在も引き続きカリキュラム改革を行っている。

評価と課題

（良い点）

- ・西洋美術、西洋哲学など、日本の大学では扱う科目がヨーロッパ中心になりがち。多様な文化を知り、幅広い知識を習得するという共通教育の本来の意義に立ち返り、アメリカ、イスラム、アジア文化圏の科目を設置した。
- 1. 中国語は2年前に、韓国語は今年から。履修者も40~60人と評判が良い。
- 2. イスラム文化圏の科目は、音楽（松田嘉先生）だけだった、イスラム文化の科目を新設した（非常勤）、100名ほどの履修者がり、評判が良い。

（問題点）

- ・各学科独自で実践的英語講座の設置と、語学の必要履修単位を減らしたことで、1年次しか語学をやらなくなってしまった。語学教育ということで考えると残念だ。カルチャーセンターではなく、全人教育を意識したい。

（その他、改善案など）

- ・必修科目の履修者数に偏りが生じている。学生が求めているものを考えていくことと、そのアレンジが必要かも知れない。
- ・各学科からの必修科目に指定が横並びになっている。各学科が個性づけをして必修指定をした方がカリキュラムを組みやすいところもある。
- ・自然科学の分野が手薄になっていると感じる。もの造りをする美大生にとって、自然科学は学生にとって非常に重要だ。
- ・人文とか自然科学という枠組みに囚われず、様々なジャンルが融合した実験的な取り組みを行い、新しい切り口を提示するののも一つの案だと思う。
- ・共通教育と各学科の壁がある。全学的に専門と共通教育が話しあえる場があっても良い。
- ・上野毛との協力体制も検討課題の一つだ。

## 造 形

- ・日 時：2004.6.19 13:30～14:30
- ・場 所：造形学科研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長  
高橋教授、田中教授、北條教授、松下助教授  
筆記：総務・石井

## 現状の報告

- ・日本画と油画でクロスオーバーの授業を行っている。
- ・平面表現を中心として、インスタレーション、立体などは物理的、人的要素を考慮して行っていない。
- ・社会人の制作意欲は目を見張るものがあり、成果を上げている。

## 評価と課題

## (良い点)

- ・クロスオーバーの授業を行いカリキュラムが多様化している。新入生も大学案内等で情報を収集し、色々なことをやりたいという希望をもって入学してくる。クロスオーバーの授業は、学生にとっても選択肢が広がり良いアピールになっている。
- ・社会人は、非常に学習意欲が高い。入学時の基礎力不足を自覚しているからだろう。4年間でかなりの成長が見られる。大学院に進学するのも社会人が多い。
- ・五美大の参加は良かった。日本画、油画が混在しているのは他大学には無い特徴だ。
- ・作家養成の一環としてギャラリーヨコハマ作品展など、授業に取り入れてる。大学院生などはその意識が強い。

## (問題点)

- ・クロスオーバーの授業は選択必修科目であるが、夜間部ということで単位取得上の問題から、ほぼ全員に授業を受けさせている。慌しく科目をこなさないといけないので、対象物にじっくりと向き合うということが難しい。時間的制約がどうしても出てくる。
- ・カリキュラムの多様化により、授業準備に手間が掛かる。助手・副手の負担が大きくなった。
- ・制作スペースの問題がある。  
2号館は天井が低いので、距離が取れない。/3年生から大作を描くので、1、2年生のテンペラ、フレスコなどは50人規模であるのに小部屋しか使えない。廊下など外でやらざるを得ない。/80号を描かせたいが、スペースのもんたいで50号で止めている。  
/版画の部屋は、生涯学習との兼ね合いもあり4月しか使えない。/日本画、油画の比率が年によって違うが、部屋割りは固定なので比率に偏りがでると運営が大変である。
- ・学生にとって経済的な問題がある。4年間を通して、独自の技法が出始めたときに経済的理由から、大学院進学を諦める場合が多い。トップクラスが抜けてしまうのは、非常に残念。大学院含め、6年間でやっと独自の技法を育てることができると考えている。その点、社会人は経済的バックグラウンドがあるのか、大学院進学はほとんどが社会人である。

## (その他、改善案など)

- ・学生にとって、施設や制作環境を良いものにしてあげたい。
- ・メンタル面で学生相談室に行っている学生が多いようだ。研究室で激励のつもりで声をかけて逆効果になることもある。プライベートの問題もあるが、学生相談室と連絡を取り合いたい。又、メンタル面に問題を抱える学生への対処方法を教えて欲しい。専門の先生による講習会などがあると良い。
- ・芸大が1週間くらい入試日程を遅らせたため、受験者が減ったようだ。芸大と造形学科の試験日程が近かったため、芸大の試験を優先されたようだ。
- ・学生数を定員のみにするれば物理的な問題は軽減するが、基本的な問題点は現在の箱ではやはり困難を来たす状況である。

## デザイン

- ・日時：2004.6.19 14:45～15:45
- ・場所：デザイン準備室(1-108)
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長  
猪股教授、太田教授、山中教授、高味助教授、武正助教授、西岡助教授、植村講師  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

- ・コミュニケーションデザインを軸に、分野の垣根をはずした複合デザインを目指している。デザインを通して、社会とどう向き合っていくかを大切にしている。

### 評価と課題

#### (良い点)

- ・八王子と同じ分野のオンパレードという指摘を学長に頂いたが、逆にそれが良かった。各分野が別々の学科ということではなく、デザイン学科という1学科で行っているため、異分野交流が可能である。複合デザインの時代に適っている。
- ・その取り組みとして、星座ゼミという形のゼミを行っている。学生も教員も異分野の人材が一つのゼミを通して交流することで面白さが出ている。
- ・デザインの社会的役割と可能性というテーマでやって来たが、時代に対応したデザインという概念をリードする取り組みを行っているという自信がある。
- ・blogを活用した授業など、社会との接点を意識している。E-learningの需要は大きいと思う。実際にblog授業については、ネット系のライターなどからの問い合わせがあった。(http://blog.goo.ne.jp/04s2network)
- ・デザイン分野の社会人は概して優秀。豊富なキャリアが良いのだと思う。今の学生の一番問題点は、社会経験が少ないことであり、複雑なことになると対応できなくなる。その意味で社会人は他の学生に良い影響を与えている。
- ・「'97・'99」の時のPCルームの管理に手が掛かるという問題は、解消した。

#### (問題点)

- ・今の学生は、プロのデザイナーになりたいと言う希望が少ないようだ。クリエイティブな環境に身を置ければ良いと考えているようだ。裾野は広がったが、浅く広くという形で対応している。それをどう捉えて対応すべきかを考えると、良い悪いは別にして難しい時代であると思う。

#### (その他、改善案など)

- ・社会人は既に一部単位を取得済みという場合が多い。取得済み単位への経済的バックアップが必要だと思う。
- ・広報を適切に行いPRを充実させたい。  
企画広報部のみでの広報活動ではなく、実際に現場を知っている教員が機動的に広報活動を行いたい。/企画広報部とともに高校、予備校まわりもやりたい。/教育成果をビジュアル的に分かり易くしたPR方法を考えたい。
- ・広報活動を行なうための、学科独自の予算と権限を与えて欲しい。勿論、結果が出なければ、翌年に反映させて貰って良い(全体的な縛りがあるのは当然だが、現状の100万円では難しい)
- ・他大学とのつながりを持ってないか?例えば、東大とか早稲田などトップの大学との単位互換などによって、相互に別の分野の勉強ができるシステムがあると良い。都内立地や夜間授業というのは、メリットになる。又、そこで生まれた新しい発見が大学院へつながる可能性もあると思う。
- ・エントランスや食堂などにテコ入れできないか?社会人学生など、学費に対する意識も高いので、美観などに配慮して欲しい。

## 映像演劇

- ・日時：2004.6.19 16:15～17:15
- ・場所：映像演劇学科研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長  
鈴木教授、萩原教授、福島教授、石井助教授、加納助教授、河原助教授  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

他大学や美術学部と競合しない学科であると思っている。学科内を映像と演劇の2分野に分けず、「表現」ということにこだわって、基礎を学ばせることを重視している。

### 評価と課題

#### (良い点)

- ・受験者の減少率が他学科より少ない。他と競合しない点と、映像と演劇というように区別を設けず「表現」にこだわっている成果だと思う。予備校などでは両方やれるという伝わり方。
- ・設置から15年経ち、卒業生が活躍し始めている。

#### (問題点)

- ・施設のスペース、機材の老朽化に問題がある。絶対的に不足状態。
- ・アニメーション、ゲームなどのデジタル分野が上手くない。その分野の専任教員がないので対応できていない。今後の問題として、急ぎ立案に入った。
- ・社会人の数が中途半端で上手く対応できていない。一般学生と一緒に授業をするのは難しい。一般学生向けに基礎を重視することになるからだ。

#### (その他、改善案など)

- ・PCや機材の入れ替え、機材室や工作室をプレハブで良いから作って欲しい。
- ・写真スタジオ、映像スタジオ、講堂などメディアセンターに代って直接管理で柔軟に使いたい。
- ・魅力ある学科を目指して、システムメディア、メディアアートの分野に力を入れたい。旬の人材を特例勤務で呼びたい。
- ・受験動機となる卒業生の活躍を引き出すために、卒業生支援を行いたい。昼間のスタジオ利用などの有効活用をしたい。
- ・例えば、演劇関係者への稽古場の貸し出しを行い、その代わりに学生の出入りを自由にするといった提案もある。
- ・上野毛を開かれた場所にして、何かができる「場」があるということをアピールしたい。劇場でも試写室でも何でも良い。昼夜問わず、何かがあるという場所をアピールできないか？このために「劇表現工学研究所(仮称)」を併設したい。
- ・これらを解決するために、研究室では3つの方策を考えた。
  1. 授業を変える+入試を変える
    - \* 自己推薦入試の導入
    - \* 昼夜開講型への大胆なモデル転換
  2. 科研費のとれる学科へ(システムメディア系の立ち上げ)
    - \* 専任教員の交代補充と非常勤講師および助手の増員を含めて中期戦略を。
    - \* 劇表現工学研究所の立ち上げ
  3. メディアセンターの役割を兼務+教育環境の整備
    - \* 講堂、映像スタジオ、写真スタジオ等の運用管理
    - \* 教室の確保+機材機器類の更新+学生環境の整備
- ・これらを行うために、コスト面での対応として入学者100名、総数400名の学科を目指したい。

## 共通教育（造形表現学部）

- ・日 時：2004.6.19 11:15～12:15
- ・場 所：本館会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、米倉学部長  
伊藤教授、小穴教授、中村教授、樋口教授  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

- ・全ての学生を対象としている共通教育は、幅広く人間考察することを重視している。教員数も少ないので、どの分野に特化するかが課題であり、カリキュラム改革に取り組んでいる。

### 評価と課題

#### （良い点）

- ・どうしてもマスプロになりがちな共通教育では、ゼミ形式の導入や講義形態などの改革を行いつつある（その他、改善案で詳述）、学生の要望に応えられるような対策を一つづつ積み上げている。

#### （問題点）

- ・講義形式だとその積りではやっていないが、一方的に情報を与えテストを行うということになりがち。講義形式の枠内で様ざま取り組んでいるが、共通教育はマスプロになりがちな状況である。
- ・夜間なので、限られた時間で単位を取得させることに重点を置きがちになる。そろそろ次の段階を目指して良いと考えている。
- ・技術的には、演習2単位、講義4単位であるため、語学は労多くして2単位ということになってしまう。夜間部なので時間も限られており残念だ。
- ・カリキュラムに占める語学の割合が多いので、様ざまな講義を増やすという意味で語学を選択科目にした。その利点もあるが、国際化の時代であるし、語学を好きになって欲しいという気持ちもあり複雑だ。

#### （その他、改善案など）

- ・マスプロ教育の弊害を解消するため、カリキュラム改革を行った。  
少人数ゼミを取り入れた。/ アジアの一員としてアジア諸国語を教える。来年から韓国語の講座を開く。/ 美術大学の特性、夜間学部という生活環境から、心の健康に問題を抱える学生が少なくない。チームスポーツや太極拳など呼吸運動を取り入れたスポーツ科目を増やし、学生の心の健康に配慮した。/ 1つのテーマを複数教員によって立体的に捉える授業を検討している。/ 実技系や外部の者との連携授業を検討している。
- ・学生の資質としては、真面目でおとなしい学生が多い。講義形式では、おとなしい学生は中々発言しない。少人数ゼミによって、おとなしい学生でも発言の機会が増え、自分の考えをきちんと言葉にするという大切なことが望めるのではないか？
- ・少人数ゼミの導入により、教員も学生から教わることがあるだろう。その効果を期待している。
- ・学部長から社会人だけの講座の提案を受けたが、そのメリット、デメリットを考えてみる価値があると思う。やってみて新しい発見があるかも知れない。
- ・教職については、八王子と連携できるように検討している。
- ・社会人にとって18:00～の授業というのは、間に合うか、どうか時間的にキツイ。
- ・留学できる大学が受験生にとってアピールになるので、語学能力は重要になってくると思う。講座数は減らしたが、質は維持できるようにしている。
- ・受験者数のことを考えると、入るのは簡単だが出るのは難しいというように門戸を広げていくべきだと思っている。
- ・受験生にとっては、就職が大切だ。人材育成のコンセプトを学部としてどのように出していくかが課題だと思う。そのコンセプトをハッキリ出して頂ければ、カリキュラムなどへの反映も議論していけるだろう。学部として議論できる場があれば良いと思う。



## 大学院

- ・日時：2004.6.24 16:15～17:15
- ・場所：大学院研究室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
島尾教授、本江教授、小島助手  
筆記：総務・石井

### （議事要旨）

- ・ファイン系とデザイン系が融合する形にしたい。大学院が横のつながりを推進して、大学にとっての頭脳的役割を果たしたい。
- ・2003年度までは、課程が独立して運営されていたが、学部・修士・博士とつなぎ固めて行きたい。
- ・そのための環境を作る必要も感じている。

## 美術館

- ・日時：2004.6.26 14:00～15:00
- ・場所：美術館マルチメディアシアター
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
仙仁事務室長、小林主任  
筆記：総務・石井

### 現状の報告

山邊前館長、宮崎館長の基本コンセプトである「良いものを展示すること、それによる刺激」という意識を前提に運営して来た。八王子時代は、キャンパスライフの中での日常的なアートゾーンとして考えてきた。多摩センターへ移転してからは、同時に社会に向けた活動をという考え方を併せ持つようになっている。多摩市や八王子市からも好意的に捉えて貰っている。

### 評価と課題

#### （良い点）

- ・大学の美術館であることから研究活動と業績を基盤として、特に大学力としての共同研究とのリンクを考えている。「構成主義ポスターの研究」や「リヒャルト・パウル・ローゼ」展など、共同研究から始まったものだ。大学の附属美術館らしい多様な特別展を開くことが可能であり、大学美術館の存在価値と社会性につながっている。入館者数を上げていくという課題はあるものの、マスコミなどには概ね好評を得ており、大学の附属美術館としての方向性は認知されている。
- ・ファインアート系だけでなく、デザイン系も積極的に取り上げ、文化発信のキー局としての役割を考えてみたい。高木教授の退職記念展などは、漆作家の展覧会は例がなく、スイス外務省の文化担当者からの是非扱ってみたいという反応があった。
- ・竹尾のポスター展など特色のある展示をやったお陰で、多様な美術を扱う姿勢が注目されるようになった。「リヒャルト・パウル・ローゼ」展が巡回出来たのもその結果だと思う。
- ・これからは本学同様の施設を持っている他大学ともリンクし、社会に対して、大学からの発信機能を高めて行く可能性も見えている。

#### （問題点）

- ・所蔵品目録の整備と収蔵庫の確保が必要である。収蔵庫などの管理体制を一層整え、アピールすれば寄贈などの申し出も増えると考えている。

#### （その他、改善案など）

- ・学生や教員の作品を見たいと言う声もある。八王子時代には「50人の目展」、「校友会展」を行った。昨年度は「博士課程展」を行った。学生や教員の作品についても「社会性」ということを考慮して考えてみたい。
- ・「今井兼次展」など建築系の展覧会も積極的にやって行きたい。

- ・作品コレクションについては、本学と深い関わりを持つ世界的作家と早いうちからコンタクトを取って行きたい。
- ・収蔵作品の整理や研究などを大学院の授業や研究と結びつけることで、共同研究や芸術学科のアーカイブなど特色ある研究を導き出し、大学力のボトムアップにつなげたい。
- ・カリキュラム化することで学生の利用を増やすことが課題（授業での見学利用、シアター・多目的室などの施設利用など）
- ・教員や学生に年間一定期間開放して欲しいという要望があり、その課題が残る。

### 図書館

- ・日 時：2004.6.28 10:00～11:00
- ・場 所：八王子本館理事長室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
峯村館長、筒井事務課長  
筆記：総務・石井

#### 現状の報告

約 11 万冊の蔵書がある。2002 年以降、図書館電算システムを導入してデータベースによる蔵書管理を始めた。選書に対する基本的な考え方として、小説や文庫本などの一般書籍は公立図書館に任せて、美術大学の特色を出せるような蔵書を意識している。図書の整理については、PC 検索可能なものが、約 85% であり、実際に利用者が利用可能な状態にあるものは、70% 程であろうかと思う。利用者が利用可能な蔵書数を増やしていく課題がある。

スペースの問題もあり、学生のニーズに応えきれない部分もあるのが、新図書館の建設を機に学生のニーズに応えられるように検討している最中である。

#### 評価と課題

##### （良い点）

- ・相模原市の公立図書館との提携を行った。橋本の図書館の学生利用は非常に高いようだ。学生の利便性が高まった。小説や文庫などの一般書籍は提携の公立図書館で、美術書など美大の特色を生かした蔵書は本学図書館で、という住み分けが上手く行っている。本学の特色を出しつつ、小説や文庫などの一般書籍を効率的にカバーできるというメリットがある。又、一般の方に対しては、公立図書館では蔵書数が少ない美術書の閲覧機会を増やすという意味で社会貢献の意味もあろうかと思う。
- ・図書館電算システムを導入して、磁気カードによる貸し出しに変えたので、随分手間が省けるようになった。

##### （問題点）

- ・研究室の図書は図書館でデータ管理を行い、現物は研究室で管理している。一部の研究室では使用頻度が高い図書は、研究室で管理すれば利便性が高いが、その分、コスト高（場所、人、時間など）になってしまう。
- ・スペースの問題があって閲覧場所の確保が出来ない。開架図書を増やしたいが難しい。
- ・ディテクションが無いため、所持品を書庫に持ち込めない。

##### （その他、改善案など）

- ・新図書館へ移行する際に、以下のような検討事項がある。
- 1. 映像資料をどう扱うかが問題。MC と役割分担を新図書館構想でハッキリしておく必要がある。MC との重複、収蔵スペースの問題が出てくる。中途半端なものにならないように検討しないと。（\*メディアテークの話があるが、各学科やMC でコンテンツ制作機能は請け負うべき。新図書館の面積を考えると、図書をメインにするべきだろう。映像関係は、あくまでも収集と活用が基本。サーバを別に置く手もある。書籍と映像（デジタル）の性格の違いを良く考えて、新図書館のコンセプトを固めて欲しい：学長談）
- 2. 開架図書を増やし、積極的に学生に使って貰いたい。その為にはディテクションの問題をクリアする必要がある。
- 3. 開架書庫に閲覧場所を設けるために、ゆったりとした場所を取るなどの検討が必要。
- 4. 開館時間の延長をするなら、ゾーニングの問題、人の手当の問題が出てくる。人的問題は、学生アルバイトの利用などが、コスト

と教育効果の両面から有望であると思う。その場合、カギの問題など、ゾーニングが一層重要になるだろう。

5. 研究室の蔵書を図書館管理とした場合、コレクションの意図含め、上手く管理できるか検討の余地がある。共通の要素を持つ図書は、図書館で管理していく方向が良いとは思いますが、そうした管理の問題があるので難しい話でもある。
- ・蔵書数の比較では遅れていることは事実。蔵書数を増やすのは、コツコツとやって行かないといけない。蔵書数で宣伝効果を上げるのは、早急には難しい。運営方法で特色を出していきたい。
  - ・研究室設置の図書を図書館が一括して集めアーカイブ機能を果たすことを考えていかなければいけない。
  - ・寄贈資料を利用して、各学科が研究活動を行ったり、大学院生を研究活動に参加させていく、という形があっても良い。
  - ・かつては新書、文庫はハードカバーの縮刷版という位置づけであった。最近は、新書、文庫のみの重要な書籍も増えてきた。新書、文庫等の扱いも見直す必要があるだろう。

## メディアセンター

- ・日 時：2004.6.28 14:45～15:45
- ・場 所：メディアセンター会議室
- ・出席者：藤谷理事長、高橋学長、森下教務部長、清田学部長  
石田所長、野澤事務室長、駒形、肥沼、三浦、林、長谷川、村穂技術職員
- 筆記：総務・石井

### 現状の報告

MC 運営委員会で運営を決定している。各センターごとに小委員会を設け、各センターの詳細事項をフォローしている。

### 評価と課題

#### （良い点・問題点）

- ・情報センター  
労働力の投下効率の悪い旧サービスの廃止、情報の告知、アップルトークのブロードキャスト制御の問題については、サーバ更新により問題解決を行った。小委員会が、機能しづらくなったのが課題。
- ・工作センター  
当面、スペースなどの物理的障害をクリアするには、授業計画の見直しが必要と思う。Web を有効に利用し、学生の利便性を上げていくのが課題。瀬田文教サミットなど、社会貢献活動も行っている。
- ・映像センター  
施設整備の時に、事前打合せで回避できる問題が多い。
- ・研究センター  
アーカイブ 産官学共同研究へシフトして行く。授業と産官学共同研究が面白い事例であると、経済産業省の担当官にも言われた。著作権などの契約業務に対応するマンパワーが足りない。
- ・写真センター  
グラフィックによる利用中心から、全学対象の講習会利用にシフトした。講習会は応募も多く、利用まちが出るほど好評。暗室利用については、グラフィックの学生がまだ多く、他学科の学生による自由使用が押し出される結果になってしまっているのが課題。

#### （その他、改善案など）

- ・委員会のあり方を考え直す時期に来ている。（全センタ）
- ・ネットワークに限らず、各種システムを扱う IT 委員会など検討できないか？（MC の機能とは別次元の話であるが。）（情報センタ）
- ・サービスを高めるためには、個人認証の一元化が必要になってくる。ネットワークとかではなく、全学的な問題だ。現状のシステムのあり方では、非常にコストリー（大学の財政、学生の手間でも）（情報センタ）
- ・それらを統合する組織が必要。（石田所長）
- ・産官学共同研究や、社会との関わりで独自の技術支援ができればと思う。（工作センタ）
- ・研究助成のコーディネート役をやりたい。法律的な事務に対処できるマンパワーの手当が必要だ。ファインアート系でも産官学共同

## X . 資料（ヒアリング）

---

研究を行っている（彫刻の更埴市など）ファインアート系の埋もれた産官学共同研究にスポットを当てる必要がある。

（研究センタ）

## 授業評価アンケートの目的

体系的な知識がどこかに在り、それを空の頭の中に詰め込んで行くという教育を本学では行なわない。

創造の力は、学生自身が、学びの環境から自分の意志をもって、同時に、教職員の提供するさまざまな活動に支えられて、内発的に育つものである。

授業料を払った分、あるいはそれ以上に、本学において「自分は学ぶことができた」と感じることであったかどうかを調査する。

## アンケート内容

- 1 . 学年
- 2 . 性別
- 3 . 所属学部学科
- 4 . 質問内容

Q1:この授業で学んでいることは多いですか。

Q2:この授業を楽しんでいますか。

Q3:この授業は分かりやすいですか。

Q4:授業への出席などあなたのこの授業の参加度は高いですか。

Q5:あなたはこの授業を同じ学科の後輩に勧めますか。

## 実施方法

授業名を伏せて提出するA方式と、授業名を公開しその結果を教員個別に還元するB方式のどちらかを選択し、実施期間内に行う。一つの授業を複数の教員が行っている場合は、希望により、教員ごとの集計をする。

## 実施期間

### 2002年度

美術学部 2002年11月11日～2002年12月14日

造形表現学部 同 上

### 2003年度

#### ・前期

美術学部 2003年6月23日～2003年7月12日

造形表現学部 同 上

#### ・後期

美術学部 2003年11月25日～2004年1月10日

造形表現学部 2003年11月25日～2003年12月13日

## アンケート実施率・回収率

14年度

15年度

アンケート実施率 ・全学 学部単位の明細			
	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	586	450	77%
造形表現学部	142	126	89%
合計(全学)	728	576	79%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	実技系	343	256	75%
	講義系	243	194	80%
造形表現学部	実技系	86	73	85%
	講義系	56	53	95%
合計(全学)	実技系	429	329	77%
	講義系	299	247	83%

アンケート実施率 ・全学 学部単位の明細			
	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	726	543	75%
造形表現学部	163	130	80%
合計(全学)	889	673	76%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	対象件数	実施件数	実施率
美術学部	実技系	463	352	76%
	講義系	263	191	73%
造形表現学部	実技系	100	77	77%
	講義系	63	53	84%
合計(全学)	実技系	563	429	76%
	講義系	326	244	75%

アンケート回収率(実施授業のみ) ・全学 学部単位の明細			
	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	26,017	12,083	46%
造形表現学部	7,282	3,968	54%
合計(全学)	33,299	16,051	48%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	実技系	11,674	6,250	54%
	講義系	14,343	5,833	41%
造形表現学部	実技系	2,976	1,810	61%
	講義系	4,306	2,158	50%
合計(全学)	実技系	14,650	8,060	55%
	講義系	18,649	7,991	43%

アンケート回収率(実施授業のみ) ・全学 学部単位の明細			
	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	30,691	15,817	52%
造形表現学部	6,746	4,069	60%
合計(全学)	37,437	19,886	53%

学部・実技系・講義系単位の明細				
	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
美術学部	実技系	15,724	9,003	57%
	講義系	14,967	6,814	46%
造形表現学部	実技系	2,705	1,918	71%
	講義系	4,041	2,151	53%
合計(全学)	実技系	18,429	10,921	59%
	講義系	19,008	8,965	47%

アンケート対象授業における実施率は8割近くとなり、任意ではありましたが、教員の積極的な参加が目立ちました。また、回収方法は授業名を伏せるA方式と授業名を明らかにするB方式がありましたが、B方式が9割以上を占め、自分が学生にどのような評価を受けているかを知りたい教員が圧倒的でした。

アンケート実施授業に対するアンケート用紙回収率は、そのまま出席率と考えることができます。50%という出席率が全国平均で高いか低いかはその統計資料がないのでなんとも言えませんが、14年度・15年度とも「参加度は高いか」という質問に対して65%前後の学生が「強くそう思う」「そう思う」と回答していることから、出席する学生がある程度固定化されているとみることができます。

学年別アンケート回収率(実施授業のみ)

・ 学年別

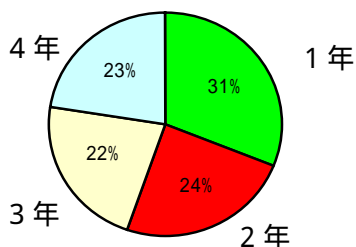
14年度

全学				
学年	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
1年	実技系	3,971	2,494	63%
	講義系	7,149	3,864	54%
	合計	11,120	6,358	57%
2年	実技系	4,774	2,427	51%
	講義系	5,840	2,276	39%
	合計	10,614	4,703	44%
3年	実技系	4,390	2,174	50%
	講義系	3,574	1,039	29%
	合計	7,964	3,213	40%
4年	実技系	1,515	831	55%
	講義系	2,086	659	32%
	合計	3,601	1,490	41%
その他	実技系		2	
	講義系		63	
	合計		65	
不明	実技系		132	
	講義系		90	
	合計		222	
合計		33,299	16,051	48%

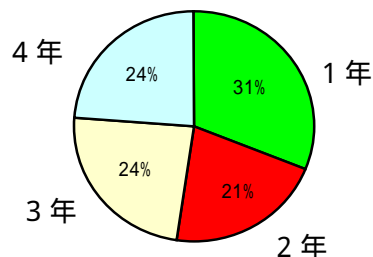
15年度

全学				
学年	区分	配布枚数	回収枚数	回収率
1年	実技系	4,793	3,234	67%
	講義系	7,386	4,600	62%
	合計	12,179	7,834	64%
2年	実技系	7,392	3,396	46%
	講義系	6,369	2,615	41%
	合計	13,761	6,011	44%
3年	実技系	4,294	2,810	65%
	講義系	3,316	946	29%
	合計	7,610	3,756	49%
4年	実技系	2,023	1,311	65%
	講義系	1,864	620	33%
	合計	3,887	1,931	50%
その他	実技系		9	
	講義系		65	
	合計		74	
不明	実技系		161	
	講義系		119	
	合計		280	
合計		37,437	19,886	53%

14年度学年別合計の回収率による割合



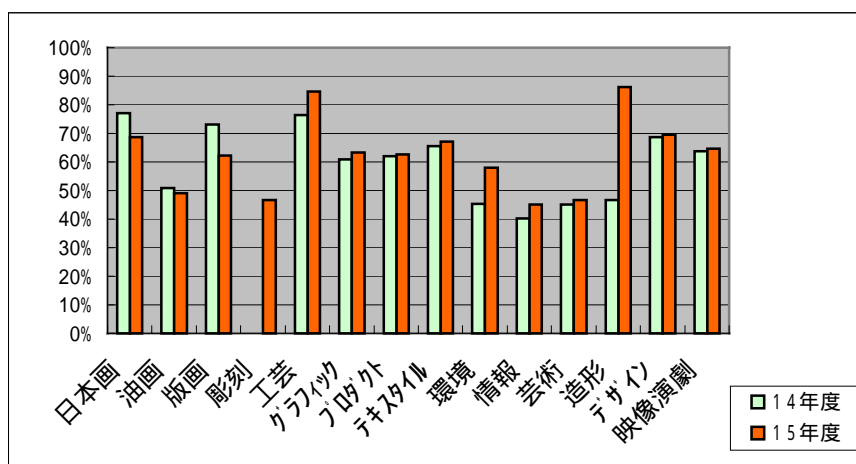
15年度学年別合計の回収率による割合



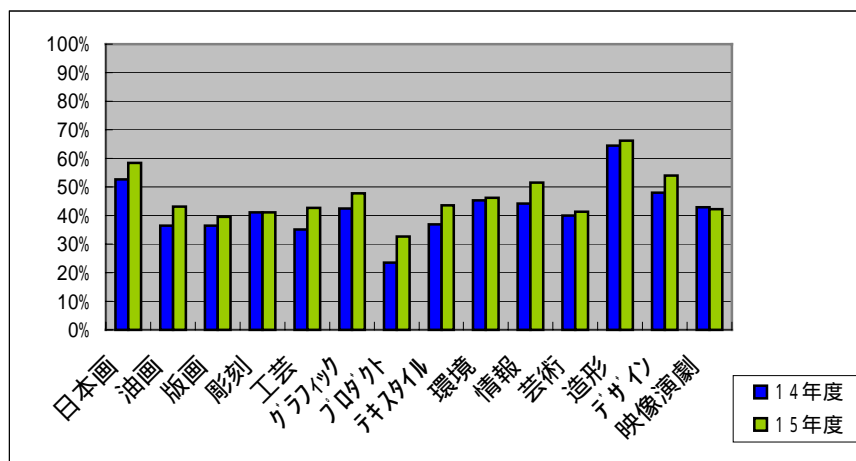
アンケートの回収率は、授業の出席率に置き換えて考えることができます。学年別の集計をみると、1年の出席率が高く、他の学年はほぼ同じという結果がでています。

学科別アンケート回収率

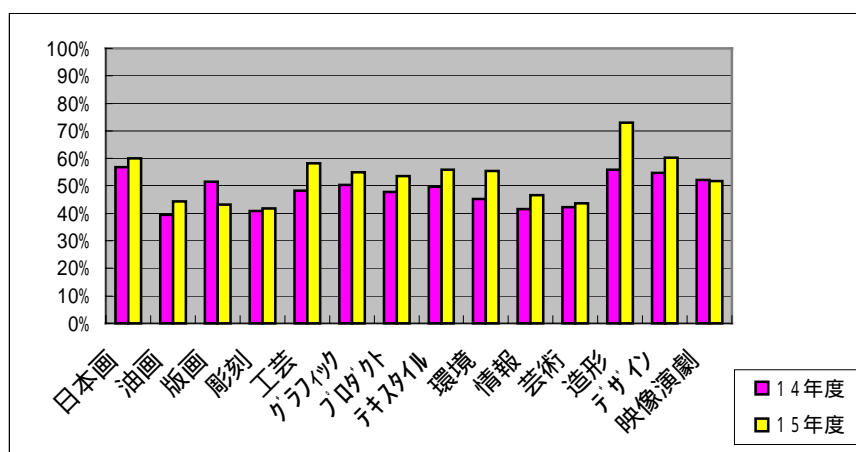
アンケート回収率(実技)



アンケート回収率(講義)



アンケート回収率(実技・講義合計)



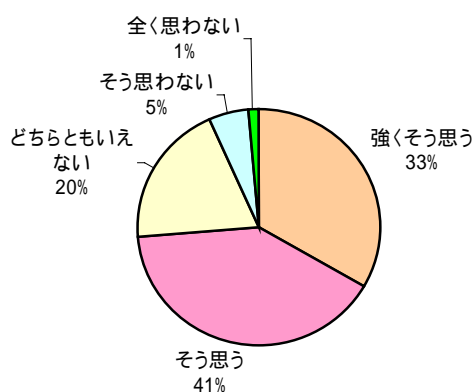
実技系の平均回収率が50%台、講義系は40%台で、実技系の授業のほうが出席率が高いという結果がでています。  
アンケート回収率では、実技系と講義系にわけたとき、学科により若干のバラつきがみられます。



・ 14年度全体集計

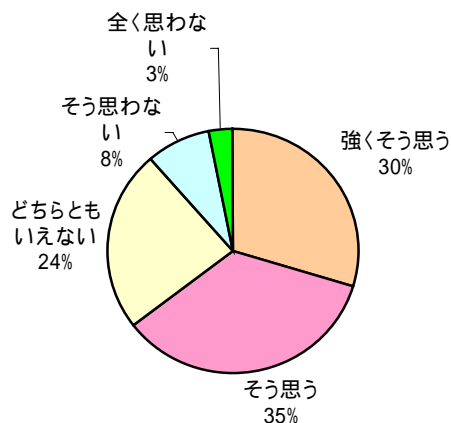
授業評価項目の単純集計（Q1）

この授業で学んでいることは多いですか



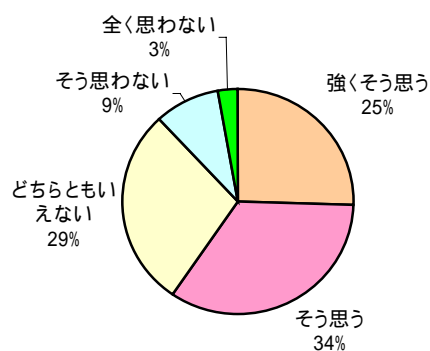
授業評価項目の単純集計（Q2）

この授業を楽しんでいますか



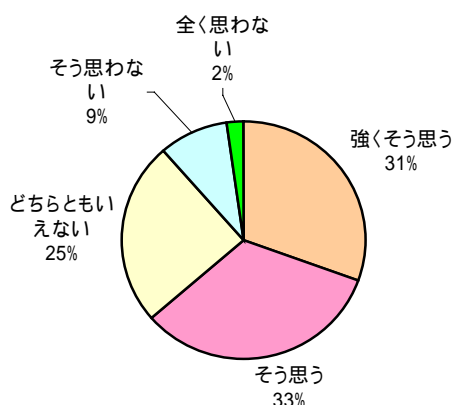
授業評価項目の単純集計（Q3）

この授業は分かりやすいですか



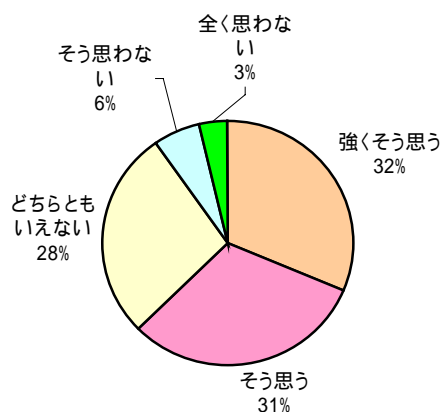
授業評価項目の単純集計（Q4）

授業への参加などあなたのこの授業の参加度は高いですか



授業評価項目の単純集計（Q5）

あなたはこの授業を同じ学科の後輩に勧めますか

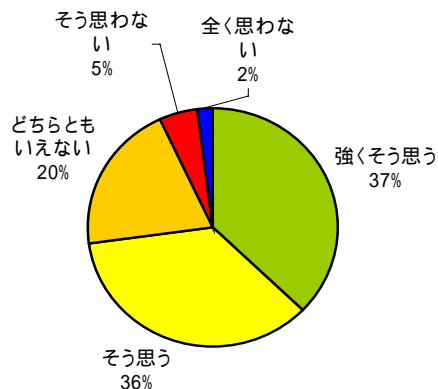


各質問を個別に調べると、担当授業が全て評価の高い教員もいますが、同じ教員でも授業によって評価が大きく異なるものがありました。これは授業内容そのものに学生の関心があるかないかによるものと思われます。例えば自分は履修したくないが、資格をとるために仕方なく履修しているというような場合は、評価が低くなる傾向があります。

・15年度全体集計

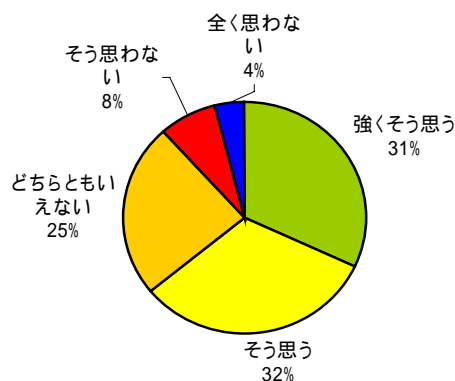
授業評価項目の単純集計（Q1）

この授業で学んでいることは多いですか



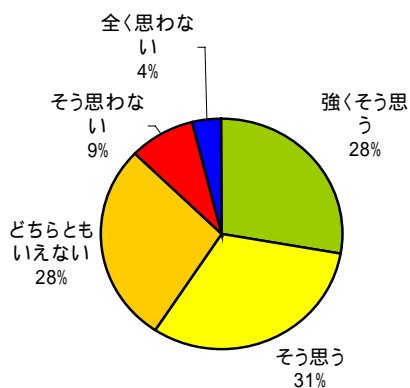
授業評価項目の単純集計（Q2）

この授業を楽しんでいますか



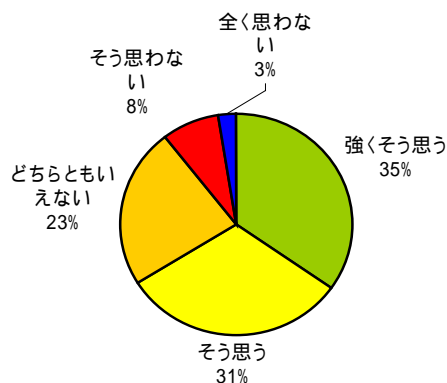
授業評価項目の単純集計（Q3）

この授業は分かりやすいですか



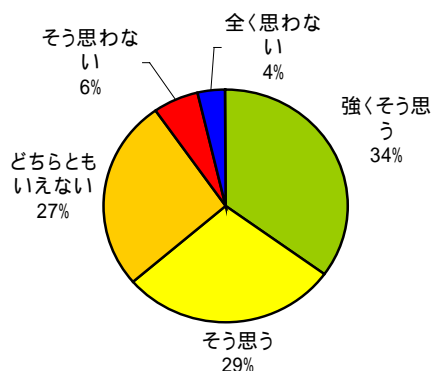
授業評価項目の単純集計（Q4）

授業への参加などあなたのこの授業の参加度は高いですか



授業評価項目の単純集計（Q5）

あなたはこの授業を同じ学科の後輩に勧めますか

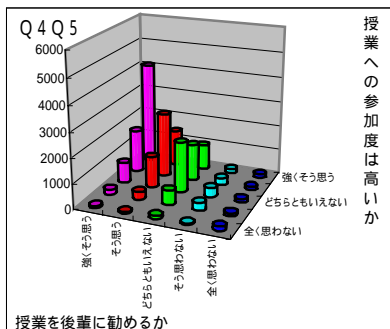
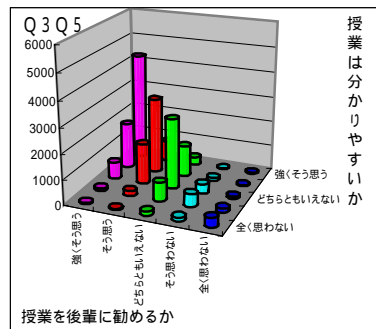
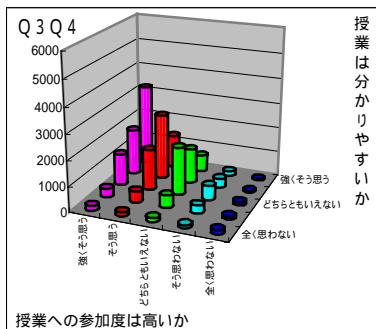
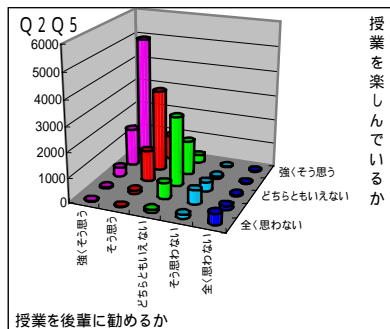
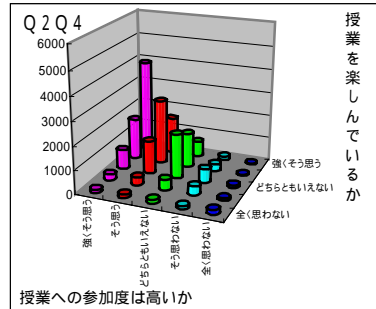
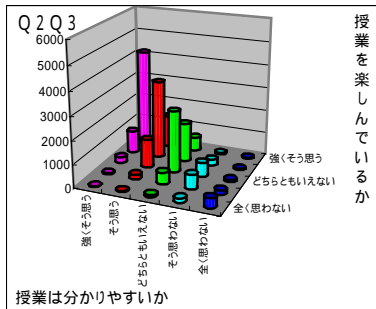
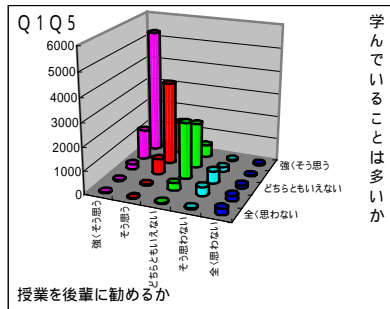
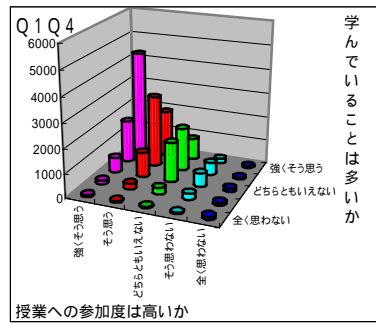
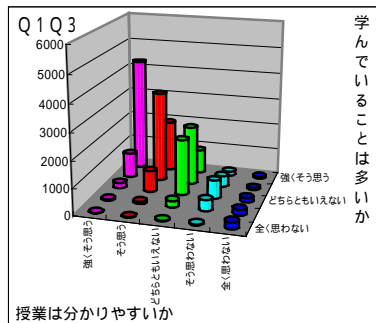
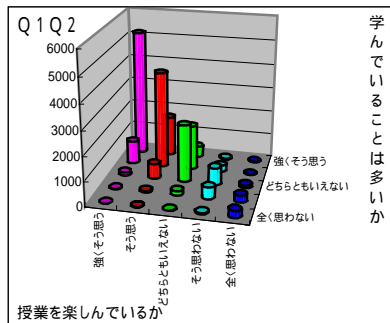


各質問の単純集計をみると、どの質問もほぼ6～7割がよい評価をしています。回収率が、50%なので、これをそのまま客観的な評価とするのは難しいものがありますが、少なくとも出席した学生は授業に対して高い評価をしているようです。

また、14・15年度を比較すると、その結果にほとんど変化がなく、年度間でみる限り、本学の学生がもっている授業に対する意識はアンケートの集計どおりであると思われます。



15年度全体クロス集計のグラフ



各質問でクロス集計をとると、どの結果も高い評価となっています。個別では当然異なる評価になりますが、大学全体として、美術学部、造形表現学部とも満足な評価になっていると思われます。

各質問の結果を結合させると、「授業で学んでいることが多く、楽しんでもあるし、出席もしており、後輩にも勧めたいが、授業内容が少し分かりづらいと感じる」ということが言えると思います。

---

---

## 自己点検・評価部会の活動状況

### ～ 準備作業 ～

準備会第1回打合せ(2004.2.13)  
準備会第2回打合せ(2004.3.11)  
準備会第3回打合せ(2004.3.31)  
学科長会、教授会報告(2004.4.2・4・5)  
部課長会議報告(2004.4.12)  
事務担当者事前打合せ(2004.4.14)

### ～ 部会活動 ～

第1回自己点検・評価部会(2004.4.16)  
第2回自己点検・評価部会(2004.5.19)  
各セクションへの現状分析依頼(2004.5.27)  
教育セクションへのヒアリング(2004.6.19・24・26・28・30)  
グループ長会議(2004.6.23)  
外部評価(2004.12.20・22)

### ～ 各グループの活動 ～

#### < 企画グループ >

第1回G会議(2004.4.22)  
作業担当者説明会(2004.4.27・28)  
第2回G会議(2004.5.19)  
第3回G会議(2004.6.8)  
事務担当者打合せ(2004.7.5)  
第4回G会議(2004.9.8)  
理事長、学長への経過報告(2004.10.7)

#### < 教育・研究グループ >

第1回G会議(2004.7.14)  
第2回G会議(2004.7.27)

#### < 学生支援グループ >

第1回G会議(2004.4.28)  
第2回G会議(2004.5.7)  
第3回G会議(2004.7.20)  
第4回G会議(2004.8.10)

#### < 施設グループ >

第1回G会議(2004.6.16)

#### < 社会貢献グループ >

第1回G会議(2004.5.26)  
第2回G会議(2004.7.14)

< 入学・卒業グループ >

第 1 回 G 会議 (2004.5.25)

第 2 回 G 会議 (2003.7.29)

第 3 回 G 会議 (2004.10.7)

< 管理運営グループ >

第 1 回 G 会議 (2004.6.8)

マネージメント体制に関する職員アンケート (2004.6.9)

事務セクションへのヒアリング (2004.6.15・23)

第 2 回 G 会議 (2004.7.5)

第 3 回 G 会議 (2004.7.9)

第 4 回 G 会議 (2004.7.15)

第 5 回 G 会議 (2004.9.16)

< 総括グループ >

第 1 回 G 会議 (2004.10.15)



自己点検・評価部会長  
森下 清子

「多摩美術大学 2000-2003」の出版にあたって

自己点検・評価「多摩美術大学 1997-98-99」に引き続き出版するものです。自己点検・評価を全学的に取り組み、その結果を教職員が共有できるためにはできるだけ多くの教職員が係われるように組織をつくり、今年の2月頃から巻末にあるような会合を重ねながら、進めて参りました。

前回と同様に藤谷宣人理事長、高橋史郎学長を委員長とする教育充実検討委員会の一部門である自己点検・評価部会が中心になって纏めましたが、今回は纏める過程において議論されるプロセスを重視し、全教職員が各々の分野または全体の中の部分について問題意識を持ち、纏める過程で抽出された課題、共通認識された問題点を、各部署のこれからの運営に積極的に活かされることを目的の一つとしました。

自己点検・評価部会のもとに6つの作業グループと、この6グループをサイドから支援するための企画グループを配しています。全体のまとめは各作業グループの取り扱い事項を設定し、その中に共通するとおもわれる見直し項目について、記載しています。教育・研究グループの各学科については学科長を中心にまとめていただきましたが、各学科の事情が異なるため、必ずしも同じフォーマットになってはいません。各学科については、当事者がまとめるのに平行して、理事長、学長、学部長、教務部長と各学科の専任教員と教育・研究について現状視察を兼ね、ざっくばらんに話し合える場を設け、ヒアリングというかたちでまとめましたが、重複したものあり、要望あり、将来計画ありで、これに関しては疎通を図ることが目的ですからまとめや結論は期待しないものだという付記しておきます。

多摩美術大学の全教職員が大学全体の現状、問題点、課題を把握するためには、なるべくコンパクトになるよう纏めるように編集した結果、細部については説明不足になっているところもありますが、これについては、ファカルティ、大学案内、シラバスで補足しています。今回は外部評価者として、教育研究を中心に會田雄亮先生、岡島達雄先生にまた財務を中心に和田義博先生に見て頂き、貴重な御意見を対談形式でまとめました。多忙の中、時間を割いて頂いた外部評価の先生方、協力して頂いた多くの教職員に感謝すると共に、この自己点検・評価のまとめが契機になり、見直し・改革につながり、さらなる大学の特徴ある大学に発展することを願って止みません。

多摩美術大学 2000・2003

編集 多摩美術大学 教育充実検討委員会自己点検・評価部会

発行日 2005年2月

発行 多摩美術大学

〒158-8558 東京都世田谷区上野毛 3-15-34

電話 03-3702-1141 (代表)

<http://www.tamabi.ac.jp>